

白き兎は魔王の力と共に正義の眷族と共に行く。

桐野 ユウ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ベル・クラネル、本来の歴史では13歳でオラリオへ行く少年、だが彼は7歳の時に神さまと共にオラリオに行き眷族となる。

最初は断ろうとしたが彼の目を見て彼女は……そして彼の中にいる魔王さまも力を貸してくれる。

これは最悪最低の魔王と呼ばれたオーマジオウの力というか本人が中にいる白い兔が奮闘をするお話。

## 目次

兎と正義の眷族	1
変身	6
朱色の髪の子との出会い	10
やっぱりベルは誑しなのか？	16
アーマータイム	21
目を覚ましたベル	25
誘拐された兎	28
フルスロットルで行こう	32
美の女神	39
ランクアップした二人の人物たちの様子	46
眠る兎	53
オーマジオウが気になっている女性と運命とクライマックス。	56
考える魔王	61
パトロール	66
魔王降臨	70
目を覚まさない兎	75
黒い髪をしたエルフの女性	80
犬人くんかくんか	84
通りすがりの力	88
遠征準備	93
いざ行かん！アストレア・ファミリア遠征へ！	96
水浴び	100
その先へ	103

全ての力が集結をした王の力！	109
オツタル対ジオウ	116
襲われる兎!?	122
ベルの罪悪感	129
豊穡の女主人へ	132
ベルと椿	135
現れた謎の男	138
ベルの新たなスキル	144
新たなスキルを試す	147
ベル再び目を開ける。	153
ベルホームへ帰還をする。	157
ガドル閣下がなぜダンジョンに	160
オラリオを歩く	165
ベルがいない	169
お風呂ですよー！ー！ー！ー！	175
二人のエルフ	178
ため息をつきながら上がるベル	184
キャラ紹介！	188
遠征準備	193
遠征へ	198
階層主との戦い	202
天井が見えません！	207
ベル待機中	213
目を覚ましたうさぎ	218
アミツドのところで再び目をさます。	223

宴会へ	229
豊穰の女主人で宴会へ	234
にやああああああああああああああああ!!	239
不思議に思いながらホームへ帰る。	244
目を覚ました男性	249
新武器完成	253
眠れない	259
怪物祭り	263
新たなアーマータイム	269
事情聴取	272
新たな事件	278
カジノへGO	281
オーナーとの会合	285
再びの対決ジオウ対ゴ・ガドル・バ	290
いちやもんをつけてくる奴ら	295
神の宴	299
決定をした戦争遊戯! 神々の会	302
戦争遊戯戦、負けられない戦い!	306
男性	314
オーガ対カイザ	319
色々と疲れた体を休める	324
大人の階段のーぼった。	327
現れたアナザーライダー ジオウとカイザ対アナザーカイザ	331
ベルの心の痛み	338
ベルまたしても	341

新たなホームへ移動	346
ベルとアーディ	350
疲れ	355
新たな事件発生	357
王蛇搜索	362
変身	367
祭り	372
アルテミス救出部隊出撃!!	377
彼女達が見たものは	380
オームフォームの力	385
オラリオ帰郷へ	390
帰ってきたぞ帰ってきたぞ——オーラリオへ!	393
小さくなつたベル	396
元に戻ったけどなんだかかなー	401
女神の部屋で	404
オラリオをパトロール	408
闇の剣士の攻撃	412
ベル休む	416
椿のところへ	420
蓮 襲われる。	424
ベル、最大の試練	428
＼( ^o^ )／オワタ	433
ジオウ対アルフィア!?	436
アルフィアの嫁作法	440
襲撃を受けるベル・クラネル	442

武器の修理が完了!!

ベル、ベットの所で死す

連れていかれるベル

ベル、アイズに襲われる。

447

451

454

458

## 兎と正義の眷族

迷宮都市オラリオ、ここでは冒険者と呼ばれる神の眷族となりダンジョンに入り鍛えたりモンスターを倒したりと世界の中心と言った方がいいだろう。

その場所にそびえ立つ星屑の庭と呼ばれる場所に赤い髪をポニーテールにしている女性は一人の白い髪をした男の子を抱きしめていた。

「ベルーーベルーーうふふふふ」

「あ、アリーゼお姉ちゃん……恥ずかしいよ。」

「何を言っているのよーーーまだ7歳の子が生意気に言うんじゃないのーー」

アリーゼ・ローヴェル 16歳、レベル4の冒険者でありアストレア・ファミリアの団長である。

そして彼女が抱きしめている人物……ベル・クラネル 7歳。

アストレア・ファミリアの団員でもありマスケットキャラになっている少年である。ではなぜ7歳の子どもがアストレア・ファミリアにいるのか？

暗黒期に起こった戦いで最後の時交戦をした元ヘラ・ファミリアであり静寂と呼ばれた女性「アルフィア」が言った最後の言葉……村に残してきた自分の妹の子ども……それをアストレアに彼女がお願いをした。

それを承諾をしたアストレアはアリーゼたちを連れて彼のいる村へとやってきたときに驚いたのは7歳とは思えない力を彼は持っていた。

そしてオラリオに連れて帰る時に彼が自らお願いをしてアストレアは彼の祖父に許可を得てからというのもアリーゼ達がその子を気にいったつてのもあり連れて帰り現在に至る。

さて話を戻して彼の中にいる人物はため息をつきながら言葉を発する。



『全く、ベルはモテモテだな……これではお前の爺さんが言っていたハーレムって奴になりそうだな。』

「な、何を言っているのですか!? オーマジオウさん!？」

ベルは顔を赤くしながら自分の体内にいる人物に訴えた。オーマジオウと呼ばれた人物は笑いながら謝るが本気で謝っていないのでベル自身は頬を膨らませていた。

(だがベルと出会って我も昔のことを思いだすな……)

オーマジオウは昔のことを思いだしながらベルとの出会いを思いだす。

オーマジオウ side

若き日の私にお別れを言った後私は消滅をしたはずだった。だが消滅寸前に別世界へと降りたつも体の維持をするだけの力を残していなかった。自分がしてきたことを考えたら当然の報いかと考えていたら一人の男の子が私に話しかけてきた。

『大丈夫?』

『……お前は私が怖くないのか?』

『ううん怖くないよ。だって優しい雰囲気を出しているのに……怖いなんて思えないよ。』

最初の出会いで思ったことが不思議な子だなと思った。私を見て優しい雰囲気かとそれからもベルは私のところへと来ては話をしていたが……私の体が光りだしたのを見て涙目になる。

『どうやらお別れのようなな……』

『どうして!?!』

『私の維持をするための力が消滅をしようとしている。お前と話をして久々に楽しかった。ベル……』

『嫌だ……イヤダイヤダイヤダ!!消えないで!オーマジオウさん!』  
彼は涙を流しながら私に抱き付いてきた。戸惑ってしまうが私はこれ以上ははいはいけない存在だ。ベルと別れるのはつらいが……これも私の宿命だと思っている。

だがベルはとんでもないことを言う。

『なら……僕の体の中に入れていい!!』

『な!?!』

正気かと思つた。7歳のベルに私のようなものが入れれば……だがベルの目を見て彼は真剣に考えて自分の中に私を受け入れることを決意をした目だ。

『……ベル、本当にいいのか? 私は前にも話した通り最低最悪の魔王と呼ばれている。その力は絶大なほどに強い……お前の体が耐えきれないかもしれないのだぞ?』

『それでも! 目の前で消えるのを見ていただけなんていやだ!! 僕はもう……失いたくない。』

ベルの思いを聞いて私は首を縦に振る。彼の目はかつて私が親を失ったときと同じ目をしていた。ベルもまた失った気持ちを知っているからこそあの言葉を出したのだろう。

それから私はベルの中で過ごしている。ベルに私の力を使わせるために精神世界や外の世界でも鍛えることにしたが……ベル自身の才能なのだろうか……正直に言えば7歳なのに化け物じゃないかつて思うぐらいに成長をしたよ。

私間違つていないよね? いや私も最初はあるな風に戦闘ができたわけじゃないのに何? いきなり俺参上とか言ったりさ最初からクライマックスだぜとか通りすがりの仮面ライダーだとかさ? いや仮面ライダーに鍛えてもらったのはわかるが……変わり過ぎじゃないか?

現在ベルにはジオウに変身をする許可を出している。アーマータームの方はまだ出してない。

現在オラリオに来てベルの中にいるが……まあ恩恵を授けた時のアストレアには苦笑いをするしかなかったな……なにせベルのステータスがERROR表示で出ていたのだからな。

レベルは1だがそれ以外がERROR表示などありえないが私が中にいるから表示ができないかもしれないな。まあいいだろう……ここからが私達の新たな物語の始まりでもあるからな。

オーマジオウ side 終了

「またベルに甘えているのですか団長さま。」

「アリーゼ……」

「あらお帰り輝夜にリユー。」

アリーゼが振り返ると黒い髪に着物を着た大和撫子と呼ぶにふさわしい人物「ゴジョウノ・輝夜」金髪の長い髪に耳がとがっているエルフの女性「リユー・リオン」の二人である。

「お、お帰りなさい輝夜お姉ちゃん、リユーお姉ちゃん。」

「あらあら兎さまはまた団長さまに抱きしめられているんですね。まあポンコツエルフには無理なことでしょうけどね。」

「な!?なぜそこで私が出るのですか輝夜!」

『相変わらず仲がいいなお前達。』

「どこが(ですか)!!」

『いや普通に仲がいいだろうお前達。』

オーマジオウはベルの中で苦笑いをしながら両手を組んでいた。ベルも二人の姉が仲がいいのになと思いきやアリーゼに抱きしめられていた。顔を真っ赤になりながら彼女から脱出をしたいがレベル4とレベル1では力の差がある、だが彼にはオーマジオウが入っているため本来の力を出せば出れるがベル自身が優しいため力を出さないようにしている。

「さて明日はベル、ダンジョンに行ってみようかしら。」

「いいの?」

「そうだな。お前ひとりで行かせるわけないから安心をしろ。リオンいいな?」

「わかっています。」

「わーい(\*、▽、\*)」

ベルが喜んでいるのを見て3人は「「可愛い!」と心の中で呟いているがオーマジオウは彼女たちを見て大丈夫だろうかと思うが流石の彼も彼女達の様子を見てはつきりと分かったことがある。

(こいつら……ベルに恋をしている!?しかも7歳だぞまだこの子は!!あれか……シヨタコンって奴なのか!?うーん本当にこいつらに預けて大丈夫だったのだろうか?不安しかないぞ……)

オーマジオウはこれからのベルのことを考えながら共に戦うアス  
トレア・ファミアの未来を心配をしながら明日のダンジョンの方を  
見る。

これは最悪最低の魔王の力と共に7歳という都市でオラリオに  
やってきた兎のお話。

## 変身

次の日ベルはリユーと共に手をつなぎながら軽装のアーマーを着てダンジョンの中に入る。彼は初めてのダンジョンに目を光らせながら辺りを見ていた。

「ここがダンジョン・・・」

「ベル、最初ですからこの辺はゴブリンなどが出て来ますから気をつけてくださいね?」

「はい( ^o^ )」

ベルは手をあげて歩いていくとゴブリンがいたのを見てベルは辺りを確認をしてオーマジオウに声をかける。

「オーマジオウさん。」

『うむ。』

ベルの腰部と右手が光りだしてベルトとウォッチが現れる。リユーはウォッチとジクウドライバーを始めて見たのでじーつと見ている。

「あ、あのリユーお姉ちゃん、そんなにじーつと見られたら恥ずかしいよ・・・」

「ごめんなさい。気になってしまいました・・・」

『まあ普段は武器だけしか出していなかったからな。とりあえずベル変身してみるといい。』

「うん!」

ベルは返事をして前に立つが・・・リユーは首をかしげてくださいのだろうと見ていると彼は振り返り涙目になっていた。

「ぐす・・・どうやって変身じだらいいの?」

『あ・・・』

オーマジオウは変身など教えていなかったため彼は涙を流していたのでやってしまったと思いい変身講座をすることにした。

『右手に持っているライドウォッチのリングパーツを動かして上部のボタンを押してみるんだ。』

「リングを動かして上部のボタンを押す?」

ベルは言われたとおりにリングを動かした後に上部のボタンを押す。

【ジオウ】

「鳴った！」

『そしてウォッチを腰部のジクウドライバーに右側にセットをするんだ。』

「右側にセット……」

ガチャとジクウドライバーにジオウライドウォッチがセットされて音楽が流れる。ベルはどうしたらいいのかパニック状態になるか  
かるがオーマジオウは説明を続ける。

『そのままベルトの上部の押してロックが解除されたら反時計回りに回転させるんだ。』

「反時計回り？」

「ベル左側にまわらせてことですよ。」

「うん！」

そのまま左側に回転させて360度ベルトが回転をして音声  
が流れる。

【ライダータイム！カメンライダージオウ！】

ベルに装甲が纏われて仮面にライダーと文字が装着されて仮面  
ライダージオウがオラリオに誕生をする。

「これが……ジオウ？」

(本当ならここでウォズが現れて祝えとか言うのだが……まあ  
いないからそんなことはできないな。)

オーマジオウは残念そうに見ているとゴブリンがジオウに気づい  
て襲い掛かろうとしていた。

「あわわわわわ……」

『落ち着けベル、お前は私の特訓にも耐えてきた。ならばいつも通り  
にすればいい。ジカンギレードを出すんだ。』

「うん！」

ベルトからジカンギレードが現れてベルは右手に装備をする。

【ケン！】

「はああああああああああ!!せい!!」

ジオウは走りだしてゴブリンにジカンギレードを振るいボディを切りつける。ゴブリンは一撃で倒れてリユースは驚いている。

「なんとこの力でしょう。」

『ベル、今度はジユウモードにしてみるといい。』

「わかりました!」

ケンモードからジユウモードに変えてトリガーを引いて残りのゴブリン二体を撃ち抜いた。ゴブリンたちは魔石を残して灰になり彼は歩いて拾った。

「やりましたよーリユースお姉ちゃん!!」

「ええ見事です。これなら少し降りても大丈夫でしょう。」

リユースに言われてベル事ジオウと共に二層に降りていき襲い掛かるコボルトが襲い掛かるがジカンギレードをケンモードに変えて切り裂いた。ジオウの力に驚きながらもリユースも襲ってくるモンスターを切りつけて倒す。

襲い掛かるモンスターたちを次々にジカンギレードのモードを変えながら戦うベル、オーマジオウもこの子は戦いの天才かと思いついていた。やがて荷物が多くなったのかりユースはここまでです。いい戻ることにした。

「まさかジオウの力がここまでとは……」

『リユースよ、これがジオウの最大の力かと思っていたら大間違いだぞ? まだジオウにはアーマータイムと呼ばれる形態を持っているのだからな。』

「え!?そんなのがあったの!!」

『ああ、まだベルには早いと思って隠していたが……. ジオウの力をここまで出した以上……. アーマータイムを使うのはいいかと判断をしている。今はライドウオツチを出していないが……. 私が保管をしている。今日のところは戻ってお風呂に入るとしよう。』

「うん……. 疲れちゃった。」

ベルはジクウドライバーからライドウオツチを外すと変身が解除

されてベルトとウオッチが消える。

ベルは疲れたのかりューの後ろに抱き付くとそのまま眠ってしまった。リュー自身もベルが寝ている姿を見てかわいいなと思っっているとオーマジオウが声を出した。

『ベルはこう見えてもまだ7歳の子どもだ。リュー・リオン……お前達アストレア・ファミアの皆がいるからこそベルは寂しい思いをせずにいる。お前も知っただけの通り彼はアルフィアと呼ばれる女性の甥だ。』

「ええ彼女から聞いています。でもそれでもアストレアさまが決めたことを私達は何も言いません。それに私も……この子のことを……」

彼女は眠っている彼を見ながら笑っているのでオーマジオウはベルの体内でシヨタコンの奴らに任せても大丈夫なのだろうかと思いつつも彼のことを思っているのも何も言わない。

アストレアも彼のことを大事な家族と見ているのでオーマジオウはベルの寂しい思いをさせないでよかったと思っただけの優しい彼のためなら最悪最低の魔王になってもいいと……

(私もあいつらのことを言えないな。ベルは私の命を救ってくれた人物……彼のためなら力を貸そう。)

オーマジオウはそう呟きながら眠っているベルの中で休むことにした。リューは眠っているベルを見ながら可愛いなーと思いつつも首を横に振り理性を保ちながらホームへと戻るのであった。



## 朱色の髪の神との出会い

リユーにおんぶしてもらいホームへと帰ってきたベル、彼はそのまま寝てしまっており帰ってきたほかのメンバー達はベルの寝顔を見て癒されていた。

「いやー可愛いわベル君。」

「本当かわいいね。」

ノインとリヤーナは眠っているベルの頬をつんつんとして癒されていた。お風呂から戻ってきたネーゼやほかのメンバーも寝ているベルの姿を見てほっこりしているとベルがうーんと動いたので起きるのかな?と見ていると。

「おねえひゃん達だいしゅきーーー」

「「「ぐは!!」」」

ベルの寝言だがお姉ちゃん大好きという言葉聞いてメンバーが地面に倒れた。丁度仕事を終えて帰ってきた小人族のライラはこの惨状を見てため息をついてベルに近づいて中にいるオーマジオウに話しかける。

「またか?」

『「……………まただ。ベルが寝言でお姉ちゃん大好きという言葉聞いて全員が倒れた。」』

「全く……………まあ今日のところはこいつも疲れているだろうからな。張り切り過ぎたんだろうな。」

『初めてのダンジョンをとでも楽しみにしていたからな。あれだけ動けば眠くなってしまうさ。』

「……………だな。しかしようちのファミリアほとんど全滅をしているじゃねーかよ。」

ライラはベルの寝言を聞いて倒れているメンバーを見てため息をつきながら一人一人起こしているとベルが目をごすりながら起き上がる。

「お、兎起きたか?」

「おはようございませすライラ……………さ……………( ⊗ ⊗ ⊗ ) スヤア」

「おいおいご飯を食べる前に寝ようとするなつての。」  
「す、すみません。」

ベルはライラに謝った後なんでアリーゼ達が倒れているのだろうと首をかしげている。オーマジオウとライラはベルのせいとは言えなかったのでごまかすことにした。

『ベル、お前が疲れているようにアリーゼ達も疲れているんだよ。なあライラよ』

「お、おうーそ、そうだぜー!」

二人の言葉を聞いてそうなんだーといいアストレアさまが待つているじゃねーか?といいベルは主神の部屋の方へと走っていく。

扉を開けると本を読んでいたアストレアが笑顔でベルを迎える。

「いらつしやいベル、さあステータスを更新をしましょうか?」

「はい( ^o^ )」

ベルは服を脱いでベットに倒れた。アストレアはベルの上に乗リステータスを確認をした。

「やっぱりエラー表示ね。」

ベル・クラネル

所属派閥：アストレア・ファミリア

L v. 1

力：ERROR

耐久：ERROR

器用：ERROR

敏捷：ERROR

魔力：ERROR

スキル

・ジクウドライバー ジオウ

????

???????

???????

に变身をする。

アストレアは首をかしげながらいるとオーマジオウが声をかけてきた。

『やはり私がベルの中にいるからERROR表示になるのか?』

「それはわからないけど……. . . . . それにしてもジクウドライバーのジオウ以外のところは……. . . . . あなたが制限をしているのね?」

『そうだ。ベルにはジオウの力に慣れてからと次のステップに進めようと思っっている。』

「そうね、強大な力をいきなり使ったら力の暴走をってしまう可能性があるのよね。」

「アストレアさま終わりました?」

「ええ終わったわよ。」

ベルは起き上がり服を着替えてアストレアはベルに声をかける。

「そうだベル、明日はダンジョンを休んでオラリオを周らないかしら?案内などしていなかったわねと思っつてね。」

「ぜひお願いします。」

「でも私一人じゃあれだから誰かついてきてもらいましょ?」

「はい( ^o^ )」

ベルは手をあげて全員で夕ご飯を食べることにした。オーマジオウはその様子をベルの中で見ながらかつて順一郎とご飯を食べていた頃を思いだす。

「そういえばベル、明日はアストレアさまとオラリオを周るつて聞いたけど.....」

「うん!僕、そこまでオラリオのことを知らないから案内をしてもらうんだ!!」

「.....ふっふっふだつたら私に任せなさい!!」

アリーゼが立ちあがってドンと胸を張って自分が護衛としてついていく宣言をしたのだ。こうしてアストレアとベルにアリーゼの三人でオラリオを見ることになりベルはアストレアと一緒に風呂に入った後部屋に戻り眠る。

次の日ベルはふぁーと欠伸をしながら起き上がり眠い目をこすりながら部屋を出て洗面所で顔を洗っているとアリーゼが欠伸をしながらやってきた。

「おはようベルー」

「おはようアリーゼお姉ちゃん。」

「ぴと!!」

2人は朝から抱き付いてアリーゼはベルの頬にキスをする。これ

は毎回やっているもので時に輝夜だったりネーゼだったり頬にキスされている。

ベルはこれが挨拶なのかな? と思いながらもそのキスを受けた後にアリーゼの頬にキスをする。

(ふあああああベルにキスしてもらって私幸せかもー) (つとアリーゼは思っているだろうな。ベルもベルで勘違いをしているがアリーゼ達が喜んでいるのを見て嬉しそうな顔をするから何も言えないな。)

オーマジオウはアリーゼの顔を見てそう思いながらもベルが嬉しそうなので言わないことにした。

朝ごはんを食べた後ベルはアリーゼとアストレアと手をつないで一緒に歩いていった。だがベルの容姿は現在完全に女の子のような格好である。白い髪はポニテールにするなど女の子と間違われてもおかしくない姿である。

中にいるオーマジオウはベルは男の子じゃなかったか? と首をかしげていると朱色の髪をした人物が金髪の小さい子を連れてやってきた。

「おーアストレアやん!」

「あらロキ。」

「?」

「んんんん、ぬおおおお可愛い可愛い可愛い! なんやその子は!? アストレア自分、こんなかわいい子を眷族にしたん! いやー羨ましいわ!! でもうちのアイスたんだって負けてないで!!」

ロキと呼ばれた人物は自分が連れてくる金髪の子を出したがベルは首をかしげながらロキにいう。

「あ、あのー」

「なんや?」

「僕、男の子です。」

「「え?」」

「え?」

ベルの言った言葉にアイスとロキは数分間硬直をした後にロキが

近づいてじーつと見る。

「男の子!?ほんまに君男の子なん?」

「は、はい。」

「ロキ?そろそろいいかしら?」

「す、すまん。ごほん改めて自己紹介をした方がええね?うちの名前はロキや。でこの子はアイズたんって言うんや……アイズたん?」

「ほーーーーー」

アイズと呼ばれた少女はベルの姿を見て顔を赤くした。アリーゼとアストレア、ロキはまさかと思いベルを近づける。

「えっと……ベル・クラネルといいます。」

「アイズ、アイズ・ヴァレンシユタイン……皆からアイズって呼ばれているの。」

「僕もベルって呼ばれています。」

「ベル……うん覚えた。」

「ベルたんって言うんやな……うーんかわいいなー男の子なのになんでこんなにかわいいんや?」

「でしょ?うちのベルは可愛いんだから。」

『それはそれでいいのか?』

「なんや?この声は?ベルたんの方から聞こえてきたけど……」  
『失礼した神ロキ、私はオーマジオウと申すもの……ベルの中に住んでいるものだ。』

「べ、ベルたんの中に!?あーあまり聞かないことにするわ。それでアストレアとアリーゼたん、ベルたんの三人は何をするんや?」

「オラリオを案内をしようと思ってね。」

「あーそういうことか、ほなうちも一緒に行くで。アイズたんもええやろ?」

「うん（ベルと一緒に、ベルと一緒に）」

（またなのか?ベルは女の子とフラグを建てるのが好きなのか!?確かにこの間あったアーデイという女の子もベルのことをじーつと見ていたのを思いだした。なんでベルはこうも女の子を好きになっ

うのか・・・不思議だな・・・いやベル自体が逆に吸い寄せているのか？恐ろしい子・・・）

オーマジオウはこれから先ベルのことを好きになりそうな人物が近づいてくるのかと考えていると頭が痛くなってしまうしやべらなくなってしまうのであった。

やっぱりベルは誑しなのか？

オーマジオウside

オラリオを二人に案内をしてもらおう予定だったが、そこに神ロキと眷族のアイズ・ヴァレンシユタインという少女と一緒にオラリオを案内をしてもらっている。

現在我々が向かっている場所はヘファイストス・ファミリアという鍛冶屋があるテナントが入っている巨塔の方へと向かおうとしたときに青い髪をした女の子が手を振っている姿を見る。

「あーアリーゼ！アストレアさま！ベルくーんーん！」

「アーデイおねーちゃんーん!!」

「ぴと!!」

あーやはりこうなったか……アーデイ・ヴァルマ、ガネージャ・ファミリアというところの眷族でリユートの友達の人物だ。リユートの紹介でベルを紹介した時の彼女はまるで最初にベルを見たアリーゼ達と同じ感じをした。

「やっぱりベル君かわいいねーんーん」

「あう……アーデイお姉ちゃん……僕男の子なのに……」

「ふふふふふ。」

……やっぱり私はベルをこいつらに託したの間違いだったのか？いやベルが可愛いのは認めよう。だがこいつらの目シヨタコンを襲いそうな目をしているもん！いやーオーマジオウさんどうしようか……いや真面目な話で……ベルは嫌がっている様子がないから何とも言えないけどさ。てかキャラ崩壊しちゃうよ。

「アーデイ仕事はどうしたの？」

「今日は休みだからのんびりしようとした時にベル君を見つけたら、それにロキ様とアイズちゃんも一緒なんですね？」

「ええ先ほど一緒になったところなのよ。」

「なら私もいいですか？」

「ええでーんそれにしてもアーデイたんもそうやけどアリーゼたん

もそんな大きなもの持って羨ましいなーベルたんはどの子がええん?」

「ほえ?」

ロキ殿!?何ベルに聞いているのだ!?てかアリーゼにアーディよ……なぜ目を光らせているのだ?てかアイズは頬を膨らませているのは何故に……

「ぼ、僕……一人なんて選ばません……だってみんな大好きだから!!」

「「「がは!!」」」」

「アストレアさま!?ロキさま!?アリーゼお姉ちゃん!?アーディお姉ちゃん!?アイズさん!」

『……ベルの言葉に全員が倒れてしまったか。この惨状どうするのだ……』

私はベルの中で頭を抑えながら彼女達が起きるのを待っていた。数分後アストレア達が回復をしてベルはアーディと手をつないで一緒に歩いている。ベルは嬉しそうに歩いているので私は文句を言うことはない。ちなみに彼女も私が中にいるのを知っている人物の一人である。

「それじゃあベル君、昨日はダンジョンデビューをしたんだ。」

「うん!」

「7歳なのにねーでもアイズちゃんが9歳でダンジョンに入っているから一緒かな?リオンが一緒だったんだよね。」

「うんリユーお姉ちゃんが一緒だったからそれにオーマジオウさんが力を貸してくれたから平気だよ!」

『まあまだまだ改善するところはあるが……良くやったと言っておくよ。』

「えへへ……」

ベルは褒められたのが嬉しかったのか笑顔になっているので後ろから彼のことを見ている3人はうんうんと首を縦に振っている。アイズに関してはいいなーという目で見ているが気のせいだろうか。

まあベルのことを思っている者たちがいる限りは大丈夫だろうな。



オーマジオウ side 終了

それから6人はオラリオを周りながらガネージャ・ファミリアの門を見てベルが上を見ながらうわーと言ったり、ロキの案内でロキ・ファミリアの中を案内してもらったりして団長であるフィンや副団長のリヴェリアなどにも挨拶をした。

「始めましてアストレア・ファミリアのベル・クラネルといいます！」  
「元気がいいね。僕はロキ・ファミリア団長を務めている」「フィン・ディムナ」だよろしくねベル。」

「私はリヴェリア・リヨス・アールヴだ。よろしくなベル。」  
「.....」

ベルはリヴェリアを見てから涙がぽろぽろと流したのを見て彼女はオロオロする。

「ど、どうしたんだ？」

「ふええええおかさああああん。」

そのまま泣きながらリヴェリアに抱き付いた。彼女自身も驚いたがベルはこう見えて7歳の子どもである。彼女はベルの頭を撫でながらよしよしと優しく声をかける。

やがて落ち着いたのかベルはリヴェリアに謝る。

「ごめんなさいリヴェリアさん。」

「気にしないでくれ.....」

彼女はベルに近づいて耳元で囁いた。彼は目を見開いたがいいのといったのでリヴェリアは首を縦に振る。

ベルは笑顔で喜んだあとロキ・ファミリアのホームを後にして鼻歌を歌いながら歩いている。

「どうしたのベル何かうれしそうね？」

「えへへへへへへ。」

「お姉ちゃんにも教えてーーー」

「内緒。」

オーマジオウはベルの体内でリヴェリアがささやいた言葉を聞いていた。

『二人きりの時に会った時は私のことをお母さんと呼んでもいい。』

(ふーむ確か彼女はハイエルフだとリユーが言っていた気がするが……シヨタコンってわけじゃないな。まあアイズって子がいるからリヴェリアにとってはベルは息子のような存在か。それにしてもベルはロキ・ファミリア、そしてアーデイに気にいられるなど不思議な子だな……なんだ？誰かがベルを見ている気がするが気のせいか……)

彼は辺りを見ているがベルをどこで見ているのかわからない。一瞬だけだったので見つけることができなかつたがもしベルに何かをする気だつたら容赦はしないと決意をする。

アーデイと別れてホームへと戻ってきた3人、ベルはリユーに模擬戦をしてもらうために裏庭に来ていた。

「それではベル始めますよ?」

「オーマジオウさん!」

『うむ。』

ベルの腰にジクウドライバーが装備されて右手にジオウライドウォッチが現れる。ライドウォッチのリングパーツを動かした後上部のボタンを押す。

【ジオウ】

ジクウドライバーの右側にセットをして上部のロックボタンを解除をして反時計回りにまわす。

「変身!!」

【ライダータイム!カメンライダージオウ!】

ジオウに変身をしたベルに対してリユーは二刀流の武器を構える。ベルもジカンギレードをとりだしてお互いに構えている。

先に動いたのはリユーだ。彼女が振り下ろす武器をベルはジカンギレードで受け止めるがリユーはその間に後ろへと飛びベルのボディにダメージを与える。

「うわ!」

ジオウのボディとは言えレベル4の攻撃は痛い、ベルは起き上がり再び接近をして剣を振り下ろすがリユーに簡単に受け止められてしまう。そのままはじかれて後ろの方へと倒れる。

「あうん……」

「やはりまだ対人戦には慣れていませんね。」

『その通りだな。当面はこのように模擬戦をした方がいいな……リニューお願いをする。』

「ええ、アリーゼにやらせたら多分私以上に力がありますから……私か輝夜が相手をしますね。」

「うーうー負けちゃった。」

「ベル、あなたはジオウの力を慢心をしています。それではいけませんよ。」

「……うん、リニューお姉ちゃんありがとう。」

「いいえ、あなたは私達にとって大事な……」

「大事な？」

「ふふさあまずは汗を流しましょう。」

「リニューお姉ちゃんと一緒に入りたいなー」

「……今日だけですよ。」

「わーい(\*・▽・\*)」

ジオウの姿のまま喜んでるのでリニューとオーマジオウはほっこりとしていたがベルはライドウオツチを外してオーマジオウが力で消すとリニューと手をつないでお風呂場の方へと歩くのであった。

そのあとにアリーゼがリオンだけずるいというのは後のお話である。

## アーマータイム

次の日、ベルはダンジョンにやってきた。だが今回ベルと一緒に来ているのはリユーではなくネーゼ、マリユー、イスカの三人だ。

「わーいベル君と一緒にだ！」

「僕もお姉ちゃんたちと一緒にうれしいです！」

「さーて頑張ろう！」

「「おーーー！！」」

四人で手をあげてベルはジカンギレードを装備をして現れたゴブリンを切っていく。ジクウドライバーは装着をしていないがそれでも鍛えているためゴ布林などのスピードをベルは見切ることができきる。

ネーゼ達もベルに負けないようにモンスターを次々に撃破していきベルの場所は6階層に到達をすると腰にジクウドライバーが装着されたのを見てベルはジオウライドウオッチを起動させてベルトにセットして360度回転させる。

「変身！」

「ライダータイム！カメンライダー！ジオウ！」

ベルはジオウに変身をした姿を三人はまじまじと見てみるとベルは仮面の奥で顔を真っ赤にしている。

「あ、あのお姉ちゃんたち恥ずかしいよ……………」

「いやージオウの姿始めて見たからさ。」

『さてベル、6階層に到達をしたってことでお前のレベルを解除をするでしょう。』

両腕に装備されているウオッチホルダーが光りだすとライドウオッチの色が変わったので全員が驚いている。

「ジオウ……………じゃない？」

『それこそ歴代の仮面ライダーの力が入っているライドウオッチだ。ジオウの隠された力……………アーマータイムだ。』

「「アーマータイム？」」

すると前方からウォーシャドウが現れてベルは左手に装着されて

いるウオッチを外してリングパーツを動かして上部のボタンを押す。

【ビルド】

「えつとえつと……」

『それを空いている左側にセットをして変身と同じ手順でまわすんだ。』

言われたとおりに左側にビルドライドウオッチをセットをして360度回転させる。

【ライダータイム！カメンライダー！ジオウ！アーマータイム！】

「うわ!?何か出てきた!!」

「人型?」

ベルは驚いているとパーツが分離をされてジオウに装着されて行く。

【ベストマッチ！ビル・ドール！】

「(カ)。ド。ン。ポカーン」

「変わった!?!」

『これこそ仮面ライダー！ジオウ ビルドアーマーだ。』

「よし!」

ベルはダッシュをして右手に装備されているドリルクラッシュシャークラッシュシャーを使いウオーシャドウを突き刺していく。そのまま地面を踏むとラビットの能力が発動されてジャンプをして蹴りを連続で入れて撃破した。

着地をした後にまだ来るのでどうしたらいいのかとっているとオーマジオウが声をかける。

『ベル、必殺技だ……ジオウライドウオッチとビルドライドウオッチの上部ボタンを押した後に変身と同じ手順で発動をする。』

「はい!」

【フィニッシュタイム！ビルド！ボルテックタイムブ레이크!!】

「お姉ちゃんたち離れて!!」

ベルの声を聞いて3人は横にずれるとグラフが発生をしてウオーシャドウの動きを止めるとそのグラフを滑るようにドリルクラッシュシャークラッシュシャーでウオーシャドウたちを撃破して着地をした。

「ふう………」

「すごい！すごいすごい！」

「ああすごいなベル！」

「えへへへへへ………」

姉たちに褒められてベルは照れておりほかのライドウオッチも使ってみたなどビルドライドウオッチを外して別のライドウオッチを起動させる。

【エグゼイド】

ジクウドライバーの左側にセットをした後にロックを解除をして反時計回りにまわす。

【ライダータイム！カメンライダージオウ！アーマータイム！レベルアップ！エ・グ・ゼ・イー・ド！】

ビルドアーマーが分離されてエグゼイドアーマーが装着されて姿が変わる。仮面ライダージオウエグゼイドアーマーである。

「こっちは両手に装着される武器なんだね。」

ガシャコンブレイカーブレイカーで現れたウォーシャドウに突撃をして殴るとHITという文字が発生をして後ろの方へと下がりネーゼ達が攻撃をして撃破するとチョコブロックを壊してアイテムが現れる。

「なんだろうこれ？」

『エナジーアイテムというものだ。それを取ってみるといい。』

「うん！」

高速化！

「うわあああああああああああああ！！」

突然としてスピードが上がったのでベルは驚いてウォーシャドウに突撃をして激突をした。全員がベルのスピードが突然上がってウォーシャドウに激突をして後ろにこけたのを見て啞然としていた。

「いたたたたた………」

ウォーシャドウはベルに攻撃をしてきたが右手のガシャコンブレイカーブレイカーでガードをして左手のガシャコンブレイカーブレイカーで殴り吹き飛ばす。

「これで決める!!」

「フィニッシュタイム! エグゼイド! クリテイカルタイムブレーク!」

地面にガシャコンブレイカーブレイカーで叩いてウオーシャドウたちが空中に浮かんだあとにベル自身も飛びあがりライダーキックを決めてウオーシャドウたちを撃破した。着地をした後にウオーシャドウ達は爆散をして魔石などが落ちてきた。

「わっと!」

マリユールが落ちてきた魔石を回収をするとベルは彼女達のところへと戻ったが膝をついた。

「あ、あれ………」

『やはり連続でアーマータイムを使うにはベルの体力などが足りないか………』

ベルはウオッチを外すとジクウドライバーなどが消失をしてベルは眠そうになっていた。イスカはベルを自分の背中に乗せてマリユールとネーゼが敵を引き受けることにした。

『ならこれらを使おう。マリユールこれを使え。』

「スイカ?」

「スイカーアームズ! コダマ!」

「変形をした!」

『コダマスイカライドウオッチだ。アーマータイムなどできないが………戦力的にはいいとおもうぞ?』

3人はベルを抱えて地上の方へと戻る。途中で襲い掛かってきたモンスターはコダマスイカーアームズが指部からマシンガンを放ち撃破していくのですごいなこれとネーゼは呟いて二人も同じように首を縦に振る。

地上に戻るとコダマスイカライドウオッチが解除されて消失をする。3人は換金をした後にホームへと帰還をした。

なおベルは ( ⊠ ⊞ ⊠ ) スヤアとイスカの背中で寝ていたのであった。

## 目を覚ましたベル

「……………うにゅ?」

ベルは目を覚ますと自分の部屋のベッドの上で起きたので彼はどうしてベットで寝ているのかなと思っているとオーマジオウの声が聞こえてきた。

『目を覚ましたかベル。』

「オーマジオウさん?なんで僕、自分の部屋のベッドで寝ているの?確かダンジョンで……………」

『そうお前はアーマータイムを二回使った後に眠ってしまったんだ。体力がなくなっただのと眠気が来てしまったのだろう。(まあネーゼ達はベルの寝顔を見ることができたから満足をしているだろうな。』

ホームへと帰ってきた三人と一匹の兎のような少年の寝ている顔を見てアリーゼ達はほっこりとしていた。やがてベルの部屋の扉が開いて入ってきたのはアストレアだった。

「ベル……………」

「アストレア様……………」

「良かったわ。あなたが眠ってしまったと聞いて慌ててしまったわ。」「ごめんなさいアストレアさま、アーマータイムができたのが嬉しくて……………自分の体力のこと考えていませんでした。」

「仕方がないわ。あなただって男の子だものね?でもねベル……………あなたが倒れてしまったのを聞いて慌てて心配をする人がいるのを忘れては駄目よ。」

「はい……………ごめんなさい。」

ベルは涙目になりアストレアに謝り、彼女はベルを抱きしめたそしてベルも抱きしめ返す。その様子を見ていたオーマジオウは女神の選択を間違えてなかったなと思いつやべらないで首を縦に振る。

現在ビルド、エグゼイドのライドウオッチを出していた。ほかのライドウオッチを使うのは明日からでもいいだろうと……………まずは疲れている体を休めるためにアストレアと共に風呂場へと行く。

「ふう……………」



「アストレアさま。」

「何かしらベル？」

「どうしてお風呂は気持ちがいいのでしょうか？」

「そうねー。体の疲れとかがとれるからじゃないかしら？」

「そうですね。」

ベルは現在一人で入ることはない、別に一人で入るのは怖くないが……。アリーゼ達がいっしょに入ろうというので彼自身も一緒に入るのは嬉しいので一緒に入っているがオーマジオウは成長をしたベルが未来の予想で13歳になっても一緒に入っていそうな未来が来る気がしてたまらない。

（あいつらベルを一人で入らせることはないだろうな、あいつらベルが13歳になってもアリーゼや神アストレアと一緒に入る未来が見えてきたわ。回避することは不可能だなこれ……。）

彼はその未来を先に見えてしまったためシヨタコンが治っていないなど思いながらお風呂に入るベルには明日はどのライドウオッチを使わせようかなと考える。お風呂から上がったベルはアストレアと共に眷族の皆がいるリビングに入る。仕事を終えて皆でご飯の準備をしており輝夜はベルに気づいて近づいてそのまま自分が先に座った上にベルを座らせる。

「あ、あれ？輝夜お姉ちゃんどうして僕、輝夜お姉ちゃんの膝の上に座っているの？」

「いいではないか、アリーゼやリオンなどはお前にかまっているが……。私だってお前を構いたいんだ。」

「うにゅ……。」

頭をなでなでされたのでベルは変な声が出てしまい、その様子を見ていたアストレアや眷族たち（ライラを除く）は可愛いと思う。

「そういうえべル、お前ジオウの新たな力を使ったって聞いたけどよ。」

「はい！アーマータイムというアーマーを装着を許可を得ました!!」

「「アーマーを装着？」」

「私達も最初見た時は驚いたよね？」

「うん、いきなりパーツが現れてベルに装着されていくのを見て驚いたわよ。」

「へえーベルにアーマーがねーまだまだありそうね。」  
「んくんく」

ベルは輝夜に食べさせてもらいながらご飯を食べていた。するとベルの左手が突然として光だったので全員が目を閉じた。光が収まるとベルの左手にライドウオッチホルダーが装着されていた。

「これは．．．．．ライドウオッチか？」

『そうだ、ジクウドライバーの方は私が出すが．．．．．私が全部出していたら時間がかかってしまう。そのライドウオッチホルダーにジオウライドウオッチとタカウオッチロイドを装着させておく。』

ベルは左手にライドウオッチなどが装着されたのを見て笑顔になる。ベル自身がジオウの力を悪いことに使わないのをオーマジオウは知っているためライドウオッチホルダーとジオウライドウオッチとサーチなどを使えるタカウオッチロイドをホルダーにセットをしたのを託したのだ。

ご飯を食べ終わった後ベルは自分の部屋に戻りライドウオッチホルダーを外してから目を閉じる。

「お休みなさいオーマジオウさん。」

『お休みベル．．．．．』

ベルは目を閉じてオーマジオウもベルが寝た後に部屋の外を見ていた。

『．．．．．私は別の世界で過ごしているのだなと感じるな。若き私が別の未来を進んだことで私という存在はなくなっても当然．．．．．だがこうして私は生きているのもベルのおかげだ。そしてベルには私の力を使える。それがどういう意味か．．．．．私にもわからないことだな。ベルには私ができなかった最高最善の魔王になることを祈るとしよう。』

彼はベルの中で呟きながら自分ができなかった最高最善の魔王を目指してもらいたいなと思いつつ彼の力になろうと．．．．．改めて決意をするのであった。



人をぶちのめす気だよ!!」

その通りである。タカライドウオツチからベルが捕まっている様子を見た瞬間アリーゼ達は自分たちが使用をしている武器を持ちだして襲撃をする準備をしていた。その様子をライラは見えていたが全員で行く必要あるのかと見ていたがアリーゼ達の目に光がなかった。「何を言っているの？ベルをさらったやつらを叩いておかないとまたベルがさらわれるじゃない……ダカラココデネ？サアイクワヨ。」

アリーゼの後をメンバーたちがついていきアストレアとライラは犯人に同情をするがさらったのが自分たちの大事な眷族と弟分なので全員で開けるわけにはいかなかったので残ることにした。

一方で捕まっているベルはどうしようと考えていた。ジオウの力を使えば犯人を叩きのめすことはできる。

だがジオウの力をそう簡単に使ってもいいのだろうかと考える自分がいる。オーマジオウが言っていた。

『仮面ライダーとは人々を守るためにその力を使うんだ。自分個人のためにライダーの力を使ったライダーはいたりいなかったりだが……基本的に人々のために戦うものが多かった。皆の笑顔を守るために戦うライダー、皆の場所を守るために戦うライダー、ライダー同士の戦いを止めようとしたライダー、夢を守るために戦うライダーなど仮面ライダーには様々なライダーがいるんだ。ベル……仮面ライダーの力をどう使うのかはお前次第だ。』

だからこそ彼はここで捕まっている状態だった。仮面ライダーの力を使わないで姉たちが来てくれることを信じて……

「よし早速この子をぐへへへへ……」

犯人はベルに近づこうとしたときに扉が壊れて犯人たちは見るとベルに襲い掛かろうとした男の顔面に蹴りが命中をして吹き飛ばされる。

「ぐるぐるぐる……」

「ね、ネーゼお姉ちゃん!!」

ネーゼが犯人に蹴りを入れた後手などが自由になったので見ると

輝夜が持っている剣でベルの縄を切ったのだ。

「ベル大丈夫か？」

「輝夜お姉ちゃんたち来てくれたんだね!!」

「ええー！さーてあなたたち？どこの子をさらったのかわかってやったのかしらねー」

アリーゼは笑顔だが後ろから黒い炎を出しているかのような雰囲気を出しながら犯人たちの方へと向かっている。

「あ、アストレア・ファミリア!？」

「なあああああああああああああ!!」

「「「サア覚悟ハデキテイルデショウカ?」」」

「「ひいいいいいいいいいいいい!!」」

数分後犯人たちはアストレア・ファミリアによってフルボッコしてからガネージャ・ファミリアにつきだした。

受け取ったガネージャ・ファミリア団長「シャクティ・ヴァルマ」はなぜ犯人がフルボッコにされているのか理由を聞くと一言。

「「「私達の大事な子をさらったから」」」

「へえーベル君をさらったんだー」

アーデイの目から光が消えたのを見てシャクティは妹がアリーゼ達と同じようになってしまう運命が見えてしまったのか頭を抑えていた。

一方でベルはさらわれて疲れたのか夢の中でオーマジオウのライダー講座を聞いていた。アーマータイムを使うために仮面ライダー達の歴史や技、戦い方などを教えているところである。

一応ベルはオーマジオウとの訓練で仮面ライダーと模擬戦をしたことがある。だがそのライダーの歴史の知識などは知らない。

精神世界の中でベルはオーマジオウと話をしていた。

『「とうわけだ。ベル……仮面ライダーはそれぞれフォームチェンジをすることで戦い方を変えることができる。』

「じゃあジオウが使うアーマータイムは仮面ライダーというフォームチェンジみたいな感じですね。」

『そういうことだ。(いづれグランドジオウになったときにそのライ

ダーの力と技などが使えるが……今は黙っておこう。)だがベルよく仮面ライダーの力を使わなかったな。』

「だってお姉ちゃんたちが助けてくれると思っただけだからそれに……この力を人に向けては駄目なんだよね。なら僕はこの力を人には向けない……でももしそれで僕に襲い掛かるって言うなら僕は……使う。」

(今はその答えだけでもいいとしようか。7歳なのにベルは強いな……姉たちを信じて待つという精神を持っている。)

精神世界で両手を組みながらベルのこれからのことを考えながらライドウォッチを使う為に訓練だなと……

フルスロットルで行こう

ベルが犯人たちに連れ去られた事件から数日が経ち、ベルはアリーゼや輝夜達と一緒にダンジョンの中にいた。ジカンギレードをジユウモードにしてアリーゼ達に当たらないように発砲をしてモンスターたちを倒していた。

「ベルが使っているえっと・・・」

「ジカンギレードだよお姉ちゃん。」

「そうそうそれ、銃？つてもものになったり剣になったりできるから便利ね。」

アリーゼはベルが持っているジカンギレードを見ながらベルはモードをケン状態にして襲い掛かる魔物たちを切っていくアストレア・ファミリアは降りて7階層にやってきた。

ジクウドライバーが現れたのでベルは左手のライドウオッチホルダーからジオウライドウオッチを外してリングパーツを動かして上部のボタンを押す。

【ジオウ】

右側にセットをして上部のロックボタンを解除をして360度回転させた。

「変身!!」

【ライダータイム！カメンライダージオウ！】

仮面ライダージオウに変身をしてモンスターたちが現れた。

「気を付けてベル！あいつらはキラアアントといって堅い装甲を持っています！」

『ならばベル、ここはスピードでかく乱をするといいさ。』

「スピードで？」

右側のライドウオッチホルダーが光りだしてそれを外してリングパーツを動かして上部のボタンを押した。

【ドライブ】

そのままジクウドライバーの左側にセットをして先ほどの変身と同じ手順をしまわす。

「ライダータイム！カメンライダージオウ！アーマータイム！ドライブ！ドライブ！」

ジオウの前でアーマーが現れてジオウの体にボディに装着されて行き仮面のところのにドライブと書かれた。初めてベルのアーマータイムを見たメンバーは啞然とした。

『やはりアーマータイムを見慣れないと驚かれるなベル。』

「ひとつ走り付き合ってもらおうよ」

ジカンギレードを装備をして高速で移動をしてキラアアントを切りつけた。キラアアントは気づいたら頸が切断されてたのに気づいたのは首が落とされてからでありそのまま絶命をした。

「これがドライブアーマーの力なの？」

『そうだ、ドライブのタイプスピードはスピードをあげることで高速で移動をすることができる。その力を具現化したのがドライブアーマーだ。』

「ならこの両手のは？」

両手を前につきだすとシフトスピード型のエネルギーが飛んで行きキラアアントが吹き飛ばした後アリーゼ達がキラアアントを切り裂く。

ベルはライドウオッチの上部ボタンを押す。

「フィニッシュタイム！ドライブ！フルスロットルタイムブレーク！」

「はあああああ………」

するとジオウの周りに車型が現れてそのままキラアアント達の周りを飛んで蹴りを入れていき最後の蹴りが命中をして爆散をする。

「「ちよつとまてええええええええええええええええ!!」」

「ふえ!!」

「何今の!?!てか何かいたわよね!!」

「ああ！しかもベルが突然として浮いたと思ったら連続でキラアアントを蹴っていくわ！その後になかったかのように消えているし！」

『あれはトライドロンという車のエネルギー型を利用して蹴りを入れるスピードドロップという技をベースにした攻撃だ。』



「『てか車って何!?!』」

『この世界に車というものはないのだな。ベル左手に装備をしてるバイクライドウオッチを外して投げてみるんだ。』

ベルは言われたとおりに投げるとバイクライドウオッチが変形をしてライドストライカーに変形をしてアリーゼ達はさらに驚いている。

「『なによこれええええええええええええええええええええええええええええええええええ!!』」

『ライドストライカーと呼ばれるバイクだ。……うーんまさかこの世界ではバイクや車などは存在しないのか……。そういえばベルがオラリオに来る時も馬車だったな……。ふーむ。』

オーマジオウはこの世界がかなり古い時代の歴史なのかと考えていたが獣人に小人族にエルフやドワーフなどいる世界なのでバイクや車がないのが当たり前かと考えている中アリーゼ達は始めて見たライドストライカーを目を光らせながら触ったりしておりベルも気になっていたのかライドストライカーを見ていた。

「本当……。不思議なものばかりね……。これ動くの?」

『ああベル乗ってみるといい。』

「いいの?」

『ああジオウに変身したら身長などは160cmにまで成長をしているからな。ライドストライカーを動かすことができるが……。この場所では狭すぎるな。とりあえずライドストライカーを元のバイクライドウオッチに戻すでしょう。』

ベルは仮面の奥で頬を膨らませながらライドストライカーがバイクライドウオッチに戻ってライドウオッチホルダーに装着させてダンジョンから戻ることにした。ドライブアーマーを装着したままのためジカンギレードをベルは見ていた。

「ねえオーマジオウさん。」

『なんだ?』

「このジカンギレードのくぼみにライドウオッチをつけてくれるよね?」

『気づいたようだな。その通りだベル……ケンモードとジュウモードによってウオッチを装着をすることで必殺技が放つことができるのだ。』

「へえーだったら。」

ベルはドライブライドウオッチを外してジカンギレードにセットをする。

【フィニッシュタイム！ドライブ！ギリギリスラッシュー！】

「はあああああああ!!」

ベルは回転をしてウオーシャドウたちを切りつけていく。ウオーシャドウたちは倒したがベルは回転を続けてそのまま倒れてしまう。  
「ベル!？」

「大丈夫か!!」

「め、目が回るよーーーーー」

『やれやれ……あれだけ回転をすれば目をまわすのは当たり前だ。自分で止まらなないとダメだからなベル。』

「は、はーいーい」

ベルはなんとか起き上がり上につくので変身を解除をしようとしたが誰かの声が聞こえてきたのでドライブアーマーが解除していたので普通の状態に戻るが走りだした。

「ベル!!」

アリーゼ達はベルの後についていこうとしたがジオウの姿に変身をしているベルのスピードが速くて追いつかない。

「つてか早くないか!？」

「ちよ!!」

一方4階層で襲われている一人の女の子の冒険者、リザード達に襲われていた。武器なども破損をしており彼女は目を閉じてしまう。

【フィニッシュタイム！タイムブ레이크!!】

「であああああああああ!!」

音と共にリザード達が吹き飛ばされて撃破された。女性の冒険者は助けてくれた人を見て話しかける。

「あ、あなたは……」

「ほ……じゃなかった。俺は仮面ライダージオウ!!大丈夫?」

「は、はい!!」

ベルは冒険者の人が無事なのを確認をするがフロッグシューターやリザードが現れてベルは逃げるように言い女の冒険者は上の方へと逃げる。

「オーマジオウさん……僕はこの選択に後悔はしていません。」  
『誰が攻めるものか、お前は人を助けるために動いた。仮面ライダーとして当然のことをしただけだ。』

「ありがとうございます。」

ベルはライドウォッチを外してリングパーツを動かして上部ス  
イッチを押す。

「フォーゼ!」

そのままジクウドライバーの左側にセットをして上部ロックボタ  
ンを外して回転させる。

「ライダータイム!カメンライダージオウ!アーマータイム!3:2:

1 フォーゼ!」

丁度アリーゼ達もベルに追いついてロケット型のアーマーがベル  
に装着される姿を見た。

「宇宙きたあああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああ!!」

「宇宙?」

「タイムン張らせてもらうぜ……タイムンってなんだろう?まあ  
いいか!」

両手のブースターモジュールが起動をしてベルは空中に浮かんで  
リザード達に体当たりをして粉碎をしていく。フロッグシューター  
達はベロをベルに向かって放つが素早く飛んで交わしていき着地を  
した後に両手のブースターモジュールを飛ばしてフロッグシュー  
ター達に命中をして爆発させた。

「これで決める!」

フォーゼライドウォッチをジカンギレードジュウモード形態の窪  
みにセットをして構える。

「フィニッシュタイム！フォーゼ！スレスレシユータイング！」

「えい！」

トリガーを引いてブースターモジュール型のエネルギーが飛んで行き残っていたリザード達に命中をして撃破した。辺りにモンスターがいらないことを確認をしたベルはライドウオッチを外して変身を解除をする。

7歳の身長に戻ったベル、アリーゼ達は彼の元へと行き抱きしめる。

「ほえ？」

「大丈夫ベル！怪我とかしていない!？」

「大丈夫だよお姉ちゃん、怪我とかしていないけど……」

「けど？」

「く、苦しい……」

ベルはレベル1に対してアリーゼはレベル4だ。ジオウの姿ならまだ良かったが……。現在のベルは変身を解除をしているためアリーゼの抱きしめる力が強かったのだ。後は彼女の14歳とは思えないものがベルに当たっており彼は顔を赤くしている。

とりあえずベルは仮面ライダーとして人を助ける行為はいいことだがそれで自分が死んだらどうするのかとアリーゼ達に言われた。

それでもベルはアリーゼ達にいった。

「それでも僕は、仮面ライダーとして困っている人がいたらお姉ちゃんたちのように助けたい。僕だって……アストレア・ファミリアの一員だもん。」

「ベル……」

全員で上がりホームへと戻ったベルはアストレアにステータスを更新をすることにした。

「……スキルが増えている!？」

ベル・クラネル

所属派閥 アストレア・ファミリア

L v. 1

力：ERROR

耐久：ERROR

器用：ERROR

敏捷：ERROR

魔力：ERROR

スキル

ジクウドライバー ジオウ

家族一途 自分の関係ある人をおうほど強くなる

魔王のカリスマ 相手に対して威圧を与える。レベルなど関係な

しに可能

「ふふふ本当にベルはアリーゼ達のことを好きね？」

「にゃあああああああああああ．．．．．」

ベルは新しい魔王のカリスマというのともう一つ家族一途というのを見て顔を真っ赤にしている。どうみてもアリーゼ達のことを思っていることがスキルとして出ているので顔を赤くしている。

「そしてもう一つのスキルどうみてもオーマジオウの影響が出ているわね？」

『．．．．．ノーコメント』

まさか魔王のカリスマという威圧のがスキルとして出てきているのでオーマジオウ自体も恥ずかしいのかノーコメントといい言葉を閉じた。

アストレアはふふと笑いながらベルも男の子だもんねといい一緒に寝ることにした。

## 美の女神

ステータス更新をして新たなスキルが現れてベルは見せるとアリーゼ達はスキルのを見て抱きしめて頬にキスをすることを続けてベル自身も顔を赤くしながらも姉たちの頬にキスをした次の日、ベルはオラリオの噴水のベンチに座っていた。

今日はダンジョンには入らずにボーっとすることにしたのでベンチに座っていると銀色の髪をした女性と身長が大きな男性が現れてベルに話しかける。

「こんにちは坊や。」

「こんにちは綺麗なお姉さん。」

「あら可愛いことを言うわね、お隣いいかしら？」

「いいよー」

ベルはどうぞといって彼女を座らせて話をしていた。その間大きな人は彼女を見ているがベルから強大な力を彼自身は感じていた。

「それにしても可愛いわねあなた、男の子なのにふふ。」

「むー僕男の子だもん！」

彼女はベルの頭を撫でながら笑っていた。オーマジオウは彼女から何かを感じてはじかせようとしたがベル自身が効いていないのか彼女は驚いていた。だけど気にせず話をするベルに彼女自身も頭を撫でながら聞いていた。

それから数分話をした後女の方は立ちあがりベルも立ちあがる。

「お話をありがとうね。そういえば名前を言っていなかったわね。私の名前はフレイヤよ。」

「ベル、ベル・クラネルです!!」

「そうベル……いい名前ね。ふふまた会いましょベル。」

フレイヤは大きな男の人を連れて去っていった後に彼はボーっと座っていると金髪の女の子がダンジョンから出てきてベルを見つけると走っていく。

「ベル」

「うにゅ？」









(本当ですか!?)

『スロットの上部のスイッチを押すことで必殺チャージが可能だ押し  
てみる。』

ベルは言われたとおりにスイッチを押す。

【タイムチャージ！5・4・3・2・1】

アイズに方も風を纏い始めてお互いに突撃をして振り下ろす。

【ギリギリ斬り！】

「はああああああああああああああああああ!!」

お互いに剣と剣がぶつかり衝撃が発生をしてお互いに武器を手放  
して吹き飛ばされて地面に倒れる。

フィンたちは駆け寄り倒れている二人にポジションを飲ませる。  
リヴェリアはベルに飲ませている姿をフィンとロキはお母さんみた  
いだなと思いいていた。

「まさかアイズとここまでやり合うなんてね……. . . . . だけどアリー  
ゼ達にどうせつめいをしてらいいのか……. . . . .」

「あれ待て、今何時だ?」

「……. . . . .」

夕方5時になっていた。一方でアストレア・ファミリアのホームで  
は?

「遅い」

両手を組みながらアストレア・ファミリア団長「アリーゼ・ローヴェ  
ル」は帰ってこないベルを待っていた。

まだ7歳のベルには5時には帰ってくるように言っていた。だが  
5時を過ぎてもベルが戻ってこない。

「遅すぎるわ。いったいどこで何をしているのかしら?」

「落ち着けアリーゼ、ベルのことが心配なのはお前だけじゃない。」

「輝夜……. . . . . でもベルに何かあったら私……. . . . .」

「私もそうだ。あいつと出会ってから誰もがあの子を守りたいと思っ  
ている。だがあいつだって男の子だわかるだろ?」

「……. . . . .」

すると誰かがホームに近づいてきたので誰だろうと見ているとリ

ヴエリアがやってきたので驚いている。

「リヴェリアさんどうしてあなたが？」

「ベル!？」

リヴェリアにおんぶされているのは先ほどまで話題になっていたベル・クラネル本人だ。彼は疲れてしまったのか眠っており輝夜が受け取る。

「すまない、うちのアイズがベルを連れて中庭で激突をしたんだ。彼の傷を治す為にポーションなどを使ったんだ。そしたらこの時間まで申し訳ない。」

「……まあベルが無事だからよかったわ。まさかアイズちゃんと激突をしていたなんてね……」

「それで結果は？」

「……引き分けだ。お互いに最後の激突で武器を手放して地面に倒れた。」

「!!」

アリーゼと輝夜はベルを見てからリヴェリアの顔を見た。あのアイズと引き分けになった？

「ねえオーマジオウさん、ベルはジオウに変身をして引き分けたの？」

『いや、ベルは変身をせずに戦って引き分けになった。』

「変身をせずに……」

「わかったわありがとうございます。リヴェリアさん。」

「いやうちのアイズが迷惑をかけたからな。ではな」

そういつてリヴェリアは自分のホームの方へと戻っていく。それからベルは目を覚ますと自分の女神が彼を見ていた。

「起きたベル？」

「アスト……レアさま?……ここは……」

「ここは私達のホームよ?ベル、アイズちゃんと激突をしたんですつてね?」

「はい……そうだ、アイズさんと戦って……最後に気絶をしたんです。」

「そうよ。アリーゼと輝夜がリヴェリアがあなたを連れてきたときは



## ランクアップした二人の人物たちの様子

ベル・クラネルがレベル2になったという報告をするためにアストレアはベルを連れてギルドにやってきた。

アストレア・ファミリアに入って数か月は経っていたがなかなかダンジョンに入る許可を得れなかったベル、その間は訓練などをしていたがランクアップはしなかったのでまさかアイズとの激突でランクアップをするとは誰も思ってもいなかったので驚いている。

ギルドに到着をして職員にベルがランクアップをしたことを報告をして驚いている。

「え!?ベル君ランクアップをしたの!?でもダンジョンに入ってまだ数週間しか経っていないのに………なんで?」

「実はアイズさんと戦いました………」

担当をしている銀髪のエルフの人物ソフィは頭を抑えていた。まさかロキ・ファミリアのアイズと戦ってランクアップをするって思いながらどうしてこうなったのかと聞くことにした。

「えっとベル君、なんでアイズちゃんと戦ったのか教えてくれないかしら?」

「噴水の前でフレイヤ様に頭などをもふもふされた後にダンジョンから出てきたアイズさんにロキ・ファミリアまで連れていかれてそこから激突をしたんです。」

「ベル、あなたはフレイヤにあったの!?」

「はい、頭を撫でてもらいました。」

笑顔でベルが言って二人の人物は彼の笑顔にハートが撃ち貫かれる。とりあえずランクアップを授与をした時にロキがアイズとリヴェリアを連れてギルドへとやってきた。

おそらくロキの方もアイズのランクアップの申請をするために来たのであろう。

「アストレアにベルたん。」

「あらロキ。」

「こんにちはロキさま、リヴェリアさん、アイズさん。」

ベルはぺこりと頭を下げ、挨拶をしてリヴェリアとロキも挨拶をする。だがアイズは彼を見ると頬を赤くしてリヴェリアの後ろに隠れてしまう。

「？」

（まあしゃーないわ。アイズさんのスキルにあんなのがあったら意識を失ってしまうわな。）

ロキはリヴェリアの後ろにアイズが隠れてしまったのを見ていししと笑みをしながら首をかしげているベルを見ていた。

（それにしてもベルさんがレベル3のアイズさんと引き分けるなんてな。正直言えば驚いているで、アストレアがベルさんにそんな神の力を使っているわけじゃないのはわかってる。オーマジオウが貸したのか？ いやそんなわけないか……）

ロキはベルとアストレアに挨拶をした後アイズがランクアップをしたことを報告をしてホームへと戻る。

帰ってきたロキは苦笑いをしながらアイズのスキルを見ていた。

・兎一筋

「どうみてもこれはベルたんやなー」

「兎か……ふふふ」

フィンには失礼だなと思いつつも笑ってしまいリヴェリアとガレスも同じように苦笑いをしてスキルを見ていた。

「だがアイズが変わり始めたのはベルと出会ってからかもしれない。」

「わしも後から聞いたのだが……まさかアイズが自らの意思でベルを連れて戦ったと聞いたときは驚いたわい。しかもベルはアイズと引き分けたのじゃろ？」

「ああその瞬間を見ていたがお互いの技が激突をして吹き飛んで引き分けになった。」

「7歳だよね彼……」

「ああ7歳だ。」

ロキ・ファミアで話している中、アイズはベットの途中でジタバタ足を動かしていた。頭の中はベルのことで一杯なのだ。

（なんでベルのことが頭が一杯、リヴェリアが言っていたな。『それは

「アイズがベルのことが好きってことじゃないか？」ベルのことが好き……ベル……ベル……ベルベルベルベル……」  
アイズの目からハイライトというものが消えてふふふと笑っていた。一方でそのベルは？ダンジョンに来ていた。

あの後ホームに戻った後ノインとアスタの二人と一緒にダンジョンにやってきていた。ベル自身はジカンギレードを使い攻撃をしてモンスターを倒していた。

ノインとアスタの二人もモンスターに攻撃をしつつベルがレベル2になったので彼は体がいつもと違って動きずらいなと思いつつ魔物と戦っていた。

「なんか体がいつもと違う感じがするな……なんでだろう？」  
「おそらくベルの体がレベル2になったから動きなどが慣れていない可能性があるわよ。」

「そうなの？」

「ええ私達もランクが上がった時はこうしてダンジョンで体を慣れさせる感じだよ。」

「そうだったんだ。」

ベルはそういいながら現れたモンスターを切りながら降りていく、腰にジクウドライバーが現れたのでジオウライドウォッチをまわして上部のボタンを押して右側にセットをして上部ボタンを押して360度回転させる。

「変身！」

【ライダータイム！カメンライダージオウ！】

ジオウに変身をした後に右側のオレンジのライドウォッチを出してリングパーツを動かして上部のボタンを押す。

【ゴースト】

ジクウドライバーの左側にセットをして360度回転させる。

【ライダータイム！カメンライダージオウ！アーマータイム！カイガン！ゴースト！】

仮面ライダージオウゴーストアーマーが装備されたのを見て二人は見たことがない姿だなと見ていた。

『これこそ仮面ライダーゴーストの力が入ったゴーストアーマーだ。』  
「命燃やすぜ！」

ジカンギレードをジュウモードにして襲い掛かるニードルラビツトに対して発砲をして撃破したがノインとアスタの二人は合掌をしたのでベルはなぜ両手を合わせているのかと聞いた。

「だってベルの同胞を殺すのがね……」

「僕人間だよ!!」

撃ち落としながら攻撃をしているとアスタが現れたパープル・モスに注意をするように言う。

「気を付けてベル、あのパープル・モスは毒の鱗粉を出してくるわ。」

「だったらー！」

紋章を組むと肩部からパーカーが現れてパープル・モスたちに攻撃をして撃破していく。

「あれ何？」

「えっと英雄の人たちだって」

「英雄の人達？」

「オーマジオウさん曰くゴーストという仮面ライダーは英雄の人達の手を使って戦うライダーだって言っていたよ。今のパーカーみたいなのがそれだって……」

「なるほど」

モンスターを倒しながら先に進んでいたが素材などを回収をするると多くなってしまい戻ることにした。

ベルは体に違和感を感じながら手などを動かしていくと二人の姉たちが声をかけてきたので走っていこうとしたが何かが見えて声を出す。

「お姉ちゃんたち!!」

ベルは急いで飛び彼女たちの前に立つと矢がジオウのボディに刺さる。

「ぐ!!」

「ベル!!」

「だ、大丈夫。」



「ちい！外しちまったか！」

一人の男が舌打ちをしていたが二人は武器を構えていた。

「お前たちは……まさか闇派閥!？」

「そんな、私達が壊滅をさせたのに!？」

「そうだ！俺達は貴様らによつて滅ばされた闇派閥……てめえらがいたのを見て殺そうとしたが余計なやつが割りこんできたせいで殺せなかったぜ。」

「……今、何て言った？」

「あ？なんだてめえ……てめえには関係ないことだ!!そいつらを殺す！それが俺達がやることだ！」

「殺す？お姉ちゃんたちを殺す？」

『落ち着けベル!!』

ベルは立ちあがり刺さった矢を抜いた。

「お姉ちゃんたちは……殺させない!!」

彼はゴーストライドウォッチを外すと別のライドウォッチを出して起動させる。

【ウイザード】

左側にセットをして回転させる。

【ライダータイム！カメンライダージオウ！アーマータイム！プリーズ ウイザード！】

仮面ライダージオウウイザードアーマーに装着をして彼は歩きだす。

「……さあ、ショータイムだ。」

「やれ!!」

「「うああああああああああ!!」」

武器を持った闇派閥はベルに襲い掛かってきた。一人の闇派閥が槍をふるったがベルはそれを躲して蹴りを入れて吹き飛ばす。

剣を振ってきた闇派閥のを交わしてお腹を殴り吹き飛ばして上空へと飛び魔法陣から炎の弾が放たれて闇派閥の人たちを殺さないように外しながら撃っている。

アスタ達はベルだけに戦わせないようにしていたが後ろから突然

として抑えられてしまう。

「動くな!!」

「!!」

ベルは振り返ると二人の姉が捕まっており相手は笑いながらいた。

「ご、ごめんベル……………」

「……………」

「動けばこいつらの命はないぞ!!」

「……………卑怯物!!」

「へっへっへっへ!!それお前ら!そいつに魔法を放って殺せ!!」

リーダー格の命令で魔導士たちは魔法を放ちたくさんの魔法がベルに命中をする。

「ベルううううううううううううううううううううううう!!」

「あっはっはっはっはっはっはっはっは!!」

「フィニッシュタイム!ウィザード!ストライクタイムブ레이크!」

すると魔法陣が現れてリーダー格の顔面に拳が命中をして吹き飛ばされた。アスタ達は今のはと見ていると煙がはれてダメージを受けながら立っているベルの姿がいた。

「ぜえ……………ぜえ……………ぜえ……………」

「ベル!!」

2人はベルのところへといく。相手はベルに殴られたがすぐに起き上がり怒りの表情で見ている。

「この……………やろう!!」

「!!」

『ベル……………体を借りる!!』

相手は剣を持ちベルたちに襲い掛かってきた。だがそれをベルは右手で受け止めた。

「何!?!」

「愚かな……………」

そのまま立ちあがるとベルは相手のお腹を殴った。

「ベル?」

「……………違う、私はオーマジオウだ。今はベルの体を借りて活動

をしている。ふん!!」

ベルは手を前にかざすと闇派閥の体に鎖が体に巻き付けられていき動けなくさせる。彼らが動けなくなったのを確認をした後ベルはライドウオッチを外して変身を解除をする。

だが彼はダメージなどもあり後ろに倒れかけたがすぐにアスタ達を支えた。そこにタカラライドウオッチに案内されてアリーゼ達が駆けつける。

「アスタ！ノイン！」

「団長!!」

「団長！ベルが!!」

「ベル!!……あなたたち……よくも私達の可愛い子をいじめてくれたわね……覚悟はできているかしら?」

「アリーゼ！怒る気持ちはわかるがこいつらをギルドに叩きつけることが先決だ！ベルが奮闘をしてくれたみたいだからなそうだろうか?」

『……すまない、私もベルの体を使った影響なのか……少し眠ることにする。』

オーマジオウはベルの体を始めて使った影響なのか眠りについた。アリーゼ達は闇派閥の眷族たちを連れてギルドに叩きつけた後ベルを連れてホームへと戻る。

## 眠る兎

輝夜 side

「ベル・・・・・・・・」

ベットの上で寝ている人物、ベル・クラネル・・・・・・・・私達にとって大事な大事な弟分だ。私達はタカライドウォッチの案内でダンジョンに入ると膝をついたベルにノインとアスタが涙を流しながら謝っていた。

その周りで倒れている人物達、かつて私達が奮闘をして戦った闇の派閥の残党だった。アリーゼは怒りであいつらを殺そうとする勢いだったが私は彼女を止めたが・・・・・・・・私もアリーゼと同じ気持ちだ。

私達が奴らを取り逃がしたばかりに・・・・・・・・ベルを負傷させてしまった。仮面ライダーを纏っているとはいえあれだけの魔法をくらえばベルだってダメージを受けてしまう。今もこうしてベルはベットの上で寝ているが起きる気配がない。

私達は怖い・・・・・・・・ベルが死んでしまったらと思うと・・・・・・・・いつの間にか私はベルの右手を両手でつかんでいた。

「うう・・・・・・・・ん。」

「!!」

声が聞こえて私は顔を上げるとベルが目を開けて辺りをキョロキョロしていた。

「あれ？どうして僕・・・・・・・・自分の部屋に？」

「ベル!!」

「うわー!」

私はベルに抱き付いたが関係ない!目を覚ましてくれた嬉しさの方が勝ってしまったからだ良かった。本当に・・・・・・・・良かった・・・・・・・・

輝夜 side 終了

ベルは目を覚ますと目の前にいたゴジョウノ・輝夜が自分を抱きしめていた。なんで自分は部屋にいて輝夜に抱き付かれているのか覚醒したばかりの頭で考えていると輝夜は涙を流しながら説明をした。

「お前は……ノイン達を守るために戦ったんだ。」

「そうだ！ノインお姉ちゃんたちは!!」

「無事だ。お前にずっと謝り続けていた。自分たちのせいでベルがと今も責めている。」

「……………オーマジオウさん!!」

『……………』

「あ、あれ?」

「オーマジオウどうした?」

2人はオーマジオウが無言でいたので何かあつたかと特にベルは涙目になりながらオーマジオウに声をかけていると声が聞こえてきた。

『ぐ……………ぐ……………』

「……………」

オーマジオウはいびきをかきながら眠っておりベルは安心をしたのか膝について涙を流した。

「うわああああああああああああああん!!」

『ぬお!?べ、ベル!?!誰に泣かされた!!この私が直々に成敗をしてくれるわ!!』

「貴様だ馬鹿!!」

『何!?!私だと!?!』

輝夜はベルが泣いている理由をオーマジオウに話をして彼は少しの間無言になった後に謝る。

『すまないベル、お前の体を使った影響かもしれない。それで眠りについてしまった。』

「よかった……………良かったです……………」

『安心をしろ、お前を残して消えたりするものか……………私が眠りについていたのは新たな武器を生成をしていたからだ。』

ベルの右手が光りだして二人は目を閉じるとそこには斧のような武器が生成されていたので輝夜は持つ。

「オノ?オノと書かれているがベルが普段使っているジカンギレードに似ている気がするが……………」

『当たり前だ。それはジカンザックスといいジカンギレードと同じ機能を持っているものだ。通常はオノモードだが切り返ることでユミモードになる武器だ。その武器を作るためにベルの中で無言でいたのだ、それで完成をしたので一息ついたら寝てしまったのだ。すまないベル。』

「いいよ、オーマジオウさんが消えてなくなつて僕・・・ぐすえぐ」  
『・・・・・・・・・・・・・・・・』

泣かれてしまったのでオーマジオウは何も言えなくなつてしまい部屋の扉が開いてアリーゼ達が入ってきた。全員が涙目となりベルに突撃をする。

「「ベル!!」」

「うわ!!」

「ごめんねごめんねベル!」

「私達が不甲斐ないばかりにあなたを・・・・・・・・」

「ううんノインお姉ちゃんとアスタお姉ちゃんが無事でよかつたよ。」

「うわああああああああああん!!」

二人の姉はベルに抱き付きながら涙を流した、ベルは泣いている姉たちの頭をなでなでしているので子どもにあやされる二人の姉と見ている全員が思った。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

オーマジオウもその様子を見ながらベルは弟じゃなかったか?と思いながらその様子を見ているがベル自身が成長をしてきたなど思い精神世界にライドウォッチを出していた。

『ベルにサブライダーのライドウォッチを使わせるのはまだ先か・・・・・・・・まずメインの仮面ライダーを中心に・・・・・・・・ん?』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

銀色の髪をした女性がオーマジオウを見た後にそのまま消えたのでオーマジオウは何者なのだろうか?と。

オーマジオウが気になっている女性と運命とクライマックス。

オーマジオウ side

『……またか……』

最近になってだがこの精神世界に私以外に住んでいる気がする。その視線を感じるようになったのはベルの体を借りて戦って以降からだ。

ベルにジカンザックスを託してベルは状況でジカンギレードやジカンザックスを使いアリーゼ達に鍛えてもらいながらジオウの力を慣れるために奮闘をしている姿を見たが……いったい何者なんだ？

現在ベルは副団長を務める女性ゴジョウノ・輝夜と共にダンジョンへと来ていた。私はベルの腰部にジクウドライバーを発生させてベルはジオウに変身をしてジカンギレードを使いモンスターを切っていく。やはりレベルの影響なのか戦い方も変わった気がする。

だがまだあの力を使うにはまだまだ成長途中だからきつとなれるだろう。

『さて今回はこのライドウオッチを使わせることにしよう。』

私は力を使いベルにライドウオッチを託す。

オーマジオウ side 終了

一方で8階層へとやってきたベルたち、彼の手にライドウオッチが現れてベルはリングパーツを動かして上部のボタンを押す。

【ブレイド】

「ブレイド？」

そのまま左側にセットをして360度回転させる。

【ライダータイム！カメンライダージオウ！アーマータイム！ターンアップ！ブレイド！】

「カードを使うライダーと見たがあっているか？」

『うむブレイドはラウズカードと呼ばれるもので戦うライダーだ。ベ

ル！ブレイドアーマーは名前の通り仮面ライダーブレイドの力を出すことができる。以前ラウズカードについては説明をしたな？その力を試してみるといい!!」

「はい！戦えない人のために俺は………戦う!!」

肩部のカード部分が光りだして構える。

【タツクル】

「ウエエエエエエエイ！」

ベルは叫びながら突撃をしてモンスターを吹き飛ばした。輝夜は叫びながら突進をしたベルに対して両手を組みながら見ていた。

【スラッシュ】

「は!!」

ジカンギレードの切断力が上がり次々にモンスター達を倒していく、そのままブレイドのライドウオッチを外してジカンギレードにセットをする。

【フィニッシュタイム！ブレイド！ギリギリスラッシュ！】

「ウエエエエイ!!」

電撃を纏ったジカンギレードを振り下ろして電撃の剣がモンスターたちを魔石などに変えていき倒した。輝夜もまだ降りれるなど判断をして9階層へと降りていく。

「妙だ………」

「え？」

「この9階層はモンスターが出てこないなんてあり得ない。だが先ほどから歩いているが………モンスターを見ていないからだ。」

「確か………輝夜お姉ちゃん危ない!!」

「!!」

輝夜は後ろを振り返ると大きなミノタウルスが剣を振り下ろしてきた。その前をベルが割り込んで振り下ろされた剣を受け止める。

「ベル！」

「だい……じょう……ぶ!!」

ベルははじかせると輝夜は驚いている。

「ミノタウルス!?!なぜこの魔物がこの上にいる!!」



「輝夜お姉ちゃん、ミノタウルスって13階層とかから現れるんだよね？なんでこの9階層とかに現れるの？」

「それはあり得ない！ぐ!!」

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「はああああああ!!」

ベルはジカングレードを振るいミノタウルスに攻撃をするが斧を使ってジカングレードを受け止めると吹き飛ばす。

「ぐあ!!」

「ベル!!はああああああ!!」

輝夜は太刀を抜いてミノタウルスに切りかかる、ミノタウルスは咆哮をあげて衝撃波を放ち輝夜を吹き飛ばした。

「が!!」

「輝夜お姉ちゃん!!」

ベルはブレイドライドウォッチを外して別のライドウォッチを出して装着をする。

「ライダータイム！カメンライダージオウ！アーマータイム！ソードフォーム デンオウ！」

電王のライドウォッチを使い電王アーマーへと変わりジカングレードを構える前にポーズをする。

「俺・・・参上！」

ベルはポーズをとった後にジカングレードをジュウモードへと変えてミノタウルスに発砲をする。ミノタウルスは発砲をした弾を斧ではじかせる中、オーマジオウはミノタウルスを見ていた。

『・・・確かミノタウルスは13階層らへんで出るモンスターのはずだ。だがなぜこの階層に現れたんだ？しかもレベル4の輝夜を押すほどだ・・・今のベルでは勝てるのかわからない。さて・・・いい加減見ているだけはやめてもらおうか？女。』

女性は目を閉じていた人物で髪が銀色の人物がいたがオーマジオウは彼女から発せられるオーラを感じていた。

（このオーラは・・・強者のオーラだ・・・もしかしてベ

ルが言っていた)

『貴様……アルフィアというものだな？ベルの記憶をたどり見  
ていたが……なぜ貴様がベルの精神の中にいるんだ？』

「わからん、気づいたらここにいた。そして貴様がベルの中にいたの  
でな。ずっと見させてもらった。」

「うわあああああああ!!」

『ベル!!』

「!!」

二人は見てみると電王アーマーのベルは吹き飛ばされて壁にめり  
込んだ。ミノタウルスはベルにドロップキックを噛ましてベルはダ  
メージを受ける。

「が!!」

『……仕方がない。ベル!体を借りるぞ!!』

オーマジオウはベルの体を借りようとしたがアルフィアが彼を吹  
き飛ばした。

『どあ!』

「悪いが私の妹の大事な子だ。使わせてもらう。」

『ま、待て!!』

彼女の魔法を受けてオーマジオウははじかれて彼女がベルの体の  
主導権を取る。

ミノタウルスは止めを刺すために斧を振り下ろす。

「福音(ゴスペル)」

ミノタウルスは直撃を受けて吹きとばされたが耐えてジオウを見  
ていた。輝夜はベルが放った魔法をみて驚いている。

「な……ベルがアルフィアの魔法をなぜ……」

「ぐるるるるるる……」

「消え失せろ、雑音……」

【フィニッシュタイム!デンオウ!俺!タイムブ레이크!】

走りだしてジカンギレードとジカンザックスを構えてそのまま飛  
びあがり二刀流でミノタウルスを切り裂いた。

「ぶもおおおおおおおおお!!」



## 考える魔王

輝夜はベルを背負いながらも先ほどの戦いを見て考えていた。なぜベルがアルファイアの魔法「福音（ゴスペル）」を使用できたのか……今は眠っている彼を急いでホームへと走っていた。

だが彼女自身もミノタウルスとの戦いで傷ついていた。ポーションをお互いにかけて体を回復させた後に上の方へと歩いていた。その周りをオーマジオウが出したのかタカライドウオツチ、コダマスイカライドウオツチが起動をして周りを飛んでいた。

「本当にこいつらは便利だな。さてあと少しだ。」

輝夜は立ちあがりそのままダンジョンから出るとギルドにミノタウルスが9階層で現れたことを報告をしてからホームの方へと帰宅をする。

「おかえりなさい輝夜。ベル？」

「すまないベルは疲れているみたいだ。後でアリーゼ達を呼んでくれ。」

「わかりました。とりあえずベルを部屋に運びますよ。」

「いや私が責任を持って運ぶ。」

輝夜はそういつてベルを部屋に運んで寝かせると巡回からアリーゼ達が帰宅をして話し合いをするために全員が椅子に座る。

輝夜は今日ダンジョンであったことを話した。強化されたミノタウルスに襲われて二人が絶体絶命になったときにベルがアルファイアの魔法を使ったことを言うと全員が目を見開いた。

「嘘……」

「ベルがアルファイアの魔法を？」

「ああ間違いない、あれは福音（ゴスペル）だった。私も最初は嘘だと思いたかったがあ魔法は間違はなくアルファイアが使っていたので間違いない。」

「だが不思議じゃねーか？なんで強化型のミノタウルスが9階層で現れたんだ？しかもミノタウルスって13階層付近のモンスターが……」

「そうだね。誰かが私達に対して放ったのか……まさか……」  
「アリーゼどうしたのですか？」

「……ミノタウルクスの目的が輝夜じゃなくてベルじゃないかなって思ってたね。」

「何？」

「ベルを狙って!？」

全員がアリーゼが言った言葉に目を見開いた。自分たちの大事な弟分を狙ったの行動だと知りいつたいいどこの派閥がそんなことをしたのか……リユーは立ちあがろうとしたが輝夜が止める。

「待てリオン、犯人がわかっていないのだぞ!!」

「くー!」

リユーが立とうとしたが輝夜が止めて座らせる。その間もどこの派閥が自分たちの大事な弟分を殺そうとしたところを考えながら話し合いを進めていく。

一方でオーマジオウは寝ている傷ついたベルの体を回復させていた。ジオウのアーマーを装着をしていたとはいえ……7歳のベルの体には大きな負担だった。

そのため現在オーマジオウはベルの体を回復させつつもアルフィアの相手をしていた。

『……このオラリオの知識を吸収させてもらったが……まさかかつてアストレア・ファミリアと戦って死んだはずの貴様がベルの中にいたとはな……』

「……」

『ベルのことが心配であの世にも行くことができずに気づいたらベルの中にいたと……』

「そうだ。」

『……ベルがどれだけ悲しんだのをお前は知らないはずがない。私がいなかったらベルの心は完全に壊れていた。今も時々お前の名前を呼ぶことがある。』

「……ベル……すまない。」

二人が話をしている頃ベルは目を覚まして自分の部屋にいること

に気づいた。彼は扉を開けて主神の部屋の扉をノックをする。

「アストレアさま、ベルです。」

扉が開いてアストレアはベルを抱きしめた。

「ベル・・・ベル・・・良かったわ。目を覚ましたのね。」

「ごめんなさいアストレアさま、僕・・・」

「いいのよ輝夜から話は聞いているわ。さあステータス更新をしましょう?」

アストレアのベッドの上に寝転がり、彼の背中に乗りステータスを更新をする。

「!!」

彼女はベルに新しいのが追加されていたので目を見開いた。なにせベルに魔法が発生をしている。

「・・・まさかね。」

アストレアはベルにステータスを見せることにした。

ベル・クラネル

所属派閥 アストレア・ファミリア

力：ERROR

耐久：ERROR

器用：ERROR

敏捷：ERROR

魔力：ERROR

魔法

・【サタナス・ヴェーリオン】

詠唱式【福音（ゴスペル）】

不可視の音による攻撃魔法

スペルキー【鳴響け（エコー）】

スキル

・ジクウドライバー

・家族一途

・魔王のカリスマ

（正直に言えばなぜベルにアルファイアの魔法が発動をしているのか。

正直に言えば驚くことばかりよ。」

「やったー僕魔法を覚えたんだーでもまさかお義母さんと同じ魔法が使えるなんて嬉しいな。」

ベルは新たに覚えた魔法が自身のお義母さん「アルフィア」と同じ魔法だからだ。アストレアはアルフィアの魔法を使えるようにしたのはいいが、なんとか奮闘をして街の修復などをして彼を迎えている。

まあその間を彼女達自身が奮闘をして色々と解決をしてきたがまさかベルがアルフィアと同じ魔法を覚えるとは思わなかったのでアストレアは苦笑いをしていた。

（そういえばベルはランクアップをしたんだっけ……あ、神の会……あるじゃない。頑張つて変な二つ名が見つからないようにしない……）

ため息をつきながらアストレアはベルを連れてリビングの方へと行くと。アリーゼ達は目を覚ましたベルを見て抱き付いた。

輝夜が一番に駆けだしてベルに大丈夫だった課などを聞いてベルは笑顔で大丈夫だよといったのでホッとしていた。

「ベル、今日は私と一緒に風呂に入ってくれないか？」

「いいよ？」

一方でベルの中では

「何!?ベルと一緒に入るだど!?小娘が……」

『落ち着け、お前がこの中で覚醒をする前からベルは彼女たちと一緒に入っているぞ?』

「何?」

オーマジオウの言葉を聞いてアルフィアは閉じていた目を開けてオッドアイの目を見開いていた。

彼はため息をつきながら過保護の母親に絶対に自分たちの物にする姉たち、さらに彼のことを狙っている金髪の幼女など……ベルは女性を虜にする魅了でも持っているのかと思いつながらオーマジオウはほかのライドウオッチたちを出しているとアルフィアは一つのライドウオッチを持つ。

「このライドウオッチだけは形が違おううだが？」

『ディケイドライドウオッチのことか、そのウオッチだけは特殊だな……いづれベルに使わせる予定だ。』

「そうか、だが貴様はなぜあの時わざと吹き飛ばされた？ 貴様の本来の力では私の技を受けても吹き飛ばされないと思ったが？」

『……私も力が落ちているのは承知。まだ体が完全に回復はしていないからな。』

オーマジオウは玉座に座りながら金色のライドウオッチとジオウライドウオッチのとは別のを出しながらふふと笑いながら座るのであった。



## パトロール

「さてベル、今日は私とライラと共にオラリオをパトロールをしましょう。」

「パトロール？」

次の日、ベルはリユーからパトロールという単語を始めて聞いたので首をかしげていた。その様子をアリーゼ達は可愛いなと思いつながらリユーはごほんど仕切り直して説明をする。

「私達アストレア・ファミアの本来はオラリオを治安を守る派閥でもあります。ベルも7歳ですがアストレア・ファミアの仲間です。だから今日から私たちと共に見周りをしますいいですね？」

「はい（〇〇）」

ベルは手をあげて返事をしてリユーは顔を赤くしていたがライラがひじ打ちをして意識を取り戻した後にホームを出ていき3人はオラリオを回りながら街を歩いていた。

前にアストレアとアリーゼ、さらにロキとアイズ、アーデイが加わったメンバーで案内をしてもらったので彼は色々と確認をしながらパトロールを続けていると一人の青い髪をした女性が手を振りながらやってきた。

「ベルーーーーー」

「アーデイおねえちゃん!!」

2人は走りだして街の中なのに関係なく抱き付いた。中にいるアルフィアはその様子をじーっと見ていたがオーマジオウは苦笑いを見ながらその様子を見ていた。まるで母はそんなの許さないぞというオーラを纏いながら見ていた。

アーデイと別れてからベルとリユーとライラの3人はパトロールを続けていると裏の方に入る人物たちを見つけた。ライラとリユーとベルの3人はその人物達を追いかけて裏路地に入り様子を見た。

「これが？」

「ああお金などもかかっちゃったが……」

「ご苦労だったな。これで我々の「それはどうかな?」な!」

「てめえら……闇派閥の残党だな?まだ謎の動きをしていると思っていたが……」

「そんなことさせるとでも思っていますか?」

「ツチ!アストレア・ファミリアかよ!」

「さーて大人しくしてもらおうぜ?」

「大人しくしてもらうのはお前たちの方だ。」

「!!」

二人は見ると後ろの方でベルが抑えられていた。リユールとライラはどうすればいいと思っていたが左手のタカライドウオッチが起動をしてベルを抑えていた闇の派閥の人物達に突進をしてベルを解放させるとジクウドライダーにジオウライドウオッチと別のライドウオッチを手に起動させる。

【ジオウ】【ファイズ】

そのまま両側にセットをして360度回転させる。

「変身!」

【ライダータイム!カメンライダージオウ!アーマータイム!コンプレイト ファイズ!】

ジオウ ファイズアーマーへと変身をして闇派閥達は驚いていた。

「な!貴様は!」

「仮面ライダー……ジオウ!」

「そうか、てめえが……なら仲間のうお!」

【シングルモード】

ジオウの右手に「ファイズフォンX」が装備されてトリガーを引き持っていた武器をはじめさせた。

「な!」

「……」

555とコードを入れてエンターボタンを押す。

【ショットREADY】

右手にショット555が装着されて後ろにいた相手に接近をしてお腹を殴り気絶させた。

「ひい！」

「逃がすでも思っていますか？」

「悪いがゼーんぶ話してもらおうぞ？お前らが何をしているのかを……さもないと」

「わかった！全部話す！」

闇派閥の残党は今回の計画のことを全て話をした。ライラとリユーはその話を聞いて両手を組んで考えている中、ジオウファイズアーマーのままボーッと待機をしているベル……7歳のベルにとって難しい話なので姉たちの話を理解するのが難しいからだ。

「……」

『ベル、暇そうだな？』

「まあ……ね。闇の派閥……か。」

ベルはジオウの姿のまま姉たちの様子を見ながら座っていると何かを感じて立ちあがりファイズフォンXを構えていた。

「ベル？」

「……気のせいかな？何かの視線を感じただけど……」

「視線？」

2人は犯人を抑えながら辺りを見るがベルは気のせいかなと思いつつも中にいた二人は視線を感じていたのでベルをじっと見ている人物がいるだと思いつつオーマジオウは視線をバベル塔の方を見る。

（神の力を感じるな？……ってことはベルを見ているのは神で間違いない。またシヨタコンが狙っているってことなのか!?もう勘弁してくれ……）

オーマジオウは頭を抑えながら次々に増えていくシヨタコンたちをどうしたらいいのかと思いつつも闇の派閥がもたらされた計画を聞いていた。

『準備段階に入っていたが……そのファミリアを中心に動いている。名前はルドラ・ファミリア……』

『ルドラ・ファミリア……か。』

オーマジオウは何か嫌な予感がしてもしかしたらベルの体を借り

て戦わないと行けないと思ひ彼は両手を組みながら何事もなければ  
いいかと・・・

## 魔王降臨

『ベル、いつまでも不貞腐れるな。』

「・・・・・・・・別に。」

『レベル2になったとはいえ、お前はまだ7歳なんだぞ?』

「だけど・・・・・・・・」

現在アストレア・ファミアはギルドから調査依頼を受けて27階層の方へと向かっていた。ベルはまだ幼いつてことで置いていかれて不貞腐れた。

だがベルは突然として立ちあがり走っていく。オーマジオウはなぜベルが突然としてダンジョンの方へと走っていくのか聞くことにした。

「お姉ちゃんたちが危ない予感が見えたんだ。」

『何!?(まさか未来予知がベルに?・・・・・・・・仕方がない。)ベル!体を借りるぞ!!お前の未来が本当だったら私が出たほうがいい!!』

「オーマジオウさん、お姉ちゃんたちを救って!!」

『私を誰だと思っている!!任せろ!!』

ベルは突然として動きが止まり腰部に現れたのはジオウドライバーじゃなく金色のドライバーだ。

「・・・・・・・・さてやるとしよう変身!」

【祝福の刻!最高!最善!最大!最強の王!逢魔時王(オーマジオウ)】

ここにかつて最高最善最大の最強の魔王が再び世界に降臨をした。オーマジオウは指などを動かしてアリーゼ達の気配を感じてレポートをする前に別のところで苦戦をしている何かを感じてその場所へと行くと一人のエルフの女性が襲われようとしていたので彼は彼女を助けるために右手にエネルギーを込めてモンスターを殴り飛ばした。

「無事か?エルフの女性よ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女は頬を赤くしながらオーマジオウを見ていたが、彼はすぐに後

ろから大量のモンスターたちが襲い掛かろうとしていたので目からビームを放ちモンスターをあつという間に撃破した。

「ふん最高最善の魔王である私に対して弱いではないか？さて……」

オーマジオウは怪我をしているであろう人物の手を触りエネルギーを送り彼女の傷を治した。

彼はそのまま去ろうとしたが声をかける。

「ま、待ってくれ!!あなたさまの名前を!!」

「覚えておくがいい!我の名前はオーマジオウ!最高最善の魔王である!ではまた会おう!」

オーマジオウはその場を後にして一人残されたエルフの女性はオーマジオウの去った方角を見ながら呟いた。

「オーマジオウさま……我が魔王……」

場所が変わりアストレア・ファミリアはルドラ・ファミリアが起こしたダンジョン爆破で発生をしたモンスター「ジャガーノート」が現れた。

「何よあれ……」

「アリーゼどうする!!」

「どうする言われても戦わないと行けないわよね!!」

『ぐおおおおおおおおおおおおおおお!!』

ジャガーノートはアストレア・ファミリアをターゲットにして襲い掛かろうと彼女達に爪を振り下ろそうとしたが何かが現れてアリーゼ達を守った。

「何これ……」

「無駄だ、貴様がどれだけの爪を持っていようが……私が張った防壁を破ることなどできない!」

「!!」

全員が声をした方を見るとオーマジオウが立っていた。

「べ、ベル?」

「ベルではない、オーマジオウの方だ。」

「ど、どうしてここに!!ベルは!」

「落ち着け、そのベルに頼まれてきた。お前達が骨のモンスターに襲われる未来が見えたといい私に体を託してこの階層へとやってきた。」

『ぐおおおおおおお!!』

「大人しくしてもらおう？モンスター如きよふん!!」

サイコキネシスを使いジャガーノートを吹き飛ばして壁にめり込ませるとオーマジオウはアリーゼに声をかける。

「こことは別のフロアにエルフの女性が一人襲われかけたところを助けた。お前達はここから離脱をしてその子を救ってやってくれ。」

「お前はどうする気だ？」

「心配するな、こいつを倒してお前たちの元へ帰る。ベルとの約束だからな……」

「帰ってきなさいよ。あんたも一緒に!!」

アリーゼ達は入り口の方へと撤退をしていきオーマジオウは改めてジャガーノートの方を見ているとベルに声をかける。

「ベル、見ておけ……これがお前がいつかなる私の力……見ていただろ？」

『うん、オーマジオウさんはやっぱり優しい人だって。』

「そうだ。ベルよこれが私の力だ!!」

『ぐおおおおおおお!!』

ジャガーノートはオーマジオウに襲い掛かろうと爪を振り下ろしてきた。彼はそれを衝撃波で受け止めるとそのまま蹴りを入れてジャガーノートにダメージを与えると龍騎のマークが現れてドラグレッターが現れて突進をしてジャガーノートにダメージを与える。

『ぐおおおおおおお!!』

「貴様はそこで止まるかい!!」

マツハのマークからゼンリンシューターが現れてトマーレのマークが現れてマークを通り抜けるとジャガーノートは動きを止めた。

そのままオーマジオウは腰部のオーマジオウドライバーに両手を置いて必殺技を放つ。

【終焉の刻！逢魔時王必殺撃！】

「はああああああああ．．．．．」

彼の周りに歴代の仮面ライダー達の幻影が現れてオーマジオウは飛びたち蹴りの構えをするとほかのライダー達も一斉にジャガーノートへライダークックを放ち命中をした後にオーマジオウがジャガーノートの全体を貫通して爆発させた。

「我に．．．．．勝てるものなし！消えるといい骨の化け物よ！」  
『ぎやおおおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおお!!』

ジャガーノートはオーマジオウの必殺技を受けて爆散をした。

『す、すごい．．．．．』

「これが私の力だ。といってもまだ一部だけだがな．．．．．ベル、お前ならいつかこの姿になることができるさ。」

『うん．．．．．』

「とりあえず戻るとしよう。」

オーマジオウは指を鳴らしてアストレア・ファミリアがいるであろうホームの方へと帰還をした。オーマジオウは変身を解除をしたがベルは膝をついた。

「あ、あれ?」

『す、すまん．．．．．やはり7歳のベルではオーマジオウの力を使つたのはいが体力などを考えずに使ってしまった。おそらく疲れが一気に来てしまったのだろう。』

「ふええええ．．．．．」

「二」ベルうううううううううううううううううううううう!!」「」

「あばああああああああああああああああ!!」

「ベル．．．良かった．．．．．良かったわ．．．．．」

「あ、アリーゼお姉ちゃん一言言わせて．．．．．」

「何?」

「寝かせて．．．．．( ⊗ ⊗ ) スヤア」

ベルはアリーゼに抱きしめられながら眠ってしまい、彼女達はふふと笑いながらベルを部屋に運んでからリビングに集まり眷族会議をしていた。



「……私達はベルに助けてもらったのだな……」

「ええ、間違いなくあの魔物はダンジョンに現れたモンスターよりも強力なものでした。おそらくベルがいなかったら私達は全滅をしていました。」

「オーマジオウ……あれが全力の力なのか……」

「だけどオーマジオウさんはあの姿になるにはベルの体などを考えたらなさえないって言っていたような……」

「だがあの姿になったってことは、それほどに強力なモンスターってことだよなああの骨の化け物……」

ライラの言葉を聞いて全員が無言でいた。もしベルがいなかったら自分たちはこうしていることがなかったであろうと……

「……ベル……起きてくれるよね？」

「そういえばあのエルフの子は？」

「そういえば明日来るって言っていたわね。」

「ベル起きるかしら？」

「わからないわね。」

そんな話をしている中、ベルは？精神世界の中にいた。

「……は？」

『さてベル、お前を呼んだのには理由がある。』

「？」

『これからのことを考えてサブライダーのライドウォッチを使わせるために歴史をお前の頭の中に叩きこませる。ただしアーマータイムを使うのではなくジカンギレードなどの武器にセットをするために使わせる感じだな？まずは基本的のアーマータイムになれた後に使うことにしよう。』

「は……」

『いい返事だ。さあ始めよう』

精神世界でベルはジオウに変身をしてオーマジオウが出した仮面ライダーたちとの特訓が開始された。

## 目を覚まさない兎

アリーゼ side

ベルが謎のモンスターと戦って数週間が経った。私達はベルによつて救われたも当然……なのにベルは今だに目を覚まさない……あれから数週間が経ち私達は傷などを治した。

けれどベルだけはまるで眠りについたかのように目を開けてくれない。アミッドに来てもらい治療をしてくれたけど目を開けない。

「ベル……いつまで寝ているの？もう数週間は経ったよ？あなたが私達を助けてからね。なんで起きてくれないの？」

私は不安で仕方がなかった。ベルが起きないことにほかのメンバーも不安が大きくなっている。それはアストレアさまも同じだ……ほかにもロキさまなどもお見舞いに来てくれたけどベルが起きることがなかった。

「アリーゼ、交代の時間だ……ベルは？」

リユートの言葉に私は首を横に振り後を任せて団長としての仕事をするために私はベルの部屋を後にする。

アリーゼ side 終了

一方でそんなベルは精神世界で鍛え続けていた。ライダー達に鍛えてもらい現在はオーマジオウにジオウの姿で交戦をしていた。

「はああああああああ!!」

『ふん!!』

ジオウが振るうジカンギレードをオーマジオウは受け止めると衝撃波を放ちジオウを吹き飛ばすがジオウはサブライダーのライドウオッチを出してセットをする。

「フィニッシュタイム！カリス！スレスレシユータイング！」

「は!!」

ジカンギレードから風の矢が放たれてオーマジオウに放たれる。オーマジオウはそれを左手でガードをするとジオウが接近をしてジカンギレードを投げた。

『な!!』

オーマジオウは剣をはじかせたがベルがいらないことに気づいた。

「フィニッシュタイム！チエイサー！ザックリカッティング！」

「はああああああああああああああ！！」

上空からジカンザックスをふるいオーマジオウのボディにダメージを与えた。

「はあ……はあ……はあ……」

『……見事ベル、基本形態ならばの戦い方だったな。』

「でも全然本気じゃなかったですよ？」

『ふふそうだな、そこまで見破られたがお前は私に一撃を与えたのは事実。だがジカンギレードを投げたときは驚いたがまあその手もありだろう。さてお前が眠らせて数週間が経ってしまったな。』

「え!?そんなに!?!」

『私もうっかりしていた。そのせいで外では大変なことになっているようだ。』

「い、急いで戻らないと……お姉ちゃんたちに何をされるのかわからない。」

ベルは慌てて戻ろうとしたがオーマジオウはそつちじゃないぞといいベルは顔を赤くしながら自分の体に戻る。

『ベル……これでアーマータイムをしても倒れることはないが、まだほかのは使用不可能にしている！それは成長と共にしているから安心をしろ！』

「はい!!」

ベルは急いで自分が寝ている体の場所へ行く前に一人の女性のところへと行く。彼女はベルに気づいたのか振り返る。

「ベル……」

「……僕は今でもお義母さんたちがいなくなったのを許していない。僕がどれだけ悲しんだか……」

「……」

「だけど時々、オーマジオウさんとは別の何かを感じていた。お義母さんが見守ってくれているんだなって思った。」

「……」



に再び戻ってきたのでオーマジオウとアルファイアは首をかしげている。

『早くないか?』

「色々とありまして……………」

改めて目を覚ましたベルが見たのは涙目で見ていた姉たちだ。

「ベル!!」

「お姉ちゃん……………」

「良かった……………良かったよ……………」

「無事でよかった。お姉ちゃんたちが無事で……………」

「馬鹿ベル!!あなたが死んだら意味がないわよ!!あなたが死んだら私達は悲しいのよ!!」

「ご、ごめんなさい……………」

アリーゼは涙を流しながらベルを抱きしめていた、彼自身はオーマジオウに鍛えてもらったため体力などが増加されておりアーマータイムを使用する回数が増やすことができたがオーマジオウ自身ですっかり忘れていたため数週間が経ってしまい現在に至る。

さてベルが目を覚ましたことがアストレアも彼に抱きしめた。

「良かったわベル、心配かけさせて……………あなたは……………」

「ごめんなさいアストレアさま、僕……………」

「あなたのおかげでアリーゼ達が無事だったのは事実、でもあなたが無事じゃなかったら意味がないわよ……………」

「……………」

「そういえばあなたが眠っている間にあなたの二つ名が決まったわ」

「二つ名……………」

「そう二つ名……………」

「仮面正義兔……………」

「仮面正義兔……………」

「もしかして仮面ライダージオウにアスト

レア・ファミアリア……………」

「そして僕の見えた目……………」

「はあ……………」

「ベルは仮面正義兔と名付けられたのでショボンと落ち込んでいた。仮面正義兔という二つ名がつけられたので……………」

「って待てよと思えばベルは考えていた。」

（仮面正義兔ってことはこれからは堂々とジオウに変身ができるって

ことだよね？あ、でも僕普段変身をする時は目立たない場所で変身をしていたからな……今更か……)

ベルはそう思いながらも仮面正義兔と思いながらもはやく大人になりたいなーと思いながら左手のジオウライドウォッチを動かした。



ください。」

えー！そんなこと言われても……とりあえず僕はフィル  
ヴィスさんを連れて一度アストレア・ファミリアのホームへと戻って  
アストレア様のところへと行く。

「アストレアさまああああああああああああああ!!」

「べ、ベルどうしたのってあら?」

アストレアさまも僕がフィルヴィスさんを連れてきたのに驚いて  
いるようで僕は事情を話す。

兔説明中

「あーそれでベルの部下……というかその下につきたいって言  
うのね?」

「はい、我が魔王に助けられて以降ずっと忘れられないのでデイオ  
ニユソス様のところから離脱をしまして……」

「わかったわ。とりあえずあなたにも私の恩恵を刻むわね?」

「感謝をしますアストレアさま。」

「では僕外で待っていますね?」

外に出ていきアストレア様がフィルヴィスさんに恩恵をつけてい  
る間暇をしている間何をしていようかなと思いついてライドウオッチを外  
してみている。

「デイケイドライドウオッチか……長いなーどうしてデイケ  
イドライドウオッチだけ長いんだろう?」

僕はデイケイドライドウオッチを見ていると扉が開いてフィル  
ヴィスさんが出てきた。どうやら恩恵をもらったみたいだ。

「お待たせしました我が魔王。」

「あのー僕魔王でも何でもないんですけど……」

「何をおっしゃいますか?それともオーマジオウさまと呼びしたほ  
うがよろしいですか?」

「普通にベルでお願いします。」

「わかりましたベルさまとお呼びいたします。」

「レベルなどは3だけど一応ダンジョンで行ったどうかしら?」

「わかりました。フィルヴィスさん行きますよ?」



「は!!」

とりあえずアストレア様と共にギルドの方へと向かい、フィルヴィスさんの冒険者登録を済ませてからダンジョンに入った。

フィルヴィスさんは魔法を使うことができるそうなので僕はジカンザックスを出してユミモードでゴブリンを倒して10階層まで降りる。

「さてつとここからはジクウドライバーを使おうかな?オーマジオウさん!」

僕は声をかけるとジクウドライバーが現れて僕はジオウライドウオッチを起動させてセットをする。

「変身!!」

【ライダータイム!カメンライダージオウ!】

「祝え!全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者!その名も仮面ライダージオウ!」

(まさかウオズの台詞を言うとは思ってもいなかったが……懐かしいな……私も始めて変身をした時にそう言われたのをな。)

「フィルヴィスさん、行きますよ?」

「は!ベルさま!!」

僕たちは降りていき現れた大猿に驚いてしまう。

「ベルさま、あれはシルバーバックとよばれるもの。」

「だったらこのライドウオッチだね。」

【鎧武】

そのまま左側のセットをして変身をするけどあれ?上から何かが頭のくるううううううううううう!!

【ライダータイム!カメンライダージオウ!アーマータイム!ソイヤ!ガйм!】

「祝え!全ライダーの受け継ぎ時空を超え過去と未来をしろしめす時の王者!その名も仮面ライダージオウ!ガймアーマー!」

「さてここからは俺達のステージだ!!」

僕は現れた大橙丸Zを装備をして襲い掛かってきたシルバーバックを切っていく。だけど流石に魔物の数が多いな……

「ベルさまー！ここは私が魔法で倒します！その間敵を引きつけておいてくださいー！」

「OKーじゃあこれを貸してあげる!!」

僕はコダマスイカアームズとタカライドウオツチを起動させてフィルヴィスさんを守るように指示を出してシルバーバックやインプなどを相手にしている。

「一掃せよ、破邪の聖杖！ベルさまおさがりを!!ディオ・テウルソス!!」

フィルヴィスさんの声を聞いて僕は横にそれると雷魔法が発動をしてシルバーバック達に命中をして撃破されていく。すごい魔法だなど思いつつもオレンジのエネルギーをたくさん作りそれを投げつけてからベルトの操作をする。

「フィニッシュタイム！ガイム！スカッシュタイムブ레이크！」

「はあああああ．．．．．せい!!」

六つの大橙丸Zを振りまわしてエネルギー刃をモンスターたちに放って撃破していく。やがてモンスターがいなくなったのを見て僕はフィルヴィスさんのところへと行く。

「お見事ですぬフィルヴィスさん。」

「いいえベルさまも流石魔王でございますね？」

「ありがとうございます。けどまだ僕は冒険者としても．．．．．魔王としてもまだまだですよ。あの時だってオーマジオウさんが僕の体を使ってやりましたから。」

「．．．．．それでもあなたさまについていくと決めたのは事実です。たとえ助けた人が弱くても．．．．．あなたさまは強くなる．．．．．私はそう思っております。」

「フィルヴィスさん．．．．．」

僕は仮面の奥で涙を流しかけたよ。なんて優しいエルフの人なんだと思いつながら僕たちはダンジョンを終えてホームの方へと戻ることにした。

新たな仲間フィルヴィスさんを加えたアストレア・ファミリア、僕も頑張ります!!（、・ω・、）

犬人くんかくんか

フィルヴィスという人物がアストレア・ファミリアに仲間に入ってから数週間が経った。

我らのベル・クラネルは何をされているのか？

「くんくんくんくん、はどうして君はいい匂いをしているのかな？」

「な、ナアーザさん……」

ナアーザ・エリスイス、ミアハ・ファミリアの団長を務める人物、本来の歴史では右手が義手となっているがその前にアストレア・ファミリアが介入をしたことで彼女は右手を失うこともなくミアハ・ファミリアも零細ファミリアではない。

現在彼はベルの頭をモフモフしながらファミリアにやってきたベルをこうしてモフモフタイムに入っていた。

このモフモフを気にいったのかナアーザは一週間に一回はモフモフをしないと禁断症状が出てしまうほど気にいつてしまったのだ。

「うふふふふふふふふふふふふふふふ」

「……………」

((あ、また団長がモフモフタイムに入ってる。))

ファミリアメンバーはいつも通りのナアーザを見てベルもあきらめた様子であった。実は彼のモフモフを気にしているのは彼女だけじゃない。がちやつとドアが開いて銀色の髪をした女性が入ってきたのを見てメンバーはそそくさと退散をする。

「アミッドどうしたの？」

「アミッドお姉ちゃんこんにちは。」

「こんにちはベル、さてその犬人さん？今日はベルは私の方に来るはずでしたが？」

「あら？何のことかしら？」

バチバチと火花を散らす二人、そうベルのモフモフは二人にとって癒しの効果を持っており疲れているがベルをモフモフをすると疲れが吹き飛んでしまうためベルはこうして一週間に一回はミアハ・ファミリア、ディアンケヒト・ファミリアにお邪魔をしてアミッド及び



お前を必死に探しているだろう。』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ベルは左手のタカライドウオッチを起動させてナーザとアミツドをここに連れてくるように指示をするとタカライドウオッチはベルの命令を実行をするために二人を空から探す。

一方で二人はベルを必死になって探したが見つけることができなかった。

「私のせいだね・・・・・・・・ベルのことを気にいつちやつて・・・・・・・・」

「いいえ私も悪いです。あれは？」

『ピーピー!!』

タカライドウオッチを見つけて二人は後を追いかけて大きな木が見える場所へ到着をする。そこにベルは座っており二人はベルを見つけると土下座をした。

「ふえ?」

「ごめんなさい!ベル!!」

「私、ついアミツドにベルがとられてしまうと思つてつい意地になつて・・・・・・・・」

「私もです。ナーザがあなたを抱きしめているのを見て嫉妬をしてしまいあんな行動を・・・・・・・・それであなたを傷つけてしまった。」

「本当にごめんなさい!!」

『ベル、許してやったらどうだ?こんなに二人が謝っているのだからな。』

「・・・・・・・・アミツドさん、ナーザさん・・・・・・・・僕は物じゃありません。あんなに引つ張られたら僕だって痛いです。」

「・・・・・・・・」

「これからは2日ごとに行きます。それなら2人が喧嘩をすることがないと思います。」

「ベル・・・・・・・・」

「僕は喧嘩をする二人を見るのは嫌なんです。だから僕で喧嘩をするなら・・・・・・・・」

ベルは涙を流しながら言うのを見て二人はお互いを見てから謝る。

「ごめんなさいアミッド。」

「いいえナーザーこちらも悪いのです。」

お互いに謝ったのを見てベルは首を縦に振るが二人の人物はじーつと見ていたのを見てベルは冷汗をかいてしまう。

「さてでは今からモフモフタイムをするとしましょうか?」

「そうね。疲れを癒させてもらいましょうか?」

「ふええええええええええええ!!」

こうしてベルは二人の団長達にモフモフされてしまうのであった。

## 通りすがりの力

ベル side

つ、疲れた……ナアザさんとアミッドさんが仲良くなったのはいいけど、その分二人からのモフモフがいつも以上に触られた気がしてマインドダウンしかけたよ……おかしいな？僕魔法なんて使っていないはずんだけど……とりあえず疲れた体を休ませるためにホームの方へと歩いていく。

『まあベルお疲れだな？』

「オーマジオウさん、何もしてくれなかった……」

『それに関してはベル、お前自身だからな。私もそこまで甘やかすつもりはない。それに二人が仲良くなれたのはいいことじゃないか。』  
「そうですけど……」

そう話ながらホームの方へと帰ると裏庭の方で音が聞こえてきたのでこっそりと覗いて見るとリユウお姉ちゃんと輝夜お姉ちゃんが激突をしていた。

でもどうして二人が？

『おそらく模擬戦をしているのだろうか？ベル、お前もリユウと模擬戦をしたことと同じだ。』

なるほど、オーマジオウさんジクウドライダーをお願いします！

『ふむよかろう。』

腰部にジクウドライダーが現れるとジオウライドウオツチともう一つのライドウオツチを出した。

【ジオウ】【デイ・デイ・デイ・デイケイド】

僕はそのままジクウドライダーに二つセットをしてみわした。

「変身!!」

【ライダータイム！カメンライダー！ジオウ！アーマータイム！カメンライド ワオ！デイケイド！デイケイド！ディーケーイードー！】

「これって？」

『仮面ライダージオウ デイケイドアーマーだ。ほかの形態とは違いデイケイドライドウオツチ自体が大きいには秘密がある。まあま

ずは専用武器を出してみろ』

専用武器？ベルトから何かが出てきて僕は驚いてしまう。

「ライドハイセイバー！」

「剣？だけど針にライダーのマークがある。とりあえず！」

僕は姉たちがいる裏庭の方へと突入をしてライドハイセイバーの針を動かしてマークを選んだ。

「ハイ！ダブル！デュアルタイムブ레이크！」

「えい！！」

二つの黒い竜巻と緑の竜巻が発生をしたのを見てもしかしてライドハイセイバーはほかのライダーの力を剣で使えるってこと？

『そのとおりだベル。ライドハイセイバーは針を動かすことでどのライダーのマークで発動をすることができる。』

「べ、ベル!？」

「なんだその姿は!!」

「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え過去と未来をしろしめす時の王者！その名も仮面ライダージオウ デイクイドアーマー！」

「ふい、フィルヴィスちゃん……それあなたの役目だったんだ。」

「通りすがりの仮面ライダーだ覚えておけ！輝夜お姉ちゃん、リユーお姉ちゃん行くよ!!」

「来いベル！」

「お前の力見せてもらおうぞ!!」

2人は僕に武器を構えている。さーてショータイムだ！

ベルside終了

お互いに構えているとリユーが突撃をしてベルに振り下ろした。ライドハイセイバーを使いリユーの攻撃を受け止めたが輝夜が接近をして太刀をボディに切りつけてダメージを与える。

「流石に二人相手では不利かな？」

『ベル！デイクイドライドウオッチにほかのライドウオッチを装着させてみる。』

「ほかのライドウオッチを？」



『そうだ！それがデイケイドライドウオッチのもう一つの力だ！』  
「わ、わかった!!」

【鎧武！】「ファイナルフォームタータイム！ガ・ガ・ガ・ガイム！」  
肩部の文字がガイムの名前に変わり、胸部から左肩にかけてバーコードがジンバーレモンと変わり、ガイムのアンダースーツのようになり左手にソニックアローが現れて二人が振り下ろした武器を受け止めた。

「変わった!?!」  
「姿などは変わっていないが……アンダースーツなどが変わっている気がする。」

二人の武器をはじめかした後、ライドハイセイバーを置いてソニックアローを引つ張り張りエネルギーの矢が放たれてリユースはガードをしたが吹き飛ばされる。

「ぐ!!」  
「リオン！」  
「は!!」  
「ぐ!!」

接近をしたライドハイセイバーを振り下ろして輝夜はガードをする。

「次はこれだ！」  
【ブレイド！】

ガイムのライドウオッチを外してブレイドがセットされる。

【ファイナルフォームタータイム！ブ・ブ・ブ・ブレイド！】

ガイムからブレイドの名前に変わり、ジャックフォームに名前が変わり左手にブレイクラウザーが装備されてダッシュをする。

「はああああああああ!!」

ベルの攻撃を二人は回避をして二人はベルの力が以前よりも上がっているのに気づいた。

「リオン！お前の魔法を叩きこんでやれ！」

「わかりました！ベル、痛いですけど我慢をしてください!!今は遠き森の空……」

「あれはリユーお姉ちゃんの魔法！止めないと！」

「おっとベル、私もいることを忘れるな？」

「ぐ!!」

ベルはリユーの魔法を止めようとしたが輝夜が邪魔をして止めることができない。

「星屑の光を宿し敵を討て！ルミノス・ウインド！」

リユーから放たれた風・光の属性を持つ攻撃魔法がベルに放たれて輝夜は蹴りを入れて後ろの方へと下がりルミノス・ウインドを受けてしまう。

「少し……やり過ぎたでしょうか？」

「お前……どれだけの威力で放った。」

輝夜はベルの方を見ているとライドヘイセイバーを縦にしてリユーが放ったルミノス・ウインドをガードをしたベルが立っていた。

「嘘、リオンの魔法をガードをした？」

『いや、ベルはあの時の魔法を受けているし立っているだけでやっただ、そうだろうベル？』

「ふえええええ……」

ベルは膝についてライドウオッチを外して変身を解除をした。ライドヘイセイバーなどが消えて彼自身は初めてリユーの魔法を受けたので威力などが前に攻撃を受けた闇派閥の魔法に比べても威力が高かったのだ。

「ご、ごめんなさいベル……」

「どうやらやり過ぎたみたいだなりオン、さてベル立てるか？」  
「……」

ベルは無言で首を横に振ったので彼女は抱え上げてアリーゼ達はディケイドアーマーの力を見ていたので興奮をしていた。

「あんな風に変わるなんて知らなかったわ！」

「私も驚いたよ！」

「てか長いなこれ！ほかのライドウオッチよりも長すぎない!？」

「さてベル、今日は私と一緒に風呂に入ってもらおうぞ？」

「ふえ？」

輝夜に連れられて彼はお風呂の場の方へと連れていかれて服なども脱がされて輝夜も来ていた着物を脱いで裸になり一緒にお風呂に入る。

「ふう………」

「それにしてもベル、あの姿は驚いたぞ？」

「えへへへへ……僕自身もあの姿になったの初めてなんだけどね？」

「ふむ、二人がかりで挑んだがファイナルフォームタイムだっけ？あの姿になったときはベルのライダーの力を使うことができるのだね？」

「うん、今回使ったのはガймとブレイドのだけどほかのライダーも使えるよ？」

「そうか、ベル……来週からは忙しくなるぞ？お前もレベル2になったからな。アリーゼが少し遠征をするといつてな。それでお前も連れていくことにしたんだ。」

「本当!？」

「ああオーマジオウが27階層へと連れてきたが今回は私たちと共にダンジョンに行くぞ？」

「わーい!!」

「可愛い奴め」

輝夜はベルに抱き付いて二人はお風呂を堪能をするのであった。

## 遠征準備

アストレア・ファミリアの遠征が決まりベルもレベル2になったことで今回から遠征に連れていくことになりベル自身も初めての遠征のため楽しみにしながら準備をすることにしたが……. 現在一緒に遠征の準備をしているマリューに声をかける。

「ねえマリューお姉ちゃん？」

「なーにベル？」

「遠征ってどんな準備をするの？」

「そうだね……. ポーションとか魔導士の回復用のポーションや食料とか飲み物など様々なものが必要だよ？」

「そうなんだ。」

「大丈夫だよベル、私達がついているから平気だよ！」

マリューはベルに両手を広げるとベルはそこにすっぽりと入りこんでマリューはぎゅーと抱きしめてベルの髪の毛をなでなでしている。

「ももももももももももふ(ゝゝ♪)」

「あ……うにゅ…….」

「うふふふベル、顔を真っ赤にしているよ？」

「だ、だってマリューお姉ちゃんの…….」

「私の何？」

「うううううう…….」

ベルは顔を赤くなりながらマリューの胸が当たっているのでマリューはわざとニヤニヤしながら言うのでベルは小さい声で呟く。

「……. ムネガアタツテイルヨ」

「ふふーん」

マリューはぎゅつとベルを抱きしめている様子をアルフィアと見ているオーマジオウ、彼女からはオーラが発生させており彼女はじーつと見ていた。

『あ、アルフィア？』

「……. 奴を殺すか。」

『いや駄目だろ!!』

「最近のベルは油断が大敵だ！昨日もそうだったが……女性に  
対して甘い!!」

（そうかな？逆に女性の方がベルを甘やかしているような……  
気のせいだろうか？）

オーマジオウは様子を見ながら両手を組み、再びベルの様子を見ながら玉座に座っていた。一方で現実の方ではマリユーに抱きしめながらジタバタしていると様子を見に来たリャーナが現れる。

「何やっているのマリユー。」

「いやーベルの髪を見ているとつい抱きしめたくなくてモフモフしてました（\*・ω・）」

「まあ気持ちはわかるけどさ。ほらベルが苦しそうにしているから。」

「あ、ごめんベル。」

「うにゅ……」

解放されたベルは顔を真っ赤にしながら準備を進めていく、マリユーはやり過ぎたかなとリャーナにいい大丈夫だと思っけど？と答える。

リャーナはそう言えばと気になったことを聞くことにした。

「ねえベル？」

「何リャーナお姉ちゃん？」

「ライドウオッチってベルは現在どれだけ持っているの？」

「基本的に僕が持っているのはこのジオウライドウオッチだけだよ？  
後はオーマジオウさんが状況においてライドウオッチを出してくれる感じだね。」

「なるほど……ねえちよつと見せてもらえる？」

ベルはジオウライドウオッチを外して渡した。

「ふーむ……」

「どうしたのリャーナ？」

「いやーこのライドウオッチに使われている素材とかオラリオに存在をしているかなって思っただってこれ叩いても壊れないからかなりの強度を持っているわよ。ありがとうベル。」

リヤーナから受け取りライドウオッチホルダーにジオウライドウオッチを装着をする。ふああああと欠伸をするベルを見て二人はふふと笑ってからお昼寝をする時間かと思いい度中断をして一緒にベットに入り寝ることにした。

その様子を見ていたアルフィアはオーラをさらに強めたが体に向かひが巻き付かれて地面にこける。犯人であろう人物を見ているとウィザードライドウオッチを押しバインド魔法を発動させたオーマジオウがいた。

『全く、少しは落ち着いたらどうだ？』

「……………」

オーマジオウは過保護の母親を面倒を見ないと行けないのかと思いたため息をついてしまひベルのことも心配だが……………そういえば前にベルのおじいさんが言っていた言葉を思いだした。

『ベル！ハーレムはいいぞ！』

『……………って言っていたなああの爺さん。』

ため息をつきながらベルのことを見ながら彼はジオウライドウオッチとは別のライドウオッチを出してみていた。

「……………この遠征の時にベルに使わせてみるか……………私の力の一部を具現化したウオッチ……………」  
「ジオウⅡライドウオッチを」

彼はこの遠征が何事もないことを祈りながらジオウⅡライドウオッチを持ちながら一緒に寝ている二人の姉たちを見ながら幸せそうに昼寝をしているベルを見ていた。

いざ行かん！アストレア・ファミリア遠征へ！

あれから準備が完了をしてアストレア・ファミリアは遠征へ向かうためにダンジョンへと歩いていく。その中にベル・クラネルも一緒にアリーゼと手をつなぎながら彼らは遠征へと出発をする。

ダンジョンに入りベルの腰部にジクウドライバーが現れたのでベルは首をかしげていると声が聞こえてきた。

『遠征つてことで流石に途中で出すのも大変だからな、最初から変身をしていけばいいと判断をした。』

「ありがとうオーマジオウさん！変身!!」

「ライダータイム！カメンライダージオウ！」

最初からジオウに変身をして彼女達は中へダンジョンに入り構える。ベルもジカンギレードをジユウモードにして現れたゴブリンに放ち倒していく。やがて彼女達は中層へと入っていき目の前に現れたミノタウルスをベルはジカンギレードで切り裂いて倒した。

「ベル……」

「リユーお姉ちゃん、何持ってきたの？」

「ごめんなさい、ベルの仲間を……」

「僕はアルミラージじゃないよ!!」

リユーが持つてきたアルミラージにベルはツツコミを入れて切っていく。17階層へと突入をしてアリーゼが止めた。

「待ちなさい。」

「アリーゼ？」

「いいわねベル、あなたにとっては初めて戦うから覚えておいた方がいいわ。ここには階層主と呼ばれるモンスターがいるのよ。」

「階層主？」

「そうだ、あれがこここの階層主……」

『ぐおおおおおおおおおおおおおおお!!』

「ゴライアス！」

現れたゴライアスは咆哮をしてアストレア・ファミリアを見ていた。ベルはジカンギレードを構えていると剛腕が振るわれてベルに

当たり吹き飛ばされる。

「が!!」

「ベル!!」

「アリーゼ来るぞ!!」

「わかっているわ!!行くわよ!!」

アリーゼの指示の元アストレア・ファミリアはゴライアスと交戦をする中、ベルは壁から出てアリーゼ達の戦いを見ていた。

「すごい……」

『……ベル、ジオウの力を一段階解放させよう。』

ベルの両手にライドウォッチが現れてベル自身は首をかしげる。

「これは?」

『ジオウをもう一段階に変身をすることができるライドウォッチ、その名もジオウⅡライドウォッチだ。金のサイドと銀のサイドをジクウドライバーにセットをするんだ。そうすればお前はジオウⅡに変わる。』

「わかった!!」

ベルは立ちあがりジオウライドウォッチを外して上部のボタンを押す。

『ジオウ Ⅱ!』

そのままスライドさせて分割されてそれぞれをジクウドライバーにセットをして音声が流れる。

「なんだ?この音は。」

「ベル?」

「は!!」

『『ライダータイム!』』

『仮面ライダー!』『ライダー!』

『ジオウ・ジオウ・ジオウ!Ⅱ(ツー!)』

「祝え!全ライダーを凌駕し、時空を越え、過去と未来をしろしめす時の王者!その名も仮面ライダージオウⅡ!新たな歴史の幕が開き瞬間である!」

「仮面ライダー……」



「ジオウ……」

「Ⅱ……」

『ぐおおおおおおおおおおおおお!!』

「お前の手は読めた!!」

ジオウⅡに変身をしたベルはそのままゴライアスが振り下ろした剛腕交わしてからその剛腕を踏み台にしてベルトから武器が現れる。

『サイキョーギレード!』

「はあああああああああ!!」

サイキョーギレードのトリガーを押して必殺技を放つ。

『ライダー斬り!!』

「でえええええい!!」

振り下ろされたサイキョーギレードの斬撃がゴライアスを真つ二つに切り裂いた。全員がジオウⅡの力を見て……。ベル自体がさらに強くなっていくのを姉たちは見ていた。

(ベル……。ベルの力はジオウⅡとなってさらに強くなった。でも……)

(その力はベル自身も減ぼしてしまう力かもしれない。ジオウⅡ……。オーマジオウが選択をした力ならば私達は何も言わない。だが……)

((今のベルには強すぎる。))

「これが……。ジオウ……。Ⅱ」

ベル自身もジオウⅡが今まで使っていたジオウやアーマータイムの力を凌駕しているのを感じていた。

「それにさつきゴライアスの動きなどがわかったのって……。これが未来予知?」

『そうだ、前にベル……。アリーゼ達が危険が見えたといっていたな? おそらく私と融合をしている影響でお前に未来予知……。一瞬だけ見せることが発生をした可能性がある。そしてジオウⅡは相手の手の先を読むことができる未来予知が可能ということだ。』

「……。未来予知。」

「ベル、大丈夫?」

「アリーゼお姉ちゃん大丈夫だよ？」

ベルはジオウⅡライドウオツチを外してジオウライドウオツチをセツトをしてジオウに変身をして歩きだす。

「ジオウⅡじゃなくていいのか？」

「あれ、案外体力をかなり使うんです。だから階層主を倒したらジオウに戻る感じですね。」

「なるほどな、確かにあの力……強そうだけどよ。今のベルにとっては体力などを考えたら遠征の時は階層主を相手にジオウⅡで戦った方がいいな。」

「僕もそう思う。」

「とりあえず次のリヴィラの街で休憩をしようかしら？それに時間的にも……ね？」

「？」

ベルはジオウの変身を解除をしてリヴィラの街に到着をしてベルはダンジョンの中にある街を見て目を見光らせている。

「おーーーーー」

「ここがリヴィラの街よ！」

初めてリヴィラの街へとやってきたベル。ゴライアスを倒してベルたちはリヴィラの街で休憩をすることにした。

## 水浴び

ベルside

階層主ゴライアスを倒した僕たちアストレア・ファミリアは現在安全階層と呼ばれる場所にて休憩をする。

僕自身は初めてリヴァラの街にやってきたけど姉たちは止まるためのテントなどを買いに行くことで僕はここでボーっとしていた。

ゴライアスとの戦いでジオウⅡに始めて変身をしたけどアーマータイムより軽い気がしたけど気のせいかな？こうして誰もいないで静かに過ごすことは少なかったから……。たまにはいいかな？

「……うぐ!!」

突然としてボーっとしていた僕は後ろから抱きしめられてもう姉たちが帰ってきたのかなと思ひ振り返ったが違う人だった。

「ヤッホーベル君？」

「あ、アーデイお姉ちゃん？」

そういたのはガネージャ・ファミリアの人でアーデイお姉ちゃんだった。なんでお姉ちゃんがここにいるんだろうと思ひ話しかける。

「アーデイお姉ちゃんどうしてここに？」

「私達も遠征で来ていたの。そうしたらベル君がボーっとしていたからそれで抱き付いちゃった？」

「そ、そうなんだ。」

「ベルってなんだアーデイか。」

「輝夜ヤッホー。」

「そうだついでにアーデイお前も水浴びをするか？これからベルを連れて水浴びをすることにしたが……。」

「ならお邪魔しようかな？」

まさかのアーデイさんも参戦をするの!?最近お姉ちゃんたちと一緒に水浴びとかお風呂に入ると恥ずかしい気がするのは気のせいかな？うーうーんまあいいか。

ベルside終了

輝夜とアーデイに連れられて水浴びをする場所へとやってきたベル、ベルは姉に脱がされた後に輝夜とアーデイも一緒に服を脱いで湖に入る。

「つ、冷たい……」

「あらあら兎さまにはまだ早すぎましたかな？」

「……ねえ輝夜？」

「なんだ？」

「いつも入っているの？」

「お風呂とか一緒に入ったたり布団と一緒に寝たりしているな。ほらベル……」

「うにゅ」

輝夜に呼ばれてベルは彼女に抱き付いた。輝夜自身もまんざらじゃないのですりすりとしてくるベルの頭を撫でているのをアーデイは顔を赤くしながら見ていた。

「どうしたアーデイ？」

「ううん何でもない！（うわーベル君甘えん坊だね。まあ7歳だから当たり前か……）」

アーデイはベルが7歳だつてことにすっかり忘れていたので改めて7歳だなと確認をしていると叫び声が聞こえたので見るとアーデイが頬を膨らませていた。

「ずるいわよ輝夜!!ベルと一緒に先に水浴びをしているなんて!!」

「あらあら団長さま、私は用事が終わらせたので先に待っているベルのところへと来たのですわよ。アーデイがまさかベルを抱き付いていたのは予想外だったけどな。」

「なら私も入る!!」

アーデイは来ていた服などを脱いでいき裸となり湖の中に入りこむ。

「「うわああああ!!」」

飛び込んできたせいで三人は冷たい水を浴びてしまいベルはおぼれかけてしまう。

「こらアリーゼ!! 飛び込んでくるな! ベルがおぼれかけたじゃないか!!」

「ごめんベル!!」

「ベル君大丈夫?」

「ブクブクブクブク」

ベルがおぼれかけたので急いで湖から上がり彼の口から水が出てきてげほげほと咳をする。

「ベル…ごめん本当にごめん!!」

アリーゼは裸のまま土下座をしてきたのでベル自身は頭を振りながらアリーゼの方を見ていた。

「び、びっくりした…。。だ、大丈夫だよアリーゼお姉ちゃん。だから頭をあげて。」

「あー優しいわベルうううううううううううう!!」  
「うぐううううううううううう!!」

アリーゼがベルに抱き付いたが彼女の大きな二つの果実が彼の顔を覆ってしまいベルは手をあげたが…。。やがて手を降ろした。

「ベルうううううううううううう!!」  
「ベルうううううううううううう!!」

(拝啓故郷にいるおじいちゃん…。。僕は女性の胸に包まれて…。。幸せです。)

『おいしいおいしい!! 何やっているんだああああああああああああ!!』

オーマジオウはアリーゼの胸に包まれて幸せそうに昇天をしようとしているベルを見て驚いてしまう。やがてベルが回復したのはそれから数時間後であった。

## その先へ

テントの中、ベルは目を覚ますと『私は自分の大きな胸で7歳の子を窒息させかけました』と書かれた札を掲げながら正座をしているアリーゼの姿を見たので彼は驚いていると輝夜の顔が近かった。

「ベル目を覚ましたな。」

「輝夜……お姉ちゃん。あ……」

「思いだしたようだな？そこで正座させている奴がお前を窒息させようとしたからな」

「全く。」

「うう……」

「ベル、体の方は？」

「……大丈夫だよ。」

ベルは起き上がるとアリーゼのところへと行く。アリーゼは自分がしでかしたので何を言われてもいいと覚悟をしていたがベルは頭を撫でていた。

「え？」

「大丈夫だよアリーゼお姉ちゃん、僕がそんなんでお姉ちゃんを嫌うと思っっているの？」

「べ、ベル……」

「だからそんな顔をしないで？ね？」

「ベルうううううううううううううううううううう!!」

アリーゼはベルに抱き付いて彼は頭を撫でている様子を輝夜はやれやれといいながら見ていたがベルの優しい性格には自分たちには持っていない何かを感じていた。ベルが回復をしてテントで眠りについた。ベルは輝夜とアリーゼと同じテントで一緒に寝て次の日に目を覚ました。

「……」

『おやベル、もう目を覚ましたのか？』

「うん、ここがホームじゃないだなんて……」

ベルはこっそりと抜けてジクウドライバーを装着をしてライド

ウオッチを見ていた。ほかのライドウオッチなどまだ使ったことがないライドウオッチを出していた。

「クウガ、アギト、龍騎、響鬼、カブト、キバ、ダブル、オーズぐらいかな?」

『うむそうだな? ベルはどれを使う気だ?』

「これとこれかな?」

ベルはカブトとオーズのライドウオッチを使ってみようかなと出したのでオーマジオウはそれ以外をしまってベルの新たに右手のライドウオッチホルダーにセットをさせて立ちあがりダンジョンの中なのに朝日が見えたのでベルは目を光らせる。

「き、綺麗……」

『ああ、ダンジョンで朝日を見る事ができるとはな……本当に不思議なところだここは……』

ベルとオーマジオウは上がってきた朝日を見て綺麗だと思い見ていると一人の女性が近づいてきた。

「ベル、こちらにいたのですか?」

「リユーお姉ちゃん。」

「アリーゼ達がベルがいないって騒いでいたのでどこに行ったのかと思いましたがよ?」

「ご、ごめんなさい。」

『すまない、綺麗な朝日を見ていたのでな。』

「確かにベルにとっては初めてのダンジョンで朝を迎えますからね。ほら帰りますよ?」

「はい。」

リユーと共にテントを立てた場所に戻るとアリーゼと輝夜が心配した顔でベルが無事だったことにホッとしてアストレア・ファミリアは18階層より先へと進んでいく。ベルはジオウに変身をした後にオーズのライドウオッチを押し。

【オーズ!】

するとタカ、トラ、バッタのアーマーが現れてジクウドライバーの左側に変身をする。

「ライダータイム！カメンライダー！ジオウ！アーマータイム！タカ！トラ！バッター！オーズ！」

仮面ライダージオウオーズアーマーへと変わり先に進んでいき現れたソードスタッグを右手のトラクロウZで切り裂いた。

「せいやあああああああああ!!」

さらに現れたバグベアーを脚部のバッタレッグでジャンプをして連続した蹴りをお見舞いさせた後アリーゼが剣をふるい撃破した。

「待つて、何かモンスターが多いわ!？」

「おいおいこれって……」

「輝夜お姉ちゃんなんかモンスターが多くない？」

「間違いない、怪物の宴（モンスターパーティー）だ!!」

モンスターの数が多くなっていくのを見てベルはオーズライドウオッチを外してカブトライドウオッチを出して装着をする。

「ライダータイム！カメンライダー！ジオウ！アーマータイム！チェンジビートル！カブト！」

「お姉ちゃんたち動かないで！」

「フィニッシュタイム！カブト！クロックタイムブ레이크！」

「は!!」

ベルが一瞬で消えてアリーゼ達はいきなりベルが消えたので驚いていると次々にモンスターたちが魔石へと変わっていくのを見てベルがやっているかと判断をしてフィルヴィスは流石魔王さまとい杖を持ち見ている。

「これで終わりだ!!」

飛びあがり必殺の蹴りをバグベアーの一体に命中させて爆散させると周りにいたモンスターたちは全滅をしてベル自身もクロックアップが解除されて姿を現す。

「アリーゼどうする?」

「うーん正直に言えば降りてもいいけど……今日はこの辺でいいかしら?」

「大丈夫ベル?」

「……」



「ベル？」

「………そこだ!!」

ジカンギレードをジュウモードにして発砲をして全員が武器を構えていると舌打ちをして女性が現れた。

「何者だ貴様!!」

「アストレア・ファミリアか、お前達の相手をしている暇はない………」

「闇派閥のものなら見逃すわけにはいかない!!」

「闇派閥だと？私をあんな奴らと一緒にしてもらっては困る!!」

赤髪の女性は地面に何かをするとモンスターが現れて襲い掛かってきた。

「な!?!魔物を生み出した!?!」

「させない!」

ベルはジカンギレードにサブライダーのウォッチを出してセットをする。

【フィニッシュタイム!ギャレン!スレスレシユータイング!】

炎の弾丸がジカンギレードから放たれてモンスターを撃破する。

アストレア・ファミリアの面々も相手が出したモンスターを倒していきベルは接近をして赤髪の女性に切りかかる。

「ちい!」

「あなたは一体何者なんですか!!」

「言っただろ!貴様達には関係ないと!!」

「させない!!」

赤髪の女性が振り下ろす二刀流をベルはジカンギレードで受け止めた後に別のライドウォッチを出して押す。

【響鬼!】

そのままジクウドライバーに装着をして回転させる。

【ライダータイム!カメンライダージオウ!アーマータime!響鬼!】

「祝え!って邪魔だ!!」

フィルヴィスは祝おうとしたがモンスターが自分を邪魔をして来

て祝うことができないのをベルは苦笑いをしながら両手に現れた音  
激棒・烈火を構えて先端から烈火玉を放ち相手に攻撃をする。

「ぐ!!」

「はああああああああああああ!!」

ベルは走りながら必殺技を放つ。

【フィニッシュタイム!響鬼!音撃タイムブ레이크!】

ジクウドライバーから音撃鼓が発生をして女性に張り付いてベル  
は勢いよく叩いて衝撃を放ち吹き飛ばした。

「ぐああああああああああああ!!」

「シユ」

「ベル!!」

アリーゼ達もモンスターを倒して彼の周りに行き赤髪の女性は舌  
打ちをして何かを投げつけた。

ベルは蹴りを入れたがそれが破裂をして煙が充満する。

「覚えておけ、仮面ライダージオウ……貴様は私が倒す!!」

その言葉と共にリユウが魔法で風を起こして煙を吹き飛ばすが赤  
髪の女性の姿は消えておりアリーゼ達も武器をしまう。

「逃がしてもらった?いいや逃げたと言った方がいいな。」

「ええ間違いないベルを次は狙うといっていたわね。」

「……………」

「どうしたのベル?」

「ノインお姉ちゃん、あの人から変な感じがした。」

「「変な感じ?」」

「うん。なんだろう?人間だけど……モンスターって感じがす  
るんだよね。うーんよくわからないけど……………」

「どうしましょうか団長?」

「そうだね……さっきの相手のことも気になるけどこれ以上は  
危険ね?とりあえず戻ろうかしら?」

24階層に到達をしたアストレア・ファミリア、そこで謎のモン  
スターを繰り出してきた女性をベルがヒビキアーマーで撃退したが  
これ以上遠征に行くのは難しいと判断をして遠征を取りやめてダン

ジョンから戻るのであった。

全ての力が集結をした王の力！

オーマジオウside

やあ、私はオーマジオウだ。赤い髪をした女が襲撃をしてから三年という年季が経った。あつという間だな……。あれからベルもジオウIIの力にも慣れてきて戦い方などもほかの人達に学びながら自分なりの戦い方を取得をしていた。

そんなベルもレベル3になり10歳になったのだが……。私は現在頭を抑えている。その理由はアストレア・ファミアの奴らだ。

ベル自身身長があまり伸びないのか姉たちは甘やかしてお風呂に今でも一緒に入ったたり布団に一緒に入ったたりキスをしたりとイチヤイチヤしている姿を今でも見る。

フィルヴィスの方もベルの下につきながらもレベル4になるなど強くなっている。さーてそんなベル、ほかの場所でもモフモフの餌食になっているのが増えている。

現在ベルがいる場所、それは……

「もふもふもふもふ」

「あ、アイズさん……」

ロキ・ファミア、アイズ・ヴァレンシュタイン……。レベル4の少女だが現在ベルの頭を触りながらモフモフタイムに入ってしまったっている。彼女曰くベルをモフモフすると落ち着くことでベル自身も顔を赤くしながらも慣れてしまった。

「あーアイズ!!」

また来たよ、新しくロキ・ファミアにアマゾネスの一人「ティオナ・ヒリュテ」だ。彼女もベルのモフモフが気にいったのか？ いや彼女の場合はベルのことを男として見ていたな……。アマゾネス恐るべし……。さてティオナはアイズとベルのところへ近づいていき彼女の力でベルをぶんどりモフモフした。

「モフモフ、本当ベルはなんでこんなにモフモフなの？」

「いやーそれは僕に言われましても……」

「それに髪も長いままだよ?」

「切ろうと思っていますけど気にいつている自分がいまして……」  
ベルは苦笑いをしながらアイズは何かを思いついたのか声をかける。

「ねえベル。」

「なんですか?」

「また私と戦ってほしい。」

「えつとそれは仮面ライダーとしてですか?」

「そう。」

ふむ、アイズとの模擬戦はベルにとつても成長を試すいい機会かもしれないな。お互いに広い場所に移動をするが……ティオナもついてきており私はジクウドライダーを出してベルはライドウオッチを出して構える。

【ジオウ!】【龍騎!】

さーて見せてもらおうか?アイズよ……貴様がどれだけ成長をしたのかをな。

オーマジオウside終了

【ライダータイム!カメンライダージオウ!アーマータイム!アドベント!龍騎!】

仮面ライダージオウ龍騎アーマーに変身をしてアイズは別の姿になったと思いでスペアードを構える。

「また違う姿?」

「ええ行きますよアイズさん!!」

ジカンギレードを構えてアイズに突撃をしてジカンギレードを振り下ろす。アイズはそれを受け止めた後に後ろへと下がり風を纏う。

「目覚めよ」

彼女に風が纏われてベルが振り下ろすジカンギレードが彼女に触れることができなくなるが彼は両肩部の目の部分が光りだして赤い龍が火炎の弾を放ちながらアイズに攻撃をしてきた。

「く!ドラグレッター……」

ドラグレッターの頭部をモチーフしたドラグクローが装着されて

ドラグクローファアイアが放たれる。

アイズは交わすとベルに接近をして攻撃をしようとするが彼の左手にドラグシールドが装備されてガードをした。

（流石アイズさん、前よりも強くなっている!!）

（ベルの戦い方が以前よりも変わった。やっぱりベルは私の英雄なんだ。）

アイズはベルと戦いながらもリヴェリアが言っていた言葉を思い出した。数年前からベルがほかの女性といると胸がズキズキするの  
で病気じゃないかと思いいりヴェリアに言うとな彼女はため息をつきながらこう言った。

「それは恋じゃないか？アイズにとってベルが好きだからこそ胸が痛くなるじゃないか？」

「好き？私がベルのこと……………」

ベルのことを考えていたら顔が赤くなってしまいいりヴェリア自身もあのアイズがなと思いつつも彼の周りにいる女性達は強敵だなど思いつつアイズを応援をする。

現在に戻りジカンギレードとデスペラードが激突をして二人はそのまま後ろへと下がりベルは龍騎ライドウオッチを外してジカンギレードにセットをする。

「次で……………」

「決めます!!」

【フィニッシュタイム！龍騎！ギリギリスラッシュュー！】

「リル・ラファアガ!!」

炎の剣と風が激突をしてお互いの武器と武器が激突をする。テイオナはその衝撃に耐えながら見ていると二つの剣が地面に突き刺さった。ジカンギレードとデスペラードである。

「強いね……………ベル。」

「アイズさんこそ……………」

お互いに握手をして武器を回収、変身を解除をしてベルはホームがある場所へと歩いていく。

「……………オーマジオウさん。」

『ああどうやらまだお前を狙っている輩がいるようだな……やれやれ新たな二つ名『正義時王鬼』の出番だな?』

「それ恥ずかしいんですけど……. . . . . だけど見逃すわけにはいきません。アストレア・ファミリアとして……. . . . . というわけで出てきてください。僕を狙っているのはわかっているんです闇派閥の皆さん」

ベルの言葉を聞いてオラリオの街の中に武器を構えながら現れた人物達、かつてアリーゼ達に倒された闇派閥の残党である。

「つち!ばれてしまっていたのかよ!」

「最初に言っておきます!今のうちに降参をした方がいいですよ……. . . . .」

スキル魔王のカリスマを発動させて威圧を与えた。全員が震えあがるが……. . . . . 武器を構えているのを見てベルは仕方がないとジオウライドウオッチをジクウドライバーにセットをした後ほかのライドウオッチよりもでかいのを出す。

【グランドジオウ!】

グランドジオウライドウオッチをセットをして360度回転させる。

「変身!!」

【グランドタイム!クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド!響鬼・カブト・電王!キバ・ディケイド!ダブル!オーズ!フォーゼ!ウィザード!ガイム!ドラーイーブ!ゴースト!エグゼイド!ビル・ド!祝え!カメンライダー!!グ・ラン・ド!ジオウ!】

20人のライダークレストがジオウの体に張られて行き仮面ライダーグランドジオウが降臨をした。

「いーわーえーいーいー!!全ての力が集結をした王の力!全てのライダーの力を集いし大なる王!仮面ライダーグランドジオウ!最強魔王の誕生である!!」

「ふい、フィルヴィスさん……. . . . .」

突然としてフィルヴィスが現れて祝いの言葉を言ったので苦笑いしながらグランドジオウになったベルは歩きだした。

闇派閥達はグラウンドジオウに攻撃をしてきたが彼は右腰部の仮面ライダーカブトを押す。

【カブト】

カブトのマークからカブトクナイガンアックスモードが現れて襲い掛かる闇派閥の武器を受け止めてはじかせる。

後ろから襲い掛かろうとしてきたがベルはボタンを押す。

【アギト】 【鎧武】

2002年と2013年と書かれた扉から仮面ライダーアギトと仮面ライダーガイムが現れてストームフォーム、イチゴアームズの二人が武器を受け止めて相手をする。

前方から魔法を唱えようとしている相手に対してボタンを押す。

【クウガ】

ライジングペガサスボウガンが現れてそれを取ると引いて連続した弾が放たれて魔法を唱えようとしていた魔導士たちの武器に当たり魔法を阻止をする。フィルヴィスはその間に避難をして様子を見ていた。

「おのれ!!」

「言いましたよ?降参をするなら今のうちだと……………」

【エグゼイド】

2016年の扉からエグゼイドが現れてスポーツアクションゲーマーが現れて右肩部のホイールを外して投げて魔導士たちの武器に当ててダメージを与えた。

「おのれ!!」

「……………」

グラウンドジオウは歩きながら襲い掛かる魔導士たちに対して拳で撃退をしたり蹴りで吹き飛ばしたりして殺さないようにしている。

【ドライブ】 【ファイズ】

2014年と2003年の扉が開いてドライブタイプテクニク、ファイズがドア銃とフォンプラスターを構えて攻撃をしてグラウンドジオウは進んでいく。

「これで終わりにしますか?それともまだ戦いますか?」





「悪いがお前で八つ当たりさせてもらうぞオーマジオウ。」  
『いやなんで『福音』ぐあああああああああああああああああ  
あ!!』

アルフィアに八つ当たりをされてしまうオーマジオウであった。

## オツタル対ジオウ

「はああああああああああ!!」

15階層にベルは仮面ライダージオウアギトアーマーに変身をして剛腕をふるい魔物たちを倒していた。だが周りには誰もおらず一人でダンジョンに来ていた。

流石に10歳になったのにいつまでも禁止をするわけにはいかなのでアリーゼは仕方がなく許可を出して今に至る。ベルはミノタウルスを倒した後に休憩をするために安全ポイントを見つけて休んでいた。

「ふい……流石に多いな。」

『まあそれがダンジョンだからな……』

「お義母さんたちもダンジョンに入ってレベルとか上げてきたんでしょ?」

『まあな……』

ベルは歩きながらモンスターが襲い掛かってきたときは撃破をしていき降りていきゴライアスを倒そうとしたが……その前に大きな人物がゴライアスを倒したのか立っていた。

倒した人物は振り返り大剣を構えていた。

「オツタルさん……」

「ベル・クラネル……俺と戦ってもらおうか?」

「あなたと戦う理由がありませんか? フレイヤ様の命令ですか?」

「これは俺の独断、貴様とは一度戦ってみたかった。」

「あなたの相手をするならこっちがいいですね。」

【グラントジオウ!】

ジクウドライバーにセットをして変身をする。

【グ・ラ・ン・ド! ジオウ!】

グラントジオウに変身をしてオツタルは大剣をベルはボタンを押す。

【ディケイド】

胸部からライドブッカーが現れてそれをキャッチをして構える。

お互いにダッシュをしてベルは振り下ろす。オツタルはそれを大剣で受け止めると力でベルを吹き飛ばす。

「ぐううううううううう!! (なんて力をしている!?!これが……レベル7の力……)」

「どうした? お前の力はそんなものか?」

「まだです!!」

【ガイム!】 【電王!】

デンガツシャーと大橙丸を構えて突撃をしてオツタルに二刀流で振り下ろす。彼は太剣で受け止めてからはじかせて上空へ飛ばした。ベルはそのままボタンを押して武器を発生させる。

【キバー!】 【ウイザード!】

バツシャーマグナムとウイザーソードガンを出して発砲をして攻撃をする。

「ぬ!!」

オツタルはそれを太剣でベルが放った弾丸をガードをして着地をした。ベルはボタンを押して武器を変える。

【フォーゼ】

ビリーザロッドを出して攻撃をする。太剣とビリーザロッドが激突をして電撃が放たれる。

「ぐうううううう!!?」

「はああああああああああ!!」

【ビルド!】 【エグゼイド!】

ドリルクラッシュシャーとガシャコンブレイカーが現れてビリーザロッドを捨てて二つの武器を使いオツタルに攻撃をする。

「流石「仮面魔王兎」と呼ばれるだけある。そしてあの方がお前を気にしているわけがわかる。俺もお前を気にしている。」

「そうだったんですか!!」

「ああそうだ! お前と戦うときに俺にとってフレイヤ様の期待に応える時と一緒にだからな!! はああああああああああ!!」

「うわああああああ!!」

オツタルが振り下ろした大剣がグランドジオウのボディを切りつけてダメージを与えて吹き飛ばした。

オーマジオウはその中で様子を見ながらオツタルを見ていた。

『あの男、フレイヤのところの奴だったな？なるほど……。グランドジオウ形態のベルを圧倒をする力。やはりレベル7は伊達じゃないってことか……面白い男だ。』

【アギトー】【龍騎ー】

フレイムセイバーとドラグシールドを出してベルは突撃をしてオツタルが振り下ろした大剣をドラグシールドでガードをしてフレイムセイバーで攻撃をするがオツタルは背中に装備をしていたもう一つの剣を出してガードをする。

「!!」

「いぞベル・クラネル……もつと戦おうじゃないか!!」

「なら!!」

【サイキョーギレードー】【ジカンギレードー】

二つの武器を合体させてサイキョージカンギレードに変えて彼は一気に決めるために構える。オツタル自身も同じようにけりをつけるために力を込める。

サイキョーギレードのジオウサイキョー状態にしたプレートを外してジカンギレードの方へとセットをする。

【サイキョーー・フィンニッシュタイムー】

「はああああああああああああああああ!!」

【キングギリギリスラッシュユ!!】

「でああああああああああああ!!」

キングギリギリスラッシュユとオツタルの二刀流が激突をする。

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

オツタルは本気になりキングギリギリスラッシュユをはじめさせてグランドジオウのボディに二刀流の剣を振り下ろして吹き飛ばした。

「がは!!」

壁に叩きつけられてグランドジオウの変身が解除された。オツタルの方も使っていた武器に罅が入っていたので彼のところへと行き

エクセリーを掛けて傷を治した。

「す、すみませんオツタルさん。」

「気にするなベル・クラネル。これは俺がやったことだからな……お前と戦い得た経験と思っただけだ。」

「武器の方も」

「お前が気にすることはない、これもだいぶ使っていたからなそろそろ変え時だと思っただけだ。」

「そうでしたか。」

お互いに話をした後オツタルは立ちあがりダンジョンの外へと行き、ベルはもう少しだけダンジョンでモンスターと戦いながら上へと上がっていく。

「二うわああああああああああああああ!!」

「声が聞こえる。変身!!」

【「デイ・ケ・イドー!」

ジオウデイケイドアーマーへと変身をしてライドヘイセイバーを出して襲われている冒険者たちを助けるためにモンスターを倒す。

「あ、あんたは!!」

「早く逃げろ!!」

「逃げろおおおおおおおお!!」

ジオウが現れてモンスターたちは警戒をしている。ベルは一気に倒す為にライドウオッチをする。

【「ファイナルフォームターイム! ファ・ファ・ファ・ファイズ!」

ファイズアクセルフォームの力が入った姿へと変わりライドヘイセイバーを出して振り下ろしてモンスターを倒していく。

「これで決める!」

【「ファファファファイズ! ファイナルアタックタイムブ레이크!」

「は!!」

飛びあがりアクセルグリムズンスマッシュを発動させてモンスターたちを次々に命中させて撃破していき着地をする。

辺りに魔物がいなくなったのを確認をして彼は誰かが見ているのかと思いいているが気のせいかと思いい変身を解除をする。

『まあベルはお人よしだな相変わらず。おそろくお礼などしないと思うが……』

「だとしても見過ごすことはできませんよ。」

『そうだな。』

ベルはそう言いながら上の方へと上がっていきジカンギレードを出してモンスターを倒しながら上がっていく。

ダンジョンから出てホームへと戻ってきたベル、丁度輝夜が帰ってきていたのか彼を見る。

「ベル。」

「ただいま戻りました輝夜「お姉ちゃんだろ？」あ、はい」

「……何があった？」

「え？」

「何か動きがぎこちないからな……エリクサーを使っているもモンスターでやられるほどお前もヤワじゃないのはわかる。話せ。」

「は、はい」

ベルはダンジョンで17階層でオツタルと交戦をしたこと、そのあとに襲われていた冒険者を助けて戻ってきたことなどを全て話した。輝夜は頭を抑えながら「あのデカブツが」とブツブツ言いながらアストレアのところへ行くように言いベルはいく。

アストレアの部屋に入り彼女はベルのステータスを更新をしていた。

「……相変わらずね？」

ベル・クラネル

レベル3

力：ERROR

耐久：ERROR

器用：ERROR

敏捷：ERROR

魔力：ERROR

幸運：ERROR

魔法

【サタナス・ヴェーリオン】

詠唱式「福音」

【フレイムアロー】

無詠唱で放つ炎の矢

〈スキル〉

【ジクウドライバー】 ジオウ ジオウⅡ グランドジオウ

身をする

??????  
に変

【家族一途】 自分の関係ある人を思うほど強くなる

【魔王の威圧】 相手に対して威圧を与える。レベルなど関係なしに可能

「はあ……相変わらずのステータスねベル？」

「あははは……」

「まさたフレイヤのところのオツタルがあなたと戦ったなんてね。まあフレイムアローもフレイヤがあなたに魔導書を渡したのが原因だけどね？」

一年前ベルが9歳の時にフレイヤがもらった魔導書を読んでしま  
いフアイヤーアローという魔法を手に入れたベルなのであった。

「なんだかいけるような気がしますよアストレア様。」

「あのね……」

アストレアは苦笑いをしながらベルの言葉を聞いて頭を抑えてい  
た。ベル自身も悪気がないので怒れないのであった。



襲われる兎!?

ステータス更新を終えたベル、オツタルとの戦いで疲れた体を休めるためにお風呂場の方へと移動をして服を脱いで彼はお風呂場に入り体を洗ってからゆつくりと足から入り体を伸ばした。

「はあああああ………」

『お疲れだなベル。やはりレベル7の相手に奮闘をしたのが成果が出ていたな?』

「そ、そうですね。あれがレベル7……の力ですか………」

「あ……ベルだ………」

「ウエ!?!」

お風呂場の扉が開いたのでベルは方角を見るとマリユ、ネーゼ、イスヤ達が来たのでベルは上がろうとしたが彼女達は上がらせてくれなかった。

『これが……青春って奴か……懐かしいな……』

「团长達ずるいのよね………」

「そうそう、私たちだってベルに甘えたいのに自分たちばかり!」

「だな、というわけでベル……逃げようとするなよ?」

「ウソダドンドコドン」

ネーゼにつかまれた後にマリユ達はベルに抱き付いたりしていたが彼女達の成長をしているってか胸がベルに当たっており彼自身は顔を真っ赤にしていた。アリーゼ達もそうだが皆恥ずかしくないのだろうか……自分が異性として見られていないのかなと思っていたがオーマジオウは彼女達の様子を見ながらベルのことを異性としてみていると思いつつ黙っていることにした。

彼自身ベルの中に過ごすようになってから面白いことばかりが起こっているので玉座に座りながら見ているとまた扉が開いてフィルヴィスが入ってきた。

「ベルさま!?!なんてうらやまげファンゲファン破廉恥なことを!!」

（(今この子完全に本音が出たわよ。)( )）

ベルは姉たちに抱き付かれながらいるのでフィルヴィスが入って

きたことに気づいていない状態だ。やがて彼女も体を清めてからベルをはぎ取り自分に抱きよせた。

「うぐうううううう」

フィルヴィスの成長をしている胸が彼を包んでおり彼自身は苦しなくなってきたのでフィルヴィスを叩いていた。

「ベルさまどうしました?」

「うーうーうーうー!!」

「ねえもしかしてベル、息ができないんじゃない?」

「「あ……………」」

フィルヴィスは急いでベルを離して彼はぐだーと後ろに倒れてしまおうがお風呂のお湯でおぼれかけてしまう。

「「「申し訳ございませんでした。」」」

四人はベルが起きたらすぐに土下座をしたのでベル自身は困惑をしていた。確か自分は姉たちに抱き付かれたりしたらフィルヴィスの成長をしている胸で窒息をしかけたのを思いだした。

(それでベル、胸で窒息をした感想は?)

(最高でした!)

ベルはオーマジオウの問いにそう答えてから大丈夫だよといい五人でお風呂を満喫をして上がるのであった。

その夜ベルは眠れないのかアストレア・ファミリアのホームの外で夜空を見ていた。腰部にジクウドライバーを装着をした状態でいたので変身をするかと思ったがただ装着をしたままいるのである。

「……………」こうしてジクウドライバーを装着をしていると最初に変身をしたことを思い出します。」

『三年前のダンジョンでだな?そこからジオウII、そしてグランドジオウとお前は覚醒をして強くなっているのは間違いないぞベル。私が言うのだからまちがいないぞ。』

「そうですね。」

この綺麗な夜空を見ながらアルフィアはベルの中から見ていた。彼が守ろうとしている現在のオラリヲ、英雄と呼ばれるのが自分の甥だとは思わなかったからだ。

『お前は自分の甥っ子が英雄の器だと思わなかっただろうか？だが私はベルなら英雄の器になれると思ったさ。』

「……………」

『私のような最低最悪の魔王にならないように私はベルを導いていく。かつてできなかったことをベルはすると思っているからな。』

オーマジオウは玉座の方へと座り新たなライドウオツチを出していたが今は光らしてしまっておくことにした。いつかは使うための新たなライドウオツチを……………

次の日、ベルはジオウに変身をしているが今回は一人じゃない。

「ほえーすごいねベル君。」

「ベルすごいね。」

アーデイ、アイズ、ティオナの四人でパーティーを組んでいた。以前にアーデイに誘われていたところにアイズとティオナも参戦をして現在17階層まで降りている。

現在ベルはクウガアーマーを纏い現れたモンスターを蹴りと拳で倒していく。

「本当にベル強いね！」

「ベル君は強いよティオナ。」

「うん……………ベル、ガレスとかと模擬戦をすることあるよね？」  
「勘弁してください、いくら僕でもレベル6の人と戦うのはつらいんですけど……………」

ベルはフィンやガレスと模擬戦をしたことがある。その時はジオウIIとかに変身をして模擬戦をするが先読みをしても逆に読まれたりして苦戦をしたことが多い、戦いの差つてのもあるためベルは苦笑いしながら先に進んでいくがティオナは首をかしげる。

「あれ？ゴライオスがいないよ？」

「変だね。誰かが倒したのかな？」

(オツタルさんが倒したなんて言えないな……………)

ベルは誰が倒したのか知っているため無言でいることにした。やがてリヴィラの街に到着をしてベルは変身を解除をしてリヴィラの街を探索をしていた。ほかのメンバーの姿が見えないが……………

彼は歩きながら街を探索をしていた。

(リヴィラの街の商品の値段の高さが色々高いからな……いやー高すぎるだろ……. . . . .) と思いながら僕は歩くしかないという。ベルは苦笑いしながら街を歩いていき、ほかのメンバー達も合流をしてどうするか話をする。

「さてどうする?」

「一応、まだ降りる?」

「そうですね。僕自身もまだ戦い足りないといいますが……. . . . .」

「そうだねーなら降りようか?」

「おー……. . . . .」

リヴィラの街を出て四人は降りていく、ベルはジオウに変身をしてアーマーを装着をする。

【アーマータイム! ウェイクアップ! キ・バ!】

キバアーマーに変身をして現れたバクベアーに蹴りを入れてアイズはデスペラードをティオナはウルガを振りまわして撃破していく。

「流石やるね!」

「さーて行きますよ! アーデイお姉ちゃん!!」

「うん! ベル君!!」

2人がジカンザックスと剣でバグベアーを切り裂いて先に進んでいく。20階層まで降りてベルは止まる。

「ベル?」

「どうしたの?」

「何かがあります。 . . . . . なんだろ . . . . . 人? けど何かが違う感じ . . . . .」

「いったいどうしたの?」

ベルはキバアーマーを解除をしてグランドジオウライドウオツチを出す。

「金色?」

【グランドジオウ!】

そのままジクウドライバーにセットをするとライダー達が現れたので三人は驚いている。

「うわ!!」

「何!？」

「ええええええええええええええええええ!!」

【グランドタイム!グ・ラ・ン・ド!ジオーウー!】

「ええええええええええええええええええ!!」

「くつついた?」

グランドジオウの姿を始めて見た三人は驚いている中、ベルは辺りを見ていた。ライダーのボタンを押してライダーが出てきた。

【ゴースト】

ニユートン魂のゴーストが現れて右手をつきだして引つ張ると黒い服を着た人物が引つ張られた。

「どあ!!」

「え?誰?」

「くつそ!!まさか仮面魔王兔がいるとは!!」

「つてか敵でいいの?」

「ええ、でもなんでしょう……三年前にあつた赤い髪をした女性と同じ感じがします。」

「そうかレヴィスが言っていたのは貴様のことか!!まあいい!!貴様を倒せば同じこと!!」

相手は地面を叩くと植物のようなモンスターが現れる。

「モンスターを生み出した!？」

「……ベル?」

「皆さんは僕が……いや俺が守る!!」

ベルは走りだして植物モンスターはベルに襲い掛かる。ベルはライダーのボタンを押す。

【アギト!】

【オーズ!】

2002年と2010年の扉が開いてライダーキックとタトバキックを放つ二人のライダーが植物モンスターに命中をして撃破した。

「ほえええ……」

「扉から何かが現れて撃破した？」

「あれがベル君の力……」

【ダブル！】

メタルシャフトが現れて彼は持つと炎が纏われてそれを振りまわして植物のモンスターを次々に燃やしていく。

「ば、馬鹿な!!」

【フォーゼー！】

【フィニッシュタイム！グランドジオウ！オールツエンティタイムブ  
レーク!!】

フォーゼの幻影が合体をしてライダーロケットドリルキックが発動されて植物のモンスターを次々に撃破していき着地をする。

「ば、馬鹿な!!あれだけの植物のモンスターをあつという間に撃破した  
ただと!!」

「さあ後はお前だけだ。」

「お、おのれ……」

ベルはサイキョーギレードを構えて突き付けていた。これ以上相手は手札がないと思えば彼は構えていると何かの衝撃波がベルに当たり吹き飛ばされる。

「ベル!!」

「一体何が?」

『ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

「なに……あれ……」

「ハーピーー!?だけど何か変……」

アーディはハーピーーのようなものは苦しみながら暴れている姿を見てベルは相手を見ている。

「モンスターを改造をしたか……」

「!!」

「そのとおりだ!!ひっひっひっひっひっひさあやれ!!」

『ぎゃおおおおおおおお!!』

ハーピーーの口から衝撃波が放たれてアーディ達は吹き飛ばされてしまう。

「あう！」

「うぐ！」

「……………」

ベルは立ちあがりハーピーを見ていると涙を流しているのを見た。ベルは無言でライダーのボタンを押す。

【ゴースト！】

ガンガンセイバーアローモードが現れてベルは緑の矢が放たれる。ハーピーに当たり、接近をしてボタンを押す。

【カブト！】

パーフェクトゼクターが現れてマキシマムハイパータイフーンが発動状態で振り下ろす。ハーピーが真つ二つに切り裂かれて着地をする。その間に相手は逃げられてしまっておりベルは魔石を拾いあげる。

「……………ベル？」

「アイズさん、モンスターにも涙を流すという感情はあるのでしょうか？」

「え？」

「モンスターが涙を？」

「あのハーピー、まるで自分を殺してくれと涙を流している感じがしたんです。僕は間違っているのでしょうか？」

「……………そんなことはないと思うよベル君。君はそのハーピーの魂を救ったんだよ。」

「アーディお姉ちゃん……………」

「あー私は難しいことはわからないけど、ベルが切ったのは正しいと思っっているかな？」

「テイオナさん。」

「ベルは優しい……………私はそこに……………」

「アイズさん？」

「何でもない……………」

謎の相手には逃げられてしまい、ベルたちは一度上がることにした。

## ベルの罪悪感

20階層で謎の黒い服を着た人物が生み出した植物のモンスターを次々に倒したベルたち、そこに改造をされたハーピーの襲撃を受けたがカブトのパーフェクトゼクターを使い真つ二つにして倒した。その後解散をしたベルはアストレア・ファミリアのホームへと帰るとアリーゼが迎える。

「お帰りベルーラー」

「……………」

「何かあったの？」

「はい、皆さんの前で報告をします。」

「わかったわ。じゃあ一緒に入りましょ？」

「ウエ!？」

アリーゼに連れられて一緒にお風呂に入った後にアストレア・ファミリアの報告会が始まった。

「それじゃあベル、何かあったのか話してくれるわね？」

「はい、アーデイお姉ちゃん、ティオナさん、アイズさんと共にダンジョンに行きました。その20階層で三年前に現れた赤い髪をした女性と同じような人物と遭遇をしました。」

「!!」

「そして相手はハーピーを改造をしたのを僕たちに向けて僕は倒しました。ですが……………」

「ですが？」

「泣いていました。まるで僕に倒してほしいと……………僕は正しかったのかなと今でも思ってしまうほどに罪悪感が襲ってきました。」

ベルは両手を見ながら震えているのを見て輝夜はそつと抱きしめる。

「輝夜お姉ちゃん？」

「……………モンスターが涙を流す……………か、お前はその望みを叶えてあげたそうだろ？」

「はい……………」





「そうだな。」

輝夜はベルを抱えて彼の部屋に運んで行く。

ベル side

「あ、あれ?」

僕は目を覚ますと自分の部屋にいたので声が聞こえてきた。

『目を覚ましたみたいだなベル。』

「オーマジオウさん?僕……」

『あの後お前は輝夜に慰めてもらったが寝てしまつて輝夜に部屋まで運んでもらつたんだ。』

そうだ、泣いていた僕を輝夜お姉ちゃんに……うう恥ずかしいな。だけどだいぶ楽になつたあの時の罪悪感がなくなつたわけじゃない。

けれどモンスターによつて家族を失つた人たちのことを考えると……僕はどうしたらいいのだろうか?いけないいけない僕はアストレア・ファミリアのメンバーだ。

「はあ……」

僕はため息をつきながら起き上がりリビングの方へと行き皆さんに挨拶をする。

「おはようございます。」

「おはようございますベル。」

「あれ?皆さんは?」

「ベル、随分とのんびり寝ていましたね。ほかのみんなはパトロールにいたりしてますよ。私はベルが起きるまで待つていました。交代のメンバーが帰ってきたら私と一緒にパトロールに行きますよ。」

「はい。」

僕は遅めの朝ごはんを食べた後に交代メンバーと交代をしてパトロールへと向かうのであつた。

## 豊穰の女主人へ

「ふあああああ……」

「ベル、欠伸をするのはいいですが……集中はしてくださいね？」

「わかっていますよりユーさん……眠い……」

ベルは眠い目をこすりながらオラリオをリユーと共にパトロールをしている。昨日のこともあり彼は疲れていたがアストレア・ファミリアとして働く自分が休むわけにはいかないので待っていてくれたリユーと共に辺りを見ながらオラリオを見ていた。

「……異常はありませんね。」

「ですね。」

2人は辺りを見ながらパトロールをしているとお腹が鳴った音が聞こえてきたのでリユーはベルの方を見ると彼は顔を赤くしており時間などを確認をして声をかける。

「仕方がありませんね、豊穰の女主人で昼ご飯にしましょう。」

「す、すみません……」

「いいですよ。男の子ですからね（笑）」

リユーは笑いながら二人は手をつないで豊穰の女主人の方へと行く。

「いらっしやいニヤー」

「アーニヤニ名お願いします。」

「二名ご案内ニヤー！」

2人は案内されて座ると薄純色の髪をした女の人がやってくる。

「あらリユーとベル君いらっしやい。」

「シルこんにちは。」

「……」

「ベル？」

「ベル君？」

「うー……んシルお姉ちゃんこんにちは。」



リユーは殴られようとした人物に声をかけようとしたがいつの間にかいなくなっていたので二人は辺りを見ていた。

「いませんね。」

「いないですね。どこに行ったのでしょうか？しかもあの冒険者たち……どこかで……」

リユーは考えていたがいなくなってしまったのは仕方がないとベルもジオウライドウオツチを外して変身を解除をする。

「あの子はいつたい……」

「わかりません。いずれにしても冒険者が人を殴ること事態いけないことです。これはアリーゼ達にも報告をした方がいいですね。」

「……」

「ベルどうしたのですか？」

「あ、いや何でもありませんよ。」

「そうですか……」

パトロールを終えてベルたち、彼は違和感を感じながらもホームの方へと戻り姉たちに今日あったことを報告をした。

「最近、そういうのが多くなってきたな。」

「ええこの間もそうでしたしね。」

「アリーゼ。」

「……何事もなければいいけれど、ベル大丈夫？」

「うにゅ」

（（可愛い））

ベルの可愛い姿を見て姉たちはキューンとハートをつかまれた。オーマジオウは両手を組みながら先ほどの襲われていた少女のことを思っていた。

『あの少女、一体何をしたんだ？それに冒険者があんなに集まって殴るほど……か、ベル……何かに巻き込まれなきやいやが……』

## ベルと椿

ベル side

「そういえば僕のこの防御鎧、そろそろ限界だったな。」

僕は自分が着ている鎧が限界を迎えていたのをすっかり忘れていた。なにせジオウに変身をしているから防御鎧を着ているけど模擬戦などで戦っているためボロボロになることが多い。

とりあえず僕は鎧を新調をするためにヘファアイトス・ファミリアのところへと歩いていく、何気にあそこに行くのも久しぶりだな………と思いつつ到着をして僕は呼ぼうとしたときに抱き付かれた。

「ベーる坊?」

「椿………さん。」

ヘファアイトス・ファミリア団長椿・コルブランドさん、僕の鎧を作った人でもありなぜか僕を気にいつている人だ。僕は苦笑いしながら彼女に抱きしめられておりいつもこーなるからなーいつものことだけど………

「それでベル坊、鎧を新調しに来たのか?」

「はい、そうです。」

「ふむふむなーるほど確かにベル坊の身長が大きくなって着ているからこれは新調というよりは新しいのにした方がいいの………」

僕成長をしていたんだ………ホツとしていたけど新しい鎧ができるまでダンジョンに入れないってこと?椿さーん!!

「大丈夫だ、ほらそこに作ったのがあるからそこから選んでくれそこからベル坊に合うように調整をする。」

「わかりました。」

僕は椿さんが作ったであろう鎧を見ていた。うわー絶対に高そうなものばかりだよ………何か僕に合いそうなのあるのかな?

「ん?」

「オーマジオウさんどうしたのですか?」

『ベル、あれはどうだ?』

オーマジオウさんが見たのは軽鎧で僕の動きが邪魔にならないような鎧だった。僕はそれを選んで椿さんのところへと持っていく。「ベル坊それを選んだか？確かにベル坊のことを考えたらあまり重いのはおすすめしないからの。わかったこれをお前さん用に調整をしよう。」

「お願いしまーす。」

僕は椿さんが鎧の調整を行っている間退屈をするため椅子に座って待機をしていた。椿さんは僕が着るための鎧を打っており鍛冶屋さんの仕事は大変だなーと思いつつライドウオッチを見ていた。

僕はジオウライドウオッチⅡを見ていた。オーマジオウさん曰く『それは私が昔、影と光……それが一つになることでこのジオウライドウオッチⅡが誕生をした。』

光と影か……オーマジオウさんはそうして魔王としての道を歩んできたんだ。それから数分後僕の鎧が新調されて僕は装着をして動きなどが制限されていないので動きやすかった。

「前よりもいいですね。」

「やはりベル坊も成長をするってことかふふふ楽しみだわい。」

椿さんがこちらをじーっと見ながら何か怖いんですけど……あれ？僕襲われるのでしょうか？あばばばばばばばば……

ベルside終了

ベルは椿のところを後にして今日はアミッドのところへと行く日だったのでディアンケヒト・ファミリアのホームの方へと歩いていく。

そして目的の場所へ着くのがばつと抱きしめられたので彼自身は苦しんでいる。

「はあ……くんかくんか、あなたを抱きしめると落ち着きますね……」

アミッド・テアサナレ現在16歳の少女だが成長をしているのか胸が大きくなっており彼自身はジタバタしていた。

「うぐうぐうぐうぐうぐうぐ!!」

「やはりこの女性にも負けない髪の柔らかさ……さらにいい匂

いがしますね。本当……どうして私はアリーゼ達よりも早くあなたに会えなかったのでしょうか……ディアンケヒト様を恨みます。」

すごく関係ないのにディスられるディアンケヒトであった。現在ベルは解放されて息を整えていたがアミツドの膝の上は固定されておりベルをモフモフしながら休憩をしていた。

すると扉が開いて団員が血相を変えて入ってきた。

「団長重傷者です!!」

「わかりました。今の私に不可能はありません!!ベル……少しの間抜けますがそこについてくださいね?」

「うにゅ」

アミツドはベルのモフモフタイムをしたのか輝いておりいつもよりも魔法の効力が大きいとだけ書いておく。さてそんな待っているベルは?

「……………( ⊆ ⊆ ) スヤア」

あまりの退屈さに眠気が来てしまいアミツドが座っている椅子で眠りこんでしまう。そんな様子をオーマジオウはやれやれと思いがら見ていたがアルフィアが可愛いとまたブツブツ言っているのを見てため息が今日も出るのであった。





ルはジカンギレードで受け止めたが蹴りが入りベルを吹き飛ばす。ベルは攻撃を受けながらもジユウモードにライドウオツチをセツトをして放つ。

【フィニッシュタイム！響鬼！スレスレシユーツェイニング！】

「は!!」

トリガーを引き小さい炎の弾がディケイドに向かって放たれるがカードをネオディケイドドライバーに装填させる。

【アタックライド バリアー！】

前方にバリアーが張られて放たれた弾がガードされる。ディケイドはライドブッカーからカードを出してネオディケイドドライバーのバックルを開かせてカードを装填させる。

「見せてやるよディケイドの力をな変身！」

【カメンライド クウガ！】

ディケイドの姿がベルト以外が仮面ライダークウガに変わったのを見てベルは驚いている。

「姿が変わった!?!」

『あれがディケイドのカメンライドだ。ディケイドはカードを使い仮面ライダーの姿に変身をして戦うライダーだ。』

「ふん!!」

接近をして拳をベルのボディに叩きつける。ベルはこのままではいけないとライドウオツチを出す。

【クウガ！】

そのまま左側にセツトをしてベルトをまわす。

【ライダータイム！カメンライダージオウ！アーマータイム！クウガ！】

ジオウクウガアーマーへと変わりディケイドクウガが放つ拳を拳で受け止めた後に蹴りをボディにいれる。そのまま接近をして連続した拳をディケイドクウガへと放つもあちらは冷静に拳をはじめかされた後に両手をつかんでボディに両足で蹴りを入れて吹き飛ばす。

「うわー！」

「ふ………変身！」

【カメンライド 電王！】

デイクライド電王へと変わりデンガツシャーが装備されてクウガアーマーのボディを切りつけた。

「どうした？お前の力はそんなものか？」

「だったら!!」

【デイ・デイ・デイ・デイクライド！】

クウガライドウォッチを外してデイクライドライドウォッチをセットをしてベルトをまわす。

【ライダータイム！カメンライダージオウ！アーマータイム！カメンライド ワオ！デイクライド！デイクライド！デイクライド！】

「ほーう俺の力か・・・面白い」

【ファイナルフォームタータイム！デデデンオウ！】

ライナーフォームと書かれた姿になり右手にライドヘイセイバー、左手にデンカメンソードを持ちデイクライド電王に切りかかる。デンガツシャーで受け止めたが右手に持っているライドヘイセイバーがボディを切りつけてデイクライド電王に蹴りを入れる。

「やるな。なるほど・・・オーマジオウが入っているだけあるな・・・」

デイクライドの姿に戻りそのままベルは接近をして切りかかるが姿が消えた。

「消えた!?!」

【アタックライド イリユージュオン！】

「は！」

「であー！」

「ふー！」

「うわ！ぐあー！どあああああああ!!」

分身をしたデイクライドのソードモードのライドブツカーの斬撃、ガンモードの弾丸、そして蹴りが命中をしてデイクライドアーマー電王フォームを吹き飛ばした。

「うぐ・・・」

「どうした？お前の力はそんなものか？」

「まだだ!!」

【グランドジオウ!】

「ほーうその力も使えるのか……. . . . . だったら!」

【ケータツチ21! ダブル オーズ フォーゼ ウィザード ガイム  
ドライブ ゴースト エグゼイド ビルド ジオウゼロワン!  
ファイナルカメンライド! デイケイドコンプリート21!】

【グラントターイム! グ・ラ・ン・ド! ジオーウ!】

デイケイドはコンプリートフォーム21へとジオウはグラントジオウへと変わる。グラントジオウのベルは走りだして拳を叩きつけようとしたがデイケイドは拳を受け止めるとボタンを押す。

【オーズ! カメンライドプロティラ!】

するとデイケイドの隣にオーズが現れてメダガブリューでグラントジオウを切りつける。

「ぐあー!」

「ふん!」

【デンオウ! カメンライド ライナー!】

電王のカードが光ってライナーフォームが現れてグラントジオウに襲い掛かる。グラントジオウはボタンを押す。

【キバー!】

エンペラーフォームがバツシャーマグナムを持ちライナーフォームに攻撃をしてグラントジオウはボタンを押す。

【ファイズー!】

ファイズブラスターが現れてそれを装備をしてデイケイドに攻撃をしようとしたがその前にゼロワンのカードが光ってゼロツウが現れてグラントジオウが振り下ろしたファイズブラスターを受け止める。

「!!」

「は!!」

デイケイドがエネルギーを込めた拳を叩きつけてグラントジオウは吹き飛ばされた。デイケイドはライドブツカーからカードを出して右腰に移動したライドブツカーにカードを装填する。

「ファイナルアタックライド デイデイデイケイド！」  
「来る!!」

「フィニッシュタイム! グランドジオウ! オールツエンティタイムブ  
レーク!」

二人は飛びあがりライダーのエネルギーが集結をした蹴りが放た  
れてお互いに激突をした。

「ぐううううう……」

「はああああああああああ!!」

「だったら!! ファイアーアロー!!」

「何?」

ベルは左手からファイアーアローを放ちデイケイドに放ち押して  
いく。そしてお互いの力がぶつかり吹き飛ばされる。

「どあー!」

「がはー!」

お互いに変身が解除されてベルはボロボロの状態になっていた。  
士の方はボロボロだが彼は立ちあがってみていた。

「なるほど、だいたいわかった。あれだけの力を出せるほどか……」

ソウゴよりはまだまだだが……」

「ぐうう……」

『門矢 士、何がしたかった。』

「何こいつが本当にお前のようになるのか試してみた。結果はソウゴ  
と同じとだけ答えておく。」

『どこへ?』

「俺は通りすがりの仮面ライダーだ、どうやらこの世界でやること  
があるみたいだからな。当面はこの世界で滞在をするさ。そういえば  
お前の名前を聞いていなかったな。」

「ベ……ベル・クラネル。」

「ベル・クラネル、お前が持つ力は……世界をも破壊する可能  
性もある。それでもお前はその力を人のために使うか?」

「もちろんです。それが……僕が仮面ライダーとして戦う理由  
です!!」

ベルはボロボロの体のまま立ちあがったのを見て土はほーうとい  
い興味をもったのか笑いオーラを出す。

「お前のその目を見たら大丈夫だろうな。また会おうベル・クラネ  
ル。」

「門矢 土さん……」

ベルはボロボロの体のままホームの方へと帰り姉たちが何があつ  
たのかと叫ぶのであった。

## ベルの新たなスキル

デイケイド事門矢 士と戦い引き分けに追い込んだベル、そのままボロボロの状態でホームの方へと歩いているがオーマジオウはその姿を見た姉たちが士を殺しかねないなーと思いつつ黙ってみていた。やがてベルはホームの扉を開けて声を出す。

「ただいま戻りました。」

「おかえ．．．．．ベル!?なんでボロボロになっているの!?!」

迎えたノインがボロボロになっているベルをみて大声を出したのを聞いてほかの眷族たちがぞろぞろとベルのところへとやってきた。

「ベルうううううう!!なんでボロボロなの!?!」

「えつと色々とありまして．．．．．」

「その色々が聞きたいんだけど!?!」

アリーゼはボロボロのベルを見ていった誰がうちのベルをここまで痛めつけたのかしらと心の中で炎を燃やしながら聞く。

「ねえベール?あなたをボロボロにさせた人物は何者かしらー?」

私が少しO★HA★NA★SIをしないと行けないわね?」

「えつと．．．．．その．．．．．」

「アイズちゃん?それともオツタルかしら?」

「えつとどちらも違います。」

「ならフィンさん?ガレスさん?」

「違います。仮面ライダーデイケイドです。」

「二仮面ライダーと戦った!?!」

ベルが言った言葉に全員が叫んだ。まさかボロボロにした犯人がベルと同じ仮面ライダーと交戦をして傷だらけにされたことだ。アリーゼは自分の武器を持ち仮面ライダーをボロボロにするために出ようとしたがベルがいう。

「多分今、オラリオにはいないと思いますよ。」

「ツチ」

アリーゼは舌打ちをして持っていた武器を外してボロボロのベルにとりあえずポーションを飲ませて傷が回復をしていく。

「だが仮面ライダーがお前に攻撃をしてくるとはな．．．．何者なんだ？」

「オーマジオウさん曰く仮面ライダーディケイドとっていました。」  
「仮面ライダーディケイド．．．．」

全員がベルを傷つけた犯人がディケイドと判明をしたので今度現れた時は一撃与えてやると決心をするのであった。傷が治ったベルはお風呂に入り体を休ませていた。

「ふう．．．．これが仮面ライダー同士の戦い．．．．」

『まあディケイド自体がおそらく手加減をしていたのだろう。奴が本気を出せば世界をも破壊をする力を持っているからな。本当に奴はお前を試す為に戦いを挑んだのであろうな。』

「世界を．．．．」

『それが奴が世界の破壊者と呼ばれる理由だ。』

オーマジオウとお風呂の中で話をした後彼はアストレアにステータス更新をしてもらおうと新たなスキルが発動をしていたので驚いている。

「．．．．なにこれ」

スキル

・ライダー召喚 仮面ライダーを召還をして共に戦う。

「ライダー召喚って仮面ライダーを呼びだして共に戦うってことではないのよね？」

『おそらくそうだろう。グランドジオウのライダー召還をベルの姿でできることだろう。まあグランドジオウは召喚以外にも武器を出したりできるからな。』

オーマジオウの説明にアストレアは頭を抑えながら書き写していきため息をついた。ベルは彼女からもらったステータスを見て驚いている。

「スキルなんですか？」

「ええそうよ。あなたの新たなスキルとしてそれが出ているのよ。」

「ライダー召還．．．．じゃあ早速やってみます。」

ベルは手を出して召還をしたいライダーを思い浮かべながら



構えると紋章が現れて仮面ライダークウガが現れた。

2人は驚いているがクウガはじーつとベルの方を見ていた。

「あ、すみません試したい為に呼びました。」

そのまま手を出すとクウガが光りだして消えた。呼びだしたライダーはベルの指示で動くみたいである。

『色々と指示を出したりしないダメみたいだな。ライダー召還つてのは。』

「共に戦ってくれるのは助かりますね。」

「そうみたいね。いきなり現れるとびっくりをするわ。」

三人で話をしながらベルは欠伸をしてアストレアと一緒に寝ましょうかといいいベルを抱き枕にして一緒にベットで眠るのであった。

## 新たなスキルを試す

次の日ベルは新しいスキルを試す為にダンジョンの方へとやってきた。一階層へと到着をしたベルは現れたゴブリンに対して新たなスキルを使おうとする。

「えい!!」

ベルは右手を前に出すと紋章が現れてその中から仮面ライダー龍騎が現れてゴブリンに攻撃をする。

『なるほど、私が使っているライダー召還がベルの状態でも使えるようになったってことか。』

「どういうことですか?」

『私はライドウォッチを使わなくても仮面ライダーを召還をすることができる。それがベルに出てしまったってことだ。おそらくディケイドとの戦いでその力を一部解放させてしまった影響だな。』

オーマジオウはベルのスキルに発生をしたライダー召還のことに説明をしながらベルは龍騎にお礼を言い光って消えた。

「消えた?」

『どうやら時間制限があるみたいだな。敵がいなくなれば消えるってことか。』

「なるほど……偵察とかもできそうですね?」

『確かに』

ベルはそう思いながら階層を降りていく。現れたゴブリンに対してジカンギレードを出して切り裂いていく。少し考えながらも後ろからモンスターが襲い掛かろうとしたが上空から仮面ライダーナイトが現れてウイングランサーを突き刺して撃破した。

「ありがとうございます!」

「……………」

ナイトはウイングランサーを構えながら消えてベルはそのまま歩いていきどんどん降りていく。段々と降りていくとベルはジオウに変身をしてジカンギレードをジウモードで変えて左手にジカンザックスを構えながらミノタウルス達を切っていく。

「ライダー召還！」

ライダー召還で仮面ライダーG3Xと仮面ライダーゾルダが現れてケルベロスランチャーとマグナバイザーを構えて二人は発砲をしてモンスターを倒していく。

「これ便利ですね……………」

『そうかもしれないな。』

「ん？」

ベルは何かの声が聞こえてきたので何事かと思い偵察をさせようと一人の仮面ライダーを召還をした。仮面ライダーベルデはクリアーベントで透明化となりベルは少し休むことにした。

「……………」

『どうしたベル？』

「ううんちよつとだけ考え事をしていただけなんです。」

『そうか、だがあまり一人で抱え込むなよ？』

「わかっていますよ。」

するとベルデが現れて彼は何かあったのだろうかと思ひ聞く。ベルデは光となり彼自身はベルデが見たものを映像が流れる。

「この先で……………冒険者がミノタウルスに襲われている!!」

ベルは立ちあがり走りだして冒険者がいる場所へと向かっていく。一方でミノタウルスに襲われている冒険者は咆哮を受けて動けなくなってしまう。

「このままじゃ!!」

【フィニッシュタイム！ジオウ！ギワギワシュート！】

「は!!」

放たれた弓型のエネルギーがミノタウルスに当たりベルは冒険者たちの前に立つ。彼は無言で立ちジオウIIライドウォッチを出して装着してジオウIIに変身をして構える。

「さあはやくー！」

「逃げろおおおおおおおおおおお!!」

冒険者達はそのまま入り口の方へと走っていきベルは改めてミノタウルスの方を向いて構える。

ジカンギレードとサイキョーギレードを構えてミノタウルスは突撃をしようとしたが氷漬けにされたのでベルは驚いている。

「大丈夫かベル？」

「リヴェリアさん？」

前の方を向くとロキ・ファミア副団長「リヴェリア・リヨス・アルヴ」がいた。そのそばにはアイズとティオナがいたのでベルは近づいていく。

「どうしたのですか？」

「ああ、アイズが少し地下に入りたいたいといつてな一人では危険と私とティオナと一緒に入って今帰ろうとしたときにミノタウルスと戦う君を見つけて魔法を使ったのさ。」

「そうでし「ベル!?!その姿もベルのなの!?!」はい!?!」

ティオナはジオウⅡを始めて見たので彼女はすぐに近づいてジオウⅡの姿をじーつと見ている。

「前はいっぱいベルの体に張りついていたので驚いたよ。」

「あの時はグランドジオウに変身をしましたからね。」

「……ベルはどうしてダンジョンに？」

「えっと新しいスキルを試す為に降りてきたんです。」

「『新しいスキル?』」

ジオウⅡのままベルは右手を出すとそこから現れたのは仮面ライダー電王だ。

「『ええええええええええええええええええええええ!!』」

「これは……召喚か？」

「二応召還つて扱いになります。ただ……僕自身グランドジオウじゃないときは2体が限界みたいで3体目を呼ぼうとしたんですけど呼べなかつたんです。」

ベルは電王の召還をやめた後に変身を解除をしようとしたが……何かを感じて振り返る。

3人もベルが振り返るので何事かと見ていると黒い服を着た人物がいたのでベルは怪しい感じがして構え直す。

「何者ですかあなたは……」

「………クウガ？いや違う………」

「何者だ貴様！」

「リントは邪魔だ。俺が用があるのは………クウガのような戦士！貴様だ！」

その男は姿を変えてモンスターのような姿に変わったのを見て驚いている。オーマジオウは中でその様子を見ていた。

『あれは、ゴ・ガドル・バ………グロンギの怪人の中でも強い奴だ。』

「皆さん、ここは俺に任せてくれ。」

ベルはゴ・ガドル・バにジカンギレードとサイキョーギレードを合体させてサイキョージカンギレードへと変えて構える。ゴ・ガドル・バは格闘体のまま立っておりベルは接近をしてサイキョージカンギレードを振り下ろす。

「はああああああああああああああああ!!」

「ふんー！」

ベルが振り下ろしたサイキョージカンギレードを腕で受け止めるとそのまま剛腕をベルのボディに叩きつけて吹き飛ばした。

「ぐ!!」

「ぬん!!」

ゴ・ガドル・バは接近をしてベルに拳を叩きつけようとしたが彼は後ろへと下がり未来予知を発動させて先読みをする。

「読めた!!」

ゴ・ガドル・バが叩きつけようとした拳を読んでサイキョージカンギレードでボディに切りつける。

「ほーう。なら」

ゴ・ガドル・バの目の色が青くなり敏捷体へと変わり装飾をガドルロッドを作り構える。

「武器を作っただ?!」

「はああああああああああ!!」

ベルはサイキョージカンギレードで攻撃をしようとしたが素早く動いてベルの後ろに立ち後ろからガドルロッドで攻撃をして吹き飛

ばした。

「うわ!!」

ベルは吹き飛ばされてグランドライドウオツチを出してジオウⅡから変わり立ちあがる。

【グランドターイム!グ・ラン・ド!ジオウ!】

グランドジオウに変身をしてクウガのボタンを押す。

【クウガ!】

タイタンソードが召喚されて装備をして接近をしてガドルの方も目が紫色へと変わり剛力体へと変わりガドルソードに変えてベルが振り下ろしたタイタンソードを受け止めた。

「な!!」

「どうした?それがお前の力が……ふん!!」

「ぐあ!!」

ゴ・ガドル・バの斬撃がベルのボディに当たり火花が散る。ベルは立ちあがりライダーのボタンを押す。

【オーズ!】

2010ねんの扉が開いてサゴーズコンボのオーズが必殺技のサゴーズインパクトを発動させてゴ・ガドル・バに対して攻撃をする。

「ぐう!!」

「せい!!」

ベルは接近をしてライドハイセイバーでゴ・ガドル・バのボディを切りつけて吹き飛ばした。ゴ・ガドル・バの目の色が緑色へと変わりガドルソードがガドルボウガンへと変わり放たれてベルのボディに命中をする。

「うわ!!」

「ふっふっふリントの戦士も進化をするってことか……」

ゴ・ガドル・バは満足をしたのかガドルボウガンを地面に放ち煙を発生させてその間に撤退をした。

『流石かつて仮面ライダークウガを完全勝利をさせた敵、だがなぜ奴がオラリオに?』

「……………ぐ!!」

ベルは膝をついて変身が解除される。アイズとティオナは追いか  
けようとしたがリヴェリアをが止める。

「よせ！二人ともお前たちでも奴を倒せるかわからないんだぞ!!それ  
に深追いはしない方がいい!!」

「……………」

2人はベルが傷つけられている姿を見ているだけしかできなかつ  
た。アイズは剣を握りしめ、ティオナはダンジョンの壁を殴った。

リヴェリアはエリクサーをベルに飲ませて回復させるとベルは疲  
れてしまったのかりヴェリアに抱き付いてしまう。

「……………ベル、今はゆっくりと眠るといい。」

「ベル可愛い……………」

「本当だね。」

「さて我々も上がるとしよう。」

リヴェリアはベルをおんぶをしてアイズとティオナは護衛をする  
ために前に立つ。その様子をアルフィアはかつて自分と交戦をした  
リヴェリアがベルをおんぶをしている姿を見ていた。

『どうした?』

「別に……………お前には関係ないことだ。」

（嘘をつけ、本当はリヴェリアがベルをおんぶをしている姿を見て嫉  
妬をしているくせに、全く……………）

オーマジオウはそう思いながらもなぜゴ・ガドル・バがこの世界の  
ダンジョンの中にいたのか原因がわからないため奴がゲゲルを始め  
ないかどうか不安になりながらも今のベルでは勝てなかったのを見  
て自分が行くしかないかと今度会った時のことを考えていた。

ベル再び目を開ける。

ベルは現在困惑をしていた。自分の目の前で犬人とヒューマンの女性がにらみあっていたからだ。どうしてこうなったのだろうか。ベルは今までのことを考えていた。

自分は確か謎の怪人と交戦をして敗北をして気絶をした気がする。そして次に目を覚ましたら犬人の女性に抱き付かれてそれを銀色の髪をした女性が睨んでお互いに火花を散らしていた。

「ナアーザ、なぜあなたがここにいますか？ さっさと自分のところへお帰りください。」

「何言っているの？ ベルは私のところのお客さんだ。それをロキ・ファミリアが運んだのがそちらなのだからな。だからベルを連れて帰る。」

お互いににらみ合っておりベルはこのパターンは前にもしたような気が・・・と思っていたら扉が開いて赤い髪をポニーテールにした女性がナアーザを投げ飛ばしてベルに抱き付いた。

「ベルうううううう!! 大丈夫?! リヴェリアさんから怪我をしたって聞いて急いで駆けつけたわ!!」

ベルはアリーゼに投げ飛ばされたナアーザが心配になった。彼女は勢いよく突き飛ばされたのか壁にめり込んでいたからだ。

「あ、あのアリーゼお姉ちゃん。僕は大丈夫だけどナアーザさんが・・・」

「え?」

ベルに言われてその方角を見るとナアーザが壁にめり込んでおりアリーゼはそーっと引つ張り壁からナアーザは救出された。

アミッドは頭を抑えながらこの惨状を見てどうしたらいいのかと考えながらベルはどうしてこうなったのかなと思いつつリヴェリア達にお礼を言わないと行けないと思いついているとアリーゼは涙目になりながらベルを抱きしめる。

「本当に・・・本当に無事でよかったですわベル・・・謎の怪物と怖がらずに戦ってボロボロになって・・・」



「アリーゼお姉ちゃん……」

「ねえオーマジオウ、ベルが戦ったのつてモンスターなの？」

『モンスターというのか怪人と言った方がいいだろう。しかも奴は一度仮面ライダークウガを完封なく倒している人物だ。ジオウⅡの未来予知、グランドジオウの攻撃さえもベル以上の戦闘力だったな。』

グランドジオウのベルでも敗北させた敵、オーマジオウがいった言葉に三人は啞然としてしまう。

「ならばやく倒さないとまずいじゃない？」

『それは大丈夫だろう、ゲゲルをするなら殺人をする人数を数える相手が必要だ。それに奴はベルを指名してきたからな。奴は純粋に戦士として戦おうとしているのを感じた。』

「なら奴は僕を？」

『おそらくな。』

ベルは拳を握り次は絶対に負けないように戦おうと決意を固めるとりあえず料金の方はリヴェリアが払ってくれたというのを聞いてベルは申し訳ない気持ちになるがアミッドはそんなベルを見てリヴェリアが言った言葉を言う。

「ベル、リヴェリアさんから伝言です。『息子のお前を守れなかった母親として払わせてくれ。お金の方は気にするな』だそうですよ。」

「リヴェリアさん……」

「それに今回の料金にティオナさんとアイズも出していましたね。二人はあなたを守れなかったからと出しました。」

「そんな……」

「ベル、あなたは優しい、けれどあなたが傷ついて運ばれてみるのはつらいのですよ。」

「アミッドお姉ちゃん。」

「そうだよベル。」

「ナアーザお姉ちゃん。」

「ベル……本当に無事でよかったわよおおおおおおおお」

「アリーゼお姉ちゃん。」

オーマジオウはお隣でオーラを強くなっているお義母さんを見な

いようにしながらベルを見ていた。いずれにしても今のベルで勝てないとなるとゴ・ガドル・バを倒すことはできない。

(ふーむいったいどうしたらいいのか、やはりフィルヴィスにこれを渡すしかないか?)

彼は持つているのはライドウオッチとは違うものと変身ベルトと武器である。作っていたがこれからのことを考えて彼女に渡した方がいいかと考えていた。一方でフィルヴィスはほかのメンバーと共にパトロールをしていた。

「ねえねえフィルヴィス。」

「なんですか?」

「ベルのこと好き?」

「(っ)ほ(っ)ほ!!」

マリユートのベルの好きという単語を聞いてフィルヴィスは咳こんでしまう。いきなり咳こんでしまったのでマリユーはごめんごめんと謝りなせそんなことを言ったのか話をする。

「あの子は7歳で冒険者になったのは知っているね?もちろん私達も色々と奮闘をして彼を迎えたけど当時の彼は色々とおマジオウさんがいたとはいえあれていたのよね……それで私達はほっとけなくて見ていたんだけどいつの間にかベルが冒険者となって私たちも一緒に戦った。けれどあの子はどんどん強くなっていく。誰に対しても優しく、時には自分から飛び込んで人を助けるために戦う……私達はそんな彼に惹かれていたかな?あなたはどうかしら?」

「……私はモンスターたちに囲まれてしまってもう助からないと思ったときにあの方が現れました。私は……この人の元で戦いたい。そしてベルさまと出会いあの方は私にも優しくしてくれて……あなたの言う通りかもしれない。」

フィルヴィスはふふと笑いながらマリユーと街をパトロールを続ける。一方でお世話になったベルはアリーゼと共にアミッド達の元を後にしてお礼を言う為にロキ・ファミリアの本拠地の方へと歩いていく。

「それにしてもベル、本当に大丈夫？」

「アリーゼお姉ちゃん大丈夫だよ。って僕どれだけ寝ていたんだろう？」

「ベルは2日寝ていたのよ。」

「2日も!？」

ベルは自分が倒れてしまつて2日も眠っていたと驚いていたがアリーゼが涙を流しながら来たのを見てどれだけ心配をかけてしまったのかと……

「ごめんなさい。」

「ベルが謝ることはないわよ。あなたはリヴェリアさん達を守ろうと戦つたのだから……英雄ね。」

「英雄……か。」

ベルはそう呟いてその間にロキ・ファミリアの本拠地の方へ到着をして門番の人にリヴェリアがいるのかを確認をしようとした時に扉が開いてリヴェリアが現れた。

「ベル……目を覚ましたのだな？」

「リヴェリアさんありがとうございました。僕を運んでくれたのと料金も払ってくれて……」

「気にすることはないぞベル、お前は私達を守るために戦ってくれたんだ。本来はレベルが高い私が戦わないと行けなかったのにお礼を言うのはこちらだよベル。」

リヴェリアはベルの頭を撫でてから二人は手を振りながらホームの方へと帰った。

ベルホームへ帰還をする。

アリーゼと共にアストレア・ファミリアのホームへと帰ったベル、彼が帰還をしたのを見てほかのメンバー達は駆け寄ってベルを抱きしめたりすりすりをしたりとベルは顔を真っ赤にしている中アリーゼはニヤニヤ見ていたのを見てベルはじーっと睨んでいたが今は姉たちに甘やかされていた。

そして何が起こったのかを全て話をする。

「謎の怪物グロンギの怪人……」

「グランドジオウに変身をしたベルを圧倒をした力……か。」  
輝夜とリユーはベルを圧倒をした怪物に対してどう対処をしたらいいのか考えている。アリーゼの方を見ると彼女は両手を組んでいたがすぐに結論を言う。

「もしその人が出ても私達は戦わない方がいいわ。ベルでさえも2日も寝込んでしまっているのよ？私達が戦えば死ぬ可能性がある。なら戦わない方がいいわ。」

「だが被害などが出たらどうする？」

「……その時は僕が戦います！」

ベルが立ちあがり拳をつきあげた。その様子を全員が驚いているがベルの目に闘志が燃えているのを見て輝夜達はベルが奴に勝ちたいのだなと思いついて黙っていることにした。

やがて解散をしてベルはお風呂に入った後アストレアにステータスを更新してもらい疲れてしまったのか眠ってしまう。アストレアはそんなベルの頭を撫でながらやわらかいなと思いつついつも傷だらけになる彼を見て無言で死なないように祈るしかできない自分に対して……一方絵ベルは精神世界でオーマジオウとアルフィアに鍛えられていた。

『ふん!!』

オーマジオウは手から衝撃波を放ちベルが変身をしたグランドジオウに対して放っている。

「はああああああああああああああ!!」

【ゴースト！】

サンングラススラッシャーを装備をしてオーマジオウに切りかかるがオーマジオウは仮面ライダーシザースのシザースピンチを装着をして右手の鋏でサンングラススラッシャーを受け止める。

「!!」

『ふん!!』

「ぐうううううううううう!!」

衝撃波を放つと右手から火炎の弾を放つがベルはファイヤーアローで相殺をしながら進みボタンを押す。

【エグゼイド】

『ならば！』

オーマジオウの方は龍騎を召還をしてエグゼイドにぶつけてベルはボタンを押す。

【龍騎！】

ドラグクローが装備されてドラグクローファイアーが放たれる。オーマジオウはそれに対して防御壁を張りドラグクローファイアーをふさぐ、ベルはそれがわかつていたのか接近をしてボタンを押す。

【ファイズ】

そのまま飛びあがりポインターが放たれてオーマジオウはそれをガードをする。

「であああああああああああ!!」

グリムゾンスマッシュが放たれるがオーマジオウは吹き飛ばしてベルは着地をする。するとオーマジオウが構えを解いたのでグランドジオウは変身を解除をしてベルに戻ると座る。

「はあ……はあ……」

『ゴ・ガドル・バに勝つためにベル自身の体力、力、敏捷など上げないと行けないからな……こうして私自身が鍛えているが……いずれにしてもゴ・ガドル・バに今は勝てないからな。』

「は、はい……」

『そろそろ朝になるな。今日の訓練はここまでだ。』

「ありがとうございました。」

ベルはオーマジオウにお礼を言い精神世界を後にして自分の体の方へと戻り目を開けるとアストレアに抱きしめられて眠っている自分が見えた。

（目を覚ましたらアストレアさまの立派な果実に埋もれていた僕……これが女神の果实!?)

ベルは混乱をしながら顔を真っ赤にしながら女神が目覚ますのを待っていた。

「……………うにゅベルおはよう。」

「はいおはようございますアストレア様。」

アストレアは寝ぼけながら動くのでベルにその大きな果实も動いて彼の顔で変形をしていきベルは全体が真っ赤になり……………

「きゅ……………」

そのまま気絶をしてまた精神世界へと戻ってきたのでオーマジオウは頭を抑えていた。

『いい加減慣れるとは言わないが誰かに抱き付かれて戻ってくるな。』

「ううううう……………」

（まあまだ10歳の子どもに言っても意味がないか……………）

オーマジオウはこれからのことを考えながら頭を抑えていた。ついでにため息まで出ていたのであった。

## ガドル閣下がなぜダンジョンに

「弱すぎる……」

グランドジオウとの戦いの後ゴ・ガドル・バはダンジョンの中でモンスターを倒しながら降りていた。なぜ彼がここで目を覚ましたのか……彼自身は座り怪人の姿から人と同じ姿に変わる。

ガドル閣下 side

忘れもしない、クウガとの激闘をしたあの場所……俺が放った蹴りと奴の蹴りの打ち合いで俺は先に奴より立った。だが奴の封印エネルギーが魔石ゲブロンに到達をして俺は爆発をした。

俺はゲゲルなどどうでも良かった。奴に勝ちたい……今度こそ俺が勝つて見せるとクウガと戦う為に、そして目を覚ましたが変な場所だった。

なぜ俺はこんなところで目を覚ましたのかわからないまま歩いていると丁度変なやつらがいたから運動がてら戦ったがリント？みただったが変な感じだ。奴らのフードを奪い俺は歩いていると見つけた！クウガのような奴を……俺は元の姿に戻り奴と戦う。奴が放った斬撃を腕で受け止めそこから拳を叩きこんだが突然として奴に俺の手が読まれたことに気づいた俺は敏捷態へと変わり奴と交戦をした。

そして奴が姿が変わりクウガの剣を出した時は驚いた。あの仮面ライダーの力……まだ何かを隠している感じがした。そして俺は後ろにいるリントを見て笑いながら次にやつと戦えるのを楽しみにしながら射撃態へとなり地面にボウガンを放ち離脱をした。

「ゲゲル……か、今更ダグバがないのにしても意味がない。なら俺がするのはクウガの力を使う奴と戦うこと……それが俺の今の目的だ。」

俺は再び立ちあがりモンスター相手に戦うとしよう。再び奴と戦うその日まで……

ガドル閣下 side 終了

一方でガドルがダンジョンでモンスター相手に戦っている中、ベル

はアリーゼと模擬戦をしていた。ジオウの姿になりレベル6のアリーゼの剣を受け止める。

「であああああああああ!!」

「甘いわよ!!」

ベルが振り下ろしたジカンギレードをアリーゼは剣で受け止めた後にはじかせてジカンギレードを吹き飛ばす。

ジカンギレードを吹き飛ばしたベルはエグゼイドのライドウオツチを押してジクウドライバーにセットをしてまわす。

「ライダータイム!カメンライダー!ジオウ!アーマータイム!レベルアップ!エグゼイド!」

仮面ライダージオウエグゼイドアーマーに変身をしたベルを見てフィルヴィスが立ちあがる。

「祝え!全ライダーの力を受け継ぎ、時空を越え過去と未来をしろしめす時の王者その名も仮面ライダー!ジオウエグゼイドアーマー!ライダーの力を使う姿なり!」

『懐かしいな……』

「それフィルヴィスちゃんの役目なんだ(苦笑)」

「ノーコンテニューでクリアしてやるぜ……コンテニューってなんだろう?」

両腕に装備をしたガシャコンブレイカーブレイカーを構えてアリーゼに突撃をする。アリーゼは剣でベルに攻撃をしたがガシャコンブレイカーブレイカーでガードしてそのままはじかせた。

「うわつとそんな方法があったのね。」

「てえええい!!」

地面にガシャコンブレイカーブレイカーを叩きつけて衝撃波を放ちアリーゼは横に避けた。両腕のガシャコンブレイカーブレイカーを外してジカンザックスを構えてサブライダーのウオツチを出してセットをする。

「フィニッシュタイム!パラドクス!ザックリカッティング!」

「はああああああああ!!燃え上がれ!」

アリーゼは剣に炎を纏わせてお互いに走ってジカンザックスと剣



が激突をしてみていた全員が衝撃に備えて吹き飛ばされそうになる  
が何かが降ってくる音が聞こえてきたのでリヤーナは見ると剣と斧  
が降ってきたので彼女は青ざめて後ろに必死に逃げた。

「ひい!!」

煙がはれるとお互いに倒れているアリーゼとベルの姿があった。  
ベルの方は変身が解除されておりアリーゼも目をまわしていた。

「全くあの二人は……とりあえずポジションでもかけておけ。」  
輝夜の命令でフィルヴィスは二人にポジションをかけて傷が回復  
した。やがてアリーゼが目を覚まして頭を振っていた。

「いたたたた……まさかベルがここまでやるなんて思ってもい  
なかつたわ。」

「このドアホ!ベルに対して本気でやる馬鹿があるか!!」

「いやいやあれでもまだ本気じゃないわよ!?!」

輝夜とアリーゼが言いあっている中、ネーゼはベルを起こそうと近  
づいて彼を起こそうとするとベルは目を開けるが寝ぼけているのか  
尻尾を見てもふもふ始めた。

「うにゃ!?!」

「もふもふもふもふ……」

「べ、べりゅ……ちょ!ま!?!あああああああああ」

数分モフモフされたネーゼはぐでーと地面に倒れてぴくぴくと体  
が震えていた。全員がベルがネーゼをもふもふで倒したのを見て驚  
いてしまい、さらに言い争いをしていたアリーゼと輝夜も止めて見て  
しまうほどに……

「あ、あれ?」

オーマジオウは寝ぼけてやったのかと思いネーゼが可哀想にと思  
い手を合わせて合掌をするのであった。

それから全員でご飯を食べながらベルは考え事をしていた。

「どうしたのベル?」

「……いやあの人は僕は勝ちたいと思ってまして……」

「ベルが出会ったあの怪物のことか……」

「今度は負けません。正義と剣に誓って……」



リユートの扉を眷族たちが開けてベルがリユートに抱き付いている姿を見て嫉妬をする。

「あらあらポンコツエルフさま、自分が抱きしめられているのを見せるために私達をお呼びしたのかしら？」

「ずるいわよりオン!!」

「いや勘違いしないでください!私はベルを誘っていません!!」

「うにゅ……」

ベルはうるさかったのかリユートから布団を奪いそのまま兎団子のような形になり眠ろうとした。

「べ、ベル!?寝てないで起きてください!!」

リユートはベルを起こす為に体をゆすったりするがベルは兎団子状態から動こうとしないでそのまま寝ようとしていたがあまりのうるさいので寝ぼけてしまう。

「福音」

「ふん!!」

威力は弱めに放たれたがリユートは吹き飛ばされてしまう。全員が啞然としてしまいベルは寝ぼけた状態で起こすのはやめようと思うのであった。

『すまないリユート、ベルはどうもこうして起こさせると寝ぼけてしまうことがある。つて遅かったか……』

「もうちょっと早く……言ってください。」

それからベルが目を覚ましてオーマジオウがベルが寝ぼけて福音を撃つたことを話すとすぐに土下座をして謝るのであった。

## オラリオを歩く

次の日ベルはダンジョンに入る気がしないなと思いオラリオを歩いていた、今日はアストレイ・ファミリアとしての仕事はお休みで彼自身もこういった日を送るのは悪く無いなと思いつつ街を歩いていた。

「思えば僕がやってきて3年が経ったんですね。」

『そうだな、アストレア殿達にお願いをして7歳でオラリオへとやってきて冒険者となり……今はレベル3の冒険者だからな……』  
「そうですね。」

オーマジオウと話をしながらベルは歩いて様々な人達が買い物をしたりしてオラリオは騒がしいなと思いつつベルは歩いていた。彼自身は辺りを見ながら現在装備をしているのは左腰部に輝夜からもらった太刀を装備をしている。実はジカンギレードを出すのにすぐに出せるわけじゃないので犯人を抑える際に必要だと姉たちが自分の自分のといってきた彼は色々とふるってみて輝夜の太刀がいと輝夜は喜びほかの姉たちは不満そうにしていたのをベルは覚えている。

「だってこれが使いやすいもん」

『ベル、誰に言っているんだ？』

「ふえ？」

オーマジオウはベルが独り言を言っているのだからため息を出しながらアルフィアの方を見ていた。彼女自身も自分たちが色々計画を変えたのでオラリオの被害などはすぐに収まっているのでホツとしている。

やがてベルはいつもの噴水の前で座りダンジョンがあるバベルの塔を見ていた。とても大きいのをいつも自分たちは入っているんだなと思いつつ見ていると誰かがこちらを見て手を振っているのを見た。

「ベルくーーん」

「アーデイお姉ちゃん？」

アーデイ・ヴァルマ、ガネージャ・ファミリアの一人で団長のシャクティ・ヴァルマの妹である。彼女はベルのところへと走るとそのまま抱き付いてきたが勢いがありベル自身も油断をしていたこともあり二人はそのまま噴水の中にドポーンと落ちてしまう。

「あわわわわわごめんベル君。」

「くしゅん」

勢いよく落ちたので二人はずぶぬれになってしまいアーデイは彼を連れて自分のホームの方へと連れていきそこにシャクティが二人がずぶ濡れになっているのでいったい何があったのかと思い聞くことにした。

「何やったんだお前達。」

「えつと……」

アーデイは観念をしてなぜずぶ濡れになってしまったのかを全て話したがシャクティは妹がやったことに対して頭を抑えていた。

「全くお前は……いくらベルに会えたからといって勢いよく抱き付いて噴水に落ちるか?」

「誠にその通りでございますお姉さま。」

「ほらお風呂に入って濡れた体を温めろ」

「うん。」

アーデイはベルを連れて行こうとしたので姉は止める。

「まてまてまてまて」

「何?」

「なぜベルを連れて行こうとする。」

「だってベル君も濡れているから。」

「だからといっていっしょに入るか!」

「?」

「いやベル、お前も首をかしげるな。つて待て……ベル一応確認をさせてくれ。」

「はい。」

「アリーゼ達と入っているのか?」

「はい。」

「……アイツラ」

シヤクティは仕方がないといいアーデイにベルを連れては行つてこいといい自分は仕事をすることにした。

お風呂場に連れてこられたベル、アーデイはベルの服を脱がしてその下には少し筋肉質のお腹が見えていたので彼女自身も赤くしていた。ベルの方もアーデイの裸を始めて見たので赤くしながら一緒にお風呂に入る。

「ごめんねベル君。」

「いいえ……暖かいですね。」

「そうだね……そういえばベル君ってアリーゼ達と一緒に入っているんだよね?」

「はい、アストレア様も一緒に入ることができます。」

(まさか主神と一緒に風呂に入るの!?)

アーデイはベルが言っていた言葉に驚くがすぐに冷静となり服の方はアーデイ自身の服を貸すことにして髪をどうしようかと思いつつ一緒に体を洗ったりしてお風呂を堪能した後ベルの頭を乾かしたりして自分の服を着させてベルの髪を結んで短いツインテールにした。

「ふええええええええええ!!」

「可愛いベル君?」

アーデイはベルをぎゅっと抱きしめながら自分の部屋に連れていき女性の格好をしたベルと一緒にガネージャ・ファミリアのホームを歩いているとベルは裏庭でモンスターを調教をしている姿を見る。

「アーデイさんあれって?」

「ああうちはこうしてモンスターを調教をしているんだよ?」

「モンスター……か。」

「ベル君はさモンスターと人って共存できると思うかな?」

「共存ですか……難しいかもしれませんね。冒険者はモンスターによって殺されて復讐をする。逆にモンスターの方も仲間を殺されて冒険者を襲う。でもそれは無知のモンスターならそうじゃないですか?知性とかあれば……共存は可能かと」

ベルは素晴らしいアーデイもそうかそうかと首を縦に振り彼女の部屋にお邪魔をしてアーデイはベルの腰に太刀が装備されているのを見た。

「あれ？ベル君太刀なんて装備をしていたっけ？」

「ジカンギレードとかがすぐに出せないときのためにとアストレア・ファミリアの皆さんの武器を試して輝夜お姉ちゃんの武器が相性がいいと思ひましてこれにしました。」

「なるほど……」

ベルが達を装備をしていたので驚いてしまいがジカンギレードなどがすぐに出せないようにと用意されたのと思ひアーデイはじつと見ていた。

「本当ベル君は英雄かもしれないね。」

「英雄ですか？」

「こそ、仮面ライダーとして……冒険者として……人の人間として……ね。」

そういつてアーデイは英雄章を持ちながら話をする。そのまま本を棚に戻すとベル自身格好をどうしたらいいのだろうと思ひながらアーデイの方を見ていた。

「あー、なら今日はここで泊りしようか。」

「ええええええええええええええええ!!」

「ほらほらそのタカライドウオッチで泊まることを報告してね!!」

「ア、ハイ」

ベルはタカライドウオッチを起動させてアストレア・ファミリアホームに泊まることを伝えてくれとお願ひをしてタカライドウオッチはそのままアストレア・ファミリアのホームへと飛んで行く。

オーマジオウは大丈夫だろうかと思ひつつもアーデイがニヤリと笑っているのを見てこの子なにかする気だと思ひ何をするのか怖いなど思ひつつ見ることしかできないので黙っていることにした。

なおタカライドウオッチがベルが泊まることを報告をするるとアーデイは四つん這いでショックを受けたってだけ書いておく。





アーデイも原因が自分のせいだとわかっているので苦笑いをしてそのままベルがいる席へと行き一緒にご飯を食べていた。一方でオーマジオウの方もアルフィアにご飯を食べさせるために用意をして食べさせていた。

「お前料理などでもできるのか?」

『色々あったからな。』

オーマジオウは玉座の方へと座りベルがガネージャ・ファミリアの女性陣にモフモフされている姿を見て苦笑いをする。

『やれやれ……ベルは優しいからなあまり怒ったりすることはないからな。まあそれでもベルのこと嫌いというやつは今のところいないからな。』

「安心をしろ、ベルのことを嫌いと言ったやつは福音で吹き飛ばしてやるから。」

『どこが安心をしろなんだおい。』

福音で吹き飛ばそうとしているアルフィアに安心をしろと言ったが全然安心ができないのでオーマジオウの方でもため息が出してしまう。

そしてお風呂に入る時もガネージャ・ファミリアの女性陣達にシャクティも一緒に入りアーデイがシャクティにベルの頭を洗ってあげたらといい彼女自身は驚いてしまいがベルをじーつと見て彼の髪を洗うことにした。

「ど、どうだベル?」

「ふにゅ……」

(か、可愛い……は!?私は何を考えているんだ!!いかんいかん……だが……)

髪を洗いながらシャクティはベルの髪の柔らかさに本当に男の子なのかとじーつと見ていた。鍛えているが細い体……さらに女性のようにセミロングの白い髪……そして小さい……

「何を考えているんだ私は……すまないベル大丈夫か?」

「大丈夫だよシャクティお姉ちゃん。」

「ぐは!!」

「「団長!?!」」お姉ちゃん!?!」

お姉ちゃん呼びしてシャクティは後ろの方へと倒れかけてしまう。その様子を団員たちとアーデイは驚いていた。ベルの方は頭にシャンプーが残っているため目を開けることができないう状態でシャクティはなんとか復活をしてベルのシャンプーを落とすためにシャワーを使って落とすとした。

「どうだ?」

「ありがとうございます。あ、あの……」

「なんだ?」

「僕も髪を洗ってもいいですか?」

「……お願いをする。」

シャクティは座りベルはシャンプーを手につけて彼女の髪を洗った。彼の洗い方がとても上手くシャクティは顔を真っ赤にしている。(な、なんていうテクニックを持っている。いかん……このままでは私も彼を離したくなくなってしまう。それだけはだめだ……耐えろ私!!)」

シャクティはベルのテクニックに負けそうになる。その様子をアーデイはいいなーと思いつつ見ておりほかの団員たちも団長だけ洗ってもらってずるいなーと見ておりやがてベルは洗い終えたのかシャクティにつけたシャンプーをシャワーで落として彼女は虜になっってしまう。

「……」

「どうしました?」

「ベル……これからその……私のことをお姉ちゃんと呼んでくれないか?」

「ふえ? いいですよシャクティお姉ちゃん。」

「……」

シャクティは無言でベルを抱きしめた、ベル自身はシャクティの胸が生で当たっており顔を真っ赤にしていた。

「ちよつとお姉ちゃん!!お姉ちゃんだけズルイよ!!ベル君!!私の頭も洗って!!」

「私も!!」

「私も!!」

「私もお願い!!」

次々にベルにお願いをしたので彼は承諾をしてガネージャ・ファミリアの女性陣の頭を一人ずつ丁寧に洗っていく。

そしてお風呂に上がった後ガネージャ・ファミリアの主神ガネージャが現れた。

「俺がガネージャだ!!ってベル・クラネル!?なぜ君がここに?」

「えつと実は……………」

ベル説明中

「なるほど!ふむ!ガネージャ歓迎をするぞ!!」

「あ、ありがとうございます。」

「アーデイ、悪いがベルと一緒に寝かせてくれないか?」

「え!?ちよつと待ってよお姉ちゃん!!だったら一緒に寝よう!!」

「そうだな……………なら私の部屋でいいな?」

「OK!!」

そしてアーデイが自分の部屋から枕を持ってくるために部屋の方へと戻る間、シャクティはベルの手を握り自分の部屋に連れていき入らせる。

「すまないな……………団長としての部屋だからな。」

「いいえ。」

「……………こうして君と二人で話すのは初めてかもしれないな。」

「そうですね。」

「仮面ライダージオウか……………私も君の姿は何度か見たことがあるが……………10歳の子どもが戦っているか……………いや、ロキ・ファミリアのアイズ・ヴァレンシュタインのことを考えたらな。」

「あ……………」

「だが君は本当に優しい少年だ。ふふ本当に……………」

「お待たせお姉ちゃん!!」

「来たか……………」

そしてシャクティのベットにベルが真ん中でアーデイとシャク

テイが両横で彼を抱きしめるようにして眠る。二人はベルのモフモフした髪に虜となつてしまひしかも抱き心地もいひのでアリーゼ達がずるいと思ひながらも眠る中、ベル自身は顔を真つ赤にしながら二人の女性の胸が当たつてゐるのでドキドキしながら目を閉じた。

そして次の日、シャクテイとアーデイがベルを連れてアストレア・ファミリアのホームの方へと歩いていく。そしてホームが見えてきて玄関で立つてゐたネーゼはベルを見て声を叫ぶ。

「ベル!!」

その声を聞いたのか中にいた眷族たちはドタドタと出てきてアリーゼは真つ先にダツシユをしてベルに抱き付こうとした。

「ベルうううううううううううううううううう!!」

ひよい ずざああああああああああああああとアリーゼは地面に激突をした。ベルはシャクテイによつて横にずらされたのだ。

「しや、シャクテイ?」

「………頼む!ベルを譲つてくれ!!」

「ええええええええええええええええええ!!」

「!!」はああああああああああ!!」!!」!!」

シャクテイの譲つてくれという言葉を聞いてアリーゼは黒いオーラを纏ひ始めた。

「それどういう意味かわかつてゐるわよね?」

「わかかつてゐる。だが私はこのモフモフ、そして抱き付きがいいこの感触………何よりも頭を洗つてもらつたときのテクニクを忘れることができないのだああああああああああああああああああ!!」

ベルを抱きしめながら言うので彼はシャクテイの胸が当たつてゐるので顔を赤くしておりオーマジオウもその発言を聞いて啞然としてゐた。

『な、何を言つてゐるんだこいつは………』

「確かにベルのテクニクは私達も落ちてゐるけど渡すわけないでしょ!?!ベルはアストレア・ファミリアだからね!!」

アリーゼとシャクテイは言い争ひをしてベルは二人の胸に挟まれ

てさらに顔を真っ赤になっていく。

そして結局話し合いをした結果、何日かベルをガネージャ・ファミリアの方へ行かせることとなりアリーゼは不満げだが仕方ないと承諾をして二人はアストレア・ファミリアのホームを後にしてベルはアストレア・ファミリアのホームへ入ろうとしたが姉たちにつかまり連行されて座らせる。

「……………え?」

「さーてベローール?ガネージャ・ファミリアで何をしていたのか  
ゼーんぶ話してもらおうよ?」

「は、はい……………」

姉たちの気迫に押されてガネージャ・ファミリアであったことを話す白い兔であった。

## お風呂ですよー

「さーてベル？ガネージャ・ファミリアで何をしていたのかぜーんぶ話してもらおうよ？」

ベル・クラネル レベル3の冒険者、アストレア・ファミリア所属の仮面ライダージオウに変身をする人物、現在彼はアストレア・ファミリアの姉たちに迫られている状況、その理由は昨日ガネージャ・ファミリアのアーデイ・ヴァルマがベルと噴水に飛び込んでお互いにびしょびしょの状態になってしまいガネージャ・ファミリアに連れられていかれて泊まることとなった。

そして次の日団長のシャクティ・ヴァルマとアーデイ・ヴァルマがベルと一緒に来た。アリーゼはベルに抱き付こうとしたがシャクティがベルを横にそらしたせいで彼女は地面に挨拶をしてしまいシャクティを睨んでいたが、彼女はベルを譲ってくれといってきたので結局アミッド、ナアーザ同様2日間ガネージャ・ファミリアの方へと行くことになり二人は帰った後姉たちはベルをすぐに捕まえて現在ホームのリビングに彼を座らせて姉たちはじーっと見ている。

「えっと……全部ですか？」

「そう全部ね？いいベル？嘘とか言わないようにね？」

「はい……」

ベルはガネージャ・ファミリアであったことを全て話した。アーデイ達と一緒に風呂に入って髪を洗ったりモフモフされたりアーデイとシャクティと一緒に寝たことなどを全て話した。

「……………」

姉たちはガネージャ・ファミリアの女性達がズルイと思った。自分たちでさえもそんなことをしてもらったことがないのにおのれと……拳を握りしめた。オーマジオウもその様子を見ていたので苦笑いしながら姉たちに話をするベルを見ていた。

「それで団長さま？どうしますのですか？」

「決まっているじゃない、ベル？今日のお風呂私たちと一緒に入ってもらおうよ？いいわね？」

「は、はい……」

姉の気迫に負けたベルは今日の夜のお風呂は一緒に入る事になったが、その間も姉たちはベルの成分が足りなかったのか抱きしめたりモフモフをしたりといつも以上に甘やかしていた。

フィルヴィスや輝夜、リユーなども同じようにベル成分が足りなかったのかほかの人たちからベルを奪ってモフモフやすりすりをするなどいつも以上にこちらも甘やかしていたのであった。

最後のアリーゼに関してはずいぶん抱きしめて彼女の大きな胸が当たっておりベルは顔を赤くしながら姉たちに甘やかされていたので顔どころか全体が真っ赤になっていく、そして今日の夜にお風呂に入るって言っていたが……やがて夜となりアリーゼが言っていた通り全員でお風呂に入る。リユーもアリーゼが逃がさないようにがしつと捕まえられて一緒にお風呂に入る事になった。

「さーてベル？ガネージャ・ファミリアのお姉さんたちに何をしたのかな？」

「えつと頭を洗ってあげました。」

「なら私にもしてもらえないかしら？」

アリーゼは素晴らしい椅子に座ったのでベルは手にシャンプーを付けて姉の頭を洗うことにした。

（え!?何……すぐ上手なだけ!?や、やばい……シヤクテイが言っていたことがわかるかもしれない。）

彼女はベルのテクニクの虜となりとろけた顔となった。その様子を見て全員がごくりとつばを飲んで次に輝夜が、リユー、ネーゼなどが次々にベルのテクニクにやられて最後のマリユの髪を洗った後に見るとライラ以外のメンバーはピクピクとなっていたのでベルはなんで!?と声を出す。

「……やれやれ」

ライラはベルの受けたが彼女達ほどにはならなかったが、兎に洗ってもらうのは悪く無いなと思いついてみることにした。やがて回復をした姉たちを見ながらベルも自分の体などを洗っていないかたなどと思い洗うことにした。

「ふーんふんふんふんふーん」

鼻歌を歌いながらベルは自分の長くなった髪を洗っていた。気分よく歌っていたので姉たちは嬉しそうだなと思いつながらお風呂の中で見ていた。

やがて体も洗った後彼もお風呂場に入りふうーと疲れた体を休ませていた。ベル自身姉たちに抱きしめられたりモフモフされたりと色々されたのでお風呂のお湯が気持ちがいいので眠ろうとしたがいけないと首を振る。

「あらあら兎さま眠そうですね？」

「うにゅ……」

「ならお姉ちゃんがぎゅってしてあげ……ってあれ？」

「遅いですわ団長さま。」

すでに輝夜がベルを抱きしめていたのでしかも全員何もつけないで裸の姿なのでベルの後ろに輝夜の生の胸が当たっており感触がいいのである。

「それにしてもベルのは大きくなってきましたね。」

「!!」

ベルはその言葉を聞いてさっと自分のを隠した、だがすでに姉たちはじーっとベルのが大きくなったのを見て驚いている。

「今でこれぐらいってことは……」

「きやあああ楽しみいいいいいい」

「何がなの!?!」

（こ、こいつら……ベルに何をしようとしているんだ!?ま、まさか!!S○○をしようとしていないか?!いやあいつらなあり得る!!ベルの○○○○を見てこいつらは……何かを想像をしたに違いない。）

オーマジオウはベルの○○が姉たちに襲われてなくなりそうだなと思いつつもまあ知らない相手でなくすよりはいいかと思っていたが彼を狙っている人物などを考えると頭が痛くなった。



## 二人のエルフ

ベルside

それから三年が経ちました。僕はアストレア・ファミリアの一員としてまた仮面ライダージオウとしてオラリオを守るために戦ってきました。この三年間でも闇派閥の残党が襲い掛かってきたり、オツタルさんとぶつかったり、ガレスさんやフィンさんと激突をしたり・・・お姉ちゃんたちとお風呂に入ったり、アストレア様とお風呂に入ったり一緒に寝たり、ナーザお姉ちゃんとアミッドお姉ちゃんにモフモフされたり、アイズさんにもモフモフされたりと・・・シャクティお姉ちゃんとアーディお姉ちゃんに抱き付かれたりつてあれ？なんか変な感じだな？

ちなみにレベルは4になりました。モンスターとじゃなくてフィンさんやガレスさん、さらにはオツタルさんとの激闘がランクアップをしてしまうことになるなんて・・・とほほほこっちはグランドジオウになってもボロボロにされてしまうほどですから。

もちろんアイズさんとティオナさん、新しくはいったベートさんとかと模擬戦をすることがあります。最近はアストレア・ファミリアもそうですがガネージャ・ファミリア、ロキ・ファミリアに行ったり来たりしている気がする・・・うん気のせいだな。

さてレベル4となった僕は呼びに行った人を待ちながら噴水の前で座っていた。いつもの僕の特等席の噴水の前である。

「・・・うーんフィルヴィスさん呼びに行くって言ったけど・・・エルフの人で仲がいいのってあの人しか思いつかないけど。」

『その通りだなベル。私も同じ考えをしていたさ。』

ですよねーやがて走ってきている姿を見て僕は苦笑いをしながら見ていた。

「も、申し訳ございません!!ベルさま!!」

「ごめんなさいベルさん!!」

「えっと僕は別に怒っていないですよ?」

フィルヴィスさんが連れてきた人物、ロキ・ファミリア所属の「レ  
フィーヤ・ヴィリデイスさんだ。まあ彼女がこうして来るのもリヴェ  
リアお義母さんからのお願いでもあり一緒にパーティーを組んだり  
している。

もちろんその時にアイズさんがむーつと頬を膨らませていたのを  
思いだして笑ってしまう。

「ふふ、さして行きましょう。」

僕は立ちあがり腰につけている太刀を装備をして移動をする。

ベルside終了

ダンジョンへと入るとゴブリンなどが現れたがベルは走りだして  
一閃をしてゴブリンの首を切り裂いた。

ベルは輝夜に本格的な指導を受けて一閃以外にも縦一閃や横一閃  
などの技を使うことができるようになった。

さらにオーマジオウの力の影響で刀を通じて剣の仮面ライダーの  
技を使用をすることができるようになってもらい構えている。

「雷斬撃!!」

太刀に雷が纏われてそのままジャンプをして縦一閃に切り裂いた。  
その様子をフィルヴィスとレフィーヤは見ていた。

「流石ベルさま、太刀の技の数々ますます惚れてしまいます。」

「そ、そうですねー」

そんなベルの勇士を見ながら二人は顔を赤くしながら見ており、レ  
フィーヤは以前ベルに助けてもらって以降彼のこと気がなってお  
りこうしてパーティーを組んでいるのもそういう意味でもある。

「はああああああ!!狼斬撃!!」

狼のエネルギーを纏った斬撃がゴブリンに当たり切り裂かれる。  
その時ベルは左手に太刀を構えてから腰部に太刀をしまう。

レフィーヤ達は後衛から攻撃をしようとしたがベルが倒してしま  
うので苦笑いをしていたがベルは止まったのでどうしたのだろうか  
レフィーヤは声をかける。

「ベルさんどうしました?」

「………静かに」

ベルが突然止まって辺りを見ていたが気のせいだなと思い、歩みを続ける。オーマジオウの方も同じように何かを感じたがベルが気のせいだと思い無言でいた。やがて三人は中階層を通り16階層まで降りていた。

ベルはジオウに変身をしておりヘルハウンドが放つ炎をジカンギレードではじかせるとレフィーヤが魔法を唱えて一気にモンスターたちを倒す。

「流石ですねレフィーヤさん！」

「えつとあ、ありがとうございます。」

「ベルさま、私も私も！」

「わかっていますよフィルヴィスさん。」

ベルは二人の頭を撫でていたが何か強い気配を感じて後ろを振り返る。フィルヴィスとレフィーヤはその男性をみて恐怖を感じていたがベルは三年前に戦った時の感じがしたので構えている。

「二人とも下がっていてくれ。」

「ベルさん……」

「久しぶりだな……貴様がどれだけ強くなったのか見せてもらうぞー！」

男はゴ・ガドル・バは怪人体へと変身をしてジオウに剛腕をふるう、ベルは剛腕をガードをした後にゴ・ガドル・バのボディに蹴りを入れる。

「ふんー！」

それを気合ではじかせるとジカンギレードをジユウモードにして発砲をしてボディにダメージを与える。ゴ・ガドル・バは射撃態へと変えて胸部の飾りを取りガドルボウガンを作り砲撃をする。ベルは回避をするとライドウオッチを出して左側にセットをして変わる。

「ライダータイム！カメンライダージオウ！アーマータイム！クウガ！」

仮面ライダージオウクウガアーマーへと変身をしてそのまま必殺技を放った。

「フィニッシュタイム！クウガ！マイティタイムブ레이크！」

「であ!!」

ゴ・ガドル・バのボディに蹴りが当たり彼は吹き飛ばされるが笑い  
だす。

「まさかクウガの力で対抗をするとはな……面白い!」

ゴ・ガドル・バの目の色が金色へと変わり電撃が周りに発生をして  
いき自身の姿も変わった。ベルは驚いていると持っていたガドルポ  
ウガンの形状も変わり連射された弾丸がベルのボディに当たる。

「うああああああああああ!!」

「ベル（様）さん!!」

【グランドジオウ!】

クウガライドウオッチを外して転がりながらベルトの操作をして  
姿が変わる。

【グランドターイム!グ・ラン・ド!ジオウ!】

グランドジオウに変身をしてゴ・ガドル・バはガドルロッドを作り  
こちらも電撃態の姿に対応された形態へと変わりベルにロッドを振  
りまわす。だがベルもレベルも上がり模擬戦などを続けてきたので  
対人戦などに対応ができるようになり、フィンが槍を使うことで  
ガドルロッドを交わし続けていた。

「であああああああ!!」

拳にエネルギーを込めてゴ・ガドル・バに叩きこんで吹き飛ばした。  
「ふははは……面白い……やはり戦いはこうでなくて  
はな!!」

「僕は……あなたに勝ちます!!」

【フィニッシュタイム!グランドジオウ!】

「いいだろう……」

ゴ・ガドル・バは武器を捨てて両足に電撃が集中されて行く。フィ  
ルヴィスとレフィーヤはその様子を見ることしかできない。

お互いに走りだして飛びあがる。

【オールツェンティ!タイムブ레이크!!】

「であああああああああああああああ!!」

「ふん!!」



リヴェリアはゴ・ガドル・バがなぜこの三年間姿を見せずにいたのか考えた。三年間モンスターと戦い続けてきたのかと思いつながらベルはグランドジオウの姿のまま立ちあがり変身を解除をする。

「あいつ……また逃げた!!」

「野郎が……」

「ベル、とりあえずエリクサーを」

「すみません。」

リヴェリアからエリクサーをもらい回復をしたベルは以前よりは強くなったと思っていたが奴の強さは自分以上だということにベルは拳を握りしめていつか勝って見せると誓う。

ため息をつきながら上がるベル

「はあ……」

ダンジョンから地上の方へと戻る途中で休憩をしているベル、彼は三年前に戦ったゴ・ガドル・バと再戦をしたが電撃態の必殺技とグラウンドジオウの必殺技が激突をして立っていたのはあちらで自分が無様に地面に倒れていたからだ。もし奴があそこで自分にとどめを刺していたらと考えてまだまだ勝てないんだなとため息をついていた。

「また見逃してもらった。僕は……」

『そのため息をつくばかりじゃ駄目さベル、お前の実力は上がっているのもまた事実、だから落ち込むことはないさ。』

「わかってはいますけど、やっぱり悔しいですよ。」

（ベルも男の子だからな、はあ……だがゴ・ガドル・バの強さ……私もクウガのライドウオッチを使い奴の戦いの記憶を見たが……アメイジンググマイティのクウガの力でやっと止めを刺したからな。グラウンドジオウのベルであそこまでだからな。だがベルの力は前よりも強くなっているのもまた事実。いずれ奴に勝つときが来るさ。）

オーマジオウは玉座に座りながら別のライドウオッチを出していた。それは今までベルが使用をしていない三つのライドウオッチ、一つは竜の剣を持ち戦うライドウオッチ、一つはプログライズで戦う社長、そして最後は小説家の烈火の剣士のウオッチ……オーマジオウはふふと笑いながら楽しみにしながら見ており彼は座っていると近づいてくる人物がいたアイズである。

「ベル大丈夫？」

「アイズさん……大丈夫じゃないです。」

「ご、ごめん……」

ベルのあまりの落ち込みにアイズは謝ってしまい、少しの間無言になってしまいがベルは口を開く。

「また勝てなかったです。」

「……」

「今度は勝てる！と行けそうな気がする！と思ったんですけどね。」

「大丈夫ベルは強くなっているよ。」

「アイズさんだってレベル5に到達をしたじゃないですか、また置いてきぼりって感じですよ。」

「それでもベルは速い方だよ。」

「そうですかね?」

「そうだよ。」

ベルは7歳の時から冒険者をしてきた、そして仮面ライダージオウに始めて変身をした。それからベルはオーマジオウの訓練をして体力や仮面ライダーの歴史などを学び時には姉たちにしごいてもらったりして闇派閥の残党と戦い今ではレベル4の冒険者までに成長をした。

今の彼の呼び名は「正義兔」「仮面魔王」とか様々な二つ名がつけられている。それから「ハーレム兔」とか言われたりしている。

ベルは左手に装備しているジオウライドウォッチを持ちながら始めて変身したことを思いだしながら左手にウォッチホルダーにセツトをして立ちあがり休憩が終わり腰部の二個の太刀を抜いた。普段は左腰につけている太刀を抜くが右腰の太刀を抜いて戦うこともある。

現れたモンスターをベルは素早く入りこんで切り裂くアイズもデスペラードを抜いて風を纏って攻撃をして魔物を切っていく。

そしてダンジョンの入り口に到着をしてベルはロキ・ファミリアの人達に挨拶をしてからフィルヴィスと共にアストレア・ファミリアのホームへと歩いていた。

「.....」

「ベルさま?」

「綺麗な夕日ですね。」

「確かにその通りでございませす。ふふベル様もそう言う言葉を使うのですね(笑)」

フィルヴィスはベルがそういう言葉を言ったので笑ってしまうがベル自身もはつとなり顔を赤くする。無意識でそう言う言葉を言うてしまうので彼は頭を抑えながらホームがある場所へと急いで走っ



ていく。

「ベルさま慌てて転ばないでくださいよ（笑）」

「ころびまうわ!!」

慌ててしまいベルは転んでしまい、フィルヴィスはすぐに駆け寄り彼を起こしていつしよにホームへと歩いていきドアを開ける。

「ただいま戻りました。」

「お帰りいいいいいいベルううううううううううううううううううう!!」

「ぐううううううううううううううう!!」

ベルに抱き付いてきた人物アストレア・ファミア団長「アリーゼ・ローヴェル」レベル6の冒険者である。

「全く団長さま?ベルがとても苦しんでいますわよ?」

副団長を務める「ゴジョウノ・輝夜」同じくレベル6の人物でベルに太刀の使い方などを教えた武術の師匠でもある。

「相変わらずですねアリーゼは。」

リユー・リオン同じくレベル5の冒険者、その言葉に輝夜はため息をついたのでリユーは輝夜を見る。

「なんですか輝夜。なぜため息をつかれたのでしょうか?」

「いいえただ唯一触れる異性が団長さまが抱き付いているのを嫉妬をしているポンコツ妖精がいますわねと思っただけですわ。」

「ぐううううう」

(あーこの光景、どれだけ年を得ても変わらないなーと)

ベルは抱きしめられながらもこういう変わらない生活を送るのは悪く無いなと思いつつ輝夜はベルが少し元気がないことに気づいた。

「ベル、ダンジョンで何かあったのか?少し元気がないように見えるのだが?」

「.....わかります?」

「見せないようにしているが.....まあそれは詳しくはいつもの会議で話してもらおうかしら?」

「は」

そして全員でご飯を食べてからいつもの報告会議が行われる。ベ

ル自身も参加をしており今日あったことを報告をする。

「それじゃあいつものアストレア・ファミリアの報告会を始めましょう？・リオンから。」

「オラリオでは闇派閥の残党が動いている様子がなかったですね。」

「そうだね。」

「では次にベル」

「……三年前に戦ったあの怪物と交戦をしました。」

「！！！！」

「あの怪物とだと……」

「はい奴は今まで見たことがない電撃を纏った姿となり僕は必殺技で対抗をしました。ですが……」

「負けたのだな。」

「はい……」

「まさか奴は三年間もダンジョンで潜りこんでいたってことか？」

「おそらくそうなりますね。そこにロキ・ファミリアの皆さんもおりまして……奴はそのままいなくなりまして。」

「そんなことがあったとはな……」

「また奴に勝てませんでした。」

「だけど怪我がなくてよかったわベル。」

「アストレア様……」

それからベルは自分の部屋に戻り体を休ませることにした。ゴ・ガドル・バとの戦いの疲れを休む為に。

## キャラ紹介！

ベル・クラネル

所属 アストレア・ファミリア レベル 4

力：ERROR

耐久：ERROR

器用：ERROR

敏捷：ERROR

魔力：ERROR

幸運：ERROR

魔法

『ファイヤーアロー』 炎の矢が空いて二向かって飛んで行く魔法の矢、福音と違い詠唱不要の魔法である。相手に対してすぐに打てるが威力はゴブリンなどは瞬殺ができるほどだが巨大なモンスター相手などには連続で放たないと威力がないが炎のため水属性の相手には効かないが矢としての威力はある。

『サタナス・ヴェーリオン』 アルフィアがベルの体を制御をした時に発生をしたスキル、アルフィア同様『福音（ゴスペル）』という音が放たれて相手を吹き飛ばしたりする威力、ベルがあまり使わなかったまゝに使うことがあり寝ぼけてリニューを吹き飛ばしたほどである。

『ライダー召還』 デイケイドと戦いで力が解放された際に発生をしたスキルだったが魔法の方がいいだろうと主がこちらに変更、様々な仮面ライダーを呼びだして偵察や人助けなどをする。当初は基本形態しか呼べなかったが現在はグラウンドジオウ同様様々なフォームのライダーを出すことができるがグラウンドジオウと違い呼べるの限界で三体である。

技

『地一突き』 相手に突き刺す技 クウガタイタンフォームのカラミテイタイタンと同じ

『炎一閃』 炎を纏い相手を一刀両断にする技 アギトフレイムフォームの技セイバースラッシュである。

『炎二閃』 二刀流で炎を纏わせて相手に対して切り裂く技 元ネタアギトフレイムフォームのダブルフレイムセイバーである。

『竜一閃』 飛びあがり上空から相手を両断にする技 元は龍騎がドラグセイバーで上空から切った技

『拘束一閃』 太刀にエネルギーが纏われてそれを相手に放ち相手が高速したらそのまま接近をして相手を切り裂く。元ネタはファイズのスパークルカット

『雷一閃』 雷を太刀に纏わせてそのまま相手を切り裂く技 元ネタはブレイドのライトニングスラッシュ

『烈火一閃』 太刀に炎が纏われて行きさらに刀身が炎で生成されて相手に対して切り裂く技。元ネタは響鬼の烈火の剣、これは二刀流でも可能である。

『昆虫一閃』 カブトムシ、蜂、トンボ、サソリの四つの技をそれぞれ使うことができる。元ネタはカブトハイパーフォームのハイパーブレイド、ハイパーステイング、ハイパーアックス、ハイパースラッシュである。

『電車一閃』 レール上のエネルギーが発生をして相手を拘束をしてその上に乗り相手を切り裂く技。元ネタは電王ライナーフォームの電車斬り

『狼一閃』 狼型のエネルギーを纏いながら相手を切り裂く技 元ネタはキバガルフフォームのハウリングスラッシュだが口に加えないなどオリジナルと違う技になっている。

『蝙蝠一閃』 太刀の刀身が紅に染まり次々に相手を切った後刀身を十字に上から下に降ろして完全な十字にして倒す技 元ネタはキバエンペラーフォームのザンバットソードのファイナルザンバットであるがザンバットがないのでそれを左手の太刀で十字におろすので代用をしている。

『破壊者一閃』 カード状が発生をしてその中を通り相手を切り裂く技 元ネタはデイケイドのデイメンションスラッシュ。または刀身が分身をした状態になり切り裂く技

『属性一閃』 風、炎、幻想、切り札の力が集結をして相手を一閃をす

る。元ネタはダブルのサイクロンジョーカーエクストリームのビット  
カーチャージブレイクである。

『次元一閃』 刀身にエネルギーを込めて横に一閃、切り裂かれた後次  
元が戻り敵が爆散をする技。元ネタはオーズのオーズバッシュ

『電撃一撃』 刀身に雷エネルギーが貯められてそれを地面に刺すこ  
とで地面一体に電撃を発生させる。元ネタはフォーゼ エレキステ  
イツのライダー百億ボルトブレイク

『宇宙一閃』 宇宙のエネルギーを込められたエネルギーを斬撃波を  
放つ技。元ネタはコスミックステイツのライダー超銀河フィニッ  
シュ。

『〇〇一閃』 ドラゴンの力を込めた斬撃刃を相手に放つ。元ネタは  
フレイムドラゴン、ウオータードラゴン、ハリケーンドラゴン、ラン  
ドドラゴンのスラッシュストライク。そこにはいるのは炎竜、水竜、  
風竜、土竜一閃になる。

『果物一閃』 果実のエネルギーが込められた太刀にを一気に切り裂  
く技。元ネタは鎧武極アームズの火縄大橙無双斬である。

『回転一閃』 自身が回転をして相手を切りつける攻撃。元ネタはド  
ライブのドリフト回転である。

『幽霊二閃』 二刀流を構えて突撃をして相手を切り裂く技。元ネタ  
はゴーストムサシ魂のオメガスラッシュ

『連撃一閃』 接近をして相手に連続した斬撃を浴びせて切り裂く技  
。元ネタはエグゼイドアクションゲーマーレベル2でガシャコンプ  
レイカーソードモードの技(漢字にするのがめんどくさいのではなく  
なかったのだ)

『兔一閃』 太刀を構えて相手に横一線で切り裂く技。元ネタは仮面  
ライダービルドドリルクラッシュャーのボルティックブレイクのラ  
ビットフルボトル装着時。

『時王一閃』 ジオウのギリギリ斬りを太刀で再現させた技

## スキル

家族一途 ベルが関わった人達に関係をするスキルでアリーゼ達

を思っているほど強くなるが最近は多くなり過ぎてアミツドやナアーザやリヴェリア、アイスなどもここに含まれている。いえば彼の近くにいとステータスが上昇をする力があるとのちに判明をした。

魔王のカリスマ オーマジオウの威圧効果がベルの姿でも使用できるようになった感じである。放たればレベル関係なく相手を怯えさせる能力である。ベルはまずこれを使い相手の戦闘不能にさせることから始まり相手がそれでもだめなら変身をしたりして叩きのめすのである。

ジクウドライバー ベルの腰部にジクウドライバーが現れてジオウ、ジオウⅡ グランドジオウ

????に変身させる。

改めてベル・クラネルについて、本来の歴史では14歳でオラリオへと行きヘステイア・ファミリアの団長で活躍をするはずだったが……だが7歳の時にオーマジオウと出会い消滅をする彼を自分の体内に入れて回復させていく。そこにアストレア・ファミリアが現れて彼を連れて行くといいベル自身もお願いをして7歳でオラリオの方へと行き七歳で冒険者になる。

仮面ライダージオウ変身以降13歳まで6年間オラリオでアストレア・ファミリアとして正義の剣と翼に誓い戦い続けてきた。

初期はアーマータムを使い戦ってきたがレベル2となった際にジオウⅡの力を解放、それから10歳でグランドジオウの力を解放させて今に至る。

なお彼の現在の目標は自分を打ち負かしたゴ・ガドル・バに勝つことである。

#### ベルの現在の装備

軽装アーマー ヘファイストス・ファミリアの団長椿作成の鎧、ベルが動きやすい鎧がいいと今の状態である。だがそれでも防御の方は高い方で椿がこっそりと魔力防衛石を組み込んでいるためヘルハウンドの火炎攻撃などは効かないようになっている。

二刀の太刀 ベルがジカンギレードなどをすぐに使えないときに備えてアストレア・ファミリアの眷族たちが自分たちの武器をと試し

た結果輝夜が使う太刀が落ち着くことでこちらも椿作成の二刀流の太刀を生成してもらい装備をしている。

ジカンギレード、ジカンザックス 太刀ができる前までの主要武器、状況において出して使用をしている。

ベルのことを異性としてみているメンバー

アリーゼ、輝夜、リユウ、ノイン、ネーゼ、アスタ、リヤーナ、セルテイ、イスカ、マリユウ、アストレア、フレイヤ、ナアーザ、アミツド、アイズ、テイオナ、アーデイ、シヤクテイ、椿、フィルデイス、レフイーヤ、アナキテイなどである。

## 遠征準備

ベルside

「えつと……必要なものは、ポーションにエリクサー……色々というね……」

僕は今回ロキ・ファミリアの皆さんと一緒に遠征に行くこととなり、現在必要なものを買に行くためにナアーザさんがいるミアハ・ファミリアの方へと向かって歩いていった。

なにせ遠征のため様々な回復アイテムが必要になるためである。

「べーる！」

何か僕に抱き付いてきた。つていやこの感じはつて振り返ると猫耳の黒い髪をした人物ロキ・ファミリア所属のアナキティ・オータムさん通称アキさんだ。彼女は僕にすりすりをしながら自分のしつぽを巻き付かせてきたので驚いている。

「あ、アキさんどうしたんですか？」

「いやーベルが見えたのでついねー」

アキさんはそんなことを気にせず僕を抱きしめてすりすりをしているけどあなたの胸が当たっているんですけど!?!てか気にしないのこの人はああああああああ!!

(まあ仕方があるまい、ベルにあんなことを言われたら彼女も落ちてしまうのはな……)

オーマジオウさん?何か黙っているんですけど……気のせいかな?と思いつつアキさんもどうやらロキ・ファミリアで必要な回復薬などが必要なので買い物に行こうとしたところ僕を見つけて今に至るそうです。変だなーアキさん僕に合うとなんか襲い掛かってきそうな目をしているのは気のせいかな?

ベルside終了

二人で歩きながらアキはベルの方をじーつと見てきた。彼女は色々と悩むことが多かった。死んでいくものを見たりアイズ達よりも遅れてしまっている自分にこのまま冒険者をやめようかと思つたときにアキはため息をついて悩んでいるとびゅんと何かが通り過ぎ



ていったので何事かと追いかけていく。

「どあー！」

「ようやく追いつきました。さあいい加減返してください。冒険者として恥ずかしくないですか!!」

「うるせええええええええええええ!!」

白い髪をした人物が冒険者に対して何かを返してといていたがそんなの関係なしに襲い掛かってきたので彼は横にかわして放たれた腕をつかんで投げ飛ばした。

「ぐふ!!」

「……………先ほどから見ている人どちら様ですか?」

「えっとその……………私……………ロキ・ファミアのアナキティ・オータムって言うの……………あなたは確かベル・クラネル君。」

「はいあっていますよ?」

「それでどうしてその冒険者を?」

「この人、さつき初めてオラリオに来ていた人からお財布を盗んだんですよ。」

ベルはチェックをすると外から買ったであろうものを見つけて出した。

「全くガネージャ・ファミアの人から逃げだしたのを僕が見つけて逃げまくるんですよ? 本当にすぐに出頭をすればこんなことにはならなかったのに。」

「あははは……………ベル君は強いんだね私と違って……………」

「アナキティさん、何か悩んでいるのですか? 僕でよければ聞きますよ?」

「ありがとう。私も最初は英雄になるのが夢だったんだ……………でも現実の違いアイズやほかのメンバーよりも実力など遅れてきてね……………そして死んでいく人を見ていくのが辛くなつたんだ……………冒険者をやめてもいいと思うぐらいにね。」

「……………アナキティさん、僕は仮面ライダーとして戦い続けています。だけど僕にも辛いことがあったりします。」

「ベル君も?」

「死ぬ人を見てやめる人はいます。だけど僕はその人達の分まで生き続けることが大事じゃないかと思っています。それに．．．．．た  
とえ才能の差があってもまだやることがあるじゃないでしょうか？」  
「やることが？」

「そうです。ロキ・ファミアの人達の後輩たちに教えていくことが  
アナキティさんが教えていくべきじゃないでしょうか？」

「ベル君．．．．．」

「僕もオーマジオウさんがいなかったらアキさんのように悩んでいま  
すね。でも僕はそれでも英雄になりたいんです！」

「英雄．．．．．」

ベルは立ちあがり拳を握りしめる姿を見てアキは目を見開いてい  
た。それからベルは彼女の両手を握りしめてこういった。

「もしも絶望になることがあるかもしれない。約束をします．．．  
僕があなたの希望になりましょう。」

「．．．．．ありがとう。」

アナキティは顔を赤くしながらその言葉を受けたのでベルの顔を  
見ることができなくなる。それからもアキはベルを見つけては話を  
聞いてもらったり模擬戦をしてももらったりしてレベル4にまで到達  
をした。

そして現在に戻りミアハ・ファミアに到着をした二人はそれぞれ  
必要なポジションなどを買っていきベルはポジションやエリクサー  
をサポート用のバックに入れていきアキも同じように買ったものを  
しまつていき二人は別れてホームの方へと帰還をする。

「じゃあねベル！遠征の時にね!!」

「はい!!」

お互いに手を振った後ベルはアストレア・ファミアのホームへと  
歩いていく、オーマジオウが中からサイコキネシスを使いベルの重さ  
を軽減をしているため彼は重いものを一生懸命運んでいるが軽い  
なーと思いつつホームへと到着をしてゆっくりと降りした。

「ただいま戻りました。」

「おかえりなさいベル、大変でしたでしょ？」

「ええ、必要なポーションなどをミアハ・ファミアリアで買っておきました。」

「これくらいあれば今回の遠征は大丈夫ね？それにしてもロキ・ファミアリアと合同遠征をするなんてね。」

「普段はないですからね。フィンさんがアリーゼお姉ちゃんにお願いをするところを見ていましたからね。まあライラお姉ちゃんとテイオネさんが火花を散らしながらにらみ合っているのが印象でしたけど……」

「あはははは……」

ベルの言葉を聞いてノインは苦笑いをしながらもらったポーションなどを数を確認をして準備を進めていく。

ベル自身も太刀の整備などをしておりこの数年間改良を続けて今の太刀になっている。オーマジオウはその様子を見ながらベルに声をかける。

『さてベル、明後日からいよいよ遠征だな？』

「はいオーマジオウさん、しかも大人数の遠征など久々ですからね。」

『ああそのとおりだ。念のためにアストレア・ファミアリアには私が境界を張っておくことにしたからな。』

「境界をですか？」

『そうだアストレア殿が狙われる可能性があるからな。一応カッシーンを置いていくつもりだ。』

「あーあの機械さん達ですね？」

『そうだ。ベルの命令にも忠実に聞くだろ？』

「そういえばそうですね。」

『心配することはないと言っておくさ。』

そういつてオーマジオウは何体かのカッシーンを召還をしてベルは相変わらずすごいなーと思いつつカッシーンは膝をついた。

『『ベルさまご命令を』』

「オーマジオウさんから聞いていると思っていましたが。明後日に僕たちは遠征に向かいます。その間アストレア様を守ってください！」

『『我が主君の命令のために！』』

「あ、ついでにアストレアさまの相手もお願いしますね？」

『お相手ですか？』

『えっとどのように？』

「いや普通に話をしたりしてください。」

『それでよろしいのですか？』

『まあいいじゃないかな？』

カツシーンによって性格が異なるのかなと思いつつベルはカツシーンに指示を与えた後にライドウオッチなどのチェックをしてご飯を食べるために部屋に移動をするとカツシーンがすでに手伝っており運んでいる姿を見てオーマジオウは苦笑いをしながらもまあいいかと思いついてみる。アルフィアはその様子を見ながら何事も起きなければいいかと思いつつ無言でオーマジオウが用意をした食事を食べていた。

## 遠征へ

バベルの塔の前の噴水がある場所にてロキ・ファミリア及びアストレア・ファミリアの面々は集まっていた。ロキ・ファミリア団長のフィンが前に立ち号令をする。

「皆、今日はアストレア・ファミリアの面々と共に遠征へと行く！ さあ行くようにしましょう！」

「「「おおおおおおおおおおお!!」」」

全員が気合を入れる中ベルは第一部隊のフィンたちと共に行くこととなり、第二部隊のレフィーヤとアナキティはショボンと落ち込んでいた。一方で第一部隊のアイズとティオナはベルが一緒なので嬉しそうにしており彼らはダンジョンの中に入っていく。ベルの腰部にジクウドライバーが現れてベルはライドウオッチを外して変身をする。

「変身!!」

「ライダータイム！カメンライダージオウ！」

ロキ・ファミリアの面々はベルの仮面ライダーとしての姿を知っているものと知らないものがいたので驚いたりしていたがアリーゼ達はどや顔をしており彼は苦笑いをしながらジカンギレードを構えて現れたゴブリンを倒していく。

「さあ彼に続こうじゃないか!!」

フィンの言葉を聞いてティオナ、アイズやベート達がいき攻撃を開始、アリーゼ達は苦笑いをしながらもリユートとネーゼがいきベルを援護をするためにモンスターを攻撃をしていく。

ベルは状況に応じてアーマータイムをしていく。現在彼はダブルアーマーを装備をして格闘戦でモンスターと戦っていた。

「ベル！お前も格闘ができるんだな!!」

「そうですね。ベートさん!!」

「わかってら!!」

「フィニッシュタイム！ダブル！マキシマムタイムブ레이크!!」

そのまま両肩部のロイドが外れてダブルのマークのように蹴りが

モンスターたちを撃破していき着地をする。

「いやー流石だね……ぜひ欲しいところだよ」

「あげないわよーベルは私たちのだからねー」

自慢の彼を見てフィンがほしそうにしていたがアリーゼに拒否されたので残念と思いつつ彼らは先に進んでいく。やがて第一部隊は17階層へと到着をするとゴライアスが現れたがベルが先に飛びだして現在アーマーはアギトアーマーだ。

「フィニッシュタイム！アギト！グランドタイムブ레이크！」

「はああ……」

足部にエネルギーがたまりゴライアスはベルに攻撃をするが彼は上空へと飛びあがり一気に蹴りを入れてゴライアスを吹き飛ばす。ゴライアスは壁に激突をしてベルは後ろに向いていたので突撃をしたがベルが呟く。

「お前はもう……死んでいる。」

『ぐおおおおおおおおおおおおお!!』

ゴライアスはベルの言われた通りに体が崩壊をしていき全員が驚いている。

「嘘……ゴライアスが一撃!」

「ベルの奴……さらに強くなっているじゃないか。」

「あーベルかっこいいー」

「てい、ティオナ?」

目をハートにしてティオナはうつとりとしていたので姉のティオナは驚いているが、ベルは手を振り先に行きましようといいフィンも啞然としていたがすぐに意識を取り戻して全員で18階層にて休憩をしようといい歩いていく。やがてリヴィラの街近くでテントを張りベルは変身を解除をしておりライドウィッチを左手のフォルダーにセットをした。

『お疲れだなベル、まさかゴライアスを一撃で倒すとはな……正直に言えば驚いているさ。』

「そうですか?ですけどまだ僕たちはいつも来ている場所ですから……いよいよ下層へと行くんですね。」

『ああベル楽しみか?』

「どのようなモンスターが出るのか楽しみつつのが一つです。」  
「ベル?」

「アイズさんどうしました?」

「オーマジオウさんと話をしていたの?」

「ええ、これから下層へ行くので楽しみにしているんですよ。」

「そうなんだ。私はベルがいるから楽しいけどね?」

「え?僕とですか?」

「うん。」

お互いに話をしているとご飯ができたと来たので二人は立ちあがりご飯を食べていた。ご飯を食べた後ベルはこっそりと移動をして服などを脱いで水浴びをしていた。汗をかいたので本当はシャンプーなどを持ってきたかったが湖でやるわけにはいかなかったので全身を水で濡らしていた。

「やっぱりあんまり筋肉とかついていないや……はあ……」  
『別に筋肉がつかなかったからって落ち込むことはないじゃないか?』

「まあそうですけど……」

だが実はベルが湖に行くのを見てこっそりと来ている人物がいた。アストレア・ファミリア団長のアリーゼ、ロキ・ファミリアからはアイズ、ティオナ、レフィーヤ、アナキティの四人である。

「ぐふふふベルの裸……」

「ほええええええ……」

「細いわね……」

「あわわわあれが男の人の……」

「……」

全員がベルが水浴びをしているのを覗いており顔を赤くしていた。やがてベルは湖から出て服を着ようとしたがジカンギレードを出してジュウモードにして構える。

「……気のせいかな?」

(気のせいじゃないんだよな……お前を見て興奮をしている五

名がいたのだが……ベルは気づいていないか。)

オーマジオウはアリーゼ達がベルを覗いていたのを知っていたがベルが気づくかと思いきや黙っていたが彼の反応を見て気づいていないのねと思いつつ最近変態になってきていないかと心配をするのであった。

やがてベルは服を着てテントの方へと戻ると輝夜がいた。

「輝夜お姉ちゃん？なんで僕のテントに」

「ああすまない。ただお前と一緒にいたかったからな……それにテントを一つ買い忘れてしまつてな。それでお前のテントにお邪魔をしようとな。」

「なら僕は外で「駄目だ」ですよー」

ベルは諦めて輝夜と一緒に眠り事にした。彼女の着物の間から谷間が見えてしまいベルは顔を赤らめながら眠る。

だが次の日にアリーゼがベルのテントに行き輝夜と一緒に寝ているのを見てひと騒ぎが起るのであった。



## 階層主との戦い

18階層でテントを張り休息をしたロキ・ファミリアとアストレア・ファミリア、ベルも湖で体を清めた後輝夜と一緒にテントの中で過ごした次の日。

「ああああああああ!!」

「!!」

ベルは叫び声を聞いて目を開けるとアリーゼがこちらに指をさしながら見ていたのでベルは右となりを見て輝夜がベルを抱きしめながらいたので彼は苦笑いをしながら輝夜を起こそうとした。

「輝夜お姉ちゃん、輝夜お姉ちゃん起きてください。」

「うーん、なんだうるさいぞアリーゼ……」

「うるさい?じゃないわよ!!なんであんたベルと一緒にテントで寝ているのよ!!」

「仕方がないだろ?テントが一つなかったのだからな……それ  
でベルのテントで使っていたんだ。別にいいだろうが……」  
「ぐぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎ」

アリーゼは睨んでおり輝夜はふふと笑いながらベルを抱きしめているので彼は苦笑いをしながら彼女の胸が当たっているなーと思いつついつものにぎやかさだなと……それから朝ごはんなどを食べて部隊はさらに降りていく。

ベルもジオウに変身をしてビルドアーマーを装備をして右手にドリルクラッシュャークラッシュャーを装備をして20階層に現れたモンスターガン・リベルラの針をはじかせてそこに輝夜が接近をして切り裂いた。

「流石だね!」

「ふん甘く見るなベル!」

「そのまま降りていくぞ!!」

「了解です!!」

ベルは先に走りベルトを操作をする。

【フィニッシュタイム!ビルド!ボルトイックタイムブ레이크!!】

グラフ状が現れてモンスターたちを挟みこんでそのままドリルクラッシュヤークラッシュヤーを構えながら滑り降りて貫いた。

「流石ベルーロー!!」

「テイ、テイオナさん!？」

テイオナがベルに抱き付いたのを見て第一部隊にいたアリーゼ達はじーっとベルを睨んでいた。アイズも頬を膨らませながら心の中にいる小さいアイズはシユシユと拳を出している。

そのまま24階層まで降りていき中層最後の場所でデッドリーホーネットが現れて針を放ってきた。

「甘い!!」

ベルはジカンギレードで相殺をするとアリーゼが突撃をして切り裂いた。

「どうベル!お姉ちゃんやるでしょ!!」

「ちよ!!」

ベルが前の方からソードスタッグがせまってきたがアリーゼはそのまま振り返り切り裂いた。オーマジオウも戦闘の時は真面目なんだなど関心をしてベルは頭を抑えながらも別のライドウオッチを出して装着をする。

「ライダータイム!カメンライダージオウ!アーマータイム!カイガン!ゴースト!」

ゴーストアーマーを装着をして両肩部から偉人達が現れて突撃をしてモンスターたちを倒していく。リザードマンが襲い掛かるがベルは交わして構える。

「ファイヤーアロー!!」

左手から炎の矢が放たれてリザードマンに当たり撃破した。やがて彼らは24階層を突破をしてベルは初めてみる巨大な滝を見て仮面の奥で目を光らせている。

「うわーっすごい!!」

「そうかベルは初めてか?」

「あの時はオーマジオウさんが言ったから僕自体ははじめてだよ。」

「ふふそうか」

リヴェリアは笑いながらベルに説明をする。

「ここと25階層まで続く滝、名前は巨蒼の滝だ……そして中層と下層の狭間ともいえる場所だ」

「じゃあここからが……下層なんですわね。」

「ああ、ただ落ちたら一生の終わりだ。27階層までつながっているけどな。」

「……僕まだ死にたくありません。」

メンバーは先に進んでいくとカニのモンスターブルークラブが現れてベルはカニなのに前進をしているので驚いている。

「カニのくせに前進している!?!」

「はあああああ!!」

アイズがブルークラブを切り裂いて撃破すると水辺から魚型モンスターレイダーフィッシュが現れる。ベルはそれに気づいてジカンザックスユミモードで放ちレイダーフィッシュを倒した。

「大丈夫ですかアイズさん!!」

「大丈夫、ベル平気?」

「ええカニが前進をしてきたときは驚きましたが……もう大丈夫です。」

「私も最初は驚いたからね。」

「なるほどってほぐうううううう!!」

「今のはイグアス……ベル!!」

「いたたた……何かに体当たりされたので驚きましたがもう大丈夫です。」

【フィニッシュタイム!ゴースト!オメガタイムブ레이크!】

「命……燃やすよ!!」

飛びあがり突進をするイグアスに蹴りが命中をして爆散させる。先に進んでいくとレーザーが飛んできたのでベルはまたしても当たってしまう。

「いたあああああああ!!」

「まずい浮遊水晶(ライト・クォーツ)だ。」

「だったらライダー召還!!」

ベルは魔法のほうに入っているライダー召還でスナイプ、デルタを呼びだしてガシャコンマグナムとデルタムーバーを構えて発砲をして撃破して姿が消える。

「相変わらずベルのライダー召還って便利ね。」

アリーゼはベルが呼びだしたライダー召還を見て便利だわといひ先に進んでいき27階層へと到着をする。

「……あまりいい思い出がない。」

『そうだな……ベル!!何かがいるぞ!!』

「!!」

『ぎやおおおおおおおおおおおおおお!!』

「これっでもしかして………フィンさん!!」

「ああ階層主「アンフィス・バエナ」だ!!」

『ぐおおおおおおおおお!!』

その様子を見ている一人の男性がいた。ゴ・ガドル・バである。彼は階層主が現れてから彼らの様子を見ていた。

「みせてもらうぞリントの戦士、そしてクウガと同じ力を持つ戦士よ。」

【「ジオウ II!」】

ジオウIIライドウォッチを両方にセットをしてベルトを回転させる。

【「ライダータイム!」】【仮面ライダー!】【ライダー!】【ジオウ・ジオウ!ジオウII!!】

ジオウIIに変身をしてアンフィス・バエナは彼らに襲い掛かる。ベルは未来予知を発動させてアンフィス・バエナがどのような攻撃をしてくるのかを読んだ!

「読めた!・ベートさん右にアンフィス・バエナの頭部が来ます!!」

「おう!!おらああああああああ!!」

アンフィス・バエナの頭部を蹴り飛ばすとバエナが攻撃をしてこようとしたがすでにベルの指示でリユーとアイズが攻撃をした後ベルがティオナと共に構える。

「行きますよティオナさん!!」

「うん!!」

「はああああああああああああああ!!」

【ライダー斬り!!】

サイキョーギレードとウルガの斬撃がアンフィス・バエナを攻撃をしてベルは見る。

「リヴェリアさんお願いします!!」

「レア・ラーヴァティン!!」

放たれたレア・ラーヴァティンがアンフィス・バエナに命中をしてベルはティオナをお姫様抱っこをして着地をして降ろした。

アンフィス・バエナは叫びながら崩壊をして撃破された。

「……………流石と言った方がいいな……………お前が強くなるほど……………俺もまた強くなる。」

そういつて敏捷態へと変わり素早く降りていく。アンフィス・バエナを倒した一同……………ジオウⅡの姿のままベルは辺りを見ている。

「どうしたのベル?」

「いいえ、誰かが僕たちを見ていた気がするのです。」

「なんだって……………」

フィンたちは辺りを見るが姿が見えないのでベルも気のせいかなといい彼らは先に進む。

『……………』

「オーマジオウさん?」

『何でもないベル、ただ……………』

「ただ?」

『何事もなければいいが……………』

オーマジオウは嫌な予感がしてたまらないなと思いつつ何事もないことを祈るしかなかった。

天井が見えませんか！

27階層の階層主「アンフィス・バエナ」をジオウⅡの未来予知を使って撃破した一行はそのまま先へと進んでいきベルはライダー召還、アーマータイムを使ってアイズ達とモンスターを倒していき彼は初めての37階層へと到着をして彼は辺りが天井を見上げていた。

「……………見えない!?!」

「そうねここは37階層「白宮殿（ホワイトパレス）」と呼ばれる場所よ。」

「私達も遠征などではここまで来ることがないからな。」

「ほえええええ……………」

ベルはジオウの姿のまま上空を見た、だが彼の視力でも天井が見えないぐらいの高さをしているので驚いているとフィンが説明をする。「いいかい?ここからは戦士系のモンスターが出てくることが多い。そして何よりモンスターが一定数の上限まで無限に湧き出てくる「闘技場」と呼ばれる場所が存在するんだ。」

「そんなところが……………」

「そのとおりだ。コロシウムでモンスター同士が殺し合って強化種になることがある。」

「ほえええ……………」

『ベルは混乱をしているな。』

「そしてここでも階層主がいる。」

「いるんですか!?!」

「そう名前は……………ほら出てきた。ウダイオスだ。」

フィンが言うと言われたウダイオスの姿を見てベルはうわーと見ていた。下半身がなく上半身のみが地面から生えてるように存在をしているからである。

「とりあえずこいつを倒さないと後から来るガレスさん達に被害が出てしまう。」

ベルは現在カブトアーマータの姿でありウダイオスはレベル4のスパルトイを生み出して襲い掛かってきた。ベルはダッシュをしてジ

カングレードでスパルトイを切り裂いた。

だがすぐにスパルトイが槍をふるってきてベルは後ろへと下がりライダー召還でウィザードランドドラゴンを呼びだしてグラビティ魔法を使用させて動きを止める。その間にアイズは飛びだして構える。

「リル・ラファールガ!!」

放たれたリル・ラファールガがウダイオスに当たりダメージを与える。

「流石だアイズ!!」

「待て!」

ウダイオスは咆哮を上げるとそのまま剛腕で合図を殴って吹き飛ばした。

「アイズさん!!」

ベルはクロックアップを使いアイズが吹き飛ばされた場所へと行きクロックアップが解除されると彼女を支えようとしたが吹き飛ばされてきたので衝撃がベルに走り壁に激突をする。

「が!!」

「ベル!!」

「リオン!!」

「わかっていきます!【今は遠き森の空。】

一方でアイズはベルの方を見て涙目になっていた。

「ベル………ごめん私のせいで………」

「大丈夫です。」

彼はアイズをゆつくりと降ろすと立ちあがりグランドライドウォッチを出して押す。

「グランドジオウ!」

そのままセットをして360度ベルトを回転させて姿が変わる。

【ライダータイム!カメンライダージオウ!グランドタータイム!クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイード!響鬼・カブト・電王・キバ・デイケイード!ダブル!オーズ!フォーゼ!ウィザード!鎧武・ドラーイーブ!ゴースト!エグゼイド!ビ・ル・ドー!祝え!仮面ラ

ライダー！グ・ラン・ド！ジオウ！」

ベルのカブトアーマーが解除されてジオウの素体に各仮面ライダー達の黄金のフレームへと変わりそれらがジオウの体に張り付いてグランドジオウが再び降臨をする！フィンやベートはベルのグランドジオウの姿を見て驚いている。

「あれが彼の最強形態……………」

「グランドジオウ……………」

ベルはダッシュをしてスパルトイが襲い掛かる。

「まずはこれだ！」

【アギト！】

2001年の扉からアギトがライダーキックを放ちながら現れてそのままスパルトイに命中をする。

【ドライブ！】

ドライブのマークからトレーラ砲が現れて構えて大型ビームが放たれてスパルトイを消滅させる。ウダイオスは咆哮をして黒い剣を出してベルに振り下ろしてきた。

【ブレイド！】

ブレイドのマークからキンググラウザーが現れてウダイオスが振り下ろした剣を受け止めるとそのままライダーを押ししていく。

【鎧武！】

【オーズ！】

2013年と2010の扉が開いて鎧武とオーズが無頼キックとタトバキックを放ち命中をすると頭部のジオウが動き出した。

「時間よもどれ!!」

するとライダー達の蹴りが戻っていきベルはボタンを押す。

【ダブル！】

プリズムビッカーとプリズムシールドを装備をしてウダイオスに切ってダメージを与えると止まっていたライダー達が動きだして再び蹴りが命中をして吹き飛ばした。

「これが……………ジオウの力……………」

誰もがグランドジオウの力を見て強大だと誰もが思っていた。



フィンもベルを敵にしたら勝てるかどうか分からないぐらいに彼は本気で戦っていないのではないかと……アイズとティオナなどは流石ベルと頬を赤らめながら見ておりベートも面白いと笑っている。

ウダイオスは剣を振り下ろしてベルに攻撃をしようとしたが彼はカブトのボタンを押してクロックアップを発動させて再びカブトのボタンを押す。

「カブト！」

カブトクナイガンを出してそのままウダイオスを切りつけていく。ウダイオスは素早く動くベルについていくことができず攻撃を受けてダメージを与えられて行く。

「これで終わらせる！福音！」

音の衝撃波がウダイオスに放たれて吹き飛ばされた後ベルは着地をしてベルトの操作をする。

「フィニッシュタイム！グランドジオウ！オールツエンティタイムブ레이크！！」

「はあああああ……」

ベルは飛びあがり仮面ライダー達の幻影たちがライダーキックのポーズをとりグランドジオウの右足部にエネルギーが集結してウダイオスに向かって放たれた。ウダイオスは黒い剣を刺そうと向けたがグランドジオウのパワーで剣が粉々に砕かれてそのまま胴体部分を貫通をして着地をする。

ベルは振り返るとウダイオスは雄たけびをあげながら消滅をした。

「流石階層主、グランドジオウでも仮面ライダー召還、武器での連続した攻撃をしたけど……タフすぎる。」

『それが階層主なのだろう……しかもだんだんと下がっていくたびに強くなっている。』

オーマジオウと話をしながらベルは彼らのところへと戻りそのまま先の方へと進んでいく。リザードマンエリートやスカル・シープなど現れたがグランドジオウ形態のベルがライダーを呼んだりして倒していきアイズ達も突撃をしていることもあり彼らは誰も失わずに

撃破していく。

そして彼らは49階層でもアリーゼがベルに見せるためにスキルを発動させて炎を纏わせた剣を使う前にベルがアギトのフレームセイバーを出してそれを使い彼女は階層主バロールを撃破して50階層に到着。

彼らはここで休憩をするためにベルはグランドジオウの変身を解除をする。その後を第二部隊も到着をして彼らは50階層へと到達をしたのである。

「すごかったな……ダンジョンに火山なんてあるんですね……」  
「ダンジョンですからね……」

ベルの言葉にリユースは返して彼は座りながらグランドジオウに長く変身をしてこともあり疲れが出ってしまった。

彼は座りながら辺りを見ながらダンジョンは不思議なところだなと思いつつレフィーヤやアナキティ達が来る。

「ベル聞いたわよ！階層主を倒したんだって!!」

「すごいですねベル！」

「あ、ありがとうございます……」

「あれ？なんか疲れている？」

「グランドジオウの姿を長時間変身をしていたので体力とか……ね？」

「あーなにせここはいつもと違ってモンスターとか強かったでしょ？」

「はい……全然違いました。アーマータイムのことを考えますと……ここからはグランドジオウなどで行った方がいいですね。」

ベルは素晴らしいグランドライドウオッチを出しながら休憩をしていた。やがて全員で夕ご飯を食べながらベルはオーマジオウと話をしていた。

『初めての場所だからな、私もこのような場所に来たのははじめてだ。ベルお前が感じた気配は感じたか？』

「いいえ……今のところは何も……」

『そうか、今のところはか……一応警戒はしておいた方がいいなベルよ。』

「わかっていますよ。」

## ベル待機中

ベルside

50階層にてとりあえずの安全ポイントを確保をした僕たちアストレア・ファミリア及びロキ・ファミリア、現在冒険者依頼をこなす為にフィンさん達とアリーゼお姉ちゃんたちは51階層へと行く中、僕はリヴェリアさんやアキさん達と待機をしていた。

僕はなぜここで待機をしているのかというところグランドジオウを長時間使い続けて変身をした影響かまだ疲れがたまっていたので待機をしているんです。まあ僕自身も疲れている影響もあり待機をしている中でアキさんに抱き付かれながらいた。

「うーんやつぱりベルってモフモフなのよねー」

アキさん……だから前にも思っていたのですがあなたの当たっているんですけど!?わざとなんですか!?僕だって13歳の男子!!正直に言えば辛いんですけど!!これってなんの拷問なんですか!?!

「モフモフうふふふふふふふふふ」

拝啓おじいちゃん、僕は今……戦っています……おじいちゃんからしたら羨ましいことでしょうが……僕も嬉しいんですよ。男の子ですから……それでも先ほどからすごいプレッシャーが僕に襲い掛かるんですよ!ほら見てください!あつちで残っているアストレア・ファミリアのお姉ちゃんたちがすごく僕の方を見て睨んでいるんですよ!!オーマジオウさん助けてください!!

『ベル……流石の私でもお前を助けることは不可能だ。めんご』

めんごってなんですか!?!ん?何事!?なんかモンスターが上がってきたああああああああああ!!僕は立ちあがりグランドジオウへと変身をして襲い掛かろうとしたモンスターに僕はクウガさんの武器ライジングドラゴンロッドをふるい芋虫のようなモンスターを切り裂いた。だが何か変だ……ほかの人たちを見ると何かを発射させたモンスターの攻撃で武器が解けている!?だけドラ

イジングドラゴンロッドには何も変わりはない。

『おそらく仮面ライダーの武器やアイズの武器などは溶けないかもしれないが……今回のモンスターは厄介かもしれないな。』

「だったら!!」

【ダブル!】【フォーゼ!】【ドライブ!】【ファイズ!】

僕は四人のライダーさんを呼びだして突撃させていく、サイクロンジョーカーエクストリーム、コズミックステイツ、タイプトライドロン、ブラスターフォームの形態で呼びだした。

「お願いします!!」

僕はリヴェリアさん達を守るためにサイキョージカンギレードで相手を切り裂いた。

「リャーナお姉ちゃん!!」

「べ、ベル……武器が……」

「わかっています。僕が引きうけますので皆さんを撤退を!!」

「だけどベルも!!」

「リャーナお姉ちゃん!!僕は……俺は仮面ライダー!!戦えない人たちのために俺は戦う!!」

そういつて僕は走りだしてサイキョージカンギレードを構えて必殺技を放つ。

【キングギリギリスラッシュ!!】

「であああああああああ!!」

【プリズムマキシマムドライブ!】

【リミットブレイク!】

【フルフルスピードターイホウ!】

【エクシードチャージ】

四人のライダーさん達と共に必殺技を放ちなんとかモンスターの大群を撃破したけど……まだ音がしているので構え直そうとしたときに音が聞こえてきた。

「ま、間に合ったんだね。」

そう前からクエストをクリアーをして帰ってきたアリーゼお姉ちゃんたちがモンスターを切りながら現れた。

やがてフィンさん達が倒していき僕は膝をついた。やはりまだ精神力などが回復をしきれていなかったのでランドジオウに変身をしたので変身を解除をする。

「ベル……君達が奮闘をしてくれたおかげで僕たちは戻ることができた。ありがとう……」

「いいえ、無事でよかったです。」

僕は立ちあがろうとしたが何か51階層の方からやってくる音が聞こえてきた。しかもそれは巨大な何かで……。しかも膨れているのを見て僕は嫌な予感がした。もしあれが爆発でもすれば……。おそらく大変なことになる。



「撤退をする。」

「「な!!」」

「不本意だ。でも、あのモンスターをしますして、かつ被害を最小限にするにはあい『いや私が行こう!』え?」

「オーマジオウさん?」

『アイズよりも私が戦った方がいいだろう。ベル悪いが体を借りるぞ?』

オーマジオウさんに僕の主導権を渡して（ ）スヤアと眠気が……

ベルside終了

「……」

ベルは目を開けると金色となっており彼は巨大なモンスターの方向へと歩いていく。

「べ、ベルさん!!」

「ベルさま!!」

「二人とも下がっていきなさい。アリーゼ! その子達を頼む!!」

ベルはアリーゼの方を向いてから再び巨大なモンスターの方へと歩いていく。アイズやベートは何をする気だろうと見ているとベルの腰部にベルトが装着された。だがそれはいつもベルが使うジクウドライバーではない黄金のドライバー……。オーマジオウドライバーである。

「変身！」

【祝福の時刻！最高！最善！最大！最強王！オーマジオウ！】

「祝え！時空を越え！過去と未来をしろしめす究極の時の王者！その名もオーマジオウ！歴史の最終章へたどりついた瞬間である！」

「懐かしい……さて悪いが一気に終わらせる！」

オーマジオウはベルトの両側を押させる。

【終焉の刻！逢魔時王必殺撃！】

「ふん！！」

飛びあがり巨大なモンスターに対して必殺の蹴りをお見舞いさせるとモンスターは雄たけびをあげながら先ほど自分がのぼってきたところから落ちていき次の瞬間大爆発が発生をする。

だがオーマジオウは爆発をする場所に結界を張っており被害が出ないようにしていた。モンスターを一撃で倒したオーマジオウ。グランドジオウ以上の力をフィンたちは見ていた。

「す、すごい……」

「ああ……改めて見たが……あのモンスターを一撃で倒した。」

「すごすぎるよベル……」

「かっこいいかっこいいかっこいいかっこいいかっこいいあー駄目！興奮しちゃうよ！！」

ティオナはアマゾネスの血がオーマジオウを見てさらに騒ぎだした。フィルヴィスとレフィーヤも顔を赤らえてアナキティは私の英雄と呟いてアイズも流石ベルと目を光らせながら言いべートは面白いじゃねーかとフィンとガレスもうずうずとオーマジオウとせひ戦ってみたいと思うぐらいに高まつていた。

彼は振り返りフィンのところへと行く。

「さてどうする？勇者よ……モンスターの襲撃で武器などを消耗をしている者たちが多い遠征はこれ以上は不可能と判断をするが？」

「君の言う通りだ。撤退をするぞ！！」

「……さてベル体を返すぞ。」

オーマジオウは変身を解除をしてベルに戻ると彼は膝をついた。

「ベル休んでいいよ。後は私達がやるから。」

「ご、ごめんなさい……………」

リヴェリアはおんぶをする。

「リヴェリアさま自ら!?!」

「……………いいではないか、ベルが奮闘をしていなかったら私達は全滅をしていた可能性がある。これぐらいやっても罰はないさ」

こうしてベルをリヴェリアが背負い彼らは遠征は失敗に終わり50階層にて謎のモンスターたちに襲われたがベルが変身をしたグランドジオウ、オーマジオウの力によって解決をする。



目を覚ましたうさぎ

50階層にいても虫型モンスターなどが現れてベルは疲れている体でグラウンドジョウに変身をして奮闘をしてメインのメンバーが戻ってくるまでの間に戦いアイス達が戻ってきた。だがそのあとに大型モンスターが51階層から上がってきて襲い掛かろうとした。

だがオーマジオウに変身をしたベルによって大型モンスターを撃破したが今までの疲労などがあり倒れてしまう。

現在ベルはアリーゼに背負われながら上がっていた。ロキ・ファミリアとアストレア・ファミリアは18階層まで戻ってきた。アリーゼはベルを降ろして彼の頭を撫でていた。

「アリーゼ。ベルはまだ?」

輝夜の問いにアリーゼは黙って首を縦に振り彼女はそうかといひ倒れているベルの頭を撫でる。

「皆を守るヒーローになる。それがベルの目標だといっていたわね。……. だけどあなたが倒れては意味がないじゃない。」

彼女は素晴らしい輝夜も無言でいた。一方で外ではアキはベルが眠っているテントを見ていた。

「ベル…….」

「アキ、ベル君は?」

「…….」

「そうっすか……. 俺達年下の子に守られたんっすね……. 情けないっす。」

「……. そうね。」

ラウルとアナキティはベルが寝ているテントの方を見ている中。その中では……. 二人がじーつとベルを見ていると彼がもぞもぞと動きだしたのを見て二人は見ていた。

「う……. ううーん…….」

「!!」

白い髪をした人物、ベル・クラネルは目を開けて辺りを見ていた。

「あ、あれ?」

「ベルううううううううううううううううううううううううううううう!!」

「おぎゅー!」

アリーゼはベルに抱き付いた。輝夜も涙目になっており彼が目を覚ましたことを言う為に外に飛びだした。

「………僕は確か………」

「あなたはグランドジオウになった後にオーマジオウになって大型モンスターを倒したのよ。それからあなたは倒れて………18階層までおんぶをして上がってきたのよ。」

「そうだったんだ………迷惑………かけちゃった。」

「何言っているのよ。あなたが奮闘をしたおかげで被害が少なかったのよ?」

「………」

ベルは頭を抑えながらまだ疲れているなーと思いつつ立ちあがろうとしたがフラツとしたのでアリーゼが支える。

「ベル?」

「大丈夫………ちょっとだけまだ疲労感があるみたい。」

「無理をしてはいけないわ。」

「ありがとう………」

そのままアリーゼに支えられながらベルが出たのを見てほかのメンバーもベルのところへと駆け寄る。

「ベル………」

「ベル!!」

「目を覚ましたのですねベル!!」

「皆さん、ご迷惑をおかけしました。」

「何を言っているんだいベル、君が奮闘をしてくれたおかげで僕たちが間に合っただ。お礼を言うのは僕たちの方だよ。」

「フィンさん。」

「ベル、フィンの言う通りだ。お前は誇りに思ってもいい。」

「リヴェリアさん………」

「そうじゃぞー!ベル!」

「ガレスさん………」

そこで一泊をすることとなりベルは体を支えられながら動いていた。やはりオーマジオウの力を使った影響が大きいのか……ベル自身に力が入ってこない。

『おそらく私の力が影響が大きいかもしれないな。』

「オーマジオウさんの力は僕が成長をしてもまだ扱うのが難しいってことですね……とほほほ」

ベルはご飯を食べている間もオーマジオウと話をしながら彼の力を使うにはもつと鍛えたりしないとダメなんだなと思いつつオーマジオウは中からベルの体を回復させていた。

それから一泊をしたメンバー、ベルの体も回復をしたのか彼も前線へと復帰をしたがほかのメンバーは心配をしながらもベルはジオウに変身をしてジカンギレードジュウモードを構えていくとミノタウルスの大群がいたのでかかろうとしたが突然として逃げだした。

「な!?!」

「まずい!!」

「こらー! お前らが逃げるんじゃないよ!!」

「行けない!!」

【ライダータイム! カメンライダー! ジオウ! アーマータイム! チェンジビートル! カブト!】

ベルはミノタウルスを逃がさないためにカブトアーマーに変身をして先に行きクロックアップを発動させてジカンギレードをケンモードに変えてミノタウルス達を次々に切って撃破していく。

「はあ……はあ……」

『ベル無理をするな。お前の体はまだ完全には……』

「だけど!! ミノタウルスを見逃すってことはほかの冒険者たちの人達が危ない!!」

ベルは5階層まで逃げだしたミノタウルスを探してクロックアップを解除をする。

「いったいどこに……」

「うわああああああああああ!!」

「あつちか!!」

ベルは急いで駆けつけつければとミノタウルスが冒険者に襲い掛かろうとしたので急いでベルトの操作を行う。

【フィニッシュタイム！カブト！クロックタイムブ레이크！】

「ああああああああああ！！」

ベルは飛びあがりライダーキックを放ちミノタウルスに命中をして吹き飛ばしてから冒険者の方を見ている。

「今のうちに逃げろ！！」

「うわああああああああああああ！！」

冒険者が逃げだしたのを確認をして彼は構えようとしたがミノタウルスに剣が突き刺さり撃破された。

「！！」

その剣に見覚えがあり彼は後ろの方を見るとゴ・ガドル・バがいた。『ぶもおおおおおおおお！！』

ミノタウルスはそのまま撃破されて剣が落ちる。ベルはカブトアーマーのまま見ておりゴ・ガドル・バは歩いて落ちた剣を拾う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「来い仮面ライダー」

「はああああああああ！！」

【アーマータイム！コンプリート！ファイズ！】

ファイズアーマーに変身をしてジカンギレードを振り下ろす。ゴ・ガドル・バは剣で受け止めた後そのままベルをはじめかかせて後ろへと吹き飛ばす。

【ポインターREADY】【フィニッシュタイム！ファイズ！エクシードタイムブ레이크！】

「ああああああああ！！」

ポインターからメーカーが放たれてそのまま飛びあがりグリムゾンスマッシュを思わせる蹴りを放つ。

ゴ・ガドル・バは剣でガードをしてそのまま上空へと吹き飛ばした。

【アーマータイム！クウガ！】【フィニッシュタイム！クウガ！マイティタイムブ레이크！】

「はああああああああ！！」

上空でクウガアーマーへと変わり右手にエネルギーを込めてそれを叩きつける。胸部に受けてゴ・ガドル・バを吹き飛ばしたがベル自身も膝をついた。

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．．．」

「ベル!!」

アイズとベートが駆け寄り武器を構えていると笑い声が聞こえて煙がはれると胸部にクウガのマークがあり彼はその傷を抑えながら笑っていた。

「クウガの戦士、貴様の名前は．．．．．」

「ジオウ．．．仮面ライダージオウ!!」

「ジオウ．．．．．貴様の強気想い確かに受け取った。また会おう」  
アイズたちは逃がさないと武器を構えたがゴ・ガドル・バは射撃態になりガドルボウガンを地面に放ち逃走をする。

「．．．．．」

「ベル大丈夫!？」

「あ、アイズさん、ベートさん．．．．．あいつに一撃．．．．．与えましたよ。」

ベルは素晴らしいながら親指を立てているとほかのメンバーも到着をしてミノタウルスを倒したことで、さらにゴ・ガドル・バに一撃を与えたことをいい．．．．．彼は気絶をする。

アミツドのところまで再び目をさます。

ミノタウルスを追いかけてベルは追いついて冒険者を助けたがそこにゴ・ガドル・バが現れてベルはファイズアーマーへと変身をしてエクシードタイムブ레이크を発動させたがゴ・ガドル・バに上空へと飛ばされた後にクウガアーマーへと変身。マイティタイムブ레이크のエネルギーを拳に叩きつけて吹き飛ばした。

そしてゴ・ガドル・バは胸部にクウガのマークが残りジオウの名前を覚えてアイズとベートに対してガドルボウガンを地面に放ち撤退をしたがベルは倒れてしまう。

「ううーんあ、あれ?」

ベルは目を覚ましてダンジョンの中じゃないことに気づいた。

「目を覚ましましたねベル。」

「アミツドお姉ちゃん? ってことはここは?」

「はい、ディアンケヒト・ファミリアの病棟です。どうやら傷などは癒えたみたいですね………さてベル。」

アミツドはベルに近づいていき彼を抱きしめた。ベル自身はいきなり抱きしめられるとは思ってもしなかったので驚いている。

「良かった………あなたが無事で、あなたが剣姫たちに背負われてここへ来た時はあなたが死んでしまうじゃないかって思っていました。だからこうして目を覚ましてくれた。本当に………本当に良かった。」

「アミツドお姉ちゃん、そうだアイズさんたちは?」

「あなたを運んだあとに自分たちのやることがあるといいそのままここを去りました。」

「そうですね………お礼も言わないと」

「だめです。」

「え?」

「あなたは一週間安静にしないといけないほど体がボロボロになっていたんですよ! そう簡単に退院などさせませんからね! 当面は冒険者はお休みです! 仮面ライダーもです! いいですね!」

「は、はい!!」

あまりの気迫にベルは押されてしまい彼女はほかの入院をしている人がいるので逃走をしないようにといいベルはベットに倒れこむ。

「はあ………動けないってのも退屈なんですね。オーマジオウさん僕が眠ってどれくらいですか?」

『ベルが倒れてからか………3日経っている。やはりこういうところできちんと治した方がいいな。』

「ですね………」

ベルはゴ・ガドル・バに一撃を与えた後の記憶がなかったためそれから3日も立っていたなんて思ってもいなかったので苦笑いをしてるとアミツドが戻ってきた。

「ベル、あなたにお客さんです。」

「誰ですか?」

「ベル!!」

アミツドの後ろから現れたのはアストレアだった。彼女はアリ―ゼ達からベルが倒れたと聞いていたのでこうして彼が元気にいたので抱きしめる。

(あ、アストレアさまの大きな果実が僕を包んでいく!?)

「アストレア様………ベルは一応病人なので………」

「あ、ごめんなさい、こうして元気な姿を見たのを見てホツとしたわ。それにしてもベル………大丈夫なの?」

「はい、体の方はなんとか………ですがまだだるい感じがしますね。やはりオーマジオウさんの力はグランドジオウ以上の力ですね。」

「そうね、オーマジオウあなたのほうは?」

『私の方は問題ない、やはり無理をして変身するのは駄目だな。だがあの時は私の力じゃないとおそらく解決をすることができないと思いい変身をした。』

「なるほどね。」

アストレアはベルとオーマジオウの話を聞いてこの子はと思いつつ頭を撫でて褒めることにした。

「にゅー」

(可愛い)

ベルがにゅーという声を出したのでアミッドとアストレアは心の中で呟いた。やがてベルは眠くなつたのかアストレアもアリーゼ達にベルが起きたことを報告をしないと行けないので今日のところは帰ることにした。

アミッドも自分の仕事もありベルが入院をしている部屋を後にしてベル自身は病室の窓からオラリオの夜を見ていた。

「……………やっぱり動けないのは退屈ですね。まあ今回は僕が悪いですからあまり言えないですけど……………」

『だがお前は誰かを救うために戦つた。それは仮面ライダーとして当たり前だと思つているかと思うが……………仮面ライダーの中には戦いを楽しむだけの奴もいる。お前はいいほうだ。』

「そうなんですか?」

『ああそうだ。』

オーマジオウは素晴らしいベルの手に何かのメモリなどが現れたので何かと聞く。

『それは仮面ライダーダブルが使用をしていたメモリがジェット、スタッグフォン、バットショット、スパイダーショットだ。流石にこれらをライドウオッチの形にするのは難しいからな。ダブルのライドウオッチを使い生成させてもらった。』

「ほえ……………」

ベルはメモリをセットをする。

【スタッグ】【バット】【スパイダー】

三機は変形をしてベル自身は拍手をする。

「すごいすごい」

『これらを使いダブルはドーパントの事件を解決をしてきたんだ。おそらくベルの力になるだろう』

「ありがとうございますオーマジオウさん!よろしくね?」

ベルはメモリガジェットに頭を下げて彼らはメモリを外してベッドの近くの机に置いた。ライドウオッチフォルダーも外されており



机の上に置いておりジオウライドウオッチ及びバイクライドウオッチが置いてある。

次の日ベルはいつもと同じ時間に目を覚ましたがここがアストレア・ファミリアのホームではなくディアンケヒト・ファミリアの病棟だと気づいた。

「そうだった……僕はあの時運ばれてここに入院をしたんだっただ。なんだかいつもここにお世話になっている気がするな……」  
ベルは素晴らしい朝の鍛錬もできないのでシヨボンとしながらベツトの上で起き上がると扉が開いてアミッドが入ってきた。

「おはようございますベル。」

「おはようございますアミッドお姉ちゃん。」

「ベル駄目ですよ？あなた朝の鍛錬をするのは知っていますけどあなたはまだ体がボロボロなですからね？」

「はい……」

ベルはちえと思いつつもアミッドの言う通りに動かないでベツトの上で寝転がる。やがて朝ご飯を食べる時間となりアミッドは運んできてくれたが……

「はいあーん。」

「えつと？」

「どうしましたベル？」

「アミッドお姉ちゃん、僕腕動かせるけど？」

「いいですからあーん。」

「あ、あーん」

「ベルが行けないんですよ。いくら遠征とはいえ……一週間もあなたのモフモフをさせてもらえなかった罰です。」

「は、はい……って待って!?僕の体って……」

「すでに治っています。けれどあなたが運ばれたときにボロボロだったのは事実ですよ。だから私の魔法であなたの体を回復させたのです。」

「そうだったんですか。」

すでにベルの体が治っていたことを聞かされたがモフモフをさせ

てもらえなかったアミッドは彼の体のボロボロの状況を見て入院をさせることにしたのだ。

「なら僕退院をしてもいいような？」

「だめです。」

「そんなー」

「そういつてあなたは！またボロボロになるのですか!? 私は！あなたがボロボロになった姿をいつも見ていますー！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「仮面ライダーとしてアストレア・ファミリアとしてオラリオを守るためにあなたが戦い続けています。ですがいつもあなたはそういつて他人を優先にして自分の体をボロボロにして・・・・・・・・私はいつもあなたが運ばれて行く姿を見て心を痛めています。わたしだけじゃないナアザ、アリーゼ達も同じ気持ちでしょう。特にあなたを運んできた剣姫はあなたを死なせないでお願いと涙を流しながら私にお願いをしてきました。わかりますか!?あなたが死んだら誰もが悲しむことを・・・・・・・・あなたはそれを忘れていきます!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「無理をするな・・・・・・・・それを言ってもあなたは戦います。だから言います・・・・・・・・死なないでください。あなたが死んだら・・・・・・・・私は・・・・・・・・」

するとベルは立ちあがりアミッドの両手を包むようにして握る。

「ベル・・・・・・・・」

「アミッドお姉ちゃんありがとうございます。僕のことを心配をしてくれて・・・・・・・・僕はあなたたちに助けてばかりです。7歳の頃から冒険者として仮面ライダーとして姉たちの後をついていくばかりでした。こうして13歳となり僕自身も強くなったと思っていました。ですが現実の違い僕はボロボロにされているばかりでした。だけどあなたたちが無事ならそれでいいと思うほどに・・・・・・・・僕は誰も失いたくないんです。もうあんな悲しみを背負うのは嫌なです。」

「ベル・・・・・・・・」

「すみません．．．だからこそ僕は．．．．．仮面ライダーとして戦いますー!」

「．．．．．ふふベル、やはりあなたは英雄になる男ですね。」  
「え?」

「ダカラコソワタシハアナタガスキナンデスネ。」

アミッドは小さい声で呟いていたのでベルは聞こえなかった。アミッドは最後にベルのモフモフタイムを堪能をしてから退院を認めて彼はアミッドの方に振り返りながら頭を下げると前の方から迎えが来てくれた。

「ベル．．．．．」

「リユーお姉ちゃん。」

「お帰りなさい。」

「ただいま。」

## 宴会へ

リユーと共にアストレア・ファミリアホームへと歩いていく、二人は手をつないでおり彼女の長い金髪が風で揺れていた。ベルの髪も揺れるほどあるためリユーはじーつとベルを見ていた。

「どうしたのですかベル？」

「うーん何でもない。」

ベルは何かを考えていたが気にしないことにしてアストレア・ファミリアのホームが見えてきた。ベルは3日ぶりだけど懐かしい感じがした。やがて二人はホームの入り口に到着をして彼が先に扉を開けて中に入ると？

「ベルうううううううううううううううううう!!」

アリーゼが一番に彼に抱き付いてベルは踏ん張り倒れないように彼女を支えた。

「ベル!!」

「ベル!!起きてよかったわ!!」

「ベル本当に生きているのよね!!」

「えっとお姉ちゃんたち心配かけさせてごめんなさい。僕はこの通り元気です。」

ベルは元気の姿を見せるために笑顔を見せて姉たちは久々のベルの笑顔を見て倒れた。ベル自身も姉たちがいきなり倒れたので困惑をしている中ライラは久々にこの惨状を見たなーと思いつつもベルが元気になってくれたことは嬉しいのだがまた惨状が発生するので苦笑いをしていた。

数分後に回復をしたアリーゼはロキ・ファミリアと宴会をすることをいいなぜ今までしなかったのだろうとベルは思っていたがどうやら自分が回復をするのを待ってからやろうってことになりベルはなんだか申し訳ない気持ちになった。それを察した輝夜はベルの頭を撫でてから今日は遅いってことでベルは久々にアストレア・ファミリアのホームに帰ってきた。

現在彼の格好は着物を着ておりこれは輝夜が買ってくれたもので



「あ……………」

ベルは腰に太刀を装備をしていたので冒険に今日は行くつもりはなかったのでもいつもの癖で装着をしていた。彼は顔を赤くしてご飯を勢いよく入れたので咳こんでしまう。

「げほげほげほ！」

「馬鹿！いきなり勢いよくご飯を食べてどうするのよ。」

「ご、ごめんなさい……………」

「まあ恥ずかしい気持ちはわかるけどさ。」

ノインはベルの背中をさすり、落ち着かせるとベルはゆっくりとご飯を食べてから一度自分の部屋へと戻り太刀を置いてから再びリビングの方へと戻る前にアストレアの部屋へと行きステータスを更新をする。

「……………ランクアップが可能になっているわ。」

「ウエ!?本当ですか!!」

「……………ヤッパリと思っていたわ。あなたは階層主を倒しているしそれにあなたが倒させなかったあの怪物に対して一撃を与えた。それがランクアップ可能になった可能性があるわね。おそらく今回の遠征があなたを強くさせたと考えてもいいわね?」

「そうですか。」

「それでどうする?ランクアップはした方がいいかしら?」

「……………お願いします。」

「わかったわ。」

こうしてベルはレベル5になり、明日ギルドに報告をすることにして今日はのんびりすることにした。夜に豊穡の女主人に行くことになっているためあまり遠くに行かないようにしてホームを出る。

彼はオラリオの街を歩きながら左手のスパイダーシヨックの時間を見ながら改めてスタッグフォンやバットカメラをじーつと見ているとオーマジオウが声をかけてきた。

『どうしたベル?』

「いやこのスタッグフォンやバットカメラってどう言う効力を持っているのかなと思いいあして……………」

『うむバットカメラはその名の通りカメラを持っておる。』

「カメラですか？」

『そうだ、バットカメラで撮ったのを見ることが出来る優れたものつてことだ。』

「ほえ………」

『スタックフォンはそれと同じものを持っているものと通信をすることが出来る便利なものだ。お前からしたら離れた場所でも話をする事が出来るつてことだ。』

「ほえ………すごいですね仮面ライダーつて」

（仮面ライダーというよりはこれを作りだした制作者の方がすごいと思うがな私か誑したら………ならファイズフォンXやタカライドウオッチなど誰が作ったのだろうか？）

オーマジオウもファイズフォンXなど誰が作ったのだろうかと考えながらベルと話をしていた。彼はいつもの噴水の場所へとやってきて座った。

「なんかいつものところが空いているからついつい座ってしまいますね。」

『ベルの特等席だなここは。』

「そうですね。」

ベルはオーマジオウと話ながらいろんなところを歩きながらツイントールをした女性がジャガ丸くんを売っているなど思いながら通過をして一度戻りのんびりすることにした。

やがて時間が過ぎて夕方となりベルはアストレア・ファミリアの面々と一緒に行きホームにはカツシン達に任せており彼女達は豊穰の女主人へと向かう。

「見ろよ仮面魔王さまだ！」

「いやいやハーレム兎だろ？」

「いやいや魔王さままだあああああああああ!!」

「………僕、色んな二つ名あるんですね………」

「ベル気にしない方がいいわよ？」

「ですね。」

「ぎーてついたわよ!!」

そして彼女達の中に入りロキ・ファミリアの方は到着を  
していなかった。ベルたちは先に座り待っていると団体客、  
つまりロキ・ファミリアの面々も到着をした。

「おーベルたん!!回復したんやな!!」

「ロキさまありがとうございます。」

「さあ皆お疲れやで!今日は無礼講や!飲んで楽しもうで!!」

「二」わああああああああああ!!」二」



## 豊穰の女主人で宴会へ

オーマジオウ side

やあオーマジオウだ。現在私はベルの中で宴会の様子を見ていた。ガレスとベートとロキは飲み比べをしておりほかのメンバーも楽しそうにしているはずだった。

現在私の宿り主とも言えるベル・クラネルは今何をされているのか？

「こらーベル！私のお酒が飲めないのか!!」

「べール私と飲むわよー」

「ベル……私も飲むから一緒にのも？」

「いや……あの……えつと……」

そうお酒を飲んだ姉たちにお酒を飲もうと脅されているって言った方がいいだろうか？てか13歳なのに飲んでも大丈夫なのか？まあここは異世界だから大丈夫だ問題ないってか!?日本じゃ完全にアウトだからな!!

てか輝夜、貴様着物を着ているのはいいがなぜベルにその谷間を見せようとしている!?てかほかのメンバーを見たらなぜか胸が見えるようにしているのはなぜだ!?あのアイズでさえも今日の服装はエロく感じるぞ!?うーんこれはベル大ピンチだな。

(オーマジオウさん助けて!!なんかお姉ちゃんたちが今日は変です!!)

ベルよ……お前の姉たちはいつも変だからな？そしてすまない……私でもこのピンチを助けることができない。

さてほかのところを見て見た。

「勇者さまー私と二人で飲みませんか？」

「ライラ?なんかいつもと雰囲気が違うような……」

「あ!?てめえ……団長は私んだ!関係ない奴は引っ込んでろゴラあ!!」

「へ!あたしとフィンの付き合いの長さを知らねー奴が口を出すんじゃないよ!!」

「いや・・・僕、ライラと付き合ってもいないんだけど・・・」  
あーあつちでフィンのが好きな二人がとりあっているな、ん？  
口パクでオーマジオウ助けてくれといっているがすまないなフィン、  
オーマジオウさんだって魔王だけど怖いものはあるさ・・・特  
に嫉妬で狂いそうな女性の前ではな・・・さて辺りを見ていた  
が普通に楽しそうに話している。

「ヒック・・・」  
ん？ヒック？

「おうおうベルーーいい飲みっぷりじゃないかー」  
「もう一杯・・・」

何iiiiiiiiiiiiiiii!?ベルにお酒を飲ませたのか!!しかもシ  
ル・・・それはドワーフが飲むって言われるお酒じゃないかあ  
ああああああああ!!なんていうものを飲ませてくれたん  
だああああああああ!!

ってoooooooooooooooo!!ベル思いつきり飲んでいるじゃ  
ねーよ!!ほら見ろ!ほかのメンバーも啞然としているじゃねーか!!

「べ、ベル?」  
「.....」

まで・・・ベル・・・アリーゼをつかんだ後にキスをしたあ  
ああああああああああ!!

「な!」  
「べ、ベルさま!」

「んちゅ・・・あちゅ・・・あ・・・ベルが私にキスをしてくれた・・・  
幸せ・・・」

ベルはアリーゼから口を離れた後、輝夜の方に近づいて彼女にもキ  
スをする。なんで私は実況をしているのだ?

「べべりゅ・・・」

輝夜が目をハートにして倒れた。あーなんてことでしょう・・・  
私のベルがキス魔になってしまった。するとアイズが立ちあがりベ  
ルの前に立ちふさがる。

「待ってベル・・・ここから先にはいかせない。皆は私が守る!」

いや守るって、てか君ウエルカムって顔じゃないかああああああああああああああああああ!!ほらベルが近づいてキスをしたじゃないか!!

「あ、アイズさんとベルさんがキスをしたああああああああああああ!!」

「むーアイズずるいよおおおおおおおお!!」

それから数分キスをしたベルトアイズ、アイズは目をハートにした後に倒れた。だがその顔は幸せそうだったので私は合掌をする。

「待ちなさいベル!」

「これ以上は!」

「行かせないわよ!」

アストレア・ファミリアのお姉さま方がベルの前に立ち立ち向かってきた。だがベルはそのまま彼女達にもキスをして……うわーライラ以外のメンバーが次々にベルのキスにやられていく……うーんオーマジオウさん頭が痛くなってきたよ。

「もう我慢ができねえ!!」

「ライラうぐ!」

ライラがフィンにキスをしたああああああああああああ!!ティオネが切れています!!

「てめえええええええええええええええ!!」

「ら、ライラ……」

あつちはあつちでカオスになっているが、さてそのベル君はリユーに迫ってきた。リユーも覚悟を決めたのかベルのキスを受け入れる。

「チュ……ちゅぱ?べべりゅ……」

「リユーおねえひゃん。」

「な。なあアストレア。ベルたんはお酒は?」

「飲んだことないわよ。てか飲ませてもいないわ……うーんまさかベルがキス魔だなんて……ね?ロキ怒らないであげて?」

「いやうちは別につてべ、ベルたん!」

「べ、ベル!」

リユーをキスで倒したベルはなんと口キさまにキスをした!? つて  
おいしいii!!

「べ、べりゆたん!?んにゃあああああああああああああああああ  
あああ!!」

それから数分後

「あ、あかん……うち……ベルたんがないと……  
ぐへへへへへ……」

「べ、ベル?あの……」

そのままアストレアの口にキスをする。なーにこのカオス? てか  
アストレアよ……お前まっっていましたのような顔をしてベル  
とキスをしているし……あーもう目までハートにしてい  
るし……

「うにゅーべりゆーしゅきよー」

さてこの後の話をしようベルはお酒が足りなかったのかベートと  
ガレスの飲みあいに参加をして見事に勝利をした。その周りにはベ  
ルのキスで倒された者たちがいながらになるが……それから  
解散となったがなんとか全員が復帰をしたがベルが限界を通りこし  
てしまい私が仕方がなくベルの体を借りて今に至る。

全員が顔を真っ赤にしているが私自身は見ていただけなので気に  
しないでいた。

「ま、まさかベルに……あんな風にされるなんて……」  
「正直驚いています。」

「元の原因はお前達がベルにドワーフのお酒を飲ませたのが原因だ。  
お酒がベルの体に変わらなかった……」

「なぜお前はすぐに変わらなかった……」

「面白そうだったから見ていたがベルは酔っぱらうとキス魔になるの  
かとね。ふふ」

「べ、ベルは?」

「中でぐっすりと寝ているよ。まああれだけしたんだ……おそ  
らく記憶に残るかどうかわからないが……まあそれはそれで  
楽しみだ。」

「お前……最悪最低の魔王じゃねーか。」

「フィンとキスをした貴様には言われたくないぞ?」

「……へへ」

ライラは嬉しそうにしていたがほかのメンバーはさらにベルに虜になってしまっておりはあ……ベルよお前はいたいどうなるのか……な。

にやああああああああああああああああああ!!

次の日ベルは目を覚ました。辺りを見てここが自分の部屋だと思  
い昨日のことを思いだした。そして彼はそのまま全身が真っ赤に  
なっけていき布団に丸まったのであった。

『おはようベル、ベル?』

「にやあああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああ!!」

『どうした!?!.....ベルよもしかして昨日のこと.....思  
いだしたのか?』

「うわあああ!!僕は.....僕はなんてことをしたんだああああああ!!」  
(いや姉たちは嬉しそうだったぞ?)

「ロキさまやアストレア様にまでキスをするなんて!!僕はあああああ  
ああああああ!!」

(いやだから嬉しそうだったぞあの二人。)

「それにアイズさんも止めようとしたのに僕は!!なんてことをしたん  
だああああああ!!」

(いやアイズもウエルカムって顔でお前とキスをしていたぞ?ベルの  
勘違いなのに姉たちはすごく嬉しそうにウエルカムをしていたしノ  
リノリでキスをしていたぞ?)

オーマジオウは突っ込もうとしたがベルがあまりにも恥ずかしそ  
うにしていたので黙って突っ込むことにした。ベルがなかなか起き  
てこないでネーゼは部屋に行くとベルは布団で丸まっているので  
布団をはぎ取る。

「うにゅううううううううううううううううううううううう」

「ベルどうしたのかな?」

「僕は一族の恥さらしですううううううううううううううう!!」

「てかベル以外に一族っているのか!」

それからネーゼはベルを無理やり引きずり皆の前に出させる。ベ  
ルは昨日のこともあり姉たちをあまり見ないようにならしていた  
が.....アリーゼは近づいてベルの顔をロックをした。



太刀を抜いて構える。そのまま走りだしてベルは素早い動きでゴブリンを切り裂いた。

「高速一閃……」

高速で相手を懐に入り切り裂く技、ゴブリンは自分の頸が切らされていることに気づかず、絶命をする。ベルはそのまま降りていき6階層へとやってきた。

抜かなかった左腰部の太刀も抜いてベルは二刀流で構える。ウォーシャドウが現れてベルに襲い掛かるがレベル5になったベルはウォーシャドウの攻撃を交わして右側の太刀にエネルギーを込める。

そしてウォーシャドウを次々に切っていき、

「蝙蝠一閃……」

左手に持っている太刀を合わせて十字に降ろしていく。やがてウォーシャドウたちは爆散をして彼は落ちた魔石などを拾っていく。「だがなぜウォーシャドウたちが？ 普段ならこんなに現れることはない……まるで何かに引き寄せられている感じがする。」

ベルは降りて行きながら次々に現れるモンスターを切りながら倒していく。そして10階層へ到着をした時ベルは横にかわすとそこが爆発をしてベルは前の方を見る。

「いったい……」

『あれはエンジンブロスとリモコンブロス、あれは仮面ライダービルドに出てきたネビュラスチームガンで変身をした人物だが……奴らから生命力を感じない。ベル！ 遠慮なくやるといい!!』

「はい!! 変身!!」

【ライダータイム！カメンライダージオウ！】

ジオウに変身をしたベル、二人はスチームブレードとネビュラスチームガンを構えてベルに突撃をしてきた。

ベルはジカングレードを出してエンジンブロスが振り下ろすスチームブレードを受け止めたがそこからリモコンブロスがネビュラスチームガンのトリガーを引いて弾がベルに命中、ダメージを受けているとそこにエンジンブロスが振りかざしたスチールブレードを受



けてしまう。

「なんてコンビネーションだ！」

『変身をしていたやつらは兄弟だったからな、その影響が大きいのだろう。』

「だったらビルドならビルドだ！」

【ビルド！】

そのままジクウドライバーの左側にセットをして360度回転させる。

【ライダータイム！カメンライダー！ジオウ！アーマータイム！ベストマッチ！ビ・ル・ド！】

ビルドアーマーへと変身をしてドリルクラッシュヤークラッシュヤーを構えてエンジンブロスとリモコンブロスは攻撃をしてきたがドリルクラッシュヤークラッシュヤーを回転させてリモコンブロスのネビュラスチームガンの発砲をガードをして胸部からグラフが数式などが現れて二体に攻撃をする。

するとリモコンブロスがネビュラスチームガンを構えてエンジンブロスに発砲をする。

「な!!」

【ファンキーマッチ！】

すると二体が合体をしてヘルブロスになりベルは驚いている。

「合体をした!?!」

『あれはヘルブロス……二体のヘルブロスが合体をした姿になるな。』

ヘルブロスは歯車上のエネルギーを発生させてそれをベルに投げつけてそれを受けてダメージを受けてしまう。

「うわ!!な、なんて威力をしているんだ!!だったら!!」

【ジオウII！】

ジオウIIライドウォッチを分割させてセットをして変身をする。

【ライダータイム!】【仮面ライダー！ライダー！ジオウ！ジオウ！

ジオウII（ツー!）】

ジオウIIに変身をしてヘルブロスの先を読んで構える。

「見えたー！」

ヘルブ羅斯はネビュラスチームガンライフルモードにして発砲をしてきた。ベルは交わしてジカンザックスではじかせた後ユミモードへと変えて放ちヘルブ羅斯のボディにダメージを与える。

そのまま腰部のスイッチを押す。

【ライダーフィニッシュタイム！】

ベルトを回転させて必殺技を発動させる。ヘルブ羅斯が攻撃をしようとしたがジカンザックスユミモードでけん制で攻撃をして飛びあがる。

【トウワイスタイムブ레이크！】

「ああああああああああああああああああ！！」

そのまま必殺の蹴りに変えてヘルブ羅斯のボディに当たり後ろに反転をして着地をする。ヘルブ羅斯はトウワイスタイムブ레이크を受けて火花を発生させて爆発をする。

ベルは変身を解除をしてオーマジオウはいったいなぜヘルブ羅斯が現れたのか不思議に思っていた。

（いったい誰がヘルブ羅斯を？いずれにしてもベルを狙って攻撃をしたのか？それとも別の理由でも？）

オーマジオウは考えながら一度上がった方がいいぞと声をかけてベルも承知をしてダンジョンから出ることにした。

不思議に思いながらホームへ帰る。

オーマジオウside

謎のヘルブロスに襲われたベル、ジオウIIに変身をして撃破をした。だがなぜヘルブロスが？しかも生命力を感じなかったのでロボットかと思っただが残骸などがなかったのでロボット説はなくなつた。

ならばいったい何者がヘルブロスを使ってベルに襲わせただん？いずれにしてもヘルブロスが現れたとなると……これからこのことを考えると用心をした方がいいな……だがいったい？

ベルは腰の太刀を使いながらモンスターを倒していき撃破していた。やがてベルは座り私は声をかける。

『いかがしたベル？』

『いや先ほど倒したアの敵のことを思い出して……』

『ヘルブロスのことか、あれは人間が変身をして物じやないからな……だがなぜあれらがこの世界へとやってきたのか？ビルドライドウオッチは壊れていないから奴らが出てくることはない。だがなぜ？』

私はブツブツ考えながらアルファイアの方も両手を組み何かを考えているようだが……ん？

『ベルガ私以外ノ奴ヲトキスヲ……』

あーしかもオッドアイからハイライトが消えた状態でブツブツ呟いているのですが？オーマジオウさん怖いんですけど……てかこの人昨日ベルが酔っぱらってほかの人とキスをしている時からオッドアイからハイライトが消えていたんですよね。

怖すぎるのですけど!?

「ん？」

『ベルどうしたんだ？』

『いや何かが聞こえたと思ひまして……』

聞こえたね、私には何も聞こえないが？ベルは気になったのか立ちあがり走っていく、その場所についたが何もないのでベルは気のせい

だと思い後ろを振り返る。

『ベル！何がいるぞ!!』

「!!」

ベルは気づいて前へと転がり構える。なんだ？こいつは……

「ちい！別の世界へ来たと思ったら人間がいるじゃねーか!!」

「何だお前は！」

「俺様の名前はサムライワールド！」

「サムライワールド？」

なんか聞いたことがないのだが？てか相手は刀を抜いてきたしてか敵でいいんだよね？ジクウドライバーを発動させてベルはジオウライドウォッチを起動させる。

「変身!!」

【ライダータイム！カメンライダージオウ！】

「貴様は!!」

「俺は仮面ライダージオウ!!」

サムライワールドって一体何だろうか？まあ気にせずにベルは戦う為に行くか。

オーマジオウside終了

ベルがダンジョンで戦いをしている中、はあとため息をつくツインテールをしている人物、名前はヘスティアと神だ。本来の歴史ではベル・クラネルが彼女の眷族になるが今作では全然ないので彼女はいつたいたしたら眷族ができるのだろうか考えていた。

「いったいどうしたら眷族ができるのかなーはあ……」

彼女は落ち込みながら用意された教会の方へと歩いているが倒れている音が聞こえてきたので彼女は急いで駆け寄る。

「大丈夫かい!?うわーすごいボロボロじゃないか……とりあえず急いで教会に運ばないと！」

ヘスティアは彼を急いで自分が住んでいる教会に運んで行くのであった。一方でサムライワールドと交戦をするベル、ジカンギレードをケンモードで受け止めてサムライワールドはベルに斬撃をお見舞いさせていく。

ベルは後ろへと下がり鎧武のライドウオッチを起動させて変身をする。

【鎧武！ライダータイム！仮面ライダージオウ！アーマータイム！ソイヤ！鎧武！】

鎧武アーマーに変身をして大橙丸Zを構えてサムライワールドが放つ攻撃をガードをして両肩部のサブアームを使い大橙丸Zを振り下ろしてサムライワールドにダメージを与えた。

「お、おのれ!!」

「これで「ひゃっはああああああああ!!」どあ!!」

ベルは必殺技を使おうとしたが後ろから攻撃を受けて前にこけてしまう。

「へーい兄弟！無事か!!」

「お前は……」

「俺の名前は騎士ワールド！それ凍れ！」

「うわ！」

氷のような球を発射をしてベルにダメージを与えてきた。サムライワールドと騎士ワールドはベルに攻撃をしようとした時に光弾が飛んできたのでいったい何事かとベルは見てみると一人の人物が武器を構えながら現れた。

「ようやく見つけたぜ。また別の世界へとトジテンダは何を考えているのやら……」

「あ、あなたは？」

「チエンジツツーカー！」

【ツーカーカーカー！】

すると男性は踊りだして持っているのを叩きながらいたのでベルとオーマジオウは驚いているとトリガーを引いた。

【ヨーソロー！ツーカーにレボリューション！】

「海賊のパワー！ツーカーカー！」

「ツーカーカー？」

『聞いたことがない。仮面ライダーとは違う存在か……』  
「痛快に行くぜ！」

もっている武器ギアタリंगाーを放ちながら二体に攻撃をしていくツーカイザー、ベルも立ちあがりグランドライドウォッチを出して装着する。

「グランドジオウ！」

「は!!」

「ライダータイム！カメンライダージオウ！グランドタータイム！グラ・ン・ド！ジオウ！」

グランドジオウに変身をして鎧武を押し出す。

【鎧武！】

鎧武のところから火縄大橙DJ銃が現れて発砲をしてサムライワールドにダメージを与えて隣に立つ。

「へえー別の仮面ライダーってのもいたんだな？」

「別の仮面ライダー？」

「こっちの話だ、は!!」

接近をして蹴りを騎士ワールドに放ち、ベルも続いて別の仮面ライダーのボタンを押し出す。

【龍騎】

ドラグバイザーツヴァイが召喚されてドラグブレードでサムライワールドにダメージを与えていく。

「お、おのれ！」

「は!!」

ツーカイザーが放たれた弾丸が騎士ワールドに命中をしてベルも蹴りを入れてサムライワールドにダメージを与える。

「ツーカイに決めるぜ！」

【全速全身！回せ回せー！いっばーい！ツーカイに、弩ツキューン！】

「ツーカイザー！ゴールドスクランブル！」

【フィニッシュタイム！グランドジオウ！オールツエンティタイムブ레이크！】

「でああああああああ!!」

ツーカイザーから放たれた斬撃と銃撃が当たり、上空に飛びライダーの力を終結させたベルのオールツエンティタイムブ레이크が二

体に当たり着地をする。

「どひえええええええええ!!」

「む、無念!!」

二体は爆発をしてベルの前に何か落ちてきたのでキャッチをする。

「なんでしようこれ？」

『わからん』

「うわ！」

するとその二つが爆発をしたのでベル自身は驚いてしまうが後ろを振り返ると先ほどいたツーカイザーがいたので声をかける。

「助けていただいてありがとうございます。」

「気にするな、俺の名前はゾックス・コールドツイカーだ。」

「僕はベル・クラネルです。」

『………オーマジオウだ。』

「ふーんまあいいや俺の目的は達したしなじやあな。」

そういつてゾックスは去っていきオーマジオウはふふと笑いながらブランクのライドウオッチを作っていた。実はベルが彼と握手をした時に彼の記憶を覗いてゼンカイジャーと呼ばれる存在を見て力を半分ほど奪っていた。アーマー専用武器として考えていたので彼は両手に込めるとすぐにライドウオッチが生成された。

【ゼンカイザー】【ツーカイザー】

『ふっふっふ、貴様がライドウオッチを奪おうとしたのを知っていたからな、ニセのライドウオッチを奪わせたからな。ふっふっふこの魔王相手に泥棒をするなど2万年早いわ!!』

オーマジオウはベルの中でどや顔をしながらゾックスが帰った船でやられたああああああああと叫ぶのを楽しみにしながら笑うのであった。

## 目を覚ました男性

???  
side

「ここは？」

僕は目を覚ますとどこかのベットの上で寝かされていた、だがその場所はまるで廃墟した場所だったので驚いていると一人の女性が現れた。

「やあ目を覚ましたみたいだね！」

そこに現れたのはツインテールをした女性が現れたので僕は驚いている。

「君がボロボロになっていているのを見ておけなくてね。ごめんよーこんなボロボロな場所で……」

「いいえ、あのあなたは？」

「僕かい？僕の名前はヘスティアって言うんだ！これでも神さまでもあるんだよ。」

「神さま？」

何を言っているんだろうか？神さまがいるはずがない……

「あー今、神さまがいるはずがないと思っただろう？残念ながら僕たちは力を封じられているとはいえそういうのはわかるんだよ。」

「そうだったんですね。」

だがどうして僕がどうしてこんなところに……それにここはいつたいたいどころなんだろう？

「……君はここのことを知らないようだね？君の名前は？」

「僕の名前……木場……木場……木場 勇治です。」

木場side終了

さて場所が変わりホームへと戻ったベル、共に戦った謎の戦士「ツーカーザー」のことを思いながらも彼は疲れていたのでホームに帰還をした。

「ふう……」

『ベルお疲れだな？』

「まああれなんですか？サムライワールドとか僕知らないんですけ



ど………」

『いや私もそんな敵は始めて聞いたな。ふーむまあ倒したから問題ないだろ。』

「ですね。」

ベルは歩きながらリビングに戻り誰もいないな—と思いつつソファーに座り疲れた体を休めていた。

やがて扉が開いたので誰かが帰ってきたのだろうとベルは見ているとリユーが疲れたような顔で戻ってきた。

「ベ……ベル………」

「お、お帰りなさいリユー—お姉ちゃん………なんか疲れているね？」

「ええと—つても疲れましたのでベルで癒されたいと思います。」  
「え？」

するとリユーは有言実行でベルに抱き付いてすりすりした。ベル自身も慣れたのか彼女に抱きしめ慣れながらも普通に過ぐしていった。

やがてほかの姉たちも戻ってきてリユーがベルをすりすりをしているのを見て特にアリーゼが叫ぶほどである。

「ずるいわよりオン！自分だけベルにすりすりをしてえええええええええ!!」

「私はちゃんとベルから許可を得てしておりますので」

つといいベルにすりすりを続けるリユーであった。やがてベルは眠くなってきたのかりユーの方へと倒れてす—と寝息を立てながら眠りについた。姉たちもベルは疲れることでもあったのだろうかと思い起きたら聞くことにした。

一方でオーマジオウの方は新たな武器を作っている途中である。ゾックスの記憶から見たゼンカイザーが持っている武器をベースに作ることにしたので完成を急がしていた。

さて場所が変わり保護された木場はヘスティアに自分が何者でなぜこの世界へ来たのか全て話をした。

「……………これが僕がしてきたことです。」

「……………なるほどねオルフェノクと呼ばれる存在に仮面ライダー

ね………そういえば聞いたことがあるね。仮面ライダーというのほ」

「この世界に仮面ライダーがいるのですか!？」

「落ち着くんだ木場君! いずれにしても今の君はオルフェノクじゃないんじゃないのかい?」

「え?」

木場はまさかと思いかつての姿ホークオルフェノクになろうとしたが………変身ができなかった。

「な!?! どうして………」

「それは僕にはわからないけど………おそらくこの世界に転移をした際になんらかの影響で君は人間になったそうじゃないかな?」

「………僕はこれからどうしたら………」

「なら僕の眷族にならないかい?」

「え?」

「こう見えて僕は一人だ。君の寂しさを埋めることはできるかもしれない。」

「ヘスティア:様………お願いします。僕をあなたの眷族に………」

「よしーじゃあ早速やろうじゃないか!!」

木場は上半身の服を脱いで彼の背中に乗り刻む、そしてこれにより木場はヘスティアの眷族になった。

木場 勇治 レベル1

力:10

耐久:10

器用:10

敏捷:10

魔力:10

スキル

剣の生成

盾の生成

「何これ………なんでレベル1なのにスキルを持っているんだい

？」

「剣の生成に盾の生成……まさか!!」

木場は何かを念じると右手に現れた灰色の剣、それは自身がオルフェノクとして使っていた剣そのものだ。

「……そういうことか、君のオルフェノクとして使っていた力はスキルになったわけか。なるほどなるほど……さあとりあえず明日はギルドに行つて提出をしようじゃないか!」

「はいヘステイア様! (乾君、僕はここでもう一度生きて行こうと思う。オルフェノクではなく人間として……君は今何をしているのかな?)」

木場は遠くにいるであろう友人のことを思いながらヘステイアの眷族として冒険者として戦いが始まった。

## 新武器完成

次の日ベルは起き上がり朝早く目を覚ました。その隣にはリユーが寝ておりベルはどうやらリユーの部屋で一緒に寝たようで彼はこつそりと起き上がり外へ行くとオーマジオウが声をかける。

『ベル、新しい武器が完成をした。今転送をする。』

ベルの手にガトリング型のが現れたのでいったいこれは何だろうか？と首をかしげているとオーマジオウが説明をする。

『その名前はジカンガトリング、ツーカイザーという奴の記憶にあつた奴が持っていたガトリングをモチーフにして製造をしたものだ、その上部にライドウオッチをセットをすることでそのライダーの力をモチーフにした技が発動をすることができる。』

「な、なるほど……」

『それと新たなライドウオッチを5個もだ。』

ベルの両手にライダーが二人と三つの顔が現れたのでなんだろうと首をかしげる。

『5つのライドウオッチの名前はゼロワン、セイバー、ゼンカイザー、ツーカイザー、リュウソウジャーのライドウオッチだ。』

「ゼロワンとセイバーって仮面ライダーですか？」

『ああ令和という年号の仮面ライダーだ、そしてリュウソウジャーはスーパー戦隊と呼ばれるでゼンカイザーとツーカイザーはこの間の戦いで出会ったやつの中からな。』

「なるほど……なら新しく試した方がいいですね。」

『そうだな。だがその前に朝食を食べてから行こうな？』

「はい……」

ベルははやく試しなかったがオーマジオウに先にご飯を食べてからといわれたのでシヨボンと落ち込んでしまっただけ早く試しなかったのだらうと思いつつ中座した。

一方で木場はヘスティアと共にギルドの方へと向かい冒険者登録をすることにした。その相手はエイナ・チュールが担当となり彼女から冒険者としての心得などを学ぶことにした。

それから数十分後木場は学んだあとにヘスティアと別れて早速ダ  
ンジョンへ行くことにした。

一方でベルは朝ごはんを食べた後にダンジョンへと入りジクウド  
ライダーが現れたのでジオウライドウオッチを装着をして変身をす  
る。

「変身！」

【ライダータイム！仮面ライダージオウ！】

ジオウに変身をした後左手にジカンガトリングが現れたのでベル  
は構えながら進んでいく。

「は!!」

現れたゴブリンをジカンガトリングを放ち攻撃をして撃破してい  
く。それから電王のライドウオッチをジカンガトリングの上部に  
セットをして構える。

【フィニッシュタイム！電王！バンバンブラスト！】

「は!!」

デンライナー型のエネルギーが発生をしてゴブリンなどが次々に  
撃破されていく。

「す、すごい……」

（自分で作っておいてあれだが……すごい威力だな……）  
オーマジオウも自分で作ったジカンガトリングの威力に驚きなが  
らも先に進んでいく、一方で木場も遅れてダンジョンの中へと入る。

「……が……ダンジョンの中……こんな剣では……」

木場はダンジョンへ行くつてことでもらった剣を見たがこれでは  
いけないなど両手に力を込めると左手に灰色の盾が、右手に灰色の剣  
が装備されてかつてホークオルフェノクとして使用をしていた武器  
を装備をして先に進んでいく。

現れたゴブリンに対して木場は剣をふるい首を切断させる。

「……やはり使いこなした武器でやると戦いやすい、だがオル  
フェノクじゃない今……僕は……」

木場は切りながらもゴブリンたちの力が弱いなど思いながら先に  
進んでいく、一方でベルはジカンガトリングを左手に右手にジカンギ

レードを構えながら降りていた。

13階層にてミノタウルスと遭遇をして彼はジカンガトリングで攻撃をしてダメージを与えた後ジカンギレードで真つ二つに切り裂かせる。

「ふう……………」

「ベ……………く……………ん!!」

「アーデイお姉ちゃん!」

ダッシュをして抱き付いてきたのはアーデイ・ヴァルマだった。彼女はベルを見つけてダッシュをして彼に抱き付いたがすぐにゲンコツが命中をして頭をおさえる。

「何をしているアーデイ……………」

「お、お姉ちゃん……………」

「シャクティお姉ちゃんもいたのですね?」

「やあベル、最近来てくれないから寂しいのだが?」

「す、すみません……………」

「冗談……………じゃないけどな。変身を解除をしてくれないか?」

「え?まあいいですけど……………」

ベルはジオウライドウォッチを外すとシャクティはぎゅつと抱きしめる。

「あ……………この感じ……………虜になってしまう……………」

ベルはシャクティの胸に埋もれながら顔が真っ赤になっていきアーデイは頬を膨らませながらじーつと見ていた。

「あ、あのーシャクティお姉ちゃん……………いったい何をしていたのですか?」

「ん……………あ……………お前に会えたからすっかり忘れていたよ。今私達はモンスターを地上に運んでいるところなんだ。」

「……………もしかしてその時期が近づいてきているのですね?」

「ああ間もなく怪物祭りなのだからな。それで遠征を兼ねてな。それでベルはどうして?」

「新しい武器を試す為に降りてきたんです。」

「そうだったのか……………すまない邪魔をしたな。」

「いいえそろそろ僕も戻ろうと思っていたのでご一緒してもよろしいですか？」

「ああ構わないさ。」

そういつてベルを連れてシヤクテイは待たせているメンバーの元へ行くとガネージャ・ファミリアのお姉ちゃんたちはベルの姿を見て目を光らせてモフモフタイムが始まる。

「ひええええええええええええええええええ!!」

「ベル君今日もモフモフ!!」

「ずるいわよ本当に!!」

「そうそう!!」

ガネージャ・ファミリアの女性陣達に次々にモフモフされていやさかれていく扱いになったベルであった。

一方で木場は四階層まで降りて盾でガードをしてから剣をふるいモンスターを切り裂いて魔石をゲットをして今日はここまでにしよと帰投をする。

彼はホームへ帰るとヘスティアが迎えて彼自身もこんな風にお帰りといわれたことがないので苦笑いをしてしまう。

「いやー無事でよかったよ。どうだった？」

「今のところは問題ないけど……やはりオルフェノクじゃないから体力などが人間とは違う気がする。」

「それはそうだよ。」

2人は話をしながらご飯を食べる。一方でベルの方もガネージャ・ファミリアの人たちと一緒に地上の方へと戻り別れてからモフモフタイムをされたので彼はフラフラしながら帰る。

『だ、大丈夫かベル?』

「……大丈夫じゃないかもです。」

『まあ最近ガネージャ・ファミリアとか行けてないからな……あれ?ベルよ最近ミアハ・ファミリアとか行ってるか?』

「……」

「ベーーーーる??」

ベルは震えながら後ろを振り返ると目からハイライトが消えてい

る犬人「ナアーザ・エリスイス」その人が立っていた。

「ネエネエ、最近来テクレナイケドドウシテカナ？オネエチャンズツ  
コク寂シイ思イヲシテイルノデスケド？」

「あ、いや．．．あの．．．．．その．．．．．」

「ハイ、強制連行？」

「ああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああ

犬人にミアハ・ファミアに強制連行をされた哀れな兎、タカ・ラ  
イドウオツチを起動させて姉たちにまた泊まることを報告をするよ  
うに言い飛んで行く。

なおタカ・ライドウオツチの報告を聞いてまたアリーゼが四つん這  
いをするほどシヨックを受けるのであった。

さて連行されたベル、とりあえずナアーザは一緒にお風呂に入るこ  
とにして彼を風呂場へと連行をして服などを脱がせていく。

「．．．．．」

「な、ナアーザお姉ちゃんどこ見ているの？」

「いや．．．．．ベルも男の子だなど思っただけ。私の胸を見て大き  
くなってきたいるけど？」（笑）

「!!」

ベルは言われて隠したが彼女はそのまま服を脱いでいきすべてを  
さらけ出していっしょにお風呂に入りベルに頭を洗ってもらおうよ  
うにお願いをしてベルは姉たちのように頭を洗う。

ナアーザはベルのテクニクの虜となり体も洗ってもらおうよう  
にお願いをしてベルはえーとなったがアリーゼ達も洗ったことがある  
のでナアーザの膨らんでいる胸などを顔を赤くしながら洗う。

「はあ．．．はあ．．．」

「いかがですか？」

「さ、最高？」

ナアーザは目をハートにしながらベルのテクニクの虜となり二  
人で入りながらナアーザはベルの何かをじーっと見ておりベルは顔  
を赤くして隠していた。



(……やばいナーザの目が発情をしているような感じをしている。襲われないよなベル……)

オーマジオウは心の中でナーザが襲わないか心配をしながら二人は一緒に上がりベルの体を洗った後にベルの着るものを自分のを貸していっしょに自分の部屋に連れていき一緒にベツトに入りナーザはベルをぎゅっと抱きしめながら眠るがベルは彼女の胸が当たっているため赤くしながら目を閉じたが……

(眠れないよおおおおおおおおおおおおおおおお)

「ぐへへへべりゅーりーそんなにやにうーきやにやいでえええええ」

(そして何の夢を見ているのおおおおおおおおおおおお!!)

こうしてベルはナーザの寝言を聞きながら寝ようとしたが眠れないままいたのであった。

一方廃教会の外で木場はオラリオの夜空を見ていた。

「……結花、海堂……乾君……」

「それが君が友達の名前かい？」

「ヘステイア様……はい。」

「そうかい。よいしょつと」

ヘステイアは彼の隣に座り一緒に夜空を見た。

「本当に綺麗な夜空だ。木場君がいた世界では見えたかい？」

「いいえ、僕の世界ではこんなに綺麗な夜空は……ビルなどもここにはなく自然がたくさんありますから……」

「そうか……」

2人は夜空を見ながら木場は頑張ることをいい、ヘステイアも自分も頑張るといい二人は始まる冒険を……

## 眠れない

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ベルは無言で目を開けていた。現在彼はナーザの部屋で一緒に寝ているが慣れていないこともありさらに彼女自身がベルを完全にロックをしていたので眠ることができなかった。

そのため彼は完全に寝不足の状態になっておりオーマジオウは寝ていたの彼は目を開けるとベルが目を開けていたので声をかけようとしたがナーザを見て納得をした。

(あーそういうことか、ベルはナーザが何か言いながら寝言を言っているから眠れなかったのだな？まあナーザの方はすごく幸せそうに寝ているが・・・・・・・・いやーしばらくは起きていたが・・・・・・・・襲われなくてよかったわ。)

オーマジオウはホツとしてしているとナーザが目を開けてベルをじーつとみていた。

「お、おはようございませすナーザうぐ!!」

ナーザはベルを見てからキスをしてきた。しかも舌を入れてきたのでベルはだんだんと目がトロロンとなってきた。

「うふふふおはようベル？」

「ア、ハイ」

ベルは諦めてしまいナーザと一緒に移動をしてほかのメンバーもベルがいることに驚いていたがナーザが笑顔なのを見て察した。

((ベル、ドンマイ))

団員たちはベルに合掌を心の中でして一緒に朝ごはんを食べた。その後ベルはナーザと別れてからホームの方へと歩いていた。

「ふああああ・・・・・・・・」

『眠そうだなベル。』

「そ、そうですね。」

腰部に太刀を装備をした姿でベルは歩いていた。朝日が上がっておりすでに人々は活動を始めていた。ベル自身もはやく戻らないとなーと思いつながら歩いていた。

やがてホームが見えてきて彼は辺りを見ながらこつそりと中に入ろうと歩く、扉を開けてゆつくりと閉めたがベルは何か危険な感じを感じて震えながら振り返る。

「ヤッホーベルーー」

「ひい!!」

そこに立っていたのは赤い髪をポニーテールにした人物が黒い笑みをして立っていたのでベルは怯えてしまう。

「随分ト遅イ帰りダツタワネ? ナアーザノ所ニ泊マツタノヨネ?」

「は、はい……」

「フフフフフフフフフフ」

アリーゼは黒い笑みをしたままたのでベルは怖かった。オーマジオウもアリーゼが纏う黒いオーラを見て嫉妬のオーラが纏われているなと黙ってみていた。

やがて彼女はふふふと笑いながらベルの方へと近づいてそのままベルを拉致をした。果たして哀れな兎の運命はいかに!?

さて場所を戻して「戻さない!!」あ、はい……さて改めてアリーゼはベルを連れてリビングに到着をする。ほかの姉たちもおりじーつとベルを見ており彼は怯えてしまう。

「全くこの兎だけは……どれだけ好かれているのでしょうか?」

「さあ?」

「えっと私たち以外ですとロキ・ファミリアのアイズ、ティオナ、レフイーヤにアキとか?」

「ガネージャ・ファミリアですとシャクティ、アーデイは確定。」

「ほかだとナアーザにアミッドもそうだよね?」

ほかの姉たちはベルがどれだけ好かれているのかわかってしまったため息が出てしまう。このままでは最初がとられてしまうのではないかと不安になってしまっている。

特に団長であるアリーゼは不安満々でベルを膝の上に強制に乗せていた。ベル自身も眠いのでそのまま(☒☒)スヤアと目を閉じていた。現在アリーゼはベルの長くなった髪をいじりながらうとうとうと声をあげている。

「ううううこのままじゃベルの最初がとられる!!よし!決めた!」

「何を?」

「私、今日ベルに捧げるわ!!」

「はあ!?何言っているんだお前はああああああ!!」

「だってこのままじゃベルが誰かに取られてしまうわ!その前にやってやるわああああああああああ!!」

アリーゼは高らかに宣言をしているとベルが無意識に叫ぶ。

「ライダーパンチ」

「え?」

すると紋章が現れてパンチホッパーが現れてアリーゼを殴ってしまおう。

「ぐふ!!」

「二!団長うううううううう!!」「二!」

「サンダー」

ウィザードハリケーンドラゴンが現れてサンダーが発動をしてアリーゼに命中する。

「あばばばばばばばばばばばばばばばばばば」

「むにやむにや・・・」

「べ、ベル・・・恐ろしい子・・・」

「寝ぼけているとはいえ・・・ライダー召還をしましたね。」

「むしやむしや・・・クリアーベント」

「え?」

するとベルの姿が消えたのでアリーゼは立ちあがり探す。

「どこ!?私のベルはどこに!!」

「おまえのベルではないだろうが!!」

輝夜が叫びベルは実はベルデに移動をされておりこつそりと自分の部屋に運ばれていた。だが彼が運んだ場所はアストレアの部屋なので彼女は目を開けるとベルがいたので驚いてしまう。

「ええええええええええええええ!!」

「あ、あれ?なんで僕・・・アストレアさまの部屋に?」

ベル自身も何が起きているのかわからないので首をかしげてい

た。なぜ自分は主神の部屋で寝ていたのかを……とりあえず起き上がり何が起こったのだろうと見ているとなぜかアリーゼが頭が爆発をした状態になっていたので二人は首をかしげているとアリーゼはベルにアイアンクローをお見舞いさせる。

「いたたたたたたたたたたたたた!!」

「ベーーーる?寝ぼけてライダー召還をしないで頂戴」

「す、すみませんでした。」

ベルは謝りアリーゼはアイアンクローを解除をする。ベルは頭を抑えていたが自分のせいなので反省をする。

「さてベル、明日は怪物祭りなので知っているわね?」

「はい、昨日シャクティお姉ちゃんたちがダンジョンでモンスターを輸送をしていたのを見ました。」

「それで私達アストレア・ファミアリアも護衛としてつくことになるけど……ベルは前半グループで後半のほうは自由をしてくれるよ。」

「自由ですか……何事も起きなければいいのですが……」

ベルはそう思いながら無言でいた。一方でヘファイトスのところにヘステイアはいつており彼の専用の武器を作ってほしいとお願いをする。

果たして彼の新しい武器とは!!

## 怪物祭り

ベルside

毎年行われる怪物祭、オラリオが世界に誇るといわれているもので僕も毎年参加をしている。これはガネージャ・ファミリアが調教を行うショーなどがあるが僕はアストレア・ファミリアとして悪事を働く人がいたら未然にふさぐのが僕たちの使命である。

「とりあえず見回りをしましょうかな?」

「ベルさま」

「なんですかフィルヴィスさん?」

「今のところは異常がありませんね?」

「まあ僕が仮面ライダーに変身をして退治をしていますからね。」

「退治をしているのですか……」

「といっても実際に変身はしていませんよ。流石にこの祭りで騒ぎなどが起きるはず……」  
「モンスターが暴れているぞおおおおお  
おおおおお!!」  
「ごめんなさいありました……はあ……」

僕はため息をついて何があったのか見ているとモンスターが街の中で暴れていたので僕はジクウドライバーを装着をしてジオウに変身をして飛びかかる。

「はああああああああ!!」

僕の拳がモンスターの顔に命中をして街の人達が無事なのを確認をしてフィルヴィスさんに指示を出す。

「フィルヴィスさん!今のうちに避難を!!」

「わかりました!皆さんこちらに!!」

フィルヴィスさんが避難を開始してくれたので僕は遠慮なく戦うことができる。

「さあ来い!!俺が相手をしてやる!!」

ベルside終了

一方で木場はヘステイアと怪物祭りを楽しんでいると突然として叫びが聞こえてきて木場は彼女を抱えて飛びあがる。

「ひゃああああああ!!」

「我慢をしてください今は逃げますよ!!」

木場はそういいヘステイアはお姫様抱っこをしながら逃げて、モンスターは雄たけびをあげながら追いかけていたので彼は一度降りてから見ているがモンスターが追いかけてくる。

「くそー!」

「木場君!一度着地をしてくれ!!」

「…………ヘステイア様?」

木場は一度降りしてから彼に渡す為はずっと持っていたものを託す。

「これを受け取ってくれ!」

「これは…………剣?」

「僕の親友に作ってもらった君専用の剣だ。それには神の文字がかかっている。つまり僕の思いも一緒だ。」

「ヘステイア様…………俺は…………俺は戦います!」

すると木場の腰部が光りだしてヘステイアも一体何がと驚いていると腰部にベルトが装着されており彼は驚いている。

「ギア?だけど見たことがない…………」

「木場君!ステータスを更新をする!!」

「え?」

「いいからはやく!!」

「わ、わかりました。」

木場はステータスを更新をしてヘステイア自身も驚いている、彼の新たなスキルが出ていた。

スキル

地のベルト 仮面ライダーオーガに変身をする。

「仮面ライダー…………オーガ…………今の僕はオルフェノクじゃない…………だけど!僕はもう一度戦う!彼らが守ってきたように!!」

木場は立ちあがりオーガフォンを開いてコードを000と入れてエンターを押す。

【スタンバイバイ】

「……………ヘステイア様……………見ていてください。」

「ああ見ているよ木場君、君の姿を！」

「変身!!」

【コンプリート】

彼の体を包みこんでいき今ここに仮面ライダーオーガが誕生をす。左手に持っているヘステイアソードを構えながらオーガは構えて突撃をしてモンスターを切り裂いた。

「すごい……………ファイズとカイザ以上の力だ……………武器は右腰のこれか……………」

右腰に装着をしているオーガストラランザーを構えてトリガーを引き発砲、モンスターにダメージを与えた後にヘステイアソードで攻撃をして撃破する。

一方でオーガがモンスターと戦っている時、アイズ達も謎のモンスターと交戦をしていた。

「何よこいつ…堅すぎるわよ!!」

祭りなので武器を置いてきたティオネとティオナは拳で攻撃をしているが堅くて聞いていない、アイズも攻撃をしているが彼女の現在の武器は代用の武器のためいつも通りに振っているので武器が割れてしまう。

「!!」

「アイズさん!!」

レフィーヤが叫んで植物の花は攻撃をしてきたが剣が飛んできてアイズはそれをキャッチをして触手を切る。

アイズは着地をしてキャッチをした武器を見るとジカンギレードだった。全員が振り返るとグランドジオウに変身をしたベルがおりティオナは目を光らせる。

「ベル!!」

「遅くなりました。ほかのモンスターなどと遭遇をしていたのでこちらに来るのが遅れてしまいました。」

「いいわよー!」

「アイズさんそれを使ってください!」



「いいの？」

「はい、それならアイズさんの戦い方も耐えると思いますから！」

「でもベルの武器が」

「大丈夫です。」

【フォーゼ】

バリズンソードが現れて装備をする。

「こうやって武器を出せますから!!」

ベルはそう言って突撃をしてバリズンソードをふるい植物の花のモンスターに攻撃をしている。

(こいつ、前にも現れた……ならどこかで奴らが動いているのか?)

ベルは戦いながらも見ていたが姿が見えないので地上にはいないのかと思いボタンを押す。

【ウィザード】【ドライブ】【カブト】

扉が現れてフレイムドラゴン、タイプテクニク、ライダーフォームのカブトが召喚されて植物の花に攻撃をしている。

「レフイーヤさん！」

「は、はい！」

「この状況で勝てる方法はあなたの魔法しかありません!!」

「で、でも！私は！」

「あなたはリヴェリアさんの弟子でしょ!!ならできはずです！その間は俺があなたを守る!!だから魔法をお願いします!!」

「はい!!【誇り高き戦士よ、森の射手隊よ。】」

「であー!!」

ベルはレフイーヤに襲い掛かろうとする触手を鎧武の無双セイバーと大橙丸を召還をして切っていく。

【蛮族どもを焼きはらえ！ヒュゼレイド・ファラーリカ！】

放たれた炎属性の広域魔法が発動をして植物の花のモンスターたちを次々に燃やしていきベル自身もヒーハックガンを出して共に炎の攻撃をしてダメージを与えて撃破していく。

やがてモンスターたちを撃破して全員がレフイーヤのところへと

行きベル自身も彼女のところへと行く。

「べ、ベルさん私……」

「ありがとうございます。レフィーヤさんの魔法がなかったらここま  
で撃破していませんでした。」「

「いいえ、ベルさんが守ってくださっていましたから……」

「ベルありがとうございます。」

アイズはジカンギレードをベルに渡して彼は受け取り変身を解除  
をする。一方でオーガの方はミッションメモリを外してオーガスト  
ランザーにセットをする。

【READY】

長身の刀身が現れてオーガフォンを開いてエンターキーを押す。

【エクシードチャージ】

「ふうふう……」

フォトンブラッドの刃が伸びていきそれを振り下ろしてモン  
スターたちを次々に撃破した。

「これで終わりだあああああああああ!!」

縦に振り下ろしてモンスターを真つ二つに切り裂いた。彼はそ  
のまま振り返りヘステイアの元へと戻り膝をついた。

「やりましたよヘステイア様」

「うんやったね木場君!」

オーガの変身を解除をするとベルトがそのまま光って消えた。木  
場はあのベルトは一体何だろうと思いつつながらヘステイアと共にホ  
ムへと帰宅をする。

一方でベルはアイズ達と別れた後考えていた。

(あの植物のモンスターはずっと前に現れた赤い髪をした女性が使っ  
ていたのと一緒に、なら今回の事件にあの人が現れたか? いいや現れて  
いない……なら別の誰かが今回の騒動を利用したのだろうか?  
か?)

ベルは考えながら歩いていると誰かとぶつかってしまいころころ  
と転がってしまう。

「あうちー!」

「あらあらベルじゃない何か考え事をしていたのかしら?」

「ふ、フレイヤ様……」

前から現れたのはフレイヤ・ファミリアの主神フレイヤその人である。ベル自身もまさかぶつかるとは思ってもいなかったのですぐに立ちあがり謝る。

「す、すみません考え事をしていたので。」

「いいのよ、そういうベルを見るのも私は好きよ。」

「はあ……」

ベルはそう思いながらもフレイヤのことは嫌いではないので話をしているとオツタルが現れたのでベルはぎよっとなってしまう。

「ベル・クラネル、今度お前とまた戦わせてくれ。」

「いいですよ? 僕もあなたとやりあいたいですからね。」

「いいだろう。ここに来るといい時間的にここなら大丈夫か?」

「あーこの時期なら大丈夫ですよ。」

「よし決まった。ではフレイヤ様。」

「ええ楽しみにしているわよオツタル」

「は!!」

そういって2人は去っていきベルもホームの方へと帰っていく。オーマジオウの方もあの植物のモンスターがなぜ現れたのだろうかと考えていたが今だ答えが出ないままホームの方へとベルは歩みを進めていくのであった。

## 新たなアーマータイム

怪物祭りから数日が経ち、木場はダンジョンの方へと歩いていこうとしたときに声をかけられる。

「そこのお兄さん。」

「僕のことかい？」

「はい、あの突然ですがサポーターを探したりしていませんか？」

「サポーター？」

木場はサポーターという単語を知らなかったため首をかしげている。彼女は木場にサポーターというのを説明をして木場自身も納得をして両手を組んでから彼女に答えを頼む。

「わかった。僕の名前は木場 勇治だ。」

「私はリルカ・アーデといいます。よろしくお願いします木場様。」

「………木場さま………」

木場はまあいいかため息をついてリルカというサポーターを得てダンジョンへと向かうのであった。一方でベルはアリーゼたちと一緒に入っておりジオウに変身をしていた。

彼は新しいライドウオッチの力を使う為に押す。

【ゼロワン】

「セットをしまわす！」

【ライダータイム！カメンライダー！ジオウ！アーマータイム！ライジングホッパ！ゼロワン！】

ゼロワンアーマーが生成されてジオウに装着、仮面ライダージオウゼロワンアーマーへと変身をする。

「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を越え過去と未来をしろしめす時の王者！その名も仮面ライダージオウゼロワンアーマー！新たな歴史の始まりだ！」

「フィルヴィスちゃんすごうれしそうね？」

「ええなにせ今まで邪魔とかありませんでしたから。」

そういつてフィルヴィスは満足をして自分の武器を構える、ベルはゼロワンアーマーの脚部に力を込めて飛びあがり全員がベルが飛ん

で行ったのを見ているとそのまま落下をして連続した蹴りをお見舞いさせていた。

着地をしたベルはジカンギレードを構えてジュウモードで攻撃をして撃破した。肩部のプログライズキーが光るとバツタ型のライダモデルが現れてモンスターに蹴りをお見舞いさせて消えた。

「「なんだあれええええええええええ!!」」

「バツタが蹴ったわよ!」

全員が驚いているがベルは必殺技の動作を行う。

「フィニッシュタイム!ゼロワン!ライジングタイムブ레이크!」

「とう!!」

飛びあがりそのまま必殺のライジングタイムブ레이크を発動させてモンスターたちを次々に貫通させて撃破した。

一方で木場はリリルカと共にダンジョンへと行きヘステイアソードを使い切っていく、オーガの力を使おうとしたがギアが出てこない。ので彼はヘステイアソードで6階層のウォーシャドウを切つて倒した。

「流石木場さま!!」

「いや俺は強くないよ。(彼に比べたらね……)」

木場はそうブツブツ呟いて彼らはモンスターを倒しながら撃破していく、一方でゼロワンアーマーで進んでいくベルたち、彼らは丁度10階層で休憩をしておりベル自身もゼロワンアーマーを解除をしてジオウの姿のまま座っていた。

「ふう……」

『今のところは異常とかはないな?』

「ええあの人の気配は感じません。」

2人は話をしておりアリーゼ達も念のために武器をチェックをしてから休憩を終えて戻ることにした。

一方で木場たちは今日は切りあげて換金などをして木場はリリにお金の7割を渡した。

「木場さま!」

「いいんだよ、これは僕の気持ちだから……」

「・・・・・・・・わかりました。」

こうして木場と別れたリリルカ、だが彼女は木場からこつそりと剣を盗んで逃げた。一方でベルたちも上がり彼らはホームの方へと戻ろうとしたときに殴るなどの音が聞こえてきたのでベルはダツシユをして殴られている人物を助けるために冒険者の手を止める。

「・・・・・・・・やめろ」

魔王のカリスマを発動させて威圧を与えて冒険者たちは震えている。

「貴様ら・・・・・・・・【ソーマ・ファミリア】か・・・・・・・・この小さきものをいじめて何をしている。」

「う、うるせええええええええええ!!」

一人の冒険者はベルを殴ろうと迫ってきた。

「貴様達は攻撃をしてきた。なら俺はお前達に対して攻撃をしても文句はないな?」

そのまま冒険者の手をつかんで投げ飛ばした。もう一人も襲い掛かろうとしたがそこにアリーゼ達も到着をして抑え込む。

「貴様ら・・・・・・・・どこの兎様を攻撃をしようとしたのかわかっているのですか?」

「アストレア・ファミリア!」

一方でベルは振り返るがすでに女の子の姿が消えていたのでスタッグフォンで追わせていた。

「はあ・・・・・・・・はあ・・・・・・・・」

リリルカはダメージが大きく、すでに限界を迎えていた。

「こ、これが・・・・・・・・リリの・・・・・・・・運命なんですネ・・・・・・・・ふふ・・・・・・・・あつけない・・・・・・・・最後ですネ・・・・・・・・」

リリルカはそのまま倒れた。それをスタッグフォンが見てベルの元へと帰還をする。

## 事情聴取

ディアンケヒト・ファミリアが所要をする病院の一室、一人の少女が目を覚ました。

「こ、こは．．．．．」

「目を覚ましたみたいですね。」

声をした方を見ると白い髪をした女性のような人物が座っていた。運ばれた少女「リルルカ・アーデ」はその特徴などを見たことがあるので目を見開いている。

「あ、アストレア・ファミリアの．．．ハーレム兔!？」

「ずん!!」

ベルはまさかそつちで言われるとは思ってもいなかったのでもうこけるが再び椅子に座り彼女が持っていたのであろう剣を出した。

「!!」

「これには神の力が込められている剣ですね。しかも見た限りでは最近作られた感じがします。ですがおかしいのはなんでそれを君が持っていたかってこと．．．．．そして君をここに運んだのは僕です。ポロポロになっていたのをこいつが見つけてね。」

ベルは懐からスタッグフォンを出してメモリをセットをすると変形をしたのでリルルカは目を見開いたが彼はそんなのは関係ないかのように話を続ける。

「ソーマ・ファミリア」

「!!」

「やはりあそこのファミリア関連か．．．．．さてリルルカさん、なぜあなたはそこまでして脱退をするためにお金が必要なのか話してくださいますね?」

「．．．．．はい。」

リルルカは全てを話した。自分の両親は神酒のために無謀な冒険をして死んだこと．．．．．冒険者が憎いこと．．．．．ファミリアからぞんざいな扱いを受けたことなどを全て話した。

「．．．．．そういうことだったのでですね。いいですよ入ってきても」

ベルが言うと一人の男性が入ってきてリリルカは目を見開いた。

「木場……様……」

「実は彼が剣を探しているのを聞いていっしょに探していたんですよ。そうしたら君が持っていたので話を聞くために別室で待機をしてもらっていたんです。」

「……リリ……」

「!!」

リリルカは自分が裏切ったので目を閉じていたが……彼は彼女の頭を撫でた。

「……君もつらい人生を歩んできたんだね。」

「……木場さま?」

「……ベル君、リリ……僕の話聞いてくれるかい?」

「木場さん?」

木場はかつて自分はオルフェノクと呼ばれている存在だったこと、2年間植物状態になり彼女などにも捨てられたこと……裏切りなどあったことなど全て話をした。

(木場 勇治、かつて乾 巧と戦ったオルフェノク……それが今は人間としてこの世界で生きているってことか……まるで私がベルの中にいるのと同じだな。)

オーマジオウはそう呟きリリルカ自身も顔を下げてしまう。ベル自身も木場がフェイスとして戦っていたことなどを聞いて驚いてしまう。

やがて木場とリリルカを二人だけ残してベルの隣にアミッドが立つ。

「ベル……どうするのですか?」

「……ソーマ・ファミアのソーマ様はおそらくファミアの運営には関わっていません。真犯人はザニス……その人で間違いないでしょう。」

「ベル……どうするのですか?」

「決まっています。ザニスを叩き潰します。」

「なら僕も協力させてくれないかい?」



「木場さん……」

「僕もリリをほつとけない。だから君の力になりたいんだ!!」

「……わかりました。今夜来てください。」

「ベルさま……木場さま……どうしてこんなリリを？」

「決まっているじゃないか。」

「困っている人を見捨てるわけにはいかない！」

「それが仮面ライダーだ!!」

「仮面……ライダー……」

ベルはアストレア・ファミリアのホームへ帰還後、アストレアに今夜のことを話しをした。なおほかのメンバーには内緒でお願いをした。

「……はあ……あなたって子は……」

アストレアは時々ベルが大胆な行動をするので苦笑いをしていた。

「すみません。ですが！」

「わかっているわ。実はソーマ・ファミリアに関しては証拠などがなかったけどベルが貸してくれたこのメモリガジェットだっけ？これのおかげで便利に証拠などが集まっていたのよ。」

「アストレア様……それでは！」

「やってきなさいベル！あなたの正義を！剣を見せてちょうだい!!」

「はい!!」

その夜ベルはこっそりとホームを出ていき、木場と合流をする。

「木場さん、これを」

彼が渡したのはファイズのライドウオッチだ。

「これは？」

「押してみてください。」

木場は言われたとおりに押した。

【ファイズ】

するとライドウオッチが光りだして木場の腰にファイズドライバーが装着された。

「これはファイズドライバー……」

「それを貸しますね？」

「……………ありがとうベル君。」

2人はソーマ・ファミリアの前に到着をするとベルはジクウドライバーを装着をしてジオウに変身。

「……乾君、僕はこの世界でも仮面ライダーとして戦うよ。君の力を貸してくれ！」

木場はファイズフォンを開いて555と押してからエンターボタンを押す。

「スタンバイバイ」

「変身」

【コンプリート】

仮面ライダーファイズに変身をした。木場はオルフェノクじゃないのになぜ変身ができたのだろうと思っているとベルの中にいたオーマジオウが声をかけた。

『サービスだ。ベルの思いに答えるために私が力を貸したんだ。』

「……………そういうことだったんですね。」

「さあ行きましょう」

ジオウに変身をしたベルとファイズに変身をした木場はソーマ・ファミリアに乗りこんだ。

ザニス は仮面ライダーが襲撃をしてきたことを聞いて急いで指示を出して迎撃をするが元々お互いに争っているメンバーが協力をすることなどなくジオウとファイズのパンチとキックで撃退されていく。

やがてソーマがいる場所に到着をしてザニスは怯えていた。

「始めましてではないですねソーマさま、僕たちが用件があるのはそこにいるザニスですね。」

「……………そうか。」

「な、なんだお前たちは!!」

「ザニス・ルストラ！貴様が様々な裏取引などをしているのは明白をしている！お前の欲望で団員たちを始めソーマさまのお酒を飲ませるといふ嘘を言い自分だけ儲けようとしたお前の物語は終わりだ！」

「くそおおおおおおおおお!!」

「ここは僕に」

ザニスは怒りで剣を持ち接近をしてくる。木場は左腰のファイズショットを取りミツシヨンメモリーをセットをする。

【READY】

そのままエンターキーを押して構える。

【エクシードチャージ】

「うああああああああああああああああああああああああああ!!」

ザニスの胴体にグランインパクトを放ち吹き飛ばした。

「があああああああああああああああああああ!!」

「ザニス・ルストラ!今までのソーマ・ファミリアでの横暴などを含めて逮捕をする!!」

ベルは気絶をしたザニスをグルグル巻きにした後もう一つの要件を終わらせるために話をする。

「あともう一つ……リリルカに関してですが……」

「……二人にこれを飲んでほしい」

ソーマが出したのは自分が作ったお酒を飲ませる。二人は変身を解除をして飲んだ。

「……確かにおいしいけど何かが違う。」

「そうだね。美味しいけど……違う感じがする。」

「やはりそうか……私は間違っていたのだな……よからうりリルカの脱退を認める。そして私はもう一度考え直す……ザニスのようなものを二度と生まないためにも……」

「あなたならやれますよソーマさま」

そういつてグルグル巻きをしたザニスを連れてベルと木場はソーマ・ファミリアを後にした。やがてグルグル巻きをしたザルドをガネージャ・ファミリア前において帰り木場はファイズライドウオッチをベルに返して受け取りししまう。

「ありがとうございます木場さん。」

「ううん気にすることはないよベル君。」

「ではまた会いましょう。」

「ああまた会おうベル君」

2人は握手をした後に別れてベルはホームがある方へと歩いていく。彼は上がっていく朝日を見ながら……

なお帰ってきたら姉たちがニコニコとした笑顔でいたが……ベルは恐怖しかなかった。

「ニコシアベル、オ話ヲシマシヨウ？」

「……」

それから数日、ベルは木場とリルルカと一緒にいる姿を見ていた。彼らから話を聞くとリルルカはそのあとはヘステイア・ファミリアに入団をして現在はヘステイアと取り合いをしているそうだ。

## 新たな事件

ベルside

ソーマ・ファミリアで起こった事件は解決をした。その日の朝に帰ってきたときに見た姉たちの顔を僕は今でも忘れない……。正直に言えばまるで化け物を見たような感じだ。

あんな顔をした姉たちを見たのは初めてだったから怖かったとっておきます。事件を解決した数日後僕は木場さんとリリが一緒にいるのを見てホツとしています。

あの後リリはヘスティア様の眷族なったみたいで僕もホツとしています。あそこならリリも安心をするからね。

現在僕は何をしているのかといいますと外でジオウに変身をしてジカンギレードを使いふるっていた。今日はダンジョンにはいかずにホームで鍛えていると夫婦でいいのだろうか？貴族の人がやってきたので僕は声をかける。

「……………あの？」

「仮面ライダー！ってことはここはアストレア・ファミリアのホームで間違いない！」

何かあったのだろうか？僕はとりあえず変身を解除をしてアストレアさまがいる場所へと案内をする。

「ベル、あなたもいなさい」

「わかりました。」

ベルside終了

今回やってきた人物の名前は男の方はヒューイ、妻の方はカレンという人物である。二人にはアンナという一人娘がいた。だがヒューイがギャンブル好きでなんとアンナを無理やり旦那にして賭けを続けた結果家も娘もすべて取られたという。

(なんとというかこの人の自業自得としか思えないのですが?)

(そういうなベル、人間そういうところがあるのだからな。だが変だな……………冒険者を使って人身販売でもしている可能性があるぞ?)

(それって……まさか!!)

ベルとオーマジオウはテレパシーで話を続けている中アストレア・ファミリアが引き上げることとなりその夜にベルはアリーゼの間に挟まりながら話が始まる。

「確か前にこのような手口がありましたか……とりあえず調べる必要がありますね。」

「なら僕がライダー召還を使いましょう」

ベルはライダー召還でビーストとベルデを出して二人にアンナ・グレースのことを調べてもらうようにいい二人はカードと指輪を出して何かをする。

「カメレオ！GO！カ・カ・カメレオ！」

「クリアーベント」

二人が姿を消したのを見て全員が驚いているがベルはどや顔をしながら見ていたのでイラッと来た輝夜がでこピンをした。

「あうちー！」

「なんか腹が立った。」

「すみませんでした。」

ベルはすぐに謝り輝夜は許してアリーゼからベルを取り自分のまの間に収めた。それから数日後ベルデとビーストが帰ってきたのでベルは彼らをとりこんで情報を確認をする。

「すでにアンナさんは別の場所に売られてしまったみたいです。場所は……グラン・カジノ……聞いたことがない場所です。すね。」

「『グラン・カジノ……』」

ベル以外のメンバーはグラン・カジノという単語を聞いて両手を組んでいた。ベル自身は首をかしげていたので近くにいたアスタが説明をする。

「ベル、グラン・カジノってところはギルドですら口出しをすることができないオラリオの治外法権なの。」

「ってことは？」

「そう簡単に攻め込むわけにはいかないってことなの。だからせめて

内部に入れれば」

「内部に入れればいいのよね？」

「「「え？」」」

アストレアはどこからゴールドカードを出したのでアリーゼが代表で聞く。

「あ、アストレア様それは？」

「実はね、ここオラリオに設置されたファミリアの主神には、無条件で『大賭博場』のゴールドカードが一枚支給されるのよ。これはファミリア名義だから、そのファミリアの眷族が一人でもいれば最大三人まで誰でも入れるのよ。ゴールドだからもちろん『エルドラド・リゾード』にもね」

「これに適応をしているって幸運だけどERROR表示の……」  
姉たちはベルをじーっと見ていたので彼は辺りを見てから指をさす。

「ほ、僕？」

『なるほど幸運を持っているベルならできることだな……だがそうなるその後二人はどうする気だ？ベルが変装をすれば一人はアストレア・ファミリアで行けるしもう一人もどうにかすればいけるだろう？』

「「「なら私が!!」」」

こうして始まったベルと共にカジノへ行く戦いが今始まる。果たしてその勝者は一体……

## カジノへGO

オラリオ南方、繁華街の一角に存在をする大賭博場区域に向かう馬車の中……白い髪に片目を眼帯をつけて長い白い髪をポニテールにしている人物、我らの主人公「ベル・クラネル」である。

一人は機嫌が悪そうに着物を着て、もう一人は嬉しそうにベルの隣に座っている。

「ツチ」

「何か申し訳ありません。」

そう勝ったのは輝夜とフィルヴィスの二人で、輝夜はアストレア・ファミリアとしてフィルヴィスはベルの妻として彼と共に来ている。エルフの奥さんとして来ているため現在二人は夫婦という役で輝夜と共に来ている。

「全く、私は勝ったのに意味がないじゃないか……ベルノオクサン」

輝夜はボソリと言いベルはあの戦いの時のことを思いだした。ライラ以外の姉たちがまるでその隣を狙っているかのように戦い見事に勝利をした二人、そして最後に勝利をしたのがフィルヴィスなのだ。

そして三人はグラン・カジノに侵入をするために様々な場所と交渉をして現在までに準備が整いいざ出陣をしたのだ。

「いいかベル。お前の幸運を使いカジノで暴れるといい……まあ暴れてもらった方がいいがな。」

「は、はあ……」

『カジノか……』

「オーマジオウさんは行ったことは？」

『あるわけなからう。』

「ですよー」

やがて馬車はグラン・カジノに到着をして三人は中へ通るためゴールドカードを輝夜が提示をする。

「確認をしました。ところで男性のお名前は？」



「失礼、私はアミュード・マクシミリアンといます。こちらは妻の「アミレット・マクシミリアンといますわ。」

「そうですか、では素敵な夜をお過ごしください。」

やがて三人は中へと入りベル自身は初めて来たので目を光らせていた。片目なのでやりずらいが隣のフィルヴィスが支える。

「ベルさま、あまり無理はなさらないでください。普段は眼帯をなどお付けしないので……」

「す、すみません。」

ベルは謝りカジノの中に入る、トランプ、ダイス、そしてルーレットなど……ベルにとって初めてのことばかりなので彼は興奮をしていた。

「うふふ落ち着きなさいベル、私たちの役目はわかっていますわよね?」

「もちろんですよ。ジオウに変身をして叩きのめす」

「違う違う」

「とりあえずベルは初めてのばかりだルーレットでやってみたらどうだ?」

輝夜はベルに初心者でもできるルーレットのところへと行きベルは座りディーラーの人の女性が初心のベルに教えてくれたので彼はお礼を言い彼女は顔を赤くしながらスタートをする。

だがそれが地獄の始まりだった。

「青に5枚」

ルーレットの弾が青の6に入りベルは10枚帰ってきた。輝夜とフィルヴィスは最初の方は笑顔で見ていたが……段々とベルのペースが上がってきたのか顔が苦笑いへと変わっていく。

ディーラーの女の人も最初は応援などをしていたが……段々当たっていくベルを見て涙目となっていく。

「つ、次の……赤の9」ふええええええ……」

そして赤の9に入って当たったのでオーマジオウもディーラーの人に申し訳ない気分でした。ベルの方は楽しくなりまだやろうとしたが輝夜がストップをかける。

「べ、じゃなかった。マクシミリアン殿ストップです。」

「え?」

「ひつく・・・ぐす・・・・・・・・えぐ・・・・・・・・」

「あ、あれ?」

ベルもディーラーの人が泣いてしまっているのを見て彼女の手をとる。

「失礼、あなたのような素敵な人に涙は似合いません。どうかこれでご勘弁を」

ベルは彼女の手甲にキスをしてディーラーの女性は全身が真っ赤になりそのまま倒れてしまう。ベル自身はおかしいなーと思いがら両手を組んでいると彼の肩を握りしめる人物が二人いた。

「どういふことかな?」

「いやー前にロキさまが女性にはこういうのがええでと言っていたので。」

「あの胸ぺったんがああああああああああああああああああああ  
!!」

ロキ・ファミアアのホーム

「ふえつくしゅん!!」

「どうしたんだいロキ?」

「いや、誰かに噂されているかいなと思ってな。」

「気のせいじゃないかな?」

「せやかな?」

一方でベルたちは次のポーカーのところへと移動をしてベルが座りディーラーと勝負はやめて客同士のポーカーに挑む・・・・・・・・ここでも地獄が始まった。

「フラッシュ」

ここでもベルのERRORの幸運が始動をして次々に勝っていく。輝夜とフィルヴィスは苦笑いを通りこしていた。その様子をこっそりと侵入をしてガネーシャ・ファミアアの中にいたアリーゼ、マリユ、アーデイは苦笑いをしていた。

「え、ベルの幸運ってあんなにすごいわけ?」

「知らないけど……さつきベル君女性の手の甲にキスをしていたよね？」

「うんしていたね。」

三人は目からハイライトを消した状態で話をしていたのでシャクティ自身もベルがキスをしていたのを見てアーデイたちのようにハイライトは消していなかったがオーラを纏わせていた。

そんな様子を知らないベルは次々に勝っていき大量のチップを手に入れていた。

「……………」

輝夜とフィルヴィスはまさかここまで幸運が強いとは思ってもいなかったのだからベルが白い魔王と呼ばれそうじゃないかと思いつながら一緒に歩いていると一人のガードマンが来た。

「失礼いたします。マクシミリアン殿、さらに輝夜殿、オーナーがぜひ会いたいとおっしゃられておりました」

「ほほうオーナがですか……………よろしいですか輝夜殿？」

「ええ構いませんわよ。」

「君もいいね？」

「もちろんです……………貴方」

三人はその人物の後をついていきビツブルームがある場所へと入っていく。

## オーナーとの会合

オーマジオウside

ベルの幸運が大爆発をしてすごく稼いでいる気がするのだが……正直に言えばERROR表示なのにここまで幸運がすごいのは正直に言えば私自身も唾然としていた。現在私達はオーナーとよばれる者に呼ばれて入れないと思っていた扉の中へと入り物静かな場所に到着をした。

辺りには美女がたくさんおりまるでバーでもいる気分だよ。さすがビップルームだけあるな……やがて先に案内が進んでいきまっているかのように座っている人物がいた。

「始めまして私の名前はテリー・セルバンティスと申します。このカジノのオーナーを務めているものです。今夜は遠路はるばるお越しくださいありがとうございます。」

「いえいえ輝夜殿に誘われてきたものですから。」

さて改めてテリーという人物を見てみるか、ドワーフの人物であり愛想笑いをしているのが見てわかるな。さてこいつが今回の事件の黒幕か……とりあえずベルが勝負をすることになるが……まあ大丈夫だろうなイカサマだろうが今のベルには意味がないだろうな。

「では早速でありますか……ゲームを始めてもよろしいでしょうか？」

「いいでしょう。」

ふふ馬鹿なやつだな……愚かにもベルに挑戦を叩きつけるなど言語道断……さあベル、正義の鉄拳をお見舞いさせるといいさ。

オーマジオウside終了

輝夜とフィルヴィスは心配そうに見ていた。なにせこのゲームはベル以外はグルみたいなのでディーラーなどもグルなのであるがベルはニヤリと笑っておりゲームが始まる。

だがすでにこのゲームは兎のワンサイドゲーム化をしていたのだ。

「フラッシュユ」

「な!？」

次のゲームでも

「ストレートフラッシュユ」

「げげ!？」

さらにさらに

「ファイブカード!」

「ぐおおおおおおおお!!」

そして次々に勝利をしていき最後は

「ロイヤルストリートフラッシュユ」

そしてついに最後はロイヤルストリートフラッシュユが決まりテ  
リー達のチップを全てベルが手にしたのだ。

「な、ななななななな……馬鹿な……」

「最初に言っておく……俺はかーなり強い!さてあなたたちの  
負けですね。全てのチップは現在俺のところにあります。」

「イカサマだ!!ロイヤルストリートフラッシュユなんか絶対にできない  
ように仕組んでいるのに!なぜだああああああああああ!!」  
「ようやく吐いてくれましたね?すでにこのことは録音済みですよ  
?」

【バット】

「な!?! 貴様ああああああああああああああああ!!」

テリーは怒りでベルに殴りかかってきた。だが彼は殴ってきた手  
をつかんでそのまま背負い投げをして投げ飛ばした。

「がは!!」

「今、あなたは自分でイカサマをしたと言いましたね。レディーあな  
たを迎えに参りました。」

「あ、あなたは……」

ベルは眼帯や結んでいる髪などを降ろして腰部にジクウドライ  
バーを装着させた。テッドは起き上がりベルの腰部についているの  
を見て驚いている。

「な!?!そ、それは!!」

「変身！」

【ライダータイム！仮面ライダージオウ！】

「貴様の正体はわかってる、お前はテリー・セルバンティスではない。本当の名前はテッド……それがお前だ!!」

「お、おのれ!!まさかここにたぎつけたのも!!」

「そう、全てはお前の成敗をするためです！お前がしてきたことなど全てこいつがとっていますからね。フィルヴィスさん!!」

「は！ベルさま!!」

フィルヴィスは腰部に装着をした。ビヨンドドライバーである。

【フィルヴィス！】

「変身!!」

【アクシヨン！投影！フューチャータイム！スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーフィルヴィス！フィルヴィス！】

「祝え！過去と未来を読み解き！正しき歴史を記す忠実な部下！その名も仮面ライダーフィルヴィス！新たな歴史の1ページである！」  
(いやーまさかオズじゃなくて仮面ライダーフィルヴィスになるとは思ってもいなかったようん……)

「やれ!!こいつらをやってしまえ!!」

テリーではなくデットは部下たちに指示を出して襲い掛からせてきた。ベルはライダー召還をする。

現れたのはブレイド、カリス、ギャレン、レンゲルの4人だ。彼らは武器をとりだして襲い掛かる人たちを殺さないように攻撃をする。

ベルも突撃してきたガネージャ・ファミリアの人達に人々をお願いをして彼はデットを逮捕するために襲い掛かる人たちを投げ飛ばしたりする。

フィルヴィスはジカンデスピアを装備をして杖モードにしている。

【ツエスギ】

ツエモードにして襲い来る人たちのお腹を殴り気絶させていく。

「おのれ！ロロ！ファウスト！やれ!!」

「ん？どこかで聞いたような……」

現れたのは男だったのでベル自身はため息をついていた。



てしまう。

152億87万ヴァイスが手元に残ってしまいアストレア・ファミリアの方へ貯金をすることにして52億87万ヴァイスがアストレア・ファミリアに残りの100億がベルの手もと似のこるのであった。



## 再びの対決ジオウ対ゴ・ガドル・バ

グラン・カジノの事件を解決をしたアストレア・ファミリア、ベル自身のお金が稼いできたお金を倍以上となり彼は苦笑いで過ごしており現在は新たなライドウオッチ、セイバーライドウオッチを使い変身をしていた。

「ライダータイム！仮面ライダージオウ！アーマータイム！烈火抜刀！セイバー！」

仮面ライダーセイバーの力がこもった姿セイバーアーマーに変身をして右手に火炎剣烈火烈火と呼ばれる一体型の武器が装備されて炎を纏わせてモンスターを切っていく。

ベルはモンスターを倒しながらも赤い髪をした女性に怪物祭りで発生させた謎の植物のモンスターとの戦いそしてゴ・ガドル・バ……ベル自身、ゴ・ガドル・バにはこの間の胸部に攻撃を与えた以外はほとんどやられている。

「……………」

セイバーアーマーを纏いながら右手の剣の刀身の炎を消した後座り、現在彼は10階層におり、いったん落ち着くために休憩をしていた。オーマジオウも無言でベルを玉座に座りながら見ており目を閉じていると何か近づいてくる気配に気づいてオーマジオウは玉座から見ているとベルも気づいたのかその方角を見ていると一人の男性が歩いてきた。

「ジオウ……………」

「あなたは、いいえこの気配は……………」

ベルは立ちあがり構えると男は変身をしてゴ・ガドル・バの姿に変わる。彼は格闘形態で構えてベルはセイバーアーマーのまま構える。

「来いジオウ！」

「はああああああああああ!!」

ベルは接近をしてゴ・ガドル・バに右手の火炎剣烈火烈火を振り下ろす。ゴ・ガドル・バはそれを左手で受け止めて右手にエネルギーを込めてベルのボディに叩きつけた。

「ぐ!!」

ベルはほかのライドウオッチを出してデイケイドライドウオッチをセットをして変わる。

「ライダータイム！仮面ライダージオウ！アーマータイム！カメンライド！ウォー！デイケイド・デイケイド・デイ・ケ・イ・ド！」

デイケイドアーマーへと変身をしてライドヘイセイバーの針を動かしてトリガーを引く。

「ヘイ！アギト！デュアルタイムブ레이크！」

「せい!!」

アギトのマークを発生させてそれをゴ・ガドル・バに放つ。ゴ・ガドル・バは青い目となり俊敏体へと変わりデュアルタイムブ레이크を交わした。

「!!」

「は!!」

「ぐ!!」

素早く動いてガドルロッドでボディをダメージに突き刺してベルにダメージを与える。ベルはクウガライドウオッチをセットをする。

「ファイナルフォームタイム！ク・ク・ク・クウガ！」

姿が変わりライジングマイティの力がデイケイドアーマーに入りライドヘイセイバーを構えて突撃をする。ガドルも構えてガドルロッドを構えようとしたが突然としてベルが吹き飛ばされたのを見て何があったのかと見ていると蝙蝠のような姿をした怪物がおりガドルは睨んでいる。

「なぜ・・・貴様がいる。」

「くつくつく、貴様がいるとは思ってもいなかったが・・・まあいいダグバとの戦う前にテメエに借りを返させてもらおう!!」

現れた敵、それはズ・ゴオマ・グだ。究極体の闇を力を持った敵がこのオラリオに舞い降りたのだ。

一方で吹き飛ばされたベルは一体何があったのかと見ているとゴ・ガドル・バが別の怪人ズ・ゴオマ・グと戦っているのを見てみるとオーマジオウが話しかけてきた。

『あれはズ・ゴオマ・グ、ズ集団でありながら生き延びてダグバの力をとりこんで究極の闇に近い姿に変わった人物だ……まさかこの世界でゴ・ガドル・バと同様復活をしたのか……』

ゴ・ガドル・バは金の形態へと変わりズ・ゴオマ・グに蹴りを入れた。ズ・ゴオマ・グは立ちあがる。

「ば、馬鹿な……なぜ俺が押されている。」

「ふん、所詮ダグバの力を手に入れてもお前は所詮はズだ。」

「ちい！ だったら!!」

ズ・ゴオマ・グは標的をベルに変えて翼を広げて突撃をしてきた。ベルはライドハイセイバーを構えたがズ・ゴオマ・グは突撃をしてライドハイセイバーを落としてしまう。

「ぐ!! この!!」

「ふん!!」

そのまま壁にベルはめり込ませさせてダメージを与えた。

「福音!!」

「が!!」

ベルは一か八かアルフィアの魔法福音を使用をしてズ・ゴオマ・グにダメージを与えて吹き飛ばした。

だがベル自身もダメージが大きく膝をついてしまう。

「ぐう……」

「やってくれたな、だったら貴様を倒してダグバも殺す!」

「……無駄なことをダグバはこの世界にいない。」

「……何?」

「ダグバの気配など一度も感じない、おそらく奴は……クウガに倒された。なぜ俺達がこの世界で復活をしたのかわからないがだがお前だけはここで倒さないといけない。俺はジオウと戦うことで闘争本能を感じている。」

ゴ・ガドル・バはジオウに手を出した。

「ジオウ、今だけは協力をしてくれ。奴を倒すにはお前の力が必要だ……」

「……どういふ事情なのかはわからない、けどあの人だけは

絶対に倒さないと行けない!!」

ベルはゴ・ガドル・バの手を取り立ち上がりグランドライドウオツチを構える。

【グランドジオウー】

デイケイドライドウオツチを外してグランドジオウライドウオツチがセットされて回す。

【ライダータイム！仮面ライダージオウ！グランドタイム！グ・ラ・ン・ド！ジオーウ！】

「ガドル、てめえ……………」

ガドルはガドルボウガンを構えてベルはダツシユをして接近をしてズ・ゴオマ・グの顔面を殴る。ズ・ゴオマ・グは攻撃をしようとしたがガドルがガドルボウガンを放ちズ・ゴオマ・グにダメージを与えた。

「ぐうー！」

【キバ】

「であー!!」

ドツガハンマーが現れてそれを装備をしてズ・ゴオマ・グのボディに叩きつける。そこにガドルロッドを装備をしたガドルがズ・ゴオマ・グのボディに攻撃をした後ベルはライダーのボタンを押す。

【ドライブ】 【ファイズ】

ハンドル剣とファイズエッジが現れてキャッチをして二刀流でズ・ゴオマ・グのボディに切りつけてダメージを与えた後二人の蹴りがズ・ゴオマ・グに当たり吹き飛ばす。

「ぐううう……………究極の闇の力を手に入れた俺が……………クウガみたいな奴達に押されている!?!」

「これで終わりにする!!」

「ふんー！」

【フィニッシュタイム！グランドジオウ！オールツエンティタイムブ레이크!!】

二人は飛びあがり同時に必殺の蹴りがズ・ゴオマ・グのボディに当たり着地をする。ズ・ゴオマ・グは立ちあがり彼の体にクウガからジ

オウまでの仮面ライダーのマークが光りだした。

「こ、この俺が………があああああああああああ!!」  
『ふん!!』

中のオーマジオウはベルの体に憑依をして右手を出すとズ・ゴオマ・グの周りに結界を張りズ・ゴオマ・グの大爆発を結界の中で済ませた。

オーマジオウは憑依を解除をしてゴ・ガドル・バの方へとベルは彼の方を見る。彼の方は後ろを振り返っておりベルはどうしたのだろうと見た。

「邪魔ものが入ったせいで闘争がなくなった。この決着は必ずつけよう。」

そういつてゴ・ガドル・バはその場を去りベルも変身を解除をした。ゴ・ガドル・バとは逆の方角、ダンジョンから出る方角へと歩いていく。

ホームの方へと戻ったベル、ホームにはネーゼ達があり彼女達はお帰りベルといい彼自身もただいまといい座る。

「どうしたのベル？」

「実は………」

白兔説明中

「まさかベルが戦ったそのゴ・ガドル・バって奴以外の化け物がいたの!?!」

「それでゴ・ガドル・バと共闘をして倒したつと」

「つてことです。」

(ふむおかしいことばかりだな、なぜゴ・ガドル・バ以外にもズ・ゴオマ・グまで復活をしたのか………いずれにしても謎ばかりだな。)

オーマジオウはそう思いながら何事もなければいいのだが………と

いちやもんをつけてくる奴ら

Bel side

ゴ・ガドル・バと協力をして蝙蝠のような奴と戦い勝利をした僕、数週間が経ち今はアリーゼさん達と一緒に昼ご飯を食べるために豊穰の女主人へとやってきていた。

姉たちと一緒に外で食べるのはあの宴会以来なのだが……ここにはあまり行きずらかったので今回は姉たちに感謝をする。

僕はここでキス魔になりアイズさんを始め様々お姉さんたちにキスをしたらしい、とりあえずご飯を食べている僕たちは無言で食べていると何かの声が聞こえてきた。

「おうおう！ 兎が女の中にデレデレしながらご飯を食べていやがるぜ！！ 恥ずかしくないのか！！」

あーそういうやつがいそうですね。 いやいたわ……。確か僕の記憶だとアポロン・ファミリアだったかな？ そこに所属をしているフィンさんと同じだと思う人物が何かを言いながらこちらの方を言っているがスルーをした方がいいな。 てかうるさいし……。 「おうおうインチキ野郎！！ 何を無視をしてやがる！！ 「うるさい小童」なんだと！！」

「ギャーギャー言わないと食べれないのか？ それともアポロンさま（笑）に何かをするために今回のようなことをしているのかな？」

「きーさー！ まああああああああああ！！ アポロンさまを侮辱をしたなあああああああああ！！」

小さい人が僕に近づいて殴ってきて僕は吹き飛ばされた。

「ベル！！」

「お前ら！！」

するとフライパンが飛んできて小人の顔面に命中をして後ろの方へと倒れる。僕は殴られたのでシルさんが来て介護をしてもらっている。

「そのアポロンファミリアのクソガキども！！ この白い坊主を怒らせるつもりだけどここは楽しく食べる場所だ！！ この空気をどうしてく

れるんだい!!」

ミアさんが激怒をしていると一人の人物がミアさんに近づこうとしたので僕はボソリ魔法を使うことにした。

「ゴスペル」

すると男性の人が吹き飛ばされて団員たちは急いで男性の人を回収をしていき撤収をした。

「ベル大丈夫か?」

「すまないミア母さん」

「全くだよ。まあ悪いのは向こうだしね。それよりもベル坊大丈夫かい?」

「これくらい冒険者として受けている傷に比べたらね。」

「アポロン・ファミアリア……奴らの狙いはベルと見たな。」

「へえーベルを狙うなんていい度胸をしているじゃない……」

アリーゼお姉ちゃんの瞳から光がない状態でふふと笑っている。

怖すぎる……よく見たらほかの姉たちの瞳に光がない状態

なのでとても怖い……オーマジオウサーン!!

『……無理』

いや一言!!以前は最悪最低の魔王とか呼ばれていたんでしよう!!  
なんとかかしてくださいよ!!

『流石にな……私自身もベルに対しての言葉に怒っているのだぞ?全く……まあいいベル、念のために奴らが何をするのかわからない油断をするなよ?』

わかっていきますよ僕だって油断をしたりしませんよ。奴らが何を  
して来てもいいように僕の方でも対処をしますよ。

ベルside終了

さてアストレア・ファミアリアのホームへと戻りベルは外で鍛錬をしている中アリーゼ達はアストレアを中心に話し合いをしていた。

「アポロンの狙いはベルで間違いないわね。」

「やはりそうですか……あの変態神め……」

「いずれにしてもおそろくですけど奴は私達に戦争遊戯をしてくると思っているわ。」

「まさか．．．．いや奴なら可能性がありそうだな。」

「けどよあたしたち相手に戦うなんて無謀じゃないか？」

「いいえ奴のことだからベルを一人で戦わせると思っているわ。」

「！！！！」

アストレアの言葉に姉たちは目を見開いている。一方でベルは外でジカンギレードを出して振るっていた。

「．．．．．ふう．．．．．」

『お疲れだなベル。』

彼の左手にドリリンクが出てきたのでベルはそれを飲んでスッキリした。ちなみにオーマジオウが出したのはアクエリアスである。いやどこで保存をしているねん!!と思っている方．．．．この方仮面ライダーの力を使い冷蔵庫などを作ってそこで保存、さらにはウィザードのコレクトを使いどこからかとっているのである。(ドロボーじゃねーか!!)

その夜アストレアはベルを連れてアポロンが招待してくれた神の宴へとやつてきた。本来はアリーゼが行くのだが．．．．なぜかベルと書かれていたので彼女は仕方がなくベルを連れてアポロンが招待をしてくれた宴へと行く。

「．．．．．」

「ベルどうしたの？」

「アストレア様、もし何かありませんでも僕は守ります。」

「ふふありがとうございます。」

やがて馬車が到着をして降りるベルとアストレア、彼はでかい場所だなと思いついて見ていると彼に抱き付く人物がいたので彼は誰だろうと見ているとナーザである。

「ベル、はあはあ．．．．ベルベルベルベルベルベルベル」

「な、ナーザお姉ちゃん．．．．」

ベルに抱き付いたのは大人のナーザである。彼女はすりすりとしているとほかのメンバーも現れて苦笑いをしながら見ている。

「やあベル君!!」

「ヘステイア様に木場さん．．．．」



「ベル君モテモテだね（笑）」

木場はナアーザに抱き付かれているベルを見てふふと笑いながら  
彼らは中へと入る。果たしてベルの運命はいかに……………

## 神の宴

アストレアと共に神アポロンの主催の神の宴へとやってきたベル、現在彼女達は中へと入りいろんなところから神々が来ており眷族も一人同伴と書かれていたのだ。だがアストレア・ファミリアはベルを連れてくるようにとまるで彼をここに来させるために開催をしたのではないかとアストレアは呟いた。

そして現在到着をしたベルはでかい会場に驚きながらもアストレアと共に中へと入る。なおナーザはモフモフを堪能をしたのか満足をしてはなれている。

中に入るとロキはリヴェリアを連れてきており彼らに気づいて近づいてくる。

「おーーベルたん！」

「やあベル、君も大変なことになったな。」

「ええ……おそろくなのですが……アポロンさまの眷族たちは僕をわざと怒らせるためにミアさんの前であんなことを言ったのでしょうか。まあ僕もゴスペルを使って吹き飛ばしましたけどね……」

「お、おう……」

ふふふと笑うベルを見てロキは「アポロンの奴、ベルたんを怒らせたな……」リヴェリアの方も「息子が……息子が……」とブツブツ何か言っていたが今のベルには聞こえていない。

「ベーーーーるくーーーーん！」

「ウェツプ!!」

ベルに突撃レポートをしたのはガネージャ・ファミリアのアーデイ・ヴァルマである。彼女は彼を見つけるとダッシュをして抱きしめてきたのだ。

「あ、アーデイお姉ちゃん!？」

「うふふふモフモフモフモフモフモフ……」

アーデイにモフモフタイムが始まりベル自身はまさか公の場でやるとは思ってもいなかったので顔が真っ赤になっていく。やがて満

足をしたのかアーデイはごちそうさまといいベル自身はふえーとトマトのようになっていた。

やがてアポロンが現れてパーティーが始まった。ベル自身はアポロンから何か気持ち悪い視線を感じて身震いをしてアストレアの後ろへ隠れてしまう。

「うわーアポロンの奴完全にベルたんを狙っているな・・・」

「ああ、あの目は間違いなく捕食をしようとしている眼だ。」

「ガタガタブルブルガタガタブルブル」

(((可愛い)))

ベルの震えている姿を見てほっこりをするメンバー、やがてダンスなども終わりアポロンが降りてきた。

「諸君！宴は楽しんでいるかな？盛り上がっているなら何より！こちらも宴を開いた甲斐があるというものだ!!」

やがてアストレアと相対をするかのようにベルはアストレアの後ろに隠れながらアポロンを見ていた。

「やあアストレア、先日は私の子が世話になったわね。」

「ええそうね」

お互いに火花を散らしているのが見えてベルはこれが神々の戦い？とわけのわからないことを言いだしたのでオーマジオウは違うからなどツツコミを入れる。

「私の子が君の子に重傷を負わされた。その代償を受けてもらいたいのだが？」

「言いがかりも甚だしいわね、私のベルは一切手を出していないわよ？それに先にしてきたのはそちらの子でしょ？」

「だが私の愛しいルアンはあの日、目をそむけたくなるような姿で帰ってきた。おーールアンよ！」

すると後ろの方からミイラ男の姿を見てベルは突然として笑いだした。

「ふふふあはははははははははははははははははははははははは!!」

「な、何がおかしい!!」

「いやー傑作ですよアポロンさま、だってその人ミア母さんのフライ

パン一撃でダウンをした人じゃないですか(笑)これが笑っていられませんよ(笑)それにやられたというなら僕もそちらの団長さんみたいな人に殴られましたからね。」

ベルはぺりつと剥がすとまだ青い痣が残っていた。それを見てアーディヤリヴェリアは目を見開いてアポロンを睨んでいる。ナアーザはすぐにベルのところへと行き彼を抱きしめる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ベルの顔になんてこと最低!!」

「私の義息子の顔を傷つけたようだな・・・・・・・・貴様ら!」

「ベル君大丈夫?」

アーディは抱きしめられているベルを回収をしてすぐに殴られた後を触っている。ベル自身はいたたたというが恥をかいたアポロンは顔を真っ赤にして宣言をする。

「おのれ・・・・・・・・戦争遊戯だ!!アストレア!君のところに宣言をする!!」

「・・・・・・・・ええ構わないわよ。でも明日以降もベルを狙うならギルドからペナルティを覚悟をするといいわね。」

「やな、それにベルたんを狙うって言うならうちが証人になるで!」

「ロキ・・・・・・・・」

「ベルたんはうちのお気に入りや!それにもしベルたんをやるっていうならうちも参戦をする覚悟やで?」

「ならその時は僕のところも参戦をするさ!」

「どチビ!」

「ベル君にはうちのリルルカ君と木場君が世話になっているからね。だからもし彼らを狙うっているなら僕もそれなりの覚悟を見せるさ!」

「ヘスティア・・・・・・・・ロキ・・・・・・・・」

「さーてとりあえず準備などもあるから一週間後に『神会』を開くで!!その時まではお互いに一切の奇襲などは禁止や!破ったら即反則負けや!当日の司会はうちが受け持つ!では今日は解散や!」

こうしてアポロン・ファミリア対アストレア・ファミリアの戦争遊戯の開催が決まったのであった。

## 決定をした戦争遊戯！神々の会

それから一週間が経ちベルはアリーゼ達と模擬戦をしながらいつでもアポロン・ファミリアと戦える準備を進めていた。現在彼が装備をしているのは腰部の二刀の太刀でアリーゼが振り下ろす剣を受け止めていた。

一方でバベル30階、いつも『神会』が行われる会場で臨時の『神会』が行われることになり司会はロキが担当、今回の戦争遊戯についての説明の資料などをアストレアとアポロンは確認をしている。

「我々が勝ったらベル・クラネルをもらい、アストレア……君にはオラリオを出してもらおうぞ？」

「ならこちらが勝ったらアポロン、あなたには送還をしてもらおうわよ？」

「あちよつと待って頂戴」

「フレイヤ？」

「ねえアポロンの方は全員で挑むけどアストレアの方は……ベル一人で戦わせるってのはどうかしら？」

「!!」

「ベルたんを一人でかいな……それはさすがに」

「いいえ確かにベルは一人よ。だけど見て見たいものよ……あの子の力なども一人でどこまで戦えるのかをね。」

フレイヤはふふふと笑いながら素晴らしいアポロンもそれに便乗をした結果、アストレア・ファミリアはベル一人で戦うことになる。そしてその内容が攻城戦である。

なお攻めの方はアストレア・ファミリアで守りの方がアポロン・ファミリアの方になりアストレアの方はニヤリと笑っていた。

縛りなどは何もないのでベルはジオウの力を使うことができるからである。

「さて決まったな。日程などは城などを確保をしないと行けないから色々決まってるから報告をすることにするわ。それじゃあ解散！」

こうして神会は終わり、アストレアはそれを眷族たちに知らせるた

めにホームの方へと戻っていく。

それから出発から数時間が経ちアストレアはホームへ帰ってくる。とベルが丁度外に出ており向かえる。

「お帰りなさいアストレア様！」

「ベル、皆はいるかしら？」

「はい、皆さんアストレア様が帰ってくるのを待つておりますよ？」

「そう神会で決まったことを言わないといけないからベル、皆を集めて頂戴」

「わかりました。」

ベルはホームへと入りアリーゼ達に声をかけてリビングに集合をする。全員が座ったがベルは輝夜の間座りアストレアは神会であったことを話しをする。

「では話をするわね？今回のアポロン・ファミリアとの戦争遊戯は……」

「どうしましたのですかアストレア様？」

「攻城戦なんだけど……こちらからはベル一人でのよ。」

「！！！！」

全員が目を見開いた。ベル自身もまさか自分だけ出ることになるとは思ってもいなかったので驚いている。

「……どういことですか？なぜベル一人で参戦なのでしょうか？」

「フレイヤがベルの一人での戦いを見たいといってね。それにアポロンが便乗をしたのよ。」

「くそつたれが！！」

「ベル……一人で……」

「……やります！」

「ベル！」

「元の原因は僕の責任です。僕は必ず勝ちます！アストレア様を追放させないために！！」

ベルは立ちあがるが輝夜が腰に抱き付いてるので雰囲気は台無しである。だが彼は一人で戦わないと行けないのでいつもの姉たちが

いない不安もあるが自分が勝たないとアストレアが追放されてしまうので彼は首を横に振りジクウドライバーを腰部に装着をしてベルは改めて決意を固める。

一方でアリーゼ達は不安ではないがベルを一人で戦わせるなんてという気持ちであった。

「ねえベル………」

「なんですか?」

「もしね……あなたが勝つたらね私の純潔をささげるわ。」

「ぶううううううううううう!!」

突然の発言にベルは座った後に飲んでいた水を吹いてしまう。

「ベルさま………」

それをフィルヴィスが当たってしまったのでベルはすぐに謝りほかの団員たちはアリーゼを正座させて何を言うんだこいつはと説教を始めるのであった。

そして始まるのはベルとアリーゼ達の模擬戦を戦争遊戯まで戦うのであった。ベルはジオウに変身をしてアリーゼ達と模擬戦をして戦うがやはり対人戦などもありベルは力などを制御をしないと行けないので大変であるがそれでもアストレアのために戦う為に彼は戦い続けた。

特訓を続けて週間が経ちベルは更新をするとアストレアは目を見開いている。

「……ベル、レベルアップが可能となったわ。おそらくゴ・ガドル・バとかもあるけどアリーゼ達との模擬戦があなたをパワーアップをしようとしているのそれでどうする?」

「お願いしますアストレア様。」

「わかったわ。」

アリーゼ達との模擬戦でベルのレベルが上がれるようになり彼は昇進をしていよいよアポロン・ファミリアとの戦いが始まるようとしている。

「それではアストレア様、そして皆さん………行ってきます!!」  
「ベル気を付けてね?」

「はい!!」

ベルは馬車に乗り会場となる場所の方へと移動をする。



戦争遊戯戦、負けられない戦い！

戦争遊戯が行われる場所へと馬車に乗り向かっているアストレア・ファミリアのベル・クラネル……彼はアポロン・ファミリアの大群に対して一人で立ち向かうべく目を閉じて休んでいた。

オラリオでは街のいたるところで酒場などが開いておりロキは賭け事をするって聞いて各場所に眷族たちを向かわせてアストレア・ファミリアに賭けるように指示を出して彼女は「ベルたん頑張りな」と呟いた。

ヘステイア・ファミリアの方でもリリが賭けでアストレア・ファミリアに賭けておりそれを木場は苦笑いをしながら見ているが彼自身もベルを応援をする。

豊穡の女主人でも別の酒場でも彼の力を見たモルドなどが賭けておりアリーゼ達は自分たちができることはした。後はベルが頑張るだけと祈っている。

一方でアストレアはバベル30階層にアポロンと共におり彼はニヤリと笑いながらベルきゅんが私の物にといったている。

ベルは目を開けて攻める側なので彼はジクウドライバーとライドウオッチを構えて目を開ける。

「……………オーマジオウさん。僕は行きます！」

『ああベル！お前の力見せてやれ!!』

「はい!!」

【ジオウ！】

ジオウライドウオッチを右側にセットをして360度回転させる。

【ライダータイム！仮面ライダージオウ！】

ジオウに変身をしたベルはジカングレードを構えて左側のバイクライドウオッチを外して投げると変形をしてライドストライカーへと変わりそれにまたがる。

いよいよ戦争遊戯が始まろうとしている。そして音が鳴りベルはライドストライカーのスロットルを全開にして飛び出した。

オラリオでもその中継がされており全員が見ていると猛スピード

でアポロン・ファミリアの守る城壁にいるメンバーも何かが突撃をしているのを見て攻撃をするがベルはライドストライカーを華麗に動かして交わしていく。

「な、なんだあれは!？」

『おっと！ベル・クラネル！謎のマシンに搭乗をしてアポロン・ファミリアが放つ魔法攻撃を華麗に交わしていく。てかあれは何でしょうかガネージャさま!!』

『うむ！俺がガネージャだ!!』

『わからないならわからないといってください！なおこのたび司会をさせてもらいますガネージャ・ファミリアのイブリ・アーチャーが務めますっとおっとベル・クラネル！なんとそのまま城の中に突撃をして飛び降りる!!』

ベルはライドストライカーを戻すとジカンギレードをジユウモードにしてライドウオッチをセットをして構える。

【フィニッシュタイム！ダブル！スレスレシユーツェイング！】

放たれた誘導の弾がアポロン・ファミリアに命中をして気絶させている。ベルはそのまま走りだしてほかのライドウオッチを起動させて変身をする。

【ライダータイム！仮面ライダージオウ！アーマータイム！ソードフォーム！電王！】

「俺！参上!!」

そのまま突撃をして切りかかってきた人達の剣をはじかせた後に頭突きをしたり蹴りを入れて吹き飛ばしたりする。

【アーマータイム！サイクロン！ジョーカー！ダブル！】

肩部のメモリドロイドたちがアポロン・ファミリア達に攻撃をした後に合体をしてダブルアーマーへと変わり構える。

「撃て！魔法を使うんだ!!」

魔導士たちが魔法を使いベルに放ってきたが彼は右足部にエネルギーを込めて前に蹴りを入れると緑の竜巻が発生をして魔導士たちが放った攻撃をふさいで彼は接近をして蹴りを入れてアポロン・ファミリアの人たちを気絶させていき進んでいく。弓を使って攻撃をし

てきたが彼はすぐに別のライドウオッチを起動させて変身をする。

【アーマータイム！烈火抜刀！セイバー！】

セイバーアーマーを装着をして必殺技を構える。

【フィニッシュタイム！セイバー！必殺読破タイムブレイク！】

「せいやあああああああ!!」

右手の火炎剣烈火烈火の刀身に炎を纏わせて放たれた弓に対して斬撃刃を放ち相殺をする。そのまま先に進んでいくと一人の女性が立ちふさがる。

「あなたは……………」

「……………あたしはタブネ・ラウロス、仮面ライダー……………カサンドラが言っていた救世主ってのはあんたで間違いないよ。行きな」

「え？」

「……………あたしはね勝手にアポロンさまのせいで無理やりこの派閥に入れられたんだ。だからお願いだよ……………あたしたちを救ってくれ!!」

「……………約束をしましょう。俺はあんたたちの希望になる!!」

【アーマータイム！プリーズ！ウィ・ザ・ード！】

ジカンザックスに切り替えて現れるアポロン・ファミリアに対して次々に気絶などをさせていくベル、彼は傷つけないように彼らの武器だけを破壊をしたりして戦闘不能にさせていく。

だがアポロン・ファミリアも負けていない、数が多いのでベル自身もきりがないとほかのライドウオッチを起動させる。

【アーマータイム！3, 2, 1！フォーゼ！】

「一気に突破します！」

【フィニッシュタイム！フォーゼ！リミットタイムブレイク!!】

そのまま回転をしてきりもみしたままアポロン・ファミリアのヒュアキントスがいる場所まで行く。そして扉を蹴り飛ばして彼は着地をする。

「……………来たか仮面ライダー」

「ヒュアキントスさん……………」

「貴様が負けられないように……私もアポロンさまのために負けるわけにはいかない!!」

「……………」

ベルはライドウオッチを外して変身を解除をした。彼は腰部につけている太刀を抜いて構える。

「なら僕は仮面ライダーとしてではなく一人の団員としてあなたと戦います！我が名はベル、ベル・クラネル！アストレア様の眷族だ!!」  
「なら答えよう！我が名はヒュアキントス・クリオ！我が主神アポロンさまのために貴様を倒す！」

お互いにダッシュをしてベルに対してヒュアキントスは剣をふるう、ベルはそれを右手の太刀で受け止めてから左手に持っている太刀で攻撃をするが交わされてしまう。

再びベルはそのままダッシュをしてヒュアキントスに切りかかるが彼はそれを交わすがかすったのか服が破れる。

「!!」

「高速一閃……………交わされましたか……………」

「な、馬鹿な貴様のレベルは4のはず……………」

「いいえ実はギルドにランクアップの申請をしまして……………レベルは6です」

「な!?!」

「そしてレベル6になり僕は新たな魔法も覚えました……………これが僕の新たな魔法！」

ベルはダッシュをしてヒュアキントスに接近をしてこようとした。ヒュアキントスは剣をふるうがベルは飛びあがり回避をした。

「これが僕の新たな魔法……………強化魔法……………一時的にパワーとスピードなどがあがるみたいです。名前……………うーんつけるとしたらハザード？うーん何か違う気がする……………えつとえつと」

「戦っている最中に何を考えている貴様ああああああああああああああああ!!」

ヒュアキントスは剣をふるったがベルはそれを両手で受け止めた。

「な……に!？」

見ていた全員が驚いている。

「真剣白刃取り……」

輝夜は映し出された映像を見て眩いた。全員がベルが白刃取りをするとは思ってもいなかっただので全員が驚いている中ベルはそのまま引つ張りヒュアキントスの剣を膝蹴りで粉碎をした。

「な!」

「であああああああああああああああああああ!!」

そのまま啞然としているヒュアキントスのお腹部に拳を叩きつけてそのまま壁の方ねと殴りつける。

「がは!!」

「負けられない……あの人と……そして仲間たちと別れるのは嫌なんだ!!」

「そ……そう……か……ベル……クラネル……私の……負けだ……」

そのまま壁から立ちあがるが前に倒れる。ベルは息をあげながらそのままヒュアキントスが座っていた玉座付近にあるアポロン・ファミリアの旗を取り掲げる。

『決まりましたああああああああ!!勝利をしたのはベル・クラネル!彼を思う女神と眷族達の思いが伝わったのでしよう!彼を勝利に導きましたああああああああああああ!!』

「二!よっしやああああああああああああああああああああああああ!!」

「ちくしよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおお!!」

「ベル……かっこいい……」

「ふふ流石私のベルですね。」

「聞きずてならないよアミッド、ベルは私のだよ?」

「何を言っているのかしら?ベルは私のです。」

ばちばちと火花を散らすアミッドとナーザーであった。一方でアーデイとテイオナも喜んでいた。

「やったああああああああ!!」

「ベルやっぱり好きいいいいいいいい!!」

ティオナは戦うベルの姿を見てアーデイもベルが仮面ライダーとしてではなく一人の戦士として戦った姿を見て目をハートにする。

一方でレフィーヤとアイズも目をハートにしてベルの最後のシーン、つまりヒュアキントスを殴るシーンを見てもっと好きになりベートは血が騒いできておりはやくベルと戦ってみたくなる。

「流石だねベル」

「ああ自慢の義息子だ」

「がはははは!あやつ生身でもやるではないか!わしらも負けてられないぞ!!」

「ふふ僕も同じだよ。彼は僕たちに冒険者としての血を起こしてしまったからね。」

「楽しみだわい!」

一方でアポロンは顔を蒼白させていた。あれだけの大人数をベルは一人で突破をしてもしかも誰も殺さずに気絶させてヒュアキントスとの戦いでもけがはさせてしまったが殺さないように戦ったのだ。

「さてアポロン……わかってるわね?」

「わかってる……見せてもらったよアストレア……ベルきゆんの……君に対しての思いがね。私が間違っていたのだな……」

「その通りね。とりあえずあなたを拘束しておくわ」

「ああ……」

そして勝利をしたベルはジオウに変身をしてライドストライカーでオラリオまで飛ばしていく。

彼はオラリオが近くになると変身を解除をして中へと入るとオラリオが盛り上がっていたので彼は驚きながらも中へと入る。

アストレアが待っているであろうバベルの塔まで到着をして主神が待っている場所に上がっていく。

「ベル……………」  
「……………!!」

アストレアはベルの姿を見つけると走りだして彼に抱き付いた。ベルはそのまま後ろの方へと倒れてしまう。

「あ、アストレア様……僕、勝ちましたよ?」

「ええそうよ。あなたは本当に最高の私の眷族だわ!!よくやったわ……ベル!!」

「はい!!」

ベルは笑顔でアストレアと共にホームの方へと歩いていきベルは扉を開けるとアリーゼが勢いよく現れる。

「ベルううううううう!!」

そのままアリーゼはベルにキスをしてきた。彼自身は突然としてキスをされたので驚いている。

「好き好き好き!あーもう駄目!好きすぎるわベル!かつこいいわ!!」

「落ち着けアリーゼ!」

「ベルー本当によくやったよ!あたしからプレゼントだ!」

ネーゼも先ほどのアリーゼと同じようにキスをしてそこから輝夜にわたりキス、ノイン、アスタ、リヤーナ、セルテイ、イスカ、マリユールとフィルヴィスもキスをする。

「ベルさま……私はベルさまのような方と出会えて幸せでございます。」

「フィルヴィスさん……」

「こらお前もするのだろうか?」

「リユースさん……」

「べ、ベリゆ」

そのままキスをしてライラは頑張ったなと頭をなでなでをしようとしてベルの戦争遊戯は一日で終わりベルの勝利で終わった。

次の日にアポロンは眷族たちとお別れをしたのか覚悟を決めており送還の準備をしようとした時。

「待ってくださいアストレア様!お願いします!どうかアポロンさまを送還だけは送還だけは!!」

「ひゆ、ヒュアキントス……」

「アポロン、送還はやめてオラリオから追放させます。あなたに対して真の忠誠心があるものたちはあなたについていくようにしなさい。」

「……ああありがとう。それとベル君……」

「……アポロンさまこれからは無理やり眷族にさせないでくださいね？僕が言えることはそれだけです。」

「ああ……本当にすまなかった。」

こうしてアポロンはヒュアキントスを始め真に忠誠心を誓った者たちを連れてオラリオを出ていく。

そしてアストレア・ファミアリアに新たな二人の人物が加入をした。

「ダフネ・ラウロス、レベル2だよろしくお願いします！」

「か、カサンドラ・イリオン……同じくレベル2……です。」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

新たなにアポロン・ファミアリアからダフネとカサンドラが加入をしたが犯人である兎を見つめる姉たちであった。





彼らはダンジョンへと入りベルはジオウに変身をした後新たなライドウオッチを出してセットをする。

【機界戦隊ゼンカイジャー!】

【ライダータイム! 仮面ライダージオウ! アーマータイム! 45バーン! ゼンカイジャー!】

ゼンカイザーの力が入ったアーマーが装着されて仮面ライダージオウゼンカイザーフォームへと変わり左手にジカンガトリングが装備されて構えて発砲をする。

ゴ布林たちはジカンガトリングを受けて粉碎されて行き三人はうわーと青ざめていた。

「やり過ぎましたね」

「やり過ぎだよベル」

「やり過ぎだ」

「.....」

「カサンドラさんが真っ青になっている!？」

一方でリルカと木場もダンジョンにおり彼らは中階層まで来ており木場はオーガになりオーガストランザーを構えてモンスターを切っていた。

【エクシードチャージ】

「は!!」

振り下ろされたオーガストランザーでモンスターを次々に葬っていき彼はリルカと休憩をしていた。

「お疲れ様です木場様。」

「ああありがとう.....」

「もしかして昔のことを?」

「ああ彼には謝っていないなと思ってね。」

「彼?」

「乾 巧..... 僕がベル君から借りたライドウオッチの力でファイズの元の変身者だよ..... 僕は彼と敵対をしたことが何度もあった。最後は彼にオルフェノクの王ごと僕を倒すように言ったからね.....」

「木場様……」

「後悔をしていないってのはウソになる。乾君……さて先に進むとしようか？」

「はい木場さま!!」

オーガとリルルカは立ちあがり先へと進んでいく、一方でベルはジカングトリングを放ちながらブレイドのライドウオッチをセットをする。

【フィニッシュタイム！ブレイド！バンバンブラスト！】

「であ!!」

電撃を込められた弾丸が放たれてモンスターに当たり撃破された。ミノタウルスが現れるがベルはベルトを操作をして必殺技を構える。

【フィニッシュタイム！ゼンカイザー！ゼンカイタイムブ레이크！】

彼の隣にゼンカイザーがギアトリンガーを構えている幻影が合体をしてジカングトリングにエネルギーが貯められて発砲をする。

「ふい……」

「お疲れ様ですベル」

「ありがとうございますカサンドラさん。」

「それにしてもすごいよねベルって、7歳から冒険者として戦っているんだよね？」

「そうですね、アストレア様達と出会いオーマジオウさんと出会い今に至りますね」

「なるほど……ベルの強さがわかった気がする。」

「うんうん。」

3人はベルの強さに納得をして中層までベルたちは進んでいく。一方で16階層まで来た木場とリルルカ、彼らはモンスターを倒しながらいるとリルルカが叫ぶ。

「木場さま！誰かが倒れています!!」

「え?」

リルルカが行った方角へ走っていくと一人の男性が倒れていた。だがそれを見て木場は仮面の奥で目を見開いている。

「木場さま?」

「どうして……どうして彼がここにいるんだ……」  
「あれ？木場さん？」

そこにベルたちも到着をして倒れている人物がいたのでナーザは急いで駆け寄り傷ついている彼にポーシヨンを飲ませる。

ベルたちは変身を解除をしてその人物を見ている。

「どうして彼が……」

「木場さんは知っている人ですか？」

「……乾 巧……君が持っているファイズライドウォッチ……本当のファイズの変身者でもある人物だよ。」

「ファイズの」

ベルはファイズのライドウォッチを出してみると男性、乾 巧が目を開けて辺りを見ていた。

「こ、ここは……俺は……」

「乾君目を覚ましたみたいだね？」

「木場？……そうか俺は死んじまったのだな。」

「いや君はまだ死んでいないよ乾君」

「どうということだ？」

木場説明中

「なんだよそりやあ……ここは別世界でお前は神様って奴の眷族になっているってことか？」

「そういうことだね。」

二人が話をしている中、ベルは楽しそうにしているなど見ていた。

「なんだか普通の親友みたいだね。」

「親友なんですよ二人は。」

すると光弾が飛んできて全員が前を見ると仮面ライダーが銃を向けていたのでベルは驚いている。

「見つけたぞ……木場 勇治!!」

「もしかして草加か！」

「乾か……まあいいオルフェノクはここで消す!!」

「待ってください！あなたはいつたい!!」

「うるさいなー君は黙ってろ!!」

カイザブレイガンを構えて発砲をしてベルは腰部の太刀でふさいだがブレイガンの弾に耐えきれずに太刀が粉々になってしまう。

「太刀が……………」

【READY】

カイザはメモリをセットをしてブレードモードにして構える。乾は変身をしようとしたがファイズギアがないのでどうしようとして見ていると木場はオーガドライバーを出してオーガフォンを使い変身をする。

「変身」

【COMPLETE】

仮面ライダーオーガに変身をしたのを見て乾は驚いている。

「お前……………」

「これは僕のスキルなんだ。今の僕はオルフェノクじゃないただの間……………それでも僕は守るために今ここにいる。」

「お前が人間だと？ふざけるなああああああああああああああああ  
あ!!」

カイザはカイザブレイガンを構えて突撃をする。

## オーガ対カイザ

カイザブレイガンを振るいオーガに攻撃をしてきたがオーガストランザーで受け止めた。

「貴様ああああああああ!!」

「く!!」

カイザの猛攻にオーガは押されていた。乾はこのままでは二人が傷つくのを見ているだけなのかと見ていたがベルは二刀流の太刀が粉碎されたのでジクウドライバーを装備をしてジオウライドウオツチを装着をして変身をする。

「変身!!」

「ライダータイム!仮面ライダージオウ!」

ジオウに変身をして押されているオーガを助けるためにジカンギレードをジウモードにしてファイズのライドウオツチをセットをして構える。

「フィニッシュタイム!ファイズ!スレスレシユーツェイキング!」

「は!!」

放たれた弾丸がカイザに当たり吹き飛ばされる。カイザは起き上がりジオウを睨んでいる。

「貴様……殺してやる!お前も木場の味方をするなら俺の敵だああああああああああああああああ!!」

カイザはカイザブレイガン、カイザフォンを構えて発砲をする。ベルはその攻撃に対してかわしてオーガがオーガストランザーでカイザのボディに攻撃をして突き飛ばした。

「貴様ら!!」

するとサイドバツシャーが現れてカイザはそれに乗りこんでバトルモードにした。

「ベル!」

「ベルさん!」

「ベル!」

「皆さんは離れてください!」

「俺も……俺も変身ができれば……」

乾は今の自分が何もできない悔しさに手を握りしめっているとバイクの音が聞こえてきて全員が何かと見ているとオートバジンが現れてその後ろにボックスがあったので開くとファイズギアが……乾は決意を固めてファイズギアを装着をする。

「……」

ファイズフォンを開いて555と押してエンターを押す。

「スタンディバイ」

「変身！」

【COMPLETE】

今ここに仮面ライダーファイズが本当の意味で復活をした。カイザはその様子を見て首を鳴らしていた。

「そうかそうかやはりオルフェノク同士ってことか乾!!」

「草加、こんなところまで来て木場に対して復讐をする気なのか!!」

「当たり前だ!なぜ貴様達が生きて俺が死なないといけないんだ!!俺は……俺はそれが許せないんだよ!!」

サイドバツシャーの左手からミサイルが発射されてベルたちは回避をする。だが外れたミサイルがダンジョンに当たり次々に崩壊をしていく。

「ま……このままじゃ!!」

ベルはどうしたらいいのかと見ていると突然としてダンジョンが揺れだしたので全員が何事かと見ているとダンジョンの壁から骨のモンスターが現れて辺りを見ていた。

「なんだあれは……」

『ぐおおおおおおおおおおお!!』

今から6年前、ベルがオーマジオウの力によってアストレア・ファミリアを助けた際に交戦をしたジャガーノートが再び復活をしてダンジョンを壊されてたまるかと咆哮をしている。

「なんだあの化け物は……」

カイザはサイドバツシャーで前進をしてジャガーノートに攻撃をしようとした。

「うかつに近づいてはいけません!!」

「黙れえええええええええ!!」

サイドバツシャーのガトリングとミサイルが放たれてジャガーノートに命中をして煙が発生をする。草加はふつと笑うがその煙の中から無傷のジャガーノートが現れてサイドバツシャーに体当たりをして破壊をした。

「どあー!」

カイザは投げ飛ばされてジャガーノートは咆哮をする。ベルはジャガーノートの力を知っているのでオーマジオウが声をかける。

『ベル交代だ!』

『お願いしますオーマジオウさん!!』

『おう!変身!!』

オーマジオウに変身をして彼はジャガーノートを見ている。

「ふんまた再び我の前に現れる……ぬ?」

オーマジオウは攻撃をしようとしたが後ろから攻撃を受けたので何事かと見ているとカイザがカイザブレイガンを構えて発砲をしたようだ。

「邪魔をするな!あれは俺の獲物だ!」

【エクシードチャージ!】

カイザブレイガンからマーカーが射出されてジャガーノートが動きを止めてカイザは突撃をしてカイザスラッシュを放とうとしたがジャガーノートははじかせてカイザに爪を切り刻むで吹き飛ばした。

「がは!」

「ツチ、邪魔をするな!」

オーマジオウは動きを止めてファイズブラスターを装備をして放ちダメージを与えてから接近をして拳のラッシュをお見舞いさせる。

「うおおおおおおおおおおお!!」

『ぐおおおおおおお!!』

「どあ!!」

ジャガーノートを軽々と吹き飛ばして攻撃をしようとしたがカイザが邪魔をしてきたので彼は集中をすることができない。



「小童が……予の邪魔をする気か！」

「黙れ!! 貴様だけは俺が倒す!!」

「何?」

カイザポインターを足部にセットをしてエンターキーを押す。

【エクシードチャージ】

「ちい! 草加!!」

ファイズはファイズショットを右手に装備をして走りファイズフォンを開く。

【エクシードチャージ】

飛びあがる前のカイザにグランインパクトを放ち吹き飛ばしてカイザドライバーが外れて変身が解除される。

「がは！」

「感謝をするぞ乾 巧」

オーマジオウドライバーを操作をして2003年と表示される。

【ファイズの刻! エクシードチャージ!】

オーマジオウは飛びあがりポインターが放たれてジャガーノートは動きを再び止められてオーマジオウはそのままグリムゾンスマツシユが決まりジャガーノートは再びオーマジオウによって倒される。

一方で変身を解除をされた草加はカイザドライバーを再び手を取ろうとしたがそれを木場が回収をする。

「き、貴様……………」

「もうよせ……………君の体はさっきのジャガーノートとの戦いでロボロだ。それにまた変身をすれば君は……………」

「うるさい!!」

そのまま突進をしてカイザドライバーを取り装着をしてカイザフォンを開いて913とコードを入れて構える。

【スタンディバイ】

「変身!!」

【COMPLETE】

カイザに変身をしてカイザブレイガンを構えて三人のライダー達やダフネ達に向けていたのでオーマジオウはカイザブレイガンを発

生させてカイザより先に発砲をしてボディに命中させて吹き飛ばした。

「がは!!」

「全く、さしてどうしたものか……それにこいつの体はすでに限界を通りこしている。おそろく……」

【ERROR】

「がは!!ぐああああああああああああああああああああああああああ!!」

「やはりな……」

カイザの変身が解除されて草加は苦しんだ後に彼の体は崩壊をしていくのをナーザ達には見せないようにオーマジオウは彼女達の前に立ち見せないようにする。

「お、おれは……俺は……ま、真理……」

草加は灰化をしてカイザドライバーだけが残された。オーマジオウはカイザドライバーを拾い何かを施してからそれを木場達に渡した。

「私の力で灰化になるのを消しておいた。ついでに乾巧のも同じように処置をしておいた。」

「あんたは……」

「我が名はオーマジオウだ。覚えなくてもいい」

「乾君、君はこれからどうするんだ？」

「さあな、もう一度クリーニング屋みたいところで働こうと思っている。まあ何かあったら連絡をくれ」

「わかったよとりあえず一緒に上がろう。」

「いや私の力で一気に上がるとしよう。つかまれ」

オーマジオウに全員が捕まりそのままレポート能力を発動させて地上へと上がっていく。なお乾 巧はクリーニング屋みたいなどころを見つけてそこで居候をすることになったそうだ。

## 色々と疲れた体を休める

ベルside

なんか色々と疲れた、突然としてあの骨のモンスターがまた現れるし人は灰化するし……てかどうなっているのやら……  
オーマジオウさん説明プリーズ。

『すっかり忘れているな。カイザやファイズはオルフェノク記号及びオルフェノクが変身ができるようになってる装置なんだ。だがデルタは誰でも変身が可能なんだよな……あの草加という男はおそらくだが記号などあったのだが……ボロボロの状態で変身をしたから灰化をってしまったのだろう。』

「そうなんですネ……」

オーマジオウさんの説明を聞いた後に僕たちはホームの方へと帰ってきたのだがアリーゼお姉ちゃんが待っていたかのようにいて笑顔のままいたので僕何かしたのかと首をかしげてしまう。

(うぐ可愛い、そうよね……今日は私がベルにふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ)

(なんだろう、アリーゼから不穏な感じがするのだが？うーんこれは今日の夜何かあると思うな。)

とりあえず僕は色々と疲れたのでソファでぐでんと倒れている。いやーもう骨のモンスターと戦うのはもうこりごりです。いやーオーマジオウさんの力で倒したけど……グランドジオウでもあれ倒せますか？

『難しいところだろう、奴を見たところ堅すぎ、魔法を跳ね返すなど階層主並みだと私は思っている。』

うわーそれ冒険者キラーじゃないですかやだー！ーそんな奴がダンジョンを壊すと現れるっていったい……ダンジョンって生きているのでしょうか？

『さあそれに関してはわからないな。私もこの世界にきてから情報を調べているが……いずれにしても可能性つてのが少なすぎる。』  
オーマジオウさんでもわからないことばかりですか、とりあえず疲



水を飲んでいたものたちは吹いてしまい骨のモンスター、今から6年前にルドラ・ファミリアの爆弾が爆発をして現れたジャガーノートはベルが変身をしたオーマジオウによって粉碎されたがまさか再び骨のモンスターと交戦をするとはと……アリーゼ達は苦笑いしながら改めてオーマジオウがベルが変身をするグランドジオウよりも強いのだなと改めて認識をするのであった。

その後ベルはアリーゼと共にお風呂に入っている。

「ねえベル？」

「？」

彼女は耳元で「後で私の部屋に来てね？」と聞いたのでアリーゼは先が上がっていきベルも後からお風呂から上がり彼女の部屋に行く。

「待っていたわよベル」

「アリーゼお姉ちゃん何を？」

アリーゼは立ちあがり扉の鍵を閉めると彼を抱きしめて彼女が普段寝ているベットへと連れこむ。

「忘れていないでしょ？アポロン・ファミリアとの戦争遊戯に勝ったら私の純潔を上げるって」

「も、もしかして……」

「そう……」

アリーゼは自分が着ているのを脱いでいきベルを迎える。

「さあベルいらっしやい」

(拝啓おじいちゃん、僕は大人の階段という冒険をしてきます。)

なおこのときオーマジオウはそんな感じがするなど思いシャットダウンをしているのであった。

大人の階段のーぼった。

ベルside

皆さま、おはようございます、こんにちは、こんばんは……………アストレア・ファミリア所属のベル・クラネルです。

さて僕は今どういう状態かといいますと……………目の前に大きな二つの山があり抱きしめられているためその大きなものが僕の顔を埋め尽くされています。

皆さんの想像通り、僕は大人の階段のぼりました。正直に言いますね最高でした……………アリーゼさんは僕が起き上がったのを見て笑っていた。

「おはようベル！」

「オハヨウゴザイマスアリーゼオネエチャン。」

「なんで片言なのよ。」

「イヤーツノー……………ダツテ……………」

「ふふふでも気持ちよかったですでしょ？」

「はいその通りでございますお姉さま。」

「ふふふ私もベルも大人の階段のぼったわよ!!」

なんで大声でいうのですかああああああああ!!オーマジオウさーん!!

『……………おはようベル、まあ昨日はその……………シャツトダウンをしていたからお前達は何をしていたのかは知らない。(まあ夜のお前達をアルフィアに見せるわけにはいかないんだよ……………だからこちらのモニターでカベルが見たものをこちらでは見えないようにしているんだよな。)』

オーマジオウさんが何かを言っているけど僕はアリーゼさんと一緒に服を着替えてリビングに行く姉たちが顔を赤くしているのだけれど……………ま・さ・か……………聞こえていたのですかああああああああああ!!

「お、おはようべ、ベル」

「あ、あの……………もしかして聞こえてたりしますか？」

僕の問いに首を縦に振ったので全身が真っ赤になっていき恥ずかしくなってしまう。うーうーうー恥ずかしすぎるよおおおおおおおおおお!!

「そういえばベル、アポロン・ファミリアのホームとかどうする気なの?」

「あれをですか?.....うーうーん実は考えていることがありまして.....あのホームを大改装したらどうかなど思っています.....なにせ人が増えてきている気がするのですよ。」

「確かにそうね。この間から人が増えているからここも狭く感じているのよねー」

「だからこのホームをヘステイア様たちに渡しましてアポロン・ファミリアのホームを僕たちのホームにしませんか?」

「あらそれはいいじゃない!それ!」

こうして元アポロン・ファミリアのホームを大改装が行われることになりヘステイアとホームの話し合いをする。その中でアポロンの私物などが残されていたが全て処分されて必要なものだけが残されてベルの発案でお風呂も輝夜の話から聞いた極東のお風呂などもお願いをしたそうだ。

だが階層に時間がかかるため完成をするまでは今のホームで過ごすことにした。なにせ人が増えてきているからである。

オーマジオウ side

いやーまさかベルがアポロン・ファミリアのホームを大改装をするとは思ってもいなかったな。まあお金の方はまだあるから問題ないが.....さて現在ベルはダンジョンには向かわずにヘファースイトス・ファミリアのある鍛冶屋へと向かっている。

その理由は前回の戦いでカイザの放ったブレイガンのはじかせたがその反動で太刀が二つとも粉々に壊れてしまったからだ。椿のところへと行くためにベルは向かっていき到着をして椿を呼ぶ。

「椿さーん!!」

「おうベル坊どうしたんだ?」

ベルは粉々になった二刀流の太刀を見せると椿は驚いている。

「これは一体何があったんだ？」

ベルはなぜ太刀がボロボロになったのかを説明をして椿は仮面ライダーか……と呟いてから刀身がない二つの武器を受け取った。

「とりあえず刀身がない以上これは改良をする必要じゃな……しばらくは使えないからなベル坊その間の武器はどうするんじや？」

「その間はジカンギレードとかを使います。」

「うむわかったわい、そうだ！槍とか使ってみないか？」

「槍ですか……」

ベルは椿が作ったのである槍を見てどれがいいのだろうかと思っていた。ベルは普通の槍をつかみ振りまわしているが使ってみたがライジングドラゴンロッドを使ったことがあるのでそれと同じ風に振りまわしているのでこれをしばらくは使うといい椿は代用として改良をすることにした。

まさかベルの太刀が粉碎されるとはな……まあとりあえず新しい武器をこちらでも作るとしようジカンランサーとか、まあとりあえずベルは新しく槍を手に入れて太刀が改良をされている間はこちらを使用することになるだろう。

オーマジオウside終了

一方でここは草加 雅人が灰化をした場所、そこに一人の人物が何かのウオッチを起動させる。

【ZII―OH】

アナザーライドウオッチとは違うスイッチを押すと時間が巻き戻り草加が灰化をする前に戻っていた。

「俺は……」

「草加 雅人、力を貸せ」

「なんだお前は？」

【KAIZA】

それを草加の中に入れると彼の姿が変わりアナザーカイザが誕生をした。

『力がみなぎる！待っている木場！乾！貴様たちだけは俺の手で!!』



そういつてアナザーカイザは走りだしていく、黒いフードをかぶった人物は再びウオツチをしまいその場を去っていく。

現れたアナザーライダー ジオウとカイザ対アナザークイザ

「さーてこの槍を試そうかな？」

ベルは椿によって改良された槍を持ちダンジョンへとやってきた。振りまわしてゴブリンを一刺しをして撃破する。

「流石椿さんだ、使いやすいように仕上げてくれている。」

『うむ流石団長を務めるだけあるな……さてベルその槍を試す為にもう少し降りるの难道ろ？』

「そうですね。」

ベルはオーマジオウと話をしながら降りて5階層まで降りてきた。ここでは逃げただしたミノタウルスを戦い撃破したところでもある。彼はそう思いながら降りようとした時に何かの方向が聞こえてきたので見ていると光弾が飛んできた。

「!!」

ベルは回避をして姿が現れる。異業の姿で「K A I Z A」と書かれている単語が見えたのでオーマジオウは驚いている。

『アナザークイザだ?!』

『お前は……確か木場と乾と一緒にいたやつだな……』  
「その声……あなたは!!」

『まずは……お前からだああああああああ!!』

アナザークイザはベルを殺すために殴りかかってきた。彼は交わしてジクウドライバーを装着してライドウォッチを起動させる。

【ジオウ!】

【変身!!】

【ライダータイム! 仮面ライダージオウ!】

ジオウに変身をしたベルはジカンギレードを出してケンモードにしてアナザークイザに攻撃をする。アナザークイザは両目を光らせて両手の甲からビーム刃が発生をしてジカンギレードを受け止めてボディを切りつける。

「うわ!!」

さらに右手の甲にナツクルのようなものが装備されてそれをジオウのボディに叩きつけて吹き飛ばす。

「がは!!」

『ふははははは！素晴らしい力だ！これで乾と木場を殺すことができる!!』

「な、なぜ………そこまであの人たちを………」

『人間じゃないあいつらが生きて………人間である俺がなぜ死なないで行けなかった!!それが許せないんだよ!!』

「ふぎけるな！命はあなたが選んでいいわけじゃないんだ!!」

『うるさいな………死ねよお前』

アナザーカイザは接近をしてベルを殺すとしたときに光弾が放たれてアナザーカイザに当たる。彼は見るとカイザフォンをジユウモードにして構えている木場の姿である。

『木場……勇治!!』

「まさか君が蘇っているなんて………これ以上ベル君に手を出すなら僕が相手をする!!」

『それは俺のだ!!俺の!!』

木場はカイザフォンにコードを入れてエンターキーを押す。

『スタンディバイ』

『変身』

【COMPLETE】

木場の姿が変わり仮面ライダーカイザの姿に変わる。彼はカイザブレイガンを抜いて発砲をしてアナザーカイザにダメージを与える。

「大丈夫かいベル君」

「木場さん………」

『木場 勇治！お前は俺が倒さないと行けない！真理を人質に取り！拳銃の果てに俺を殺した男!!』

「………それに関しては謝っても許されないことだ。だがそのために関係ないベル君を殺すなんて君は人じゃない!!」

『黙れ！お前らの味方をする奴らは俺の敵だ!!』

アナザーカイザは両手の甲からビーム刃を出して攻撃をしてくる。木場はカイザブレイガンにミツシヨンメモリをセットをしてブレードの刃が発生をしてベルはその間にグランドジオウライドウオッチをセットをしてジクウドライバーを回転させる。

【グランドターイム！グ・ラ・ン・ドジオウー！】

グランドジオウに変身をしてアナザーカイザが振るうビームの刃を腕で受け止めてカイザがカイザブレイガンでボディを切りつける。

【カブト】【ファイズ】【ドライブ】

カブトハイパーフォーム、ファイズブラスタ、ドライブタイプロイドロンが現れてそれぞれ武器を持ちアナザーカイザはファイズブラスタを見て吠える。

『乾 巧い！いい！いい！いい！いい！いい！いい！』

アナザーカイザはブラスタフォームのファイズに攻撃をしてきたがカブトハイパーとタイプロイドロンがパーフェクトゼクターとハンドル剣で受け止めるとファイズブラスタは肩部にブラッドキャノンを放ちアナザーカイザを吹き飛ばす。

【ゴースト！】

ガンガンセイバーハンマーモードを装備をしてアナザーカイザに攻撃をしてカイザが隣に立ち二人でけりを入れる。

カイザブレイガンからミツシヨンメモリを外してカイザポイントに変えて右足部にセットをしてベルはベルトの操作をする。

【フィニッシュタイム！グランドジオウー！】

二人は飛びあがりカイザからポイントが発生をしてアナザーカイザに当たる。

『ぐ！！』

【カブトパワー、ザビーパワー、ドレイクパワー、サソードパワー、オルゼクターコンバイン！マキシمامハイパーサイクロン！】

【エクシートチャージ】

【フルフルスピードターイホウー！】

三人がそれぞれのマキシمامハイパーサイクロン、フォトンバスター、トレーラビッグインパクトを放ちアナザーカイザにダメージを

与えて二人のライダーが蹴りを入れる。

【オールツエンティタイムブ레이크！】

「はああああああああああああああああああ!!」

ゴルドスマツシユとオールツエンティタイムブ레이크がアナザークाइザに当たり爆発をすると草加が転がりアナザークाइザウオッチが転がりベルはそれを回収をする。

だがアナザークाइザライドウオッチは壊れて粉々になる。

「粉々になった。」

『アナザークाइドウオッチは倒せばこうやって破壊することができ。』

「こ、この俺が…….またしても…….」

2人は変身を解除をしようとしたがベルが何かに気づいてボタンを押す。

【ワイザード】

「は!!」

ワイザースードガンを構えて発砲をしてカイザもその方角を見ると黒いフードをかぶった人物がおりベルは声をかける。

「あなたはいつたい!!」

「ジオウ…….この世界でも現れたか…….」

「現れた？あなたは一体何者なんだ!!」

「そんなことはどうでもいいでしょう。やはりあなたは役に立ちませんか草加 雅人君」

「力をよこせ…….もつともつ!!」

「…….いいでしょう。ただし代償は…….あなたの命です」

「あれは!!」

彼が出したのは赤い結晶のようなものだ。それを草加に入れ込むと彼は苦しみだした。

「が!ああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「ふふふふふふ最高でしょう!人とモンスターの結晶が一つにな



「このような化け物が出てきたのか……………」

「ひどい……………」

ベルはサイキョージカンギレードで切りつけてから一旦草加だったモンスターを見ている。そのままベルトのボタンを操作をする。

（いいのかなー君は人間である俺を殺そうとしているんだぞーこの殺人者が!!）

「……………それが僕の運命なら!そんな運命と戦い続けます!!」

『フィニッシュタイム!グランドジオウ!オールツエンティタイムブ레이크!!』

ベルは飛びあがりクウガからビルドまでのライダーのマークが発生をしてそのまま草加だったモンスターに蹴りを入れて反転をして着地をする。

『ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

全員が見て爆発をしていくモンスター、すると草加の姿が見えたり消えたりしており……………ベルたちは両手を合わせる。

やがて炎が消えてベルはその場所へ行くと赤い結晶があり拾おうとしたが消えたので辺りを見ていると黒いフードをかぶった人物がいた。

リヴェリアとアイスも武器を構える。

「貴様が!!」

「九魔姫と剣姫までいるのか……………まあいいさ今日のところは逃げさせてもらうよ」

「逃がすとも!!」

「ふん!!」

相手は地面を叩くと突然として体に重みがかかる。オーマジオウが両目を光らせるとすぐに解除される。

『重加速まで使える……………奴は一体……………』

「ベル大丈夫?」

「はいアイスさん……………」

ベルと木場は変身を解除をする。





## ベルの心の痛み

アナザーカイザを倒した後、謎のフードをかぶった人物が現れて草加に謎の赤い結晶を体に取り入れて怪物化させて襲わせた。

ベルは木場のところにアイズとリヴェリアがダンジョンから上がってきたところに遭遇をしたがランドジオウのベルが草加の幻影に殺人者といわれたがそれでも戦い続ける決意を固めてオールツエンテイタイムブ레이크を発動させて怪物を撃破した。

地上に上がりアイズ、リヴェリア、木場と別れたベルは全員の姿が見えなくなると後ろを振り返りホームがある方角を歩いていく。

その間も彼は無言で歩いておりオーマジオウとアルフィアは無言でベルの様子を見ていた。

やがてホームに到着をしたベル、彼は誰もいないのかなと見ていると着物を着た女性が待っていたかのように立っていた。

「おかえりベル」

「輝夜お姉ちゃん……………」

「来い」

「え?」

突然としてベルは輝夜に言われてついていくと輝夜の部屋に到着して中に入る。すると彼女はベットに座ったのでベルは立っていると

「何をしているお前もここに来い。」

「……………」

ベルは言われたとおりに隣に座ると輝夜はじーっとベルを見てから声を出す。

「何があった?」

「え?」

「お前がいつも以上に暗い雰囲気を出していたからな、だからダンジョンで何かあったのだろうと察したさ。」

輝夜の言葉を聞いてベルは今日あったことを全て話した。草加が蘇り木場と共に戦った後謎のフードをかぶった男が現れて草加に赤

い結晶をとりつけると怪物化になりベルは戦い幻影の草加に殺人者といわれたことなどを話をして終わる。

「・・・・・・・・そんなことがあったのだな。」

「僕は・・・・・・・・」

すると輝夜は彼を抱きしめてきた。ベルは目を見開いたが彼女は気にせずに話を続ける。

「ベル、その男が言ったことは気にするな。お前は皆を守るために戦ったのだから？なら私はそれを誇りに思うさ。お前はそうして戦ってきたのだから？」

「か、輝夜お姉ちゃん・・・・・・・・」

「今は私の胸で泣くといい。」

「う、ううううああああああああああああああああああん」

ベルは輝夜に抱き付いて涙を流していた。仮面ライダーとはいえ13歳の少年だ。輝夜は泣いているベルを抱きしめながら頭を撫でている。

それから数分後ベルは涙を流し続けていたが落ち着いたのでベルは顔を赤くする。

「ご、ごめんなさい・・・・・・・・輝夜お姉ちゃん。」

「気にするな、お前は誰よりも戦い誰よりも傷ついている。私達以上にな・・・・・・・・なあベル、アリーゼとはやったのだから？」

「・・・・・・・・はい」

「なら今晚、私の部屋に来てくれ・・・・・・・・いいな？」

「わかりました。」

ベルは輝夜の部屋を後にしてからアストレアのところへと行き更新をしてからほかの姉たちも帰ってきてベルはご飯を食べてからお風呂に入り体を休めていた。

（どうしてお風呂は気持ちがいいのだろうか・・・・・・・・ここで入れるお風呂ももうわずかな・・・・・・・・）

そう元アポロン・ファミリアのホームの改装がだいぶ進んできており数日で完成をすると報告がきているからである。

そしてお風呂から上がりベルは輝夜の部屋に行くと彼女は待って

いたかのように正座をして待っていた。

「お待ちしておりましたわ兎さま。」

「輝夜お姉ちゃん?」

「さて改めてベル……アリーズとはやったのだから? 私ともやつてもらえないか?」

「輝夜お姉ちゃん」

「ふふふ今日は寝かせませんよ英雄さま」

その後ベルがどうなったのかは皆さまの想像にお任せします。なおオーマジオウはこのパターンだとシャツトダウンをさせてこちらから見えないようにするのであった。

ベルまたしても

次の日となりふふふと笑う声が聞こえてきたのでベルは目を開けるとそこは大きな果実が包まれており上を見上げると輝夜が笑っていたのでベルは昨日のことを思いだしたのか顔を赤くする。

「ふふふおはようベル」

「オハヨウゴザイマス輝夜オネエチャン。」

「兎さまは昨日はとても激しかったでございますね。まあ私も楽しめたがな。」

お互いに服を着替えて一緒にリビングに行きベルは眠そうに目をこすっていたが輝夜と一緒に洗面所へと行き顔を洗うといつものベルの顔になりリビングへと行き姉たちに挨拶をする。

「おはようベル」

「おう兎！」

「おはようございます」

挨拶をしてからベルはいつもの椅子に座り全員がそろったのを確認をしてアストレアが声をかける。

「さて新しいホームだけど明日完成という連絡が来たわ。流石ってところかしらね。」

「なら今日でこのホームで過ごすのも最後になるのですね。」

「その通りね。」

ベルはそうですかといい今まで過ごしてきたホームとも最後なんだなと思いつつ今日はアストレア・ファミリアとしての仕事としてパトロールをすることになっているため彼は修理をしているため槍を持っている。

今回共にパトロールをするのはネーゼ、リヤーナの二人である。

準備が整いベルは外で待っていると二人が駆けよりベルの武器がやりになっているのを見てネーゼが聞く。

「ねえベル、いつのまに武器を槍に変えたの？」

「そういえば私も今気づいたわ。」

「実は……」

ベル説明中

「そんなことがあったんだ。」

「はいそれで治るまでの間はこの槍を使おうと思ひまして。」

「なるほど」

2人は納得をして三人はオラリオをパトロールをするためにホームを後にする。街に到着をした三人は担当地域を分担をしてベルは歩きだす。

(このオラリオに来て6年か……7歳から冒険者として仮面ライダーとして戦い様々な人達と出会ってきたな。)

ベルはこの6年間の間冒険者としてまたは仮面ライダーとして戦い続けてきた。いずれにしてもベルを大きく成長をさせてくれたこと、さらにアストレアという優しい神に出会えたことそして姉たちとも出会わせてくれたことなど何よりもオーマジオウとの出会いも彼に取って大きな成長でもあった。

ベル・クラネル レベル5の冒険者、アストレア・ファミリア所属の戦士でもある。彼は自分が担当をする地域に到着をして異常がないのを確認をしながら回っている。

「今のところ異常はないか……」

「あれベル？」

「ん？」

彼は声をした方を見るとアイズやティオナ、ティオネにレフィーヤの四人がいたので彼は声をかける。

「アイズさん、それに皆さんも」

「ベルさんは何をしていますのですか？」

「アストレア・ファミリアとしてパトロールをしているんですよ。」

「大変だねー」

「いえいえこれでも続けている方ですから。皆さんは今日はお休みて感じですね？」

「そそ、それで皆で服とかを買いに行くんだよ!!」

「そうですか楽しんできてくださいいね?では」

そういつてベルはアイズ達と別れてから再び歩みを進んでいき彼

は異常ないなーと思いつつも何かの気配を感じて辺りに誰もいないことを感じて飛びあがりジクウドライダーを装着をして彼は見ているとオーロラカーテンが現れて何事かと見ていると銃を持った人物が現れたので彼は首をかしげている。

「なるほど君が土が言っていた新たなジオウか。」

「あなたは？」

「僕かい？彼よりも先に通りすがりの仮面ライダーさ覚えておいてくれたまえ」

【カメンライド】

「変身！」

【ディエンドー！】

姿が変わり彼の前に現れたのは仮面ライダーディエンドである。ベルはジオウライドウオッチを装着をして変身をしてジオウに変身をする。

「さて見せてもらおうか？君の力をね」

「行きます！」

ジオウはジカンギレードをジュウモードにしてディエンドに対して発砲をする。彼は放たれた弾丸を銃で相殺をする。

「なるほどならディエンドの力を見せるとしよう」

彼はカードを出してネオディエンドドライバ―に装填する。

【カメンライド ゲンム！】

【カメンライド レーザーターボ！】

【カメンライド バルカン！】

「行って来たまえ」

放たれてベルは構えているとゲンム アクションゲーマーレベル2、レーザーターボ、バルカンが現れたので驚いている。

「ライダーが召喚された!?!」

『ディエンドはライダーカードをネオディエンドドライバ―に装填させることで仮面ライダーを呼びだすことができる。』

「ならー！」

ベルもライダー召還を行いゲンム相手にはエグゼイド、レーザー

ターボにはアクセル、バルカンにはキバを召還をして相手をさせる。  
デイエンドはベルのライダー召還を見て驚いている。

「これは驚いたよ。なるほど……少しは面白くなりそうだね。」  
「ならー!」

【「デイデイデイデイケイド!」】

デイケイドライドウオッチを起動させてジクウドライダーに装着、  
回転させてアーマーが現れる、

【「ライダータイム! 仮面ライダージオウ! アーマータイム! カメンラ  
イド! ワオ! デイケイド! デイケイド! デイ・ケ・イド!」】

仮面ライダージオウデイケイドアーマーへと変身をしてライドヘ  
イセイバーを構えてデイエンドに切りかかる。

彼は素早くかわしてネオデイエンドドライバーのトリガーを引き  
弾を放つがそれをライドヘイセイバーでガードをしてアギトのライ  
ドウオッチを起動させてセットをする。

【「ファイナルフォームタイム! アアアアギト!」】

アギトトリニティフォームの力が入った姿へと変わり右手にフレ  
イムセイバー、左手にストームハルバードが装備されてデイエンドに  
攻撃をする。

「なるほど……土の力が入ったウオッチか、なら剣ならこれだ  
ね?」

【「カメンライド ナイト!」】

【「カメンライド ブレイブ!」】

ナイトとブレイブが召喚されてナイトはウイングランサーをふ  
るってきてベルはストームハルバードで受け止めるがさらにブレイ  
ブもガシヤコンソードを振るってきたのでベルは後ろへと下がりベ  
ルのライドウオッチに変えた。

【「ファイナルフォームタイム! ダダダダブル!」】

ファンングジョーカーの力が入った姿へと変わりボタンを押す。

【「ダダダダブル! ファイナルアタックタイムブ레이크!」】

【「は!!」】

飛びあがりファンングストライザーのように放ちブレイブとナイト

を撃破した。なおゲンム達のほうはライダー同士が相打ちになり消滅をした。

「やるじゃないか流石士が認めただけはあるね。さて今日のところはここままでしておくよ。あ、それとこれは僕からのプレゼントだよ。」  
そういつてディエンドは手を出すと何かがベルに当たり何かと思いい見ていると彼は言う。

「君に授けたのは僕がもらった時間を止める能力さ。君ならこれをおくようをすることはないだろうね。あー別に気にすることはないよこの力はまだあるからじゃあまた会おう」

そういつてディエンドはオーロラカーテンを開いて去っていきベルは困惑をしたまま新たな能力を得ることになった。

『時間を止める、それはタイムジャッカーが使っていたのと一緒の者だ。あらゆる時間が止まり自分だけが動くことができるという感じだ。』

「つまりいえば相手に攻撃をすれば相手は気づかないうちに倒れているって感じですか？」

『そういうことだ。』

こうして新たな力を入れたベル、彼はパトロール途中だったのを思いだしてすぐに飛び降りて変身を解除をするのであった。



## 新たなホームへ移動

パトロールをしている途中でベルは誰かの気配を感じて上空へと飛び見ているとオーロラカーテンが現れてその中から現れたのは海東 大樹こと仮面ライダーディエンドだった。

彼の召還をするライダーに対してエグゼイドなどヒーロー召還をした後にディケイドアーマーへと変身をして最後は呼びだしたナイトとブレイブをダブルフォームに変身をした技で倒した後彼から時を止める力をもらう。

現在ベルは海東からもらった力を試す為に一度時間を止めてみると辺りが動かなくなっていたのに気づいた。

「これが……」

『ああ動いているのは私達だけみたいだ。』

すぐに解除をして時が動きだして周りから声が聞こえてくる。ベルはネーゼ達と合流をした後ホームの方へと戻り最後に過ごす夜を迎える。

次の日新たなホームの方へとアストレア・ファミリアは引越しを行いベルも新しい部屋に移動をして荷物などを置いていく。なお前まで住んでいた場所はヘスティア・ファミリアに渡しており彼女達もすぐにアストレア・ファミリアが住んでいる場所に移動をする。

アストレア・ファミリアの眷族は新しくなったホームにこれからは過ごすためなおホームの改築はベルとアストレア・ファミリアのお金で支払いがされてゴブニユ・ファミリアに渡している。

現在ベルは新たなアストレア・ファミリアのホームを探索をしていた。元々アポロン・ファミリアの人数が多かったこともありかなりの広さがあったので一部を道場風にして彼はここにきて槍を振るっていた。

「……」

槍をふるった後に道場を後にする。彼は新しいホームを歩いているとアリーゼと輝夜がリビングで休んでいる。

「どうしたベル？」

「あーいえ、僕たちの新しいホームを歩いておりました。道場とか行ってみてきたんですよ。」

「あー道場とかあるんだね。」

三人で話をしながら新しいホームのことを話をしながらベルは指を鳴らすとアリーゼと輝夜が止まったのを確認をして立ちあがり移動をしてから指を鳴らす。時が動きだして二人はベルが移動をしているのに驚いている。

「え!?!」

「な!!」

2人は驚いている。先ほどまで前で話をしていたベルがいつの間にか移動をしていることにさらに見ているとベルが瞬間移動をしているかのように見えているので二人は目をこすっている。

実はベルが時を止める能力を応用をして瞬間移動をしているかのように見せているのだ。

「へへーん」

「いったいどういうことだ?」

「わからないわよおおおおお!!」

ベルは笑いながら時を止める能力を応用をしているのを見てオーマジオウは苦笑いをしながらその様子を見ていた。

『早すぎだろ? 時を止める能力を応用するのが、流石ベルだな』

「.....」

アルフィアは紅茶を飲みながらオーマジオウが用意をした本を読んでいた。

「おい新しい本を寄せ。」

『.....お前わがまますぎじゃないか? 私が本を呼び出すことができたら呼びだす装置みたいに全く。』

素晴らしいながらも指を鳴らして次の本を召還をするオーマジオウであった。アルフィアはよろしいといい次の本を読んでいる。

彼はその様子を見てため息をつく、まあ一人じゃないのはいいかな? と思いつつながら玉座に座りこむ。

ベルはホームを後にして街を歩いて槍を背中に装備をしてダン

ジョンへと行く。ジクウドライバーを装着をしてジオウに変身をして現れたモンスターに対してジカンギレードを発生させて切り裂いた。

「うーんとりあえず降りていこうかな？」

ベルは降りていき現れたモンスターに対してライダー召還などをしてしながら降りて撃破していく。彼は時を止める能力を使わないで歩いていき18階層まで降りてきてゴライアスが現れてベルに襲い掛かろうとしたが……。ベルは指を鳴らして時を止めてジクウドライバーを操作をして放つ。

『フィニッシュタイム！タイムブ레이크！』

飛びあがり必殺の蹴りを止まっているゴライアスに当てた後に着地をしていった。

「そして時が動きだす。」

指を鳴らして時間が動きだすとゴライアスは雄たけびをあげながら爆散をして撃破された。

「これやっぱり便利ですね。」

『時を止めることができるからな、相手の攻撃を交わすには便利だろうな。』

「確かにそうですね。」

彼はリヴィラの街に到着をしてからいつも水浴びをしているところへと行き彼は服を脱いで入る。

「うーん冷たい。」

冷たい水なのでベルは入ったのはいいけど寒くなっていき疲れた体を濡らしていくが……。誰かがいるのを感じてジカンギレードをジユウモードにして構える。

「誰ですか？僕を見ている人……。」

「あははははばれっちゃったかな？」

「アーデイお姉ちゃん!？」

現れた人物はアーデイだった。彼女は苦笑いをしながら隠れていた場所から出てきて自分が装備をしていたのを外して裸となり一緒に入る。

「ふう……」

「いやふうじゃないよ!!なんで入ってきているの!?!」

「いやーベル君に裸見られているし……それに君は一人で来たんでしょ?」

「ええそうですが……」

「ならば私が裸になってこうしているのに不思議と思わないかな?」

「……アーデイお姉ちゃん……それってもしかして?」  
「こそ」

(あ、これはまづいかもしれないシャツトダウンをしておこう。)

オーマジオウはアーデイの雰囲気などを感じて嫌な予感があったので彼はこちらの映像をシャットダウンさせる。

「さてベル君……アーリーゼとやったの?」

「えつとやりました。」

「ならいいよね?」

(あ、＼( ^o^ )／オワタ)

速報　ベル、別のファミリアの女性を抱く完。

## ベルとアーデイ

ベルside

「はあ．．．はあ．．．．．」

僕はアーデイお姉ちゃんと湖から出てこつそりと人がいなさそうな場所に移動をしてからその．．．．．やりまして本当に大丈夫なのでしょうか？アーデイお姉ちゃんは裸のまま僕に抱き付いているし．．．．．とりあえず人がいないことを確認をしているとアーデイお姉ちゃんが目を覚ましたのか僕の方をジーと見ていた。

「ベルくん。」

「アーデイお姉ちゃん．．．．．」

「気持ちよかったね？」

「あ、はい．．．．．そうですね。」

「ベル君は気持ち良くなかったの？」

「いえ気持ち良かったです。」

正直に言うとアーデイお姉ちゃんは抱きしめてきた。彼女の果実が僕を包んでおり．．．．．弾力がすごいな．．．．．リユーお姉ちゃんよりも大きい．．．．．

新アストレア・ファミリアホーム

「くしゅん！」

「リオンどうしたの風邪？」

「あ、いえ．．．誰かに噂されていると思います．．．．．」

「気のせいだと思うよ。一応風邪薬飲んでおいたら？」

「そうですね。」

何だろうか？リユーお姉ちゃんがくしゅみやみをした気がするけど気のせいだね．．．．．とりあえずアーデイお姉ちゃんと僕は脱いでいた服を着ていたけどそういうええなんでアーデイお姉ちゃんはいたんだらう？

「ねえアーデイお姉ちゃん。」

「何ベル君？」

「なんでアーデイお姉ちゃんは一人でいたの？何か用事でダンジョン

へ来たのかな？」

「まあそんなところだね。水浴びをしようと思つて来たらベル君がいたんで襲っちゃいました（笑）」

「おうふ……」

まさか僕を見つけて襲つてくるとは思つてもいませんでした。てか今思つたんですけど……アーデイお姉ちゃん初めてを僕にささげたってことでもいいんだよね？

「いいの、私はベル君のこと好きだから……傷つきながらも仮面ライダーとして戦つて……私たちを守ってくれたから……」

「アーデイお姉ちゃん……」

そのままお互いに抱き付いてキスをする。

「うちゅ……ちゅぱ……んちゅ」

「あ、アーデイ……おねえひゃん……」

「うふふふベル君また大きくなってきたよ？」

「だ、だって……アーデイお姉ちゃんの胸が……当たつているよ。」

「当てているんだよ……アリーズと輝夜には負けちゃうけどリオンよりは大きいよ？」

そこでリユーお姉ちゃんを出すつてことは……まあないわけじゃないですけど……おそらくアストレア・ファミリアで一番に小さいのリユーお姉ちゃんじゃないかな？

まあ今はそんなことは考えないで立ちあがりアーデイお姉ちゃんと一緒にダンジョンから出ることにした。

ジクウドライバーを装着をしてジオウに変身をして二人は上の方へと行こうとすると

「ステージセレクト！」

「!!」

突然としてダンジョンにいたはずの自分たちが変な場所にいるので驚いていると光弾が飛んできたのでベルはアーデイを抱えて回避をすると一人の男が現れる。

「ほーう私の攻撃を交わしたか。」

「あれって……」

『あれは壇 黎斗か……なぜ奴まで?』

「ふっはっはっは! 神である私に時代がようやく追いついたのだああああああ!! へっはっはっはっはっはっは!!」

彼は腰部にゲーマードライバーを装着をしてガシヤットのスイッチを押す。

【マイティアクションX!】

「グレート2変身!!」

【ガシヤット! ガチャーン! レベルアップ! マイティアクションX!!】

仮面ライダーゲンムレベル2に変身をして右手にガシヤコンバクヴァイザーを装備をしてビームガンを放ってきた。ベルは交わしてジカンギレードを放つがゲンムは交わして接近をして蹴りを入れてダメージを与える。

「ぐ!! だったら!!」

【エグゼイド!】

そのままジクウドライバーに装着をして回転させる。

【ライダータイム! 仮面ライダージオウ! アーマータイム! レベルアップ! エグゼイド!】

仮面ライダージオウエグゼイドアーマーを装着をしてガシヤコンブレイカーブレイカーを構えてゲンムに突撃をする。

「であ! たあ!」

「ちい! 宝生 永夢の力か!」

ガシヤコンブレイカーブレイカーの攻撃を受けてゲンムは吹き飛ばされて彼はガシヤットをセットをする。

【ゲキトツロボッツ!】

「グレート3変身!!」

【ガシヤット! ガチャーン! レベルアップ! マイティアクションX! アガツチャ! ゲ・キ・ト・ツロボッツ!】

ロボットアクションゲーマーレベル3に変身をしてゲキトツスマッシュヤーを構えてベルが放ったガシヤコンブレイカーブレイカー

を相殺をするが逆に吹き飛ばしてベルは地面に転がる。

「ベル君!!」

アーデイは声をかけていこうとしたがベルが来ないように指示をして立ちあがり彼はエグゼイドライドウオッチを外してゼロワンライドウオッチをセットをして変身をする。

「ライダータイム! 仮面ライダージオウ! アーマータイム! ライジングホッパー! ゼロワン!」

ゼロワンアーマーを纏いベルにゲンムはゲキトツスマツシャーを放ったがベルは脚部に力を込めて飛びあがり一気に接近をして蹴りを入れてゲンムは吹き飛ばされる。

「少しはやるな……」

【ジェットコンバット!】

「グレート3」

【ガツシユン! ガシャット! ガチャーンレベルアップ! マイティーアクシヨーンX! アガツチャ! ジェットコンバット!】

「また姿が変わった!？」

「は!!」

上空からガトリング砲を構えて発砲をしてベルは回避をする。ジカンザツクスを出してユミモードにして引いて放つがゲンムは素早くかわしてミサイルが発射されてベルは吹き飛ばされてしまう。

「ぐああああああああ!!」

「ベル君!!」

アーデイは叫ぶがベルは立ちあがりグランドジオウに変身をして上空に飛んでいるゲンムに対してこのライダーを選択をする。

【フォーゼー!】

「ライダーきりもみクラッシャー!!」

「どあ!!」

ロケットステイツのフォーゼが放つきりもみクラッシャーを受けてゲンムは墜落をした。彼は立ちあがり笑っている。

「やはり面白いな! 仮面ライダージオウ! 今日のところはここまでしておくさ! また会おう!」



「逃がさない!!」

ベルは追いかけてしようとしたが……

【キメワザ！ジエツトクリティカルフィニッシュ!!】

一斉射撃が放たれてベルはガードをした。するとステージが解除されて自分たちがいたダンジョンに戻っていたのでベルは驚いているとアーデイが抱き付いた。

「ベル君！大丈夫!？」

「ええ……なんとか……」

ベルはグラウンドジオウを解除をして通常のジオウに戻りアーデイと共にダンジョンを上がっていく。

(まさか壇 黎斗まで復活をするとはな……何か嫌な予感がする。)

一方でオラリオの裏路地で

「どあー!」

「どうした……お前らの力つてのはそんなものかよ……」

「なんだてめえ!!俺たちに喧嘩をうったことを後悔してやる!!」

一人の冒険者が男性に殴りかかるが逆につかんで投げ飛ばした後顔面に蹴りを入れた。

「楽しいな……」

「ひい!」

「食べる」

「え?ぎやああああああああああああああ!!」

現れたエイ、サイ、コブラのモンスターが先ほど男を襲っていた冒険者を食べた。男性はその場を去っていく。いったい何者なのだろうか?壇 黎斗とは別の人物もこの世界に現れたのだから。

## 疲れ

仮面ライダーゲンムに襲われてなんとか退かせることに成功をしたベル、彼はアーディと共にダンジョンから出てから別れて新しくなったアストレア・ファミリアのホームへと戻ってきた。

丁度カサンドラとダフネがいたのでベルに声をかける。

「べ、ベル？」

「ベルさん？」

「や、やあ……………」

「なんか疲れていない？」

「大丈夫大丈夫……………」

『いや大丈夫じゃないだろ、すごく疲れている顔をしているのだが？』

「あははは……………」

（一体何があっただろう？）

2人はベルが目から光が消えた状態で笑っているのを見てダンジョンで何があっただろうと思った。一方でアリーゼ、輝夜、ネーゼ、リユートの四人はガネージャ・ファミリアのシャクティと共にある現場検証を行っていた。

「……………冒険者の装備などもいつしよに消えているつても不思議だな。しかもダンジョンなどにも行かずにその神さま曰く恩恵が消えたとも言ってたな。」

「どうネーゼ？」

「……………うん間違いなくここを通っているね。だけど匂いはここで途切れているから間違いなくここを通っているよ。」

「まさか神隠しでもあったというのか？」

シャクティはアリーゼ達に素晴らしい彼女達も両手を組みどうしたらいいのだろうかと思いいずれにしても自分たちでは解決ができないと判断をしたシャクティは……………次の日にアストレア・ファミリアによるといい今日のところは解散となりアリーゼ達もホームへと戻る。

ホームへと戻ったアリーゼ達はベルがマリユード達にモフモフされ

ている姿を見るとアリーゼはうずうずしている。

「ずるいわよ！あんたたち！」

「いいじゃないですか団長！」

「そうだそうだと！団長ばかりベルにモフモフをするのはずるいので！！」

「……………」

姉たちにモフモフされていたが彼自身の目からハイライトは消えておりカサンドラとダフネは苦笑いしながらその様子を見ているのであった。

やがて解放されたベルは疲れていたのか自分の部屋へと戻りベツトに倒れる。一方で夜の街のオラリオでは酔っぱらいの冒険者が一人でウロウロとしていた。

そこに一人の人物にぶつかり冒険者はこける。

「いってええええええええ!!てめえどこを見てやがる!!」

「……………イライラするんだよ。」

すると彼はカードデツキを出すと腰部に装着されて構える。

「変身!!」

デツキが装備されて姿が変わり仮面ライダー王蛇に変わる。

「な、なんだ!?!」

「さあやろうぜ……………戦いをよ」

王蛇は冒険者を立たせるとそのお腹に思いつきりなぐり吹き飛ばした。

「いふら!!」

そのまま壁にめり込まさせた後にカードを出してモンスターが三体現れて冒険者を食べさせる。

「弱いな……………冒険者って奴は……………」

そういつて変身を解除をしてその場を去っていく。また装備なども残されておらず行方不明者が出る。

## 新たな事件発生

次の日ベルは起きた。彼は眠そうな体を起こす為に立ちあがり自分の部屋を後にしてリビングに行くとはかの姉たちは起きておりさらにシャクティもいたのでベルは首をかしげていた。

「あ、あれ？シャクティお姉ちゃん？」

「やあベル、随分と遅くに起きるものだな。」

「すみません。」

「まあいいわよベル、シャクティは来たばかりだからね。」

「……………これはベルの力も借りたほうがいいかもしれない。」

「？」

ベルはシャクティがベルの力を借りたいといってきたのでいったい何があつたんだろうと話を聞くことにした。

「ベル、最近冒険者が行方不明になっているのは知っているな？」

「そういえば最近になって冒険者が装備などもなく消えていく事件は聞いています。」

「そうだ、だからベルの力を借りたい。」

「そういうことですか……………犯人は仮面ライダーかもしれなくてことですか？」

「すまない……………」

「いいえ、それで僕は何をすれば？」

「……………困だ。」

「……………」

「奴が現れるのはだいたい夜なんだ、ベルには困になつてもらいたい。」

「ちよつと待ちなさい！そんなこと私達が許すとも思っているのシャクティ!!」

「わかっている。だがそれしか思いつかないんだ。」

「……………わかりました。その役目引きうけましょう！」

「ベルさま！私も共に戦わせてください！私もあなたと同じ仮面ライダーとしての力を持っております！」

「わかった。フィルヴィスさん力をお借りします。」

「はは!!」

こうしてベルとフィルヴィスの二人が囿になることが決まり、アストレア・ファミアとガネージャ・ファミアの面々はその周りを隠れて様子をうかがう。二人はいつでも変身ができるように腰部にジクウドライバーとビョンドドライバーを装備をして歩いている。

「ベルさま……今のところ何もいませんね。」

「ええ、フィルヴィスさん気を付けてくださいね?」

「わかっていますよ。」

お互いに警戒をしながら歩いていると突然としてエイのモンスターが現れて二人は交わすと仮面ライダーが現れる。

「ほーう……攻撃を交わしたか……」

2人は現れたのを見てオーマジオウはベルに声をかける。

『あれは仮面ライダー王蛇……奴は三体のモンスターを従えているライダーだ。しかも奴は凶悪殺人犯でもあり仮面ライダーをいくつも倒してきたのだ。おそらく今回の事件の犯人で間違いない。』  
「丁度いい……冒険者って奴らは弱すぎる。お前らはどうだか?」

「ベルさま……」

「行きましょうフィルヴィスさん!!」

【ジオウ!】

【クイズ!】

【変身!!】

【ライダータイム!仮面ライダージオウ!】

【投影!フューチャータイム!ファッシュョン!パッシュョン!クエスチョン!フューチャーリングクイズ!クイズ!】

仮面ライダージオウと仮面ライダーフィルヴィスに変身をしたのを見て王蛇は笑いだす。

「面白い仮面ライダーが相手か……さあやろうぜ!ライダーバトルを!」

彼はベノバイザーを出してVバックルからカードを出して装填さ

せる。

【ソードベント】

現れたベノサーベルを持ち襲い掛かってきた。ベルはジカンギレードを出してフィルヴィスはジカンデススパアーをツエモードにして構えてベノサーベルをガードをする。

「さてここで問題を出しましょう。」

「あ?」

「私達は二人で戦っているが実はほかにもいる○か?か。」

「そんなのどうでもいい・・・俺は戦えればいいさ。」

「そうか・・・正解は○だ」

肩部が開いて○が出たが答えていなかったので雷が王蛇に落ちてきて二人は後ろへと下がる。

「ほーう面白いことをするなお前・・・」

「あら効いておりませんか・・・」

フィルヴィスはそう呟きベルも油断をしない方がいいと考えてライドウオッチを出してセットをする。

【ライダータイム!仮面ライダージオウ!アーマータイム!アドベント!龍騎!】

龍騎アーマーに変身をしてジカンギレードをジュウモードにして王蛇に発砲をして王蛇にダメージを与えてフィルヴィスがツエモードの先端部分をボディに当てて吹き飛ばした。

「・・・やるじゃないか、面白い」

【ユナイトベント!】

するとサイ、コブラ、エイのモンスターが現れて合体をしてジェノサイダーへと合体をした。

「な!?モンスターだと!」

「どうするのよ!」

「・・・さあどうする?」

龍騎アーマーの両肩部が光りだしてドラグレッタターが現れてベルは突撃をするように言いドラグレッタターはジェノサイダーに突撃をして火炎の弾を放ち攻撃をしていく。

「はああああああああああ!!」

ベルはジカンギレードを振るい王蛇はメタルホーンを召還をしてジカンギレードを受け止めるとそのままベルの首を絞め殺そうとしたが……

【投影！フューチャータイム！誰じゃ？俺じゃ？忍者！フューチャーリングシノビー！シノビー！】

【忍法水流破!!】

両手に水を発生させてそれを勢いよく放ち王蛇を吹き飛ばしてベルは首絞めから解放された。

「大丈夫ですかベルさま？」

「はい。」

ベルは立ちあがりジオウライドウオッチと龍騎ライドウオッチを押す。王蛇もわかったのかカードを抜いてベノバイザーに装填させる。

【フィニッシュタイム！龍騎！ファイナルタイムブ레이크！】

【ファイナルベント！】

お互いに飛びあがり王蛇はきりもみキックをベルはドラゴンライダーキックを放ち激突をする。

全員がそれを見ていた。

「ベル!!」

そして激突が終わり吹き飛ばされたのは……

「ぐあー!」

王蛇だ。ベルは着地をして王蛇に近づこうとしたがそこにジェノサイダーが分離をしてベノスネーカーが体当たりをしてベルを吹き飛ばして王蛇を連れ去り消えた。

「「ベル!!」」

「……皆さんすみません逃げられてしまいました。」

「いや犯人がわかっただけでも良かった。だが犯人が仮面ライダーとはな……」

シャクティは両手を組みベル自身も奴の強さに翻弄されてしまいまさか押しあいで負けてしまうとは思ってもいなかった。いずれに

してもあの人をほっておいたら更なる被害者が増えてしまう。

止めなければもつと大きな被害が出てしまう。

「……もう手加減などをしない！僕は……今度こそあの人を止める！！」

ベルは拳を握りしめて王蛇を倒すことに躊躇をしないと。



## 王蛇搜索

「奴はいったいどこに……」

ベルは王蛇を搜索するために仮面ライダー召還を行い協力をして搜索をしていた。ベノスネーカーによつて逃走をした王蛇を探す為に今も探し続けていた。だが王蛇を見つけることができなかった。

ベルは一度ライダー召還をやめてホームへと戻るとほかのメンバーも見つからなかったのかため息をついていた。

「全くどこにいったのかしら?」

「わからないな。」

「ずっと探し続けているのにいったい……」

全員が両手を組んで王蛇の搜索を行っているがどこにいるのかわからない。ベルがジオウから変身を解除をしているように王蛇も変身を解除をしている可能性が高い、オラリオである姿のままいることはないのでベルはオーマジオウに王蛇のことを聞く。

「オーマジオウさんは知っているのじゃないですか?王蛇のことを」

『確かに知っている。人間態は浅倉 威というぐらいしか知らない、容姿などを聞かれても一番困るのだが……』

オーマジオウはそのように答えて自分たちで探すしかないかとベルはスタックフォン、バットカメラを起動させて王蛇を探すように指示を出してタカライドウォッチにも同じように指示を出して向かわせる。

さて場所が変わりオラリオに隠れている王蛇は変身を解除して浅倉 威の姿に戻る。彼はイライラを募らせながらも鏡にいる相棒たちを見ていた。

「ツチ、餌が必要か……」

一方で場所が変わり一人の男がどこかで目を覚ます。

「俺は……」

「おや自分目を覚ましたかいな?」

「あんたは?」

「うちの名前はロキヤ、これあんたのやる?」

そういつて投げたのはカードデッキだ。彼は目を見開いた。なぜこれがあるのか……また戦いが行われるというのかと……「なるほど、それどこかで見たことがあるな」と思っていたけど確かベルたんが龍騎って力を使ったときと一緒やな。」

「龍騎……城戸もいるのか!？」

「誰やねんその城戸って!!てか一回落ち着き!」

ロキに言われて男性は落ち着くように深呼吸をする。

「すまない取り乱した。」

「さてあんたは何者や?うちのホームで倒れていたんや。」

「俺の名前……俺は秋山 蓮だ。」

ロキ・ファミアでそんなことが起きている頃、ベルは再び外に出て王蛇の搜索をしていると誰かの声が聞こえてきたので現場に急行をすると冒険者が殴られてモンスターが襲おうとしていたところだ。

「変身!!」

「ライダータイム!仮面ライダージオウ!」

「ジカンガトリング!」

「であ!!」

ジカンガトリングから弾が放たれてモンスターたちはそれに当たりダメージを与えてベルは冒険者の前に立つ。

「またお前か……邪魔をするな。」

「いいえ邪魔をします!人の命を何だと思っっているのですか!!」

「……お前、やっぱリイライラさせるな……」

「スイングベント」

エビルウィップを装備をしてベルに対して振るってきた。ベルは交わしてジカンガトリングを放ち王蛇のボディにダメージを与える。

王蛇は吹き飛ばされてアドベントカードを装填をしてメタルゲラスが突進をしてベルは吹き飛ばされてしまう。

「が!!」

吹き飛ばされたベルに王蛇はつかんでお腹に思いつきり殴る。

「が!!」

仮面の中でベルは血を吐きだしてアルフィアは目を見開いてその

まま立ちあがりベルの方へと合体をする。

「どうした?」

「福音」

すると王蛇が吹き飛ばされて何があったのかと見ているとジオウの姿のままだが先ほどと違いオーラが纏われている。

「雑音が……私の可愛い甥に手を出してくれたな……」

【グランドジオウー】

グランドジオウライドウオッチを出してそのままセットをして回転させる。

【グランドタイム! 仮面ライダー! グ・ラ・ン・ドジオウー!】

グランドジオウに変身をして王蛇はメタルホーンを出してアルファイアが憑依をしたベルに攻撃をしてきた。

だが彼女はそれを素手ではじかせて蹴りを入れて王蛇のボディを思いっきり蹴り飛ばした。

「な、なんだ……」

「どうした? 雑音……お前の力はそんなものか?」

王蛇は立ちあがりファイナルベントのカードを出して装填する。

【ファイナルベント】

後ろにベノスネーカーが現れてそのまま飛びあがり連続した蹴りをグランドジオウに放つが彼女はライドハイセイバーを出して一回転をしてベノクラッシュを放った王蛇を逆に切り飛ばして吹き飛ばした。

「が!!」

「ねえオーマジオウさん。」

『なんだベル?』

「お義母さんはあの剣技どこで?」

『お前の中でずっと見ていたからな、大体のお前の戦法などは戦えると思うぞ?』

「まじで?」

『まじで』

2人はそんなことを話しをしている中アルファイア憑依のグランド

ジオウは王蛇を起こすと拳のラツシユが飛び王蛇は吹き飛ばされる。アルフィアは自身の甥が血を吐きだしたのを見て見ても居られなくなりオーマジオウの静止を振りきりベルに憑依をした。

彼女は止めを刺そうとベルト操作をしようとした。

「いけないーお義母さん!!」

ベルはダツシユをして主導権を取り戻して必殺技を放つ寸前で止めたのでベルトの操作を行わないでいた。王蛇は立ちあがりアドベントカードでエビルダイバーを召還をしてベルは油断をして攻撃を受けてしまい吹き飛ばされる。

「ぐ!!」

「おいおい・・・なんで止めを刺さない・・・」

「自首をしてください！これ以上罪を重ねないで!!」

「ふざけたことを・・・」

王蛇はファイナルベントカードを出そうとしていた。ベルは決意を固めてベルトの操作を行う。

「フィニッシュタイム！グラウンドジオウ！オールツエンティタイムブレーク!!」

「ファイナルベント!!」

エビルダイバーの上に乗リグラウンドジオウは飛びあがりクウガからビルドまでのマークが発生をしてそのエネルギーを込められた蹴りが王蛇に命中をして吹き飛ばす。

「ぐああああああああ!!」

着地をしたベル、そこにガネージャ・ファミリアの人たちも駆けつけて王蛇は変身が解除をされた。

「よしつかまえる!!」

シャクテイの指示の元団員たちが倒れている浅倉を捕まえる。ベルはグラウンドジオウライドウオツチとジオウライドウオツチを外してシャクテイはベルに抱き付く。

「よくやったベル・・・」

「ふう・・・」

(ああーベル可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い)



## 変身

王蛇事件は仮面ライダージオウ事ベル・クラネルが撃破して彼は変身を解除をしたところを捕まえて地下牢に放り込まれた。

事件を解決をしたベル・クラネルはというと疲れてしまいあの後輝夜に連れられてホームの方へと帰還をした。

完全に疲れていた彼は輝夜の胸の中で眠りについており彼女はうふふと笑いながらベルのモフモフを堪能をするのであった。

一方でそんな事件が発生をしていたロキ・ファミリアでは新たな人物秋山 蓮が仲間になったことを報告をしていた。

挨拶をした後蓮は情報を得るためにオラリオの街を歩きだす。いずれにしても龍騎の力を持った相手に会わないと行けないと……だがなぜ自分がこの世界で目を覚ましてさらにカードデッキがあったことに驚きながらも彼は歩いていった。

「やはり情報を得るにはどうしたらいいのか……それに浅倉のことが乗っていたことに驚いているが……いずれにしてもこの世界でライダーバトルが行われていないのは間違いないな。」

一方でアストレア・ファミリアのホームにはアイズが遊びに来ていた。ベルは現在眠っている状態のため会うことができなかつたのでシヨボンと落ち込んでいるところである。

「……ベルは大丈夫?」

「心配することはありません。犯人と激突をして疲れが出たのでしよう。」

「そうなんだ。ベル……私が知らないところでも戦っているんだね。」  
リユールと話ながらアイズはベルが眠っているの邪魔をしないために退散をしようとした時にふああああと欠伸をしながらベルが現れた。

「ベル。」

「あー良く寝た。おやアイズさんいらっしやい。」

「ベル大丈夫?」

「ええ心配をかけてすみません。傷の方はオーマジオウさんの力で回

復をしましたから平気です。」

アイズはその言葉を聞いてホッとしていると扉が開いてアリーゼが入ってきた。

「ベルーあんたにお客さんだよ?」

「お客さん?」

「あれって確か……蓮ってひとだ。」

「邪魔をする。お前がこいつが言っていた龍騎の力を使う奴か?」

「あなたは?」

「俺の名前は秋山 蓮、またの名を……仮面ライダーナイトだ。」

彼はVバックルをとりだしたのを見てベルは立ちあがり彼の相手をする決意を固めて外に出る。新ホームの裏庭は広くなっておりここで模擬戦などを行うことがある。アストレア・ファミリアのメンバーやアイズはライダー同士の戦いを見るのは王蛇以来なのでお互いに構えている。

「変身!!」

Vバックルをセットをして彼の姿が変わり仮面ライダーナイトへと姿が変わる。ベルもジオウライドウォッチを起動させてジクウドライダーにセットをしてまわす。

「変身!!」

「ライダータイム!仮面ライダージオウ!」

ジオウに変身をしてジカンギレードをナイトは腰につけているダークバイザーを抜いてお互いに構えると走りだして剣と剣がぶつかり合う。ジオウが振るったジカンギレードをナイトはダークバイザーを使いはじかせていく。

「はー!であー!とうー!」

「ふー!はー!せい!は!!」

ベルは戦いながら仮面ライダーナイトの力は強いと感じており一度後ろの方へと下がりジュウモードにして発砲をする。

「北岡のような戦い方もするってことか……悪いがリーチを狭くさせてもらう。」

彼はダークバイザーを開いて腰のVバックルからカードを出して

装填する。

【ソードベント】

蝙蝠型のミラーモンスター『ダークウイング』が現れてウイングランサーをキャッチをして構える。

「武器?」

「はああああああ!!」

ナイトは接近をしてウイングランサーをジオウのボディに突き刺した。ウイングランサーの攻撃を受けたベルは後ろへと吹き飛ばされるがそのままライドウオッチをセットをしてアーマーを召還をして装着をする。

【アーマータイム!サイクロン!ジョーカー!ダブル!】

ダブルアーマーを装着をして風の力でゆつくりと着地をする。ナイトはベルがアーマーを装着をした姿を見てなるほどなと構え直す。

「行きますよ蓮さん!!」

「来い!」

ジオウは接近をして風を纏わせた蹴りをナイトに放つ。彼はウイングランサーを使ってはじかせていくがジオウの連続した攻撃でウイングランサーが吹き飛ばされてしまう。

「く!」

「はああああああああ!!」

ジオウはパンチをしてナイトにあた・・・らなかった。

「え?」

ジオウは驚くのはナイトが増えているからだ。一人が二人、二人が四人、四人が八人と増えているからだ。

『トリックベント・・・実体を持つ分身を作りだすカードだな。』

「!!は!!」

その戦いを見ているアリーゼ達はナイトが分身をしたのを見て驚いている。

「ほえーあの仮面ライダー分身をしているわよ!」

「ああ、それに剣裁きに槍裁き見事なものだな。」

トリックベントをしたナイトの攻撃でピンチのジオウ、彼は二人の



ナイトのダークバイザーの攻撃を受けて吹き飛ばされてしまう。ナイトも一人となり彼はバツクルから一枚のカードを抜く、すると辺りから風が発生をしてベルはグランドジオウライドウォッチを出して構える。

【サバイブー！】

【グ・ラ・ン・ドジオウー！】

ナイトは「サバイブ疾風」のカードでナイトサバイブにジオウはグランドジオウへと変身をしてナイトはダークブレードを抜いて構えてジオウは龍騎のボタンを押す。

【龍騎ー！】

ドラグバイザーツヴァイが現れてドラグブレードを発生させて構える。

「なるほど、城戸の力を使えるってのは本当だな。お前があいつの力がふさわしいのか見てやる!!うおおおおおおおお!!」

ナイトサバイブは接近をしてダークブレードを振り下ろす。ジオウはドラグブレードで受け止めるとそのままはじかせてほかのライダーのボタンを押す。

【鎧武ー！】

イチゴクナイが装備されて連続して投げつける。

【ゴーストー！】

ガンガンセイバーとバットクロックライフルモードが現れてそれを構えて発砲をして接近をする。

ナイトサバイブは放たれた弾丸をはじかせるとカードを装填する。

【プラスチックベントー！】

ダークウイングが現れて姿が変化をしてダークレイダーへと変わり翼のホイールが巨大化をして高速回転をしてジオウは疾風で吹き飛ばされてしまう。

「うわ!!」

彼はダークソードをダークシールドにしまいカードを装填する。

【シュートベント】

変形をしてダークアローへと変わり放ってきた。



## 祭り

ベルside

そういえばこの日の夜にだけ行われる祭事があつたのをすっかり忘れていた。「神月祭り」アストレア様曰くこの地上に神々が降臨する前から開催されているという伝統の祭りみだいだ。

僕はその日は警備担当じゃないので祭りを楽しむことにした。だが今回の祭りは短時間でしか行われないう。

『祭りってのは普通は長いはずなのになぜ今年は短いのだろうか？』

さあそれに関しては僕もわかりませんが………とりあえず夜となり僕は神月祭りの周ることにした。

イカ焼きを食べていると声をかけてきたので前を向くとロキ・ファミリアのアイズさんとレフィーヤさん、ティオナさんがいた。

「ヤッホーベル！」

「こんばんはベルさん。」

「どうも………あつつつつ」

「ベルは今日は……一人なの？」

「ええ蓮さんとの戦いで疲れてしまいましたまして今回は一人で行かせてくださいといひまして………」

「なんかごめん………」

アイズさんが謝ってきたので僕は気にしていませんよといい四人で周ることにした。色んな屋台などが出ていると大きな声が聞こえてきたので見るとヘルメス様がステージ上で何かをしていた。

ステージには槍が突き刺さっていたので見ていると隣の方に木場さんとリリがいた。

「木場さんとリリ。」

「ベルさま。」

「やあベル君。」

「これは選ばれたものにしか抜けない伝説の『槍』だ！手にしたものは女神の祝福が約束されるだろう！さらに！抜いたものには、豪華世界観光ツアーにご招待！ギルドには許可済みだ!!」

「「「おおおおおおおおおおお!!」」」

まじですか、あの槍を抜いたらか……。アストレア様やアリーゼお姉ちゃんたちを連れて行って見たいかも……。僕たちも参加をすることとなりまずはテイオナさんが引つ張ろうとする。

「うぐう!!だ、駄目……。抜けない」

テイオナさんが脱落をして次にレフイーヤさん、アイズさん、リリが挑戦をするも抜けないで木場さんがステージに立ち槍を抜こうとするが……。

「うぐーぐううううう!!……。だ、駄目だ抜けない。」

木場さんまで……。そして次は僕がステージに立ち槍を持つ。

『やはりあなたなのねオリオン!』

「え?」

僕は声が聞こえて槍を抜こうと力を入れようとしたときにそのまますっぽ抜けて僕は啞然としてしまう。

「す、すごいですベルさん!!」

「ああ僕たちが抜けなかった槍を……。」

「決まったああああああああ!!ベル・クラネル君が見事に抜いて見せましたああああああああ!!」

僕は槍を見ているけど何だろう……。先ほど女性の声が聞こえてきたのは……。するとヘルメス様が僕のところへ来て声をかけてきた。

「後で1時間後くらいに君のホームに行く。悪いけど木場君にヘルメス様を呼んでほしい。じゃあまた後で」

そういつてヘルメス様は去っていき僕は抜いた槍を持ったまま木場さんにヘルメス様を僕たちのホームに来るように言い木場さんも了承をしてくれて僕たちは一度ホームへと帰宅をする。

ベルside終了

ベルが槍をもって帰宅をしたのを見てアストレアは驚いている。ベルはヘルメスが1時間後にこちらのホームへ来ることをいい彼女

は両手を組み何かを考えている。

(ベルが持つて帰ってきた槍、どこかで見たことがあるわね……。それにヘルメスが1時間後に来るなんてね……。何か嫌な予感がするわ……。)

アストレアはそう考えているとほかのメンバーも呼んでおいて待機をしているとヘルメスがやってきた。その後ろにガネージャ、ロキ、ヘステイアに眷族の木場とリルルカも来ていた。

「やあ悪い待たせたね。アストレア、ガネージャ、ロキ、そしてヘステイア……。『アンタレス』を知っているか？」

「!!」

ヘルメスから放たれたアンタレスという言葉聞いて四人は目を見開いている。ベルは聞いたことがなかったので首をかしげているとヘルメスは話を続ける。

「アンタレスってのは俺達が地上に降臨をするはるか昔に大精霊によって封印された怪物だ。だが奴の封印が解かれて復活をした。」

「!!」

『ヘルメスとやらいわせてもらおう。』

「なんだいオーマジオウ。」

『もしかしてそのアンタレスに神の力でも入ったのではないか?』

「オーマジオウさんということですか？」

『先ほどからベルが持っている槍、それから神の力を感じた……。私もわずかだったのですねとなくなりましたが名前はわかった。アルテミス……。だと思う。』

「ま、まさか……。」

「そうだ……。アンタレスがとりこんだのは……。アルテミスだ。」

「あ、アルテミスが……。」

ヘステイアが倒れたので木場は支えた。ヘステイアに取って大事な大親友がとりこまれたと聞いて立折れないはずがない……。そして彼が持っている槍こそアルテミスが残した「オリオンの矢」である。

もしそれを実行をする。それはベルが神殺しという称号を得ることになる。

「……………アストレア様、僕は行きます!」

「ベル……………あなた今、自分が何を言っているのかわかっているの?」

「もちろんわかっています!だから僕は倒すんじゃないやありません!アルテミスさまを助けて戻ってきます!!僕は俺は!仮面ライダーですから!!」

「わかったわ。アリーゼ、輝夜、リユー……………あなたたちにもベルと一緒に戻ってもらおうわね。」

「わかっています!!」

「お任せを」

「はい。」

「待ってください僕も行きます!」

「木場さまが行くなら私も行きます!!」

「ならうちからはリヴェリアとアイズを出すで。」

「ロキ、あなた……………」

「まあ本来だったらリヴェリアだけやけどどうも嫌な予感がしてな。ついでや蓮もだしたる。」

「ならこつちからはシャクティとアーデイを出そう!」

こうしてアルテミス救出作戦が決行されて参加者は!!

アストレア・ファミリア

ベル・クラネル　アリーゼ・ローヴェル　ゴジヨウノ・輝夜

リユー・リオン

ヘステイア・ファミリア

木場　勇治　リリルカ・アーデ

ロキ・ファミリア

リヴェリア・リヨス・アールヴ　アイズ・ヴァレンシユタイン　秋

山　蓮

ガネージャ・ファミリア

シャクティ・ヴァルマ　アーデイ・ヴァルマが決定をした。なおへ

スティアはついていこうとしたが木場達にホームをお願いをして彼女は眷族たちを信じることにした。

こうしてアルテミス救出作戦が決まった夜、ベルは夜空を見ているとアリーゼが近づいてきた。

「ねえベル……」

「なんですか？」

「不安？」

「……そうですね。この槍が奴にとどめを刺す前にアルテミス様を助けないと行けない……」

「助けましょ？必ず私達で!!」

「はい!!」

## アルテミス救出部隊出撃!!

次の日ベルは誰よりも早く目を覚まして立ちあがり行く準備をする。アンタレスに取りこまれたアルテミスを救うために自分の槍を置いてアルテミスが残したオリオンの矢を背中に背負い彼は冒険のアーマーを装着をしてライドウオッチホルダーなどをセットをして新アストレア・ファミリアのホームを後にして彼はガネージャ・ファミリアが用意をしていると思われる場所へと行く、誰よりも早く来ていたので彼は座り待機をしていた。

『ベル、いくら何でも早すぎると思うが?』

「すみません、アルテミスさまのことを思うとね。」

『……まあそうだな。あの時感じたのは彼女の思いつて言った方がいいだろうな。私もその槍から感じたわずかな神の力だったのか。』

二人は話をしているとリヴェリアとアイズ、蓮が到着をする。

「ベル……早いね?」

「ええ何か知らないですけどいつもよりも早く起きてしまいました……」

「……」

「どうした蓮?」

「あいつは城戸に似ているなど思ってたな。」

「城戸?」

「……俺がライダーバトルで共にいた男だ。あのベル・クラネルのようにライダーバトルを止めようと戦ってきた男だ。(最後は……女の子をかばった状態で戦い……城戸)」

そしてほかのメンバーも続々とやってきてアリーゼ達はぜえぜえといいながら来た。ベルは首をかしげているとアリーゼは詰め寄る。「ベル!! あんた黙っていなくなるじゃないわよ! 部屋にいったらいなくてアストレア様とか心配をしていたわよ!!」

「ご、ごめんなさいいいいいいい!!」

アリーゼに怒られてるのを見て全員が笑っているとヘルメスが現



れて飛竜達がおり全員が乗りこんでアンタレスがいるエルソスへと飛び経つ。ベルは初めて乗る飛竜に驚きながらも空からの絶景を見て目を光らせる。

「す、すごい………」

「ふふふすごいなベル。」

ベルと一緒に飛竜に乗っているのはリヴェリアである。彼女はベルが目を光らせているのを見て笑ってしまうが徐々に彼と二人きりってこともあり彼女はこれが冒険ではなくて普通に行けたらなと思いつながら飛んで行く。

飛竜達が疲れたらそこで休憩をして休ませるために休息をしたりしてエルソスの方へと飛竜達は飛んで行く。

「なあベル。」

「なんですか?」

「いや何でもない……ただ少しだけ嫌な予感がしてな。」

「嫌な予感ですか?」

「ああお前に関連をしていると思うとな。」

リヴェリアはそう呟き飛竜達はエルソス近くへ行くと突然として光の矢が放たれた。ベルはジクウドライバーを装着をしてジオウに変身、ジカンギレードジュウモードにライドウオッチをセットをする。

【フィニッシュタイム!ドレイク!ストレスレシユータイング!】

「は!!」

放たれた弾丸が光の矢に命中をするが数の多さに苦戦をしてしまい飛竜達の翼に当たってしまい彼らは勢いよく地面の方へと落下をしていく。落下の衝撃で吹き飛ばされるがベルは咄嗟に自分か地面の方へと向けてリヴェリアを抱きしめて自分がダメージを受ける。

「が!!」

「ベル!!」

「大丈夫です。ほかのみんなは?」

それから全員が無事なのを確認をしてベルたちは歩きだしてヘルメス・ファミリアが野営をしている場所へと到着をする。ベルは変身

を解除をしてアルファイ達が迎えてくれて彼らは休むことにした。

『あれがアンタレス、まさかスレスレシユータイングの倍以上の矢を放つとは、やはり神をとりこんでパワーアップをしたってのは間違いないか……いずれにしても厄介なのは事実だベル……』

オーマジオウと話をしながらベルは改めてアルテミスを助ける決意を固めるのであった。

## 彼女達が見たものは

アンタレスの光の矢を受けたがなんとか地上へと降りたちヘルメス・ファミリアが野宿をしている場所へと到着をしたベルたち一行、アンタレスはアルテミスを吸収をしていることでパワーアップをしておりオーマジオウも嫌な予感がしておりアンタレスの力がベル以上の力を持っているのかと思いつながらも彼らは今は休むことにした。

次の日、ベルたちはアンタレスがいる遺跡のところへと到着をして彼らは変身をしておりベルはジオウ、蓮はナイト、木場はカイザへと変身をして彼らは扉の前へと到着をした。

「ここにアンタレスが……」

なおモンスターはヘルメス・ファミリアが引きうけてくれるのでベルたちは倒しながら先へと進んでいき入り口まで到着をした。

「妙に静かすぎる。」

「まるで僕たちが来るのを待っているのか？」

カイザブレイガンを構えながら全員が遺跡の入り口が開いて中の方へと入っていく、ベルはジカングレードを構えながら辺りに青い小さき光が放たれており彼らがぶつからないのはそのおかげでもある。

やがて彼らは歩いていき封印の門があった。ベルが背負っているオリオンの矢が光りだして扉を解除をするかのように光りだした。

そして扉が開いて全員が中へと突入をするが醜悪な光景が出ていた。辺りを覆うかのように上空から木の実のようなものが落下をしてそこからサソリ型のモンスターが現れる。

【ソードベントー！】

ウイングランサーを持ったナイトがサソリ型のモンスターを突き刺して撃破していく。そこから全員が走りだしてアイズも風を纏わせながら切りつけていきベルはジカングレードにライドウオツチをセットをして放つ。

【フィニッシュタイム！ウイザード！ギリギリスラッシュユー！】

「は！！」

放たれたスラッシュユーストライクのような放ち斬撃刃がサソリ型モ

ンスターを撃破をしていくがモンスターの数が多くなっているのを見てオーマジオウはその奥から感じる力に嫌な予感がしており何事もなければいいがと思い彼は両手を組みながら立っていた。

そして彼らは先の方へと到着をして彼らは広い場所に到着をした。

「ここは先ほどの場所とは違うわ。」

「ああ．．．．．まるで嫌な予感がするわ。」

アリーゼ達は警戒をしながら進んでいくとサソリ型のモンスターがおり全員が眩く。

「「アンタレス．．．．．」」

『ぎやおおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

アンタレスはベルたちに気づいて咆哮をするとその胸部の結晶にいたのはアルテミスだ。

「あ、あれは!!」

「アルテミスさま!!」

『ぎやおおおおおおおおおおおおお!!』

アンタレスは咆哮をした後に先ほどベルたちを落とした砲撃を放ち全員が落下をしまう。

「「うわああああああああ!!」」

全員が落下をしていく中蓮はダークウイングを呼び背中に翼を広げて救うがベルだけは落下が速く救うことができない。

「なんて奴だ。」

「あああれが神の力をとりこんだアンタレスの力．．．．．」

「いずれにしても準備を整えてベルのところへと急ごう。もし奴の狙いがベルなら．．．．．」

「急ぎましょう!! (ベル待っていて!!)」

アリーゼ達は準備を整えてベルがいるであろう場所へと向かう。一方でジオウを纏っていたおかげでけがなどはしていないベル．．．．．彼は起き上がり歩いていると三日月と矢のエンブレムそしてあちこちに横たわる多数の冒険者らしき女性達の遺体。

「そうかこの人たちはアルテミスさまの．．．．．勇敢に戦った戦士たちよあなたたちの敵は僕が．．．．．俺がとります!!」



ナイトはナイトサバイブに変身をしてカイザと共に突撃をしてアンタレスに攻撃をする。

一方でベルは心肺が停止をして彼は目を開ける。

「ここは……僕は……」

「目を覚ましたかベル。」

「オーマ……ジオウさん？」

「お前はアンタレスの攻撃を受けて心肺停止の状態にいる。まだ死んでいない状態だ。」

「僕……僕は……」

「ベル、お前は何のために戦う？自分が決めたことなのか？それとも誰かに言われてやったことなのか？」

「違う！これは僕の自分の意思で戦っているんです！そしてアリーゼお姉ちゃんや皆と一緒に笑顔の世界を作りたいんだ!!」

「ならばベルよ！受け取るがいい!!」

そういつてオーマジオウの手から光が発生をしてベルの手にライドウオッチが現れた。

「これは？」

「私の力が含められたオーマジオウライドウオッチ。さあ行くといいベル！」

光が見えてきてベルは立ちあがりそのまま走っていき彼は目を覚ました。

「ここは……」

「ベルうとうとううとうとううとう!!」

ベルは辺りを確認をしているとアリーゼが涙を流しながら抱き付いてきたので彼自身は何があったのかを思いだしてアンタレスの方を見るとカイザとナイトが吹き飛ばされて変身が解除をされた。

「木場さま!!」

「蓮!!」

「つ、強すぎる……」

「ああ……」

ベルは立ちあつたのを見てシヤクテイが叫ぶ。

「やめろベル！お前はアンタレスの攻撃を受けて吹き飛ばされたんだぞ!!それに内蔵にもダメージが!!」

「……………そうだとしても僕は……………俺は戦います!」

【オーマジオウ!】

「なんだ……………それは……………」

「見ていてください。これが……………俺の……………変身!!」

オーマジオウライドウォッチをセットをしてベルトを回転させる。

【キングタイム!仮面ライダージオウ!オーマー!】

今ここにジオウの新たな姿が誕生をした。オーマジオウの力が入ったライドウォッチを使いベルはグランドジオウも超える姿に変身をした!

その名も!その名も!

「俺は仮面ライダージオウ!オーマーフォームだ!!」

今ここに新たな歴史が誕生をした瞬間である。アストレア・ファミリアのホームにて

「は!!」

「ど、どうしたのフィルヴィスちゃん?」

「今、言わないといけないのに逃した気がします。」

苦笑いをするしかないリヤーナであった。

## オーマフオームの力

アンタレスの強烈な攻撃を受けてベルは心肺停止になってしまふ。彼は精神世界でオーマジオウと自分が何のために戦うのかを認識をして彼はアンタレスに戦いを挑む為に向かおうとした時にオーマジオウから放たれた光りが新たなライドウオツチを生成をしてベルは新たなフオーム「オーマフオーム」へと変身をして彼はアンタレスの方へと向かって歩いていく。

『ぐおおおおおおおおおおおおおお!!』

「皆さんは離れていてください。アルテミスさま……今お助けします!!」

オーマフオームは走りだしてアンタレスに接近をしようとした。アンタレスは足部を使いベルに対して攻撃をする。

「ベル!!」

だがオーマフオームはそれを右手でガードを衝撃波を放ち足部を吹き飛ばしてから時間がとまり彼は一気に接近をしてアルテミスが収納されているクリスタル近くまでやってきた。

「ベル!またあのレーザーだ!!」

輝夜の声を聞いてベルの手にプリズムビツカーが装備される。

【サイクロン!ヒート!ルナ!トリガー!マキシマムドライブ!】

『ぐおおおおおおおおおおおお!!』

「はああああああああああああ!!」

ビツカーファイナリジョンが神の力が込められたレーザーを相殺をした後、そのまま接近をして腕にシャイニングカリバーが現れてアンタレスを次々に切っていく、彼はそのままアルテミスがいる結晶を見つけて接近をしようとしたがアンタレスが上空から矢が放たれてオーマフオームのベルに当たっていく。

「ぐう!!」

ベルは先ほど受けた傷もあり徐々に押されて行く、彼は決意を固めて唱える。

「福音!!」



放たれた音が命中をしてアンタレスは後ろの方へと吹き飛ばされる。オーマフォームの力にほかのメンバーたちは目を見開いている。さらにその周りに平成仮面ライダーたちが最強形態で現れてベルの周りに構えている。

「行きます!!」

アンタレスは咆哮をして攻撃をするが龍騎サバイブ、ブレイドキングフォーム、装甲響鬼がそれぞれの接近武器でアンタレスが放った触手を切り裂いた。

ファイズブラスタ、プトティラコンボ、タイプトライドロン、カブトハイパーフォームの四人が構えて砲撃が放たれてアンタレスにダメージを与える。

だがアンタレスは自己再生をしていくがそこにクウガアルティメットフォームが自然発火能力を使い再生能力を弱めていくとアギトシャイニングフォーム、電王ライナーフォーム、ダブルサイクロンジョーカーエクストリームがそれぞれの接近武器をつかい切り裂いていき結晶が見えた。

「アルテミスさま!!」

ベルは走りだしてアルテミスが眠っている結晶へとショートワープを繰り返す。彼は背中ของオリオンの矢をエネルギーを込めてそれを投げつける。

オリオンの矢がアンタレスに突き刺さり結晶体が現れてベルはその結晶を壊してアルテミスの中から救出をした。アンタレスは取り返そうとオーマフォームのベルをとりこもうとしたがムゲン魂、ハイパームテキ、ジーニアスフォームの三人が取りこもうとするアンタレスに対して蹴りを入れてから彼は仮面ライダーたちに感謝をしてショートワープをしてアルテミスを取りこもうと降ろす。

オーマフォームのベルの隣にエンペラーフォーム、コンプリートフォーム、コスミックスティツ、インフィニティースタイル、極アームズが立ち構えている。

「これが！仮面ライダーの力だ!!」

『ウエイクアップファイバー!!』

【ファイナルアタックライド！デイデイデイケイド！】

【リミットブレイク！】

【チヨーイイネ！キックストライク！サイコー!!】

【ソイヤ！極スパークキング！】

【キングファイニッシュタイム！キングタイムブ레이크!!】

6人のライダーが飛びあがりそれぞれが必殺蹴りを放ち最後はオーマフォームのベルがキングタイムブ레이크がアンタレスに命中をして全員が見ている。

『ぐ、ぐおおおおお．．．．．おおおおおおおおおおお  
おおおおおおお!!』

アンタレスはキングタイムブ레이크などを受けてダメージを受けて爆発をする。平成ライダーたちはアンタレスが倒されたのを確認をしてから消えていきベルは振り返り歩いていく。

ヘルメスは空を見てオリオンの矢が作られないのを見てホツとしている。彼は変身を解除をしたがそのまま膝をついてしまう。

「「ベル!!」」

「か、勝ちました．．．．．よ。」

「ああベル見たぞ。お前の仮面ライダーとして．．．．．誇らしいぞ。」

「シャクテイ．．．．．お姉ちゃん．．．．．」

「ベル君かつこよかったよ。私．．．．．やっぱりベル君のこと改めて好きだったことがね！」

「アーデイ．．．お姉ちゃん．．．．．」

「よくやったベル、今はゆっくりと休んでくれ私の息子よ。」

「リヴェリア．．．お母さん．．．．．」

「ベルは私の英雄だよ。」

「アイズ．．．．．さん。」

ベルは目を閉じてアルテミスと共に彼らはヘルメス・ファミリアたちが待っているであろう場所へと向かっていく。

木場と蓮もベルの力を改めて確認をしてもっと強くならないと決意を固めるのであった。

オーマジオウside

さて久々の私だな、オーマジオウライドウオッチを使いベルはアルテミスを救出をしてアンタレスを撃破した。いやーベルが神殺しをしたらどうしようかと悩んでいたがそんな心配は無用だったな。さて現在オーマジオウライドウオッチに関しては私が回収をした。

まだ本来のベルだったら早いのだからな……。だが今回のようなアンタレスの化け物に対して私が出なかつたのはベル自身が救わないと意味がないと思ひ先ほどのオーマジオウライドウオッチを出した。

その役目が終わったから回収させてもらつたよ。

『だがまた出番がある。ベルよ今はゆっくりと休むといい。』

まあ現在彼の傍にはなぜか知らないがアイズがぎゅつと抱きしめながら寝ている。隣のアルフィアさんが黒いオーラを纏い始めているので魔王さん怖いデース……。ウオズ！ツクヨミ！ゲイツ助けてええええええええええええええええええええええええ!!

オーマジオウ side 終了

さて無事アルテミスを救つたベル、現在アルテミスは彼よりも目を覚まして彼が寝ている場所へとやってきた。

彼女は寝ている彼を見てその頬を触る。

「……。オリオン、あなたは私の命を救ってくれた。あなたの活躍はアンタレスの中から見ていた。私のために体がボロボロになつても立ちあがり救ってくれた。ふふ恋愛アンチと呼ばれていた私が……。恋をするとはな。」

アルテミスはふふと笑い彼に近づいて口にキスをした。そのまま彼を抱きしめて寝ている彼を固定をした。

ベルは口に暖かいのを感じて目を開けるとそこには青い髪をした美人の女性、アルテミスが自分にキスをしていたので目を見開いている。

「うづうづうづう!!? (アルテミスさま!?)」

「んーーーーー」

ベルは目を見開いて驚いている。そこにアリーゼが入ってアルテミスがベルにキスをしているのを見て叫ぶ。

「何やっているのよおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおお!!」

アリーゼが叫んだのを聞いて輝夜、リユウ、アイズ、シヤクテイ、  
アーデイが来るとアルテミスがベルにキスをしていたのを見て蓮と  
木場は苦笑いをしてみていた。

「貴様あああああああああ!!」

「ベルから離れろ!!」

輝夜とリユウが飛びかかりアルテミスとベルを引き離してアイズ  
がベルを抱きしめる。彼自身も起きたらアルテミスがキスをしてい  
たので混乱をしておりオーマジオウも驚いておりアルフィア自身も  
目を見開いて黒いオーラを纏わせている。

こうしてアルテミス救出作戦はベルがオーマフォームに変身をし  
て彼女を救出をしたのであった。

## オラリオ帰郷へ

アルテミスがベルにキスをした事件から時間が経ち、ベルたちは無事にアルテミスを救出をしたが彼女の眷族たちは亡くなったのでここで埋葬をして石碑を立てる。

『神アルテミスを救うためにアンタレスに立ち向かった勇敢な戦士たちここに眠る』と書かれてベルたちは両手を合わせて黙とうをする。

そしてオラリオへ帰るために飛竜に乗るがヘルメスはヘルメス・ファミリアと共に帰るので余ることとなりベルの後ろにアルテミスが乗ることとなりベルのことが好きなメンバーはじーつとアルテミスを睨んでいた。

オーマジオウは彼の中でため息をつきながらこいつらはと思い玉座で肘をつきながらアルテミスに嫉妬をしているメンバーを見ているが隣のアルフィアがオッドアイに光がない状態でブツブツ言っているのでこつちもこつちで末期だなど思いたため息が出てしまう。

そして飛竜にまたがりオラリオの方へと飛んで行くメンバー、ベルの後ろをアルテミスが抱きしめてすりすりをしているのを見てアイズが頬を膨らませているのを見てリヴェリアはアイズが感情を出すようになったのはいいが早まったことはするなよと思いつつながらベルの方を見る。

(やれやれアイズが感情を出すようになったのはいいが思いつきり神アルテミスに対して嫉妬をしているではないか、まあ仕方がないベルは可愛いからな。)

リヴェリアはそう思いながらベルをじーつと見ているとアイズが彼女の方を見て頬を膨らませる。

「リヴェリアもベルを狙っている……む……」

「やれやれ……」

そして飛竜達が疲れてきたので彼らは降りたちテントを立てる。だが女性陣達はアルテミスだけがずるいつつとで順番を決めることにした。

一方でベルは木場と蓮と模擬戦をしていた。仮面ライダーに変身

をして木場が放つカイザブレイガンの弾をジカンギレードではじかせて接近をして左手にジカンザックスを発生させて切りつけようとしたがカイザはそれに気づいて後ろの方へと下がりカイザフォンを抜いて二丁でジオウに攻撃をする。

ベルは放たれた二丁の攻撃を上空へと飛びジカンザックスを投げつける。カイザは後ろの方へと下がったがそこにベルがジカンギレードを構えて突撃してきたので彼はカイザフォンを戻してカイザブレイガンで受け止める。

「そこまでだ。」

「ありがとうございます。」

「いやこちらこそ、でもベル君あまり無茶をしてはいけないよ？君はアンタレスとの戦いで一番傷ついているのを忘れてはいけない。」

「は、はい」

お互いに変身を解除をして蓮の方はダークバイザーを抜いて素振りをしている。

その夜

「お待ちしておりましたわベル。」

「輝夜お姉ちゃん？」

テントの中では輝夜がいた。彼女はベルを待つていたかのようにいたので首をかしげていると輝夜がふふと笑いだす。

「お前と一緒に寝るために奮闘してきたのだよ。明日はシャクティとアーデイ。明後日はアリーゼ、その次はアイズと順番を決めていたんですよ。それに……」

輝夜はベルに近づいて耳元で呟く。

「お前とするのが久々だからな……今日は楽しませてもらうぞ。」  
「……………／＼（＾o＾）／オワタ」

ベルは今日から帰るまで奮闘をしないと行けないのかと思いため息が出てしまう。なお二日目と四日目、そして五日目では初めてベルとやった人たちもいたのでここでは省略させてもらおう。

それから襲い掛かってきたモンスターと戦いの時はベルは戦わずにほかのメンバーが戦い撃破していく。

「……………オーマジオウさーんベルトを出してください」

『駄目絶対いいね?』

「何かあったんですか!？」

『福音を百発ぐらい受けられた身なのでね……………いやーやりすぎだああああああああああああああああああ!!』

「ごめんなさいいいいいいいいいいいいい!!」

そう何度目かの時にオーマジオウがシャツトダウンをするのを忘れていたのでアルフィアがその様子をばっちりと見てしまいオーマジオウは八つ当たりの福音を受けまくってしまい回復中である。

『はあ……………今ライダー達を呼んでアルフィアと戦わせているが……………吹き飛ばされているわ。』

「ごめんなさい……………お義母さんに会えないですよね。」

『やめたほうがいい……………ものすごく荒れているから今来たら……………な?』

「あ、はい」

オーマジオウの言葉を聞いてベルは申し訳ない気持ちになりシヨボンと落ち込むのであった。

帰ってきたぞ帰ってきたぞ——オーラリオーへ！

オーマジオウ side

はあ・・・はあ・・・地獄を見たわ。私がうっかりシャットダウンをしていなかったのでアルフィアの目からハイライトどころか黒いオーラが纏われていきなり福音を受けたオーマジオウだ。

しかも彼女は私が呼びだしたライダーたちにも対抗をして激闘が繰り広げられていたよ。

あの時は私も命がないと思っていたよ。なにせベルが丁度しているところをじっくりと見てしまったからな。その時の目がものすごく怖かった・・・オーマジオウさんだって怖いものはあるんだからね？

『貴様・・・ベルがあんな女たらしにさせてくれたな？恐怖以上のうけつけてやる・・・』

『まて！少し落ち着け！』

『なんだ？言い訳は聞かないぞ？貴様がいながら・・・なんだ？アストレア・ファミリア以外の奴にもベルは手を出したのか？なら貴様をコロサナケレバナラナイ。』

なんでヤンデレになつているの？どうしたらいいんだよ・・・それから私はライダー召還をしてアルフィアに当てているがなんとか鎮圧をすることができた。

まあ原因はベルにあるからな・・・さて後ろにべったりくっついてる神様はどうかできないものか・・・やれやれ、これではゆっくりできないではないか。

オーマジオウ side 終了

「皆——見えてきたよ——」

アリーゼの声を聞いてベルは前を向くとオラリオが見えてきたので彼はホッとしている。だが心の中では自分がもつと早くに気づいていればアルテミスの眷族を救えたかもしれないと拳を握っているとアルテミスが声をかける。

「・・・そんな顔をしないでくれ。」



「アルテミスさま……ですが！」

「……私は送還覚悟でいた。だがこうしてまたオラリオに戻る事ができたのはオリオン、あなたのおかげだ。」

「……」

「だからありがとう。」

「はい……」

その様子をベルのことが好きなメンバーからしたら不満である。まるで恋人のようにしているのでリヴェリアはため息をついて前にいるアイズは頬を膨らませて怒っている感じを出しているのでさらにため息が出てしまう。

やがて飛竜はガネージャ・ファミリアに着地をして全員が降りたち、ベルはアルテミスをゆつくりと降ろしてから彼らは数日ぶりのオラリオの空気を吸っている。

やがてメンバーは解散となりアリーゼ達と共に新アストレア・ファミリアのホームへとアルテミスと共に戻る。

そして扉を開けてベルが一言。

「ただいま戻りましたあああああああ!!」

「「「「「ベル……お帰りいいいいいいいいいい」」」」」

数日ぶりにベルの姿をほかのメンバーが彼に突撃をしてきて彼は後ろの方へと倒れてしまう。その様子をアルフィアは見ておりごごごと黒いオーラを纏わせていくのを見てオーマジオウはまたかよと思いいライダーたちを召還をして彼女をとめるように指示を出す。

「いいだろう……今の私は手加減などできない! さあ来い! すべてを破壊する!!」

『それはディケイドの言葉だ!!』

さて姉たちにモフモフタイムされたベル、アストレアもアルテミスの姿を見てホッとしている。

「よかったわアルテミス。」

「すまなかったなアストレア、オリオンに助けてもらった。」

「そうみたいね。ベルが神殺しをしなくてよかったわ。」

アストレアはホッとしてベルの方をじーつと見て更新をすること

にした。現在ベルはレベル6の冒険者、だが今回の戦いで上がったのかしら?と思いつながらステータス更新をする。

「うえええええええええええええええええええええええええええええええええええ!!」

「アストレアさま!?!」

「ら、ランクアップが可能になっているわ……やはりアルテミスを助けたのが影響が出て切るのかしら?いや待って……ア  
リーゼ達も同じように……」

それからアリーゼ達もレベルアップが可能となっておりそれはガ  
ネージャ・ファミリア、ロキ・ファミリア、そしてヘスティア・ファ  
ミリアの方でも同じようにレベルアップが可能となっていること  
なり彼女達は叫ぶのであった。

こうしてアルテミス救出はベルたちがランクアップをした結果で  
アルテミスは助けられたのであった。



ベルは視線が小さくなったのでオロオロしながらオラリオの中を歩いている。

「べ、ベル……そんなにオロオロしなくても大丈夫よ?」

「だ、だって……こんなに小さくなって視線までもいつもと違うんですよ?ふ、不安ですよ。」

ベルは不安そうに歩いているのでアリーゼは苦笑いをしながら知り合いに会わないことを祈ってアミツドがいる治療所へと到着をする。

「アミツドいるかしら?」

「アリーゼさんどうし……え?べ、ベル!」

アミツドはアリーゼの声をしたので行くところには涙目となっている小さくなったベルの姿なので彼女は近づいてベルの顔などを触っている。

「もふもふ……もふもふもふもふもふもふもふもふもふもふ」

「ふえ……あ、アミツドお姉ちゃん?」

「は!す、すみません……ですがベルなんで小さくなっているのですか?」

「朝起きたら、この姿だったのです。それでパニックになってしまつて……」

「記憶などは正常……けれど可愛いですね。」

「ふええええええええ……」

(可愛いな)

「ごほん、いずれにしても原因がわからない以上冒険者としてはお休みをした方がいいですね。」

「だね。流石に七歳でって待ってベルは七歳から冒険者をしていてわ。」

「まじですか……ってそうでしたね。」

二人はベルが七歳の時から仮面ライダーとして活動をしていたのを思いだしてオーマジオウにジクウドライバーを発生させてベルは構える。

「変身!!」



アイズがアリーゼにベルを持ち帰ろうとしたので阻止をしてベルはぷらーんと空中を浮かんでいるのでこれが浮遊なんだなーと思いつつ小さくなったのでレフィーヤやテイオナたちが大きく見えるのでいつもは上から見ているのに下から見ているので不思議に思ってしまう。

「それにしてもベルさん小さいですね。」

「七歳の時の姿ですから……はあ……」

「なんでため息をついているのよ。」

「いやーだって朝起きたら七歳の姿になっていてパニックになるじゃないですか……今はだいぶ冷静になれたので……恥ずかしいです。」

ベルは今更朝起きた時からのパニック状態が恥ずかしくなってきたのか顔を赤くしてアリーゼとアイズは今だベルを持ち帰る持ち帰らせないと話をしているので彼自身は速く帰りたいなーとっていると突然として体が浮遊をしてテイオナ達はベルが消えたので驚いている。

「ベルが消えた!?!」

「!!」

テイオナの声を聞いてアリーゼとアイズは急いでベルを探し出す。一方でベルはとうちよこんと座らせてその人物に対して苦笑いをしている。

「な、ナアーザさん……」

「なーにベル?」

彼女の目からハイライトが消えており彼は苦笑いをしていた。

「ダツテ、ベルガワルインダヨ? イツモイツモ私ハズツトマツテイタノニキテクレナカツタノヨ? ダカラツツレサツタノヨ。」

ベルは確かに今までアルテミスを救うためにオラリオを離れていたのだからナアーザやアミッドには会っていない。そしてナアーザは限界を迎えていた。

そして今回の誘拐を実行したのである。ベルはどうしようかと思っているとナアーザは突然として服を脱ぎだしたのでベルは驚い

てしまう。

「ふええええええええええええ!!」

「サアベルヤロ?」

「ああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

こうしてベルはナーザーザに捕食されたのであった。

元に戻ったけどなんだかなー

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ベルーラーベルーラー」

ベル・クラネル、アストレア・ファミリア所属の冒険者、現在彼はナアーザの家に連れてこられてやったのだが、小さい体はなぜか元の姿に戻っており彼自身は突然としてさらわれたのだから姉たちが心配をしているのは間違いないと判断をしている。

さらった犯人がナアーザだなんて一言も言えないので困っているところだ。ナアーザと別れた後彼は元に戻ったもののどう言い訳をしようかと頭を抑えながら新アストレア・ファミリアのホームの入り口まで戻ってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『どうしたベル?』

「オーマジオウさん、ホームの中に入りずらいのですが・・・・・・・・」  
『仕方があるまい、まさかナアーザに連れ去られるとは思わなかったな。まあベルの体が元の姿に戻ったのだから結果オーライだ。』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ベルは覚悟を決めたのかホームの入り口を開けて中へと入る。どうやら誰もいないことにホッとして彼は歩きだそうとしたが突然として頭に衝撃を受けたのでそのまま倒れてしまう。

「ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

そしてベルが目を覚ますと自分の体が動けなくなっているのを感じて前の方を見ると目から光が消えているお姉さま方がいたのでベルはあまりの恐怖に体を震わせている。

「アア、ベルオキタワネ?」

「あ、あの・・・・・・・・なんで僕の体巻きつけられているのでしょうか?アリーゼお姉ちゃん。」

「エーナンデツテ、サラワレタと思ツタラ、帰ツテキタカラネ。サーテベル」

「「「全部ハナシテモラオウカシラ?」」」」



「ひいひいひいひいひいひい!!」

怯え兎説明中

「ソウ、ナアーザガ……」

アリーゼはベルの説明を聞いた後件を持ちだそうとしたのを見てベルは慌てて食い止める。

「やめてお姉ちゃん!!」

「離シテ!アノ犬人!ベルガ優シイノヲ利用ヲシテ!!万死ニ値スルワ!!」

「それどこか違う人の台詞だよおおおおおお!!」

ベルはなんとか必死にナアーザの命を守るために奮闘をしてアリーゼを止めることに成功をしたがなんだか疲れてしまい彼は椅子に座る。一方でオーマジオウは玉座で座っているとなぜか女性が増えていたのでいったい何者だど?と思い見ていると三日月のエンブレムだったのでアルテミス眷族である。

『一応確認をしていいか?』

「はい。」

『なぜ貴様達ここにいる?てかお前たちどれだけいるんだよ。』

「いやー目を覚ましたらここにいたというか、てかアルテミス様のあんな姿を見たのははじめてだったので興奮をしていますよ。ほらアルテミスさま!そこはくつついてください!!」

うるせーなど主いながらまた新しい人物たちが増えるのかよと思いいオーマジオウはため息をつきながらとりあえずご飯の用意が倍になるなど思い準備をしていく。

一方でそんなことを知らないベルはアルテミスの膝の上で寝転んでいた。アルテミス自身は満足をしているのかふふと笑っている。

オーマジオウの中でアルテミスの眷族たちはベルに対しての笑顔が恋をしている乙女の顔をしていたので全員がアルテミス自身がそんな顔をするんだなと思いいながら見ている。

オーマジオウはその様子を見ながらこれ以上自分の頭を痛くさせないでほしいと願いたため息が出てしまう。ただでさえアルフィアで苦勞をしているのにさらに住民が増えてうるさくなつたのでアル

ファイアは増えていることに驚いているがオーマジオウに頼む。

「オーマジオウ本を」

『前にも言っただろうが、私は通販屋ではないと……』

そういいながら本を出しているとアルテミス眷族たちもあれがほしいこれがほしいといってきたのでやはりこうなるのかと思いがほらオーマジオウはさらにため息が出てしまい落ち着かない生活がこれから始まるのかと。

## 女神の部屋で

「つ、疲れた………なんとかアリーゼお姉ちゃんを止めることができたけど………もう駄目………」

ベルはアリーゼ達を止めることに奮闘をして元々疲れていたのだが彼は自分の部屋だと思い入ったがそこはアストレアの部屋だったのでだが彼はそんなことを知らずにベットに入りこんで何かが当たっているがまあいいかと思いい眠る。

さてベルの精神世界の中、オーマジオウは疲れていた。なにせアルテミスの眷族たちがあれがほしいこれがほしいとわがままほうだいだったので彼は色々と用意をして疲れて玉座の方に座っている。

『全くこいつらは………』

「どうしました？」

『お前らのせいだ。貴様達が色々と用意をしるとか言って準備をさせたのだからが………全くここはベルの精神世界なのに………つてあ………』

「な、なんですかこれ!？」

ベルは精神世界へ久々に来たが色々と変わっているのに驚いているとアルテミス眷族たちがじーつとベルを見て近づいてくる。

「あら坊や可愛いわね。」

「え!?!なんで!?!どうして!?!」

「いやー私達目を覚ましたらここで目を覚ましたのよ。」

「そ、そうなんですか。」

「………ベル………」

「………」

ベルはあまり後ろを振り返りたくない状況である。なにせいつもの義母親の声じゃないからである。

「なぜこちらを向かない? 私はそんな風にお前を育てた覚えはないぞ?」

「………」

ベルは仕方がなく振り返るとオッドアイに光がない状態のアル

ファイアがいたので恐怖に感じている。

「ひいひいひいひいひい!!」

「ふふふふ見せてもらったぞーお前が色々とヤツテしまっていることなどもなーそこまで私は育てていなかっただ私にも責任があるが……やりすぎだ!!福音!!」

「ふふうふうふうふうふう!!」

ベルは福音を受けて吹き飛ばされてしまうがオーマジオウが念力を放ちそつと降ろす。そのまま立ちあがりアルファイアの前に立つとアルファイアも構えている。

「そこをどいてもらおう?」

『悪いがどくわけにはいかない。ベルは私が守る!!』

ベルの中で魂の状態なので病気などないアルファイアは突撃をして蹴りを噛ました。オーマジオウは彼女の攻撃を腕で受け止めると念力を放ち吹き飛ばしたがすぐに着地をして構え直す。

(ええい奴は化け物か!!普通の人間だよな?)

オーマジオウはそう思いながらもアルテミス眷族達は巻き込まれないようにベルをそつと連れて行く。

一方で現実アストレアはなぜか布団が盛り上がっているのを見て誰かが入っているのかしら?と思いつめくるとそこにはベルが彼女に抱き付いたまま寝ていたのだったのでいまにベルは自分の部屋に入ったのだらうと思いまあいかと一緒抱きしめながら再び目を閉じる。

精神世界ではベルはジオウに変身をしてアルテミス眷族達と模擬戦をしていた。

【アーマータイム!ウェイクアップ!キバ!】

キバアーマーを纏い眷族たちの攻撃を蹴りではじかせていく。

「うっへー流石レベル6だね。」

「あたしたちじゃ勝てないかも!」

「いえいえ僕でも勝てないときはありますよ!!」

「魔法攻撃部隊!」

魔法を使うメンバーが魔法を放ってきてベルは吹き飛ばされてしまう。彼は再び立ちあがりジカンガトリングを構えて発砲をする。

「うわああああああああ!!」

全員がジカンガトリングに驚いて逃げてしまう。一方でアルフィアとオーマジオウの激突はオーマジオウが仮面ライダーたちを呼びだしてアルフィアを抑えて勝利をする。

『ふう・・・やれやれ疲れるな毎回、あつちはどうやら大丈夫みたいだな。』

オーマジオウは戦いながらもベルが模擬戦をしていることを知っているためまあ問題ないだろうと判断をして彼はアルフィアをグルグル巻きにして動けないようにする。

「なぜグルグル巻きをする。」

『今のお前をベルに近づけさせろわけにはいかないだろうが、そのための保証だ』

「はーなーせーせー」

『さてベル、そろそろ現実にもどったらどうだ?』

「ほえ?」

『色々問題が発生をしているからな、ほら帰ってこい』

「わかりました。」

そういつてベルは元の現実へと戻っていき何か当たっているのに気づいた。いったい何だろうと思いと見るとアストレアの果実に包まれていたのだ。

(どうしてアストレア様のが!?てかここは僕の部屋じゃなくてアストレア様の部屋!?)

ベルは大混乱をしている。現在夕方である。

「・・・おはようベル。」

「お、オハヨウゴザイマスって時間じゃないですよアストレア様。」

「ごめんなさい。まあベルが帰ってこなかったけどね。」

「そうでした。」

「まあ無事でよかったわベル・・・けど心配をかけた罰を与えるわね?」

「えっとはい。」

するとアストレアはそのままベルを自分の口に当ててキスをする。

「ほえええ……」

「うふふふベル可愛いわね（笑）」

「うにゅ……」

ベルは顔を真っ赤にしながらアストレアをじーっと見ていたが恥ずかしいのであった。

## オラリオをパトロール

ベル side

次の日となり僕はアリーゼお姉ちゃんと輝夜お姉ちゃんと共にオラリオの街へと来ていた。

「それじゃあベル、今日は私たちと一緒にパトロールをするわよ！」

「言っておくがお前に拒否権はないからな？」

「あ、はい」

本来だったら僕はリヤーナお姉ちゃんたちと一緒にだったのだがなぜかアリーゼお姉ちゃんと輝夜お姉ちゃんが僕とパトロールをするという団長命令といひほかのメンバーは逆らえないのであった。

そして今に至ります。僕はとりあえずお姉ちゃんたちと別れてからオラリオをパトロールをしているが全てを知っているわけじゃない。

実はお姉ちゃん達は南の方には行かせてくれないのだ。だから僕は南の方へは行ったことがないからだ。

念のためにパトロールとしていこうと思ったが顔を見られたらまずいからね。僕は変装道具を使うことにした。

「ちやちやちやーん」

『そんなものいつから用意をしていたんだ？』

オーマジオウさん、僕だって準備はしているんですよ。えっとこの黒い髪をかぶり長い髪だけど気にしないよーんとりあえず変装完了！どうですかオーマジオウさん!!これでベル・クラネルだとわかりませんよ!!

『まあ確かにこの姿はベル・クラネルとわからないな。』

ふふーん僕って天才でしょ!!

(なんだろう、最近ベルはアリーゼのような感じがしてきたような気がする。まあ一緒に暮らしていればそうなるのか?)

何かオーマジオウさんが言おうとしているけど僕は気にしないよ。変装を完了をした僕は南の方へと歩いていく。この場所は始めてくるので何があるのだろうと思いつながら見ているとテイオナさんのよ

うな格好をした人たちがたくさんいるので驚いている。

「あら坊や?こんな昼間からやろうときたのかしら?」

「え?」

見ると僕の周りを女性が囲んでいるのに驚いてしまう。てか昼間からやる?・・・ま・さ・か、南つてそういうところだからお姉ちゃん達が行くなって言ったのね!!やばいやばい!

とりあえず僕はダッシュをしてここから出ないと行けないが逃げているばかりでここがどんな場所があるのかわからない。とりあえず建物中へと突撃!!

ど、どうしよう!!

「ぐおおおおお男の匂いだああああああああ!!」

「ぎゃああああああああ!!」

なにあれ!?変な化け物みたいなのが現れたああああああああ匂いなども消して!ええい!この部屋に隠れよう!!

僕はどこかの扉を開けて中へと入り化け物がいなくなるのを待つことにした。

『な、なんだあの化け物は?オラリオにはモンスターがいるというのか!』

「ゆ、油断をしていましたね。オーマジオウ・・・さん」

『ん?どうしたべ・・・ル?』

飛び込んだ部屋の中に尻尾がモフモフしている金髪の狐人がいました。てかあの人なんで僕の顔を見て真っ赤にしているんだろう?

「あ、あの・・・まだ開店をしていないのですが・・・」  
「す、すみません逃げこんだ場所がここだったので・・・化け物のようなものに追われて」

「ば、化け物・・・私はサンジヨウノ・春姫と申します。あなたさまは?」

「僕はベ・・・じゃなかった。私はソウゴ・トキワといいます。」

(まさかベルが私の名前を使うとはな・・・まあ名前を教えたがここで使われるとは思ってもいなかったけどな。)



ごめんなさいオーマジオウさん、その名前しかおもいつかなかったんです!!でもサンジヨウノ・春姫さんって名前、輝夜お姉ちゃんみたいな感じだなー！実は知り合いなんてね（笑）

「……あ、やばいやばい！そろそろ合流をしないと行けないのに！春姫さんと話をしていたら忘れていたあああああああ！仕方がない！」

「え？あ、あの!？」

「また会いましょう！春姫さん!!」

僕は窓から飛び降りる時にジクウドライバーを発生させてジオウライドウオツチを起動させて変身をする。

「変身!!」

「ライダータイム！仮面ライダージオウ！」

僕はジオウに変身をして着地をした後急いで向かうためにこのライドウオツチを使う。

「カブト！ライダータイム！仮面ライダージオウ！アーマータイム！チェンジビートル！カブト！」

カブトアーマーに変身をしてクロックアップを使おうとしたけどそういえば僕は時を止める時間をもらったのを忘れていた！だからクロックアップ&時を止める時間!!を使い姉たちの合流場所へと向かう。

ベルside終了

一方でアリーゼと輝夜はすでに合流をしておりベルを待っている。

「ベル、遅いわね?」

「ああ、一体何があった?」

「まあ何かあったら……ヤレバイイノヨフフフフフフフフフフフ」

アリーゼの目からハイライトが消えており輝夜はその様子を見てため息がついてしまう。すると彼女たちの肩に手が置かれたので二人はビクツとなり武器を持ち振り返り振り下ろす。

「うわ!!」

「!!」

二人は声がしたので見るとジオウカブトアーマーのベルが驚いてしまい二人はすぐに自分の剣をしまいベル自身もライドウオツチを外してホツとする。驚かそうとして両手を置いたら剣を抜いて切りかかってきたのでベル自身も驚いてしまう。

「何やってるんだお前は………」

「そうよベル！いきなり肩に手を置かれたら誰だっぴっくりをするわよ!!」

「ご、ごめんなさい」

ベルは謝りアリーゼ達も許すことにした。だがベルは気になっていたことがある。あのサンジヨウノ・春姫のことである。

なぜ彼女はあそこで一人でいるのだろうか？と

## 闇の剣士の攻撃

ベルside

パトロールを終えた僕はイシユタル・ファミリアにいるあの人、サンジヨウノ・春姫さんのことが気になっていた。なぜあの人はあんなところにいるのだろうかと悩んでいるが流石にアリーゼお姉ちゃん達に相談をするわけにはいかないと思っている。

いや美人さんだからね（笑）いやいや違う違う、これは僕個人の仕事じゃないかと思っっている実際にアストレア様に相談を試みた。

「ベルはどうしたいの?」

「僕はあの子を助けたいと思っています。ほつとけないんです。」

「ならベルがしたいことをすればいいと思うわよ?」

「いいのですか?」

「ええ、あなたはアストレア・ファミリアの一人、そして仮面ライダーでもあるんでしょう?ならあなたがしたいことを私は応援をしているわ」

「ありがとうございます!!」

こうして僕は姉たちに内緒でどうにかしようと考えている中。僕はオラリオの夜を走っていた。

『何かを感じたが、一体何だろうか?』

「わかりません。」

そう何かの気配を感じて僕はオラリオの屋根の上へと行くと黒い剣を持った人物が立っていた。

「なんででしょうかあれは?」

『仮面ライダーカリバー!?だがなぜ奴が?』

「.....」

「問答無用ですね。オーマジオウさん!!」

僕はジクウドライバーを出してもらいジオウライドウォッチを起動させて装着をする。

「変身!!」

【ライダータイム!カメンライダージオウ!】

同時に走りだしてジカンギレードを出して切りかかる。相手は聖剣で受け止められてしまうが………一体何者なのだろうか？

ベルside終了

一方で新アストレア・ファミアアのホームの中、輝夜はベルの部屋の方へと移動をしていた。今日はベルを抱いて眠ろうと彼の部屋の前に到着をするが気配を感じないのでドアを開けた。

「ベル？………いないのか？ん（なんだこの感じは嫌な予感がする。）」

輝夜は急いで自分の部屋へと戻り刀を持ち外へと飛びだす。一方でベルはカリバーと戦っていた。

（っ、強い……この人に隙が見当たらない。）

ベルはジカンギレードではじかせた後左手にジカンガトリングを構えて発砲をするがカリバーは剣で全ての弾丸をはじかせていき彼は腰に闇黒剣月闇を腰の必冊ホルダーに納刀をしてトリガーを引く。

【月闇居合！読後一閃!!】

放たれた一撃がジオウに放たれる。彼はジカンギレードで受け止めようとしたが威力が思っていた以上だったのでジカンギレードなどが吹き飛ばされてしまい彼自身も吹き飛ばされて壁に激突をする。

「が!!」

変身は解除されていないがカリバーの強さに驚いている。彼は立ちあがり時を止める能力を使いカリバーはジオウが消えたことに辺りを見ていると音が聞こえてきた。

【グ・ラ・ン・ド！ジオウ！】

グランドジオウへと変身をして響鬼とドライブを押す。

【響鬼！】【ドライブ！】

それぞれの扉から響鬼とドライブが現れてカリバーに攻撃をしていく、その間にジオウはフォーゼの押す。

【フォーゼ！】

ヒーハックガンが現れて構える。

「はああああああ!!」

ライダー爆熱シユートが放たれてカリバーは月闇でガードをする。

「や、やったのかな？」

『まだみたいだぞベル！』

「え？」

見るとカリバーは月闇を構えているが……

「ベルうううううううう!!」

「え？」

声が出た方を見ると輝夜が刀を構えている。彼女はカリバーがベルに攻撃をしたのだなと判断をして構える。

「貴様、仮面ライダーとは言え私の可愛いベルに攻撃をしたな？何が目的かは知らないが……私のベルを殺すというなら……私は修羅となる!!」

「……」

カリバーは無言でいたがその場を去っていく。ベルは追いかけてうとしたが膝をついてしまう。

「おいベル！」

「……大丈夫、大丈夫」

彼は変身を解除をしたがカリバーはゴ・ガドル・バと同じ強さだと感じていたが一体何者なのだろうか？と思いつつながら彼はカリバーが去った方角を見ていると輝夜が抱き付いてきた。

「馬鹿者……馬鹿者!!」

「え？」

「私がどれだけ心配をしたと思った!!部屋を覗けばお前がいなくて嫌な予感がして……お前が死んだら私達は悲しいのに……どうしてお前はいつもいつも傷だからけなんだ。」

「……」

ベルは何も言えなかった。輝夜は涙を流しながら抱きしめてくれたからだ。

「馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿」

「……めんなさい」

ベルは謝ることしかできなかった。輝夜がいなかったらおそらく自分はあそこでやられていたのだと……一方でオーマジオウ

はあのカリバーは一体何者なのだろうかと思いつながらなぜカリバーが現れたのかとさらに言ってしまうば死んでいた仮面ライダー達がなぜこのオラリオに現れたのか。

『……何か嫌な予感がするな。』

オーマジオウは玉座に座りながら空を見上げているとアルテミス眷族達があればほしいとか言ってきたので彼はため息をつきながらものを出すのであった。

## ベル休む

オーマジオウside

仮面ライダーカリーバーの襲撃を輝夜の援護でなんとか退けたベル、だがなぜカリーバーが現れてベルに襲い掛かってきたのだろうか？それに死んだはずの秋山 蓮、木場 勇治などもこの世界で仮面ライダーとして復活をしている。

そして浅倉 威や草加 雅人なども同じようにこの世界で甦ったのも不思議でたまらない。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「オーマジオウさーん！お願いをしてもよろしいですか!!」

『またか？ほら』

私は念じると彼女がほしそうなものを出して渡す。私は便利屋ではないのだがな・・・・・・・・今ベルは輝夜に運ばれてホームの方へと帰還をしている。

てか女性におんぶをされているベル、軽くないはずなのだが？調査をする必要があるな・・・・・・・・

オーマジオウside終了

一方でホームの方へと歩いている輝夜とベル、ベルはカリーバーとの戦いで疲れてしまったのか輝夜におんぶされている。

「輝夜さん・・・・・・・・」

「なんだベル？」

「降ろしてください。恥ずかしいです!!」

「何を言っているんだ。お前はあの仮面ライダーとの激闘で動けないだろうが・・・・・・・・おんぶするしかないだろ？」

「いや男として・・・・・・・・」

「馬鹿めが、私たちよりも年下のくせにかっこつけようとするではないーそれに」

「それに？」

「お前は何度も私たちを救ってくれた。ならこれぐらい目を閉じておけいいな？」

「・・・・・・・・わかりました。」

「わかればよろしい。」

ベルはおんぶされながらもあの仮面ライダーが突然として自分に襲い掛かってきた理由はわからないまま頭の隅に置いておくことにした。今はあの狐の人をどうやって助けたいのだろうか?と思いつきながら目を閉じる。

やがてホームへと到着をして輝夜はベルをソファアにゆつくりと降ろす。

「眠っていたのか・・・・・・・・ふふふ私の背中がとても気持ち良かったのでしようね兎さまは(笑)」

輝夜は笑いながらベルの頬をつつついてみるとアリーゼがリビングに歩いてきた。

「あれ輝夜? あんたどこかに行っていたの?」

「・・・・・・・・ああ」

「何かあったのね? ベルがソファアで寝ているってことは」

「ああそのとおりで。ベルが謎の仮面ライダーに襲われた。私はすぐに駆けつけると奴は撤退をした。」

「・・・・・・・・オーマジオウさん。」

『なんだ?』

「どうしてベルは襲われたの?」

『わからない、相手は無言でベルに襲い掛かってきた。だから私もどうして襲ってきたのかわからない状態だ。一度調べる必要があるが・・・・・・・・』

「いずれにしても何かがおラリオで起こる・・・・・・・・ってことでいいのかしら?」

「それはわからないが・・・・・・・・警戒はしておいた方がいいな。」

「そうね・・・・・・・・」

二人は両手を組み少しだけこれからのことを話しながら寝ることにした。なおベルに関しては輝夜が部屋に連れて帰ることとなりアリーゼはぷーと頬を膨らませるがじゃんけんで負けてしまったので何も言えない。



次の日ベルは何か当たっているなど目を開けると輝夜の胸があつたので驚いている。おそらく輝夜が裸のまま寝ているので彼は起き上がるとうとしたが輝夜が動いて彼女の胸が当たっているのでベルは………

「Ω／＼。）チーン」

再び気絶をするのであつた。輝夜はベルがなぜか気絶をしているので首をかしげる。

「なんでこいつは気絶をしているんだ？まあいいかさーてまた抱きしめようっと」

一方で精神世界の中。

『ごふうふうふうふうふうふうふうふうふうふうふうふうふう!!』

オーマジオウは吹き飛ばされてみるとアルフィアが闇のオーラを纏いながらオーマジオウの方へと近づいている。

「貴様………」

『落ち着け！お前体とかないだろうが!!』

「やかましい!!ベルはいつもあんなことをしていたのか!!」

『いやベルがしているわけじゃ「福音」ごああああああああああああああああ!!』

問答無用の福音が放たれてオーマジオウは吹き飛ばされてしまう。彼は立ちあがり仕方がないと構えなおす。

『ええい！これ以上はさせないぞ!!』

オーマジオウはサイキョージカンギレードを構えてアルフィアに突撃をする。アルテミス眷族たちはアルフィアを止めることのできないので見ているだけしかできないのであつた。

一方で現実ではベルが改めて目を開けるとやはり輝夜は裸のままだったので苦笑いをしながら彼は起き上がる。

「ふふふ目を開けたのですね兎さま」

「輝夜さん………また裸で寝ていたのですか？」

「いつものことだろ？」

「まあそうですけど………」

「それに抱かれたのだから問題ないだろ？」

「おうふ」

ベルたちは部屋を後にしてリビングの方へと行くとほかのメンバー達もおりベルは座りご飯を食べる。

今日はベルはOFFのため武器や鎧などを調整をするためヘファイトスファミリアの椿のところへと行くことにした。

## 椿のところへ

仮面ライダーカリーバーに襲われたベル、彼は輝夜の援護がなかったらやられていた。次の日彼は腰の武器の太刀を調整をするために椿のところへと向かった。

「……………」

ベルは辺りを警戒をしながらヘファイストス・ファミリアがあるタワーへと歩いていったが彼は春姫のことを考えながらもどう助けたいのかと考えながら向かっていった。やがてヘファイストス・ファミリアの工房に到着をして椿がいるのかを確認をすると彼女が現れる。

「おーベル坊！よく来たな！」

「はい武器の調整をお願いをしたくてやってきました。」

「わかった。……………だがちよつとたてこんでいてな……………」

「聖日が完了をするのが3日後になるがいいか？」

「わかりました。お願いしますね？」

「おう任せられた。」

太刀を預かってもらいベルはヘファイストス・ファミリアを後にしてオラリオの街を歩いていると誰かの気配を感じてオーマジオウも気づいてジクウドライダーが腰に現れたのを見てベルは走ってジクウドウオッチを起動させる。

【ジオウー！】

「変身!!」

ジクウドライダーにジオウライドウオッチをセットをして変身をする。

【ライダータイム！カメンライダージオウー！】

ジオウに変身した後彼はジカンギレードを構えて上空を飛び屋根の上へと移動をする。一体誰が自分を見ているのかと警戒をした。すると攻撃が放たれてベルはジカンギレードで相手が放った砲撃を切り裂く。

『今の攻撃は……………』

「いったい誰が？」

すると現れたのは仮面ライダービルドに搭乗をしたガーディアンだった。彼らは持っているマシンガンでジオウに向かって放ってきいた。ベルはファイヤーアローで彼らが放ったマシンガンの弾を相殺をする。

「フイニッシュタイム！クローズ！スレスレシユーテイニング！」

クローズライドウオッチをジカンギレードジュウモードにセットをして青い龍型が放たれてガーディアン達に当たり撃破していく。オーマジオウはなぜガーディアンがこの世界に現れたのかと思いきはビルドライドウオッチを起動させてセットをする。

「ライダータイム！カメンライダージオウ！アーマータイム！ベストマッチ！ビ・ル・ド！」

ビルドアーマーを装着をして襲い掛かるガーディアンにドリルクラッシュークラッシュャーで攻撃をして切りつけていく。

「はあああああああ!!」

放たれた攻撃でガーディアン達が撃破されていきベルは止めを刺そうとしたときに後ろから攻撃を受けてしまう。

「ぐあー！」

『あれは……』

「悪いがこいつらをやらせるわけにはいかないのだ。」

「あ、あれって電王？」

『いや違う、あれは……ネガ電王だ。その実力は……』  
「俺様の強さは別格だ。」

ネガ電王は腰のデンガツシャーを連結させてソードモードにして構える。ベルもドリルクラッシュャークラッシュャーを構えて突撃をしてネガ電王に攻撃をするが彼はデンガツシャーソードモードで受け止める。

「!!」

「ふん！」

そのままはじかせるとデンガツシャーでジオウのボディを切りつける。そのまま連続した攻撃をしようとしたがベルはディエンドからもらった力、時を止める時間を使い後ろの方へと下がる。

時間を動かすとネガ電王が振り下ろした場所にジオウはおらずに彼はデンガツシャーソードモードを分解してガンモードへと変えて発砲をする。

現れたジオウのボディに弾丸が命中をして吹き飛ぶ。

「がはー！」

「ふん………魔王の力とはそんなものか？」

「まだまだ!!」

【ブランドジオウー！】

ブランドジオウライドウォッチをセットをしてまわす。

【ライダータイム！カメンライダー！ジオウ！ブランドタイム！グ・ラ・ン・ド！ジオウー！】

ブランドジオウに変身をして彼はボタンを押す。

【電王ー！】

デンガツシャーアックスモードが現れてベルは突撃をして切りかかる。ネガ電王はガンモードの弾を放つがベルはアックスモードではじかせると左手にエネルギーを込める。

「ファイヤーアロー!!」

放たれたファイヤーアローがネガ電王に放たれてボディに当たる。彼自身は舌打ちをした後立ちあがりアックスモードへと切り替えて電王パスをベルトにスタップする。

【フルチャージ】

エネルギーが込められたアックスモードのデンガツシャーを振るい斬月刃が放たれる。ベルはサイキョージカングレードを構えて放たれた斬撃刃をガードをする。

「ぐううううううううう!!」

ベルは衝撃を抑えてなんとかガードをした。ネガ電王はガードをされたのを見て舌打ちをする。ベルはこのまま追撃をしようとした。

だが突然として体当たりをくらってしまい吹き飛ばされると現れたのは仮面ライダーBLACKが戦ったゴルゴムの怪人「サイ怪人」だった。

「余計なお世話を」

ネガ電王は現れたサイ怪人に後を任せて離脱をする。ベルは追いかけてようとしたがサイ怪人が自慢のつの攻撃を放ちグランドジオウの投げ飛ばした。

「うわ!!」

投げ飛ばされてサイ怪人は止めを刺そうとベルに近づこうとしたが彼は何かを閃いたのかボタンを押す。

「デイケイドー」

扉が開いてデイメンションキックを放つデイケイドが現れてサイ怪人に当たり角が折れる。

吹き飛ばしたサイ怪人に走ってサイキョージカンギレードでサイ怪人のボディを切りつけた後に上空へと投げ飛ばす。

「ゴーストー」

ゴーストがグランドジオウに重なっていきそのままオメガドライブを発動をさせた状態の蹴りを放ちサイ怪人を撃破する。

オーマジオウは現れたネガ電王、サイ怪人が復活をしたのを見て大シヨツカーが復活でもしたのか？と首をかしげる中、牢屋に捕まっていた浅倉 威が脱走をしたことが判明をした。しかも没収をしたはずのカードデツキなども消失をしていた。

蓮 襲われる。

オーマジオウ side

「……………」

ベルの精神世界の玉座に座りながら私はネガ電王のことを考えていた。奴は電王とゼロノス、キバによって倒されたはず……………それなのに奴は実体化をしておりネガ電王に変身をしてベルに襲い掛かってぐおおおおおおおおおおおおおお!!

「貴様……………」

「突然福音を放ってくるな!」

「なぜベルがまた……………抱きしめられている?」

アルフィアの言葉を聞いて私はベルが見ている視線を見るとアリーゼと……………はあ!?何やっているんだあいつらは!そういうえば気づいたら部屋に戻ってたのだったな。やばい!アルフィアの戦闘力が上がってきて私の生命がピンチな気がする!

「さて覚悟はできているか?」

仕方がない、ベルのために私は戦うとしよう!なんだかいけそうな気がするからな!!

オーマジオウ side 終了

一方で秋山 蓮は夜に移動をしていた。浅倉が脱走をしたと言うのを聞いて彼は警戒をしながら探している。

「浅倉……………どこへ消えたんだ。」

【アドベント】

「!!」

音声が聞こえて蓮は交わすとボルキャンサーと呼ばれるミラーモンスターが襲い掛かってきた。

「こいつは……………」

「まさかあなたとまたこうして再会をするとは思ってもおりませんでしたよ。」

「須藤……………変身!!」

彼も仮面ライダーナイトに変身をしてミラーワールドの中へと突

入をしてシザースはカードを抜いてシザースバイザーにカードを装填させる。

【ストライクベント】

右手にシザースピンチが装備されてナイトに襲い掛かる。ナイトは交わした後ダークバイザーを抜いてシザースに攻撃をする。

「なぜお前がここにいる！」

「それは私は今はある組織にいましてね！あなたをこうして殺せるのを待っていたんですよ!!」

シザースは連続した攻撃をナイトに放つが彼ははじかせた後カードを出して装填する。

【トリックベント】

分身を作りシザースに攻撃をする。一方で場所が変わりナイトとシザースが戦っている中ベルは？

「.....」

隣に眠っているアリーゼを見ていた。彼女と帰ってからヤツテしまいどうしてこうなったんだろうと思いつながらオーマジオウに話しかける。

「オーマジオウさん。」

だが返事がなくベルは首をかしげているとアリーゼが起き上がる。

「べぐるくどうしたのよ？」

「あ、いえオーマジオウさんが返事をしないのでどうしたのだろうと思ひまして.....」

「うにゅーならもう一回しましょ？」

「ちよアリーゼさん!？」

そんなアリーゼのせいでアルフィアのオーラがさらに強くなってしまいオーマジオウはウオッチを起動させて仮面ライダー達を総動員をしてアルフィアを止めるために奮闘することをベルたちは知らないのであった。

一方で

【ソードベント！】

「であ!!」



「ぐ!!」

ウイングランサーがシザースのボディに命中をして吹き飛ばされる。

「さて色々とお前には聞きたいことがある。」

「私もなめられたものですね。ここは一度撤退をさせてもらいますよ?」

「逃がすか!!」

ナイトは攻撃をしようとした時にボルキャンサーが体当たりをしてナイトを吹き飛ばす。その間にシザースは撤退をしてナイトはミラーワールドから出て変身を解除をする。

「……………このオラリオに何が集まろうとしているんだ。城戸……………お前ならこういうときになんと言うんだろうな。」

彼はそのままロキ・ファミリアの方へと戻ることにした。

次の日ベルはあの狐の人を助けるための準備を進めることにした。神殺しになるかもしれない……………だけどあの狐の人を助けたいという自分がいる。

アストレア達は知っているがアリーゼ達はそのことを知らない、彼は誰にも迷惑をかけないために……………今立ちあがろうとしてこけるのであった。

「ふん!!」

『ベルよ、かっこつけるのはいいが周りを見てからな?』

「すみませんでした。」

『……………さて話を戻すとしてまずは変装道具を準備をアルテミスのお嬢ちゃん達がしてくれた。ベルよ今転送をする。』

オーマジオウの力で転送されたのを見てベルは目を見開いた……………なにせ彼女達が用意したのは銀色の髪のかつらと胸パット……………さらにはドレスを用意したのだからである。

「……………オーマジオウさん?」

『……………私は何も関わっていない。まじで』

ベルは思った。まさかのアルフィアの姿をしろとは思ってもいなかったのである。誰もいないの確認をして彼は服などを脱いでい

く。なぜかブラジャーなどの付け方を知っている自分としては情けないなと思いつながら装着をして最後はかつらを装備をして改めて鏡を見る。

「……………」

『見事にアルファイアだな。』

「オッドアイじゃないですからばれないようにフードをかぶってつと……………」

ベルはフードをかぶりこつそりとアストレア・ファミリアを抜けて夜までブラブラすることにした。

「ベルがいないいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

アリーゼの言葉を筆頭にベルの姿が見えないことに慌てるアストレア・ファミリアの眷族達であった。

（ベル、あなたが今最大な試練を乗り越えようとしている。頑張りなさい……………まあ帰ってきてアリーゼ達に怒られるのかもね？）

アストレアは苦笑いしながらベルの奮闘を見守るのであった。



うかも。」

ベルはそういいながらイシュタル眷族たちが現れたのを見て、自分の匂いなどをかいでくるので仕方がないので吹き飛ばすことにした。

「福音」

放たれた福音を受けて、二人の眷族たちは吹き飛ばされた。ベルはごめんなさいと謝り中へと入るために扉を蹴り飛ばした。

彼は春姫がいると思われる場所を探すために走りだした。途中で眷族たちと会うが、彼女たちを福音で吹き飛ばしていき、目的の場所を探そうとしていると？

「ぐおおおおおおお！男の匂いだあああああああああああ  
あ!!」

突然として大声が聞こえてきたのでベルは見るとヒキガエルのような化け物が現れたのを見て彼は一言……

「化け物!?!」

「誰が化け物じゃあああああああああああああ!!」

「福音!?!」

「ごふらあああああああああああ!!」

ベルが放たれた福音が命中をしてヒキガエルは吹き飛ばされて行く、さらにベルは接近をしてヒキガエルのお腹に思いつきり膝をぶつける。

「ごは!!」

気絶をしたのを確認をして、彼は移動をしていきフードをかぶりながらだが戦っていると大きな音が聞こえてきたのでいったい何かと見ているとフレイヤファミリアの精鋭達が攻撃をしているのを見て、フレイヤファミリアがどうしてここに?と思いつつも自分の目的を果たす為に移動をする。

「いったいどこに?……!!」

突然として攻撃でイシュタルファミリアの眷族たちが吹き飛ばされたので、フレイヤファミリア達の精鋭はロキ・ファミリアの精鋭みたいな強さを持っているなど思いながら進んでいき目的の人を見つける。

「あ……あなたは？」

春姫は十字架に捕らわれていたが、ベルはすぐにジカンギレードで彼女を縛っていた紐を切り、彼女を支える。

「大丈夫ですよ春姫さん、僕です。」

フードを取り、銀色の髪をした人物が現れた。

「あ、あの？」

「ベルです。色々とありまして変装をしています。」

「ベル様……」

「ぐああああああああああああああ!!」

「!!」

声が聞こえてきたので、一体何かと見ているとイシユタルが苦しそうにしていた。フレイヤも一体何がと思い見ているとイシユタルの姿が変わる。

【AMAZON!】

『ぐああああああああああああ!!』

アナザーアマゾンへと変身をして、ベルはそれに気づいてジクウドライバーを装着をしてジオウライドウォッチとグランドライドウォッチを起動させる。

【ジオウ!】【グランドジオウ!】

「ベルさま?」

「見ていてください。これが僕の本当の姿……変身!!」

そのまま走りだしてベルトをまわす。

【ライダータイム!カメンライダージオウ!グランドタータイム!

グ・ラ・ン・ド!ジオウ!】

グランドジオウへと変身をしてフレイヤに襲い掛かろうとしたアナザーアマゾンに蹴りを入れる。

「は!!」

『ぐお!!』

「ベル……どうしてあなたが？」

「フレイヤ様、ここは俺がやります。オツタルさん!」

「わかった。ベル……すまん。」

ベルは手を振りアナザーアマゾンを見ていた。

『ぐああああああああああああ!!』

アナザーアマゾンは咆哮をしながらグランドジオウに襲い掛かってきた。両腕のカッターが伸びてグランドジオウに斬りつけてきた。

「くー」

彼は攻撃をはじめさせた後蹴り入れようとしたが反転をして四つん這いになりベルに襲い掛かろうとしてきた。

【ゴーストー】

ガンガンセイバーハンマーモードが発生をしてアナザーアマゾンを吹き飛ばす。そのままボタンを押していく。

【響鬼ー】【電王ー】

扉から響鬼と電王が現れて、アナザーアマゾンに攻撃をする。ジオウもライドヘイセイバーとジカンギレードを構えて二刀流でアナザーアマゾンに攻撃をする。

その様子をフレイヤファミリアは見ていた。

「あれが………アストレア・ファミリアの仮面の兎………」

「強い……なんていう剣裁きをしている。」

「それだけじゃないわ。あの動き………あの子は戦い続けてきた戦い方よ。それはオツタルあなたが一番わかるでしょ?」

「はいフレイヤ様。」

【龍騎ー】

「せいやああああああ!!」

ドラグクローからドラグクローファイヤーが放たれてアナザーアマゾンにダメージを与える。

「これで………決める!!」

【フィニッシュタイムー!グランドジオウー!オールツエンティー!タイムブ레이크!!】

「とうー」

グランドジオウは飛びあがりライダーキックのポーズをとるとほかのライダー達の幻影たちが合体をしてアナザーアマゾンにオールツエンティタイムブ레이크が命中をする。

吹き飛ばされたアナザーアマゾンが爆発をして、イシユタルは倒れて転がってきたアナザーライドウオッチを拾い握りつぶした。

オーマジオウはなぜアナザーライドウオッチがあるのだ？と思いつながら考えているとイシユタルが起き上がる。

「ぐううう．．．お、おのれ．．．．．」

「ベル、後は私がやるわ。」

「フレイヤ様．．．．．」

そのままフレイヤは彼女を一度上の方へと上がった後突き飛ばしてイシユタルは地面に墜落する前に送還された。

こうしてイシユタルの野望はベルとフレイヤファミリアによって壊滅した。ベルは春姫をどうしようかなと考えながらフードをかぶりながら春姫を連れてアストレア・ファミリアの方へと帰ることにした。

「「「おかえりべール。」」」

「．．．．．／（＾o＾）／オワタ」

前方で両手を組みながら目から光を消した姉たちが立っていたのであった。

オーマジオウside

さて前回、イシユタルファミアに侵入をするためにアルフィアの姿に変装することとなったベル、そして目的の春姫の救出をすることはできたが……。突然としてイシユタルはアナザーアマゾンに変身をして、ベルはグランドジオウに変身をしてアナザーアマゾンと激突をして見事に撃破した。

そして春姫を連れてアストレア・ファミアへと戻ってきた。だがその前に目の前の人物たちが黒いオーラを纏いながら立っていた。そう頭が痛い……。アリーゼ達が待っていたかのように両手を組み立っていた。ベルは震えているし……。さてどうしたものか。

オーマジオウside終了

「がたがたぶるぶるがたがぶるぶる」

ベルは震えながらいるとアリーゼが代表で歩いてベルの近くへやってきた。

「お帰りベル、色々と話がしたいから中へ入りましょう？」

「え、いや「ハヤク」は、はい!!」

逆らったらダメだと本能的にささやいてついていく、もちろん春姫はほかのアストレアファミアの人たちに連れられて行く。

「ご、ごーんーんーん！」

「大丈夫大丈夫。」

「ちよつとあつちでお話をするだけだからね？」

「ベルさまあああああああ!!」

春姫はベルに助けを求めているが、そのベルはアリーゼ、輝夜の二人が左右の手をつかんで抱き付いていた。

「さてベル、どうしてアルフィアの格好をしているのか？」

「そして、なぜイシユタルファミアへと行ったのかは大体あの狐人を見てほしいは察しているが……。」

「私達に黙って出ていったことに関しては絶対に許さないからな



？」

二人の目から光が消えた状態だったので、ベルはどうしたらいいの  
だろうかと思ひながら黙っていた。

アストレアも申し訳なきように謝っている姿を見て、もしかしてば  
れたのってアストレア様じゃないか？と彼は思っていた。

『二人ともそれぐらいしてやってくれ、ベルは男として助けたいと  
思っただいたんだ。お前たちだって正義を掲げる眷族だろ？それと  
一緒だ。それにこれに関してはベルがアストレアに言ったことだ。  
丁度お前達が出ており誰もいないときになるがな……』

「わかっているわよ……でも！もしそれでベルに何かあつたら  
！あたしは自分を攻めるわよ!!」

「アリーゼさん……」

「そうだな、確かにお前の力は強大だ。だがそれでもベルは普通の人  
間……もしも何かあつたら私達はお前を殺している!!」

『わかっている。そうはならないように私も力を使うさ。お前達を信  
用しているカラこそベルを任せている。私を失望させるなよ?』

そういつてオーマジオウは通信を終わり、アリーゼ達はため息をつ  
いた。

「まあベルが無事だったからいいわよ。」

「全くだこのおバカ!」

「あいた!」

でこピンされてベルは頭を抑えてしまうが輝夜達の先ほどの言葉  
を聞いていたのでベルは謝ることにした。

「アリーゼさん、輝夜さん!ごめんなさい!」

「もういいわよ。」

「ああ、アストレア様からだいたいは聞いたからな。だがまた無茶を  
したな?だがよくやったなベル……」

「うん。」

輝夜はベルの頭をなでなでしてベル自身も気持ちよくなったのか  
うとうととしていた。やはり夜に戦ってそのまま帰宅をしたので眠

くなってしまうていた。

「無理もないわ。輝夜、ベルをお風呂に連れていきましょ？」

「そうだな、それに……」

「「「じーーーーー」」」

ほかのメンバー達もアリーゼ達だけずるいという目線を送っているのでアリーゼも仕方がないわね全員でお風呂よ！といい眠りそうなベルを連れてお風呂場へと急行をするのであった。

なおこのときに我慢が限界になった乙女たちに襲われたというこ  
とだけ書いておこう。

## ジオウ対アルファイア!?

春姫を助けることに成功をしたベル、だが帰るのが遅くなってしま  
いアリーゼをはじめとした姉たちに捕まりお風呂へと連行されて襲  
われてしまう。

そして精神世界へと転送される。

「……………は!!」

見るとアルテミス眷族達は地面に倒れているのを見てベルは一体  
誰がと思っていると、黒い強大なオーラを感じて後ろを振り返るとア  
ルファイアがいたのを見てベルは震えてしまう。

なにせ彼女の目からハイライトが消えており、その黒いオーラは強  
大なものになっているのでベルは様々なモンスターと戦ってきてい  
るが、今まで以上の恐怖を感じていた。

「ベーーーール? ふふふふふふふふふふふふふふふふ」

「お、お義母さん……………まさか!？」

「あはははははははははははははははははははは!!」

アルファイアは笑いながらベルに襲い掛かってきたので、これはまず  
いとジクウドライダーを装着をしてジオウに変身をする。

「変身!!」

【ライダータイム! カメンライダー ジオウ!】

ジオウに変身をしてアルファイアがどこから奪った剣をジカンギレ  
ードで受け止める。だがかつてはレベル7の人物だ。

それに加えて彼女は歴戦の戦士でもある。だからこそベルは受け  
止めたりしているがその力に苦戦をしてしまう。

(なんていう力をしているんだ! 流石お義母さんだ……………強すぎ  
る!!)

「福音!」

「うわああああああああああ!!」

至近距離からの福音を受けてベルは吹き飛ばされてしまう。彼は  
反転をしてグラウンドライドウォッチを起動させて装着をしようとし  
たが素早く動いた彼女にグラウンドライドウォッチを奪われてしまう。

「あー！」

「……………」

まさかグランドライドウオッチを奪われるとは思ってもいなかったので仮面の奥で驚いているが、彼はライダー召還を使いカブトが現れてクロックアップを使いグランドライドウオッチを奪取をしてベルは装着をしてグランドジオウに変身をする。

「……………」

お互いに見会いながらベルは横に動いてライダーのボタンを押す。

【鎧武！】

イチゴクナイが現れてそれを投げつける。アルフィアは福音を使いイチゴクナイをはじかせる。

だがベルはその隙について電王とキバのボタンを押してガルルセイバーとデンガツシャーを装備をしてアルフィアに振り下ろした。

だが彼女はそれを剣で受け止めた。

「な!？」

「甘いなベル、今の私は病魔など存在しない……………だから……………福音」

「ぐはああああああああああああ!!」

福音を受けてベルは吹き飛ばされてしまい、彼はどうしたらいいのだろうか?と思いつきながら見ているとアルフィアの体を鎖が巻き付かれていきため息をつきながらオーマジオウが現れる。

「全く、色々と暴れてくれたものだな?」

「オーマジオウさん!」

現れたオーマジオウはウイザードのライドウオッチを起動させてアルフィアの体に鎖を巻き付かせた。

「ぐ! 貴様!!」

「全く、ベル……………色々と言いたいことがあったが、まあそれを知っている身としてはな、まさかアルテミスの眷族達がフルボッコで倒されたからな。だからお前が見たのは丁度奴らがやられたところだろう。」

オーマジオウは説明をして精神世界から出るように言った時、アル

ファイアが鎖を壊してベルと共に精神世界から出てしまう。

「何?!どあ!!」

衝撃波が飛んできてオーマジオウは吹き飛ばされてしまい、アルファイアが外に出たのを見てどうなるのか?と思いつながら大丈夫なのか?と思いつながらベルは部屋の方へと運ばれており何かで包まれているのを感じている。

「……………一体何が?」

「ん……………」

「……………ん?」

ベルは一体誰がと思ったが、輝夜は裸で寝ているのですぐに胸があるはずだが?どうみても相手は服を着ている。

彼は段々と上の方を見ると銀色の髪をした女性が彼を抱きしめながらいるのを見て驚いている。

「うあああああああああああああああああああああああ!!」

「ベル!一体何が!?!ってえええええええええええええええええええええ!!」

ベルの叫び声が聞こえてアリーゼが部屋に飛び込んだが、すぐに叫んだのでほかのメンバーも駆けつけた。

「アリーゼどうした!!」

「一体何が……………ってえ!!」

ベルを抱きしめて眠っている女性、それはアルファイアそのものだった。すると彼女は目を開けたのを見てアリーゼ達を睨んでいる。

「ふっふっふっふっふ貴様ら……………よくも私の可愛い義息子を色々としてくれたな?」

「えっとなんでアルファイアが?」

「知らん、精神世界の中でいたがベルが帰る際にくっついて出たら復活をしたと言うわけだ。見させてもらったぞ?貴様達がベルのことを色々としてくれたことも含めてな!!これからは私がベルを見る!」

「……………」

「お前達はベルを色々と襲ったりしているからな!」

「失礼ですがお義母様?」

「誰がお義母様だ!!」

がやがやとアルフィアとアリーゼ達が言い争っている中、ベルはオーマジオウと話をしている。

「オーマジオウさんどうしてお義母さんが?」

『わからない、なぜ彼女の体が復活をしたのか私もわからない。……おそらく彼女はかつての体ではなくこの中で生成をされた状態のまま外に出ている。つまり? 「福音」はあ……』  
「うわああああああ! アリーゼさん達いいいいいいいいいいいいいいいい!」

「「「きゅーーー」」」」

福音を受けてアリーゼ達は一撃でKO負けしたのでベルは慌ててしまう。

## アルフィアの嫁作法

ベルside

不思議なことが起こりました。なんとお義母さんがなぜか体も含めて復活をしたのです。正直に言っただけ驚いている僕がいるのですが……アストレア・ファミリアのなかにはいるのですが……」

「福音、福音、福音」

「ごは!!」

「ほへええええええええ!!」

「がはああああああああ!!」

アリーゼさんをはじめとしたメンバーが次々にお義母さんに吹き飛ばされているのを見ることになるなんて誰が思うのでしょうか？

しかもお義母さんは病魔もない状態で復活をしているので現役バリバリ以上なことになるんだよね？

それでお姉ちゃん達が次々に吹き飛ばされているのを僕は見ていることしかできないんだよね。

「つてかまさかアルフィアの奴が復活をするなんてな。」

「はい、僕も驚いています。」

『私もこれに関しては驚くばかりだ……つてかアリーゼ達ばかり吹き飛ばされているな……』

確かに、今までお義母さんは僕の中でアリーゼさん達が色々としているのを見ていたとオーマジオウさんが言っていた。つまり……

「……色々と見られていたつてこと!?!」

『そうだ、私が切っていなかったのも原因だが……』

まさか、そのためにお義母さんは!?!つて終わっているし!!

「アリーゼさん達いいいいいいいい!!」

お義母さん!?!いくらなんでもやり過ぎですよおおおおおおおおおおお!!

「何を言っている?お前を守るのにこんなに弱いのでは話にならないわ。全く……」

うーんこれからどうしたらいいのだろうか？

ベルside終了

一方、ダンジョンでは？ゴ・ガドル・バはモンスターを相手に交戦をしていた。だが彼の力ではモンスターなど一瞬で倒されてしまう。「弱いな……ジオウか……奴との戦いが、俺の闘争本能を強くさせていった。だがこのモンスターは俺をたぎらせてくれない。「なら俺が貴様をたぎらせてやろう。」何？」

ゴ・ガドル・バは振り返ると謎の人物が立っており彼は謎の敵だなと思い構え直す。

「貴様は何者だ？」

「なーに、あなたの敵ではないってことですよ（笑）」

「ふん怪しい雰囲気を出しておきながらか？信用ならないな。」

「まあしようがないですね。行け」

すると彼の周りにジャマトライダー達が現れてゴ・ガドル・バに襲い掛かってきた。ゴ・ガドル・バの目が青くなり俊敏態へと変身をしてガドルロッドを生成をして邪魔とライダー達に対抗をする。

「ふん！」

ガドルロッドを振りまわしてジャマトライダー達を吹き飛ばした。ほかのジャマトライダー達も攻撃をしようとしたが素早くロッドを振りジャマトライダー達が次々に吹き飛ばされた。

「へえージャマトライダー達を吹き飛ばすなんてね。」

「……いい加減貴様は何者か、なぜ我の前に現れた？」

「まあいいよ。僕の目的は、この世界を滅茶苦茶にするためさ、そのための戦力が必要ってわけ。」

「……くだらん、我はそんなものに興味はない。消えろ!!」

「……まあいいさ、君も変わったねー」

そういつて相手は姿を消して、ゴ・ガドル・バもダンジョンの奥の方へと消える。



## 襲撃を受けるベル・クラネル

「ふう……」

ベル・クラネルは時間を止める力を使い、アルファイアが暴れるアストレア・ファミリアのホームから脱出をしてダンジョンへとやってきていた。

こつそりと脱出をしたので彼は帰ったら地獄だなど思いながらオーマジオウが話しかける。

『あいつが外に出ていると私は対処ができないからな……中にいた時は止めることができたのだが……』

「正直に言えばアリーゼお姉ちゃん達には申し訳ないことをしてしまいました。」

彼はそう言いながらもジオウに変身をしてダンジョンへと降りていく。一方でアストレア・ファミリアでは？

「「いやああああああああああああああああ!!」」

「ベルは……ベルはどこへ行った!? 言え!!」

「し、知りません!!」

「隠していたりしたら承知しないぞ!!」

「隠すも何も私達もベルを探しているのだから!!」

アルファイアが暴走をしており、八つ当たりアリーゼ達が吹き飛ばされていく。アストレアとアルテミスはため息をついていた。

「まさかアルファイアが復活をして、アリーゼ達が吹き飛ばされるのを見ることになるなんて思ってもいなかったわ。」

「全くだな……最強と呼ばれた人物が目の前にいるっておつと」

アルテミス達は机の下に隠れてアリーゼ達が吹き飛ばされたので交わしている。さてどうしたものか? と思いつながらお茶を飲む。

一方でダンジョンでは？

「ベルさまお見事です。」

「……えつといつの間にいたのですか? ファイルデイスさん。」

ファイルデイスがいつの間にかいたのでベルは驚いている。

「我が魔王さまがダンジョンへに行かれたのを知りこつそりと抜けて

きたのであります。」

「一応聞くけどアリーゼさん達は？」

「……………」

フィルデイスが言いずらそうにしているのを見てアリーゼ達がアルフィアにやられているのだと判断をして二人でダンジョンに降りることにした。

ジオウに変身をしてジカンガトリングを発砲をしてモンスターたちを倒していく。

【仮面ライダーフィルデイス！フィルデイス！】

フィルデイスも変身をしてジカンデスピアを突き刺して撃破する。すると魔法が放たれたのを見てフィルデイスを抱えて交わした。

「べ、ベルさま!?!」

「何者だ!!出て来い!!」

ベルは言うとうとフードをかぶった人物達が現れて、無言でベルトを着して何かをセットをする。

【(JYAMATO!!)】

「!?!」

すると突然として謎の怪物がライダーのような姿に変身をしたのを見て二人は驚いている。

「なんだ!?!」

「オーマジオウさん!!」

『……………すまない私にもわからない。』

彼らは二人に襲い掛かりベルはライドウォッチを起動させて装着をする。

【ライダータイム！カメンライダー！ジオーウ！アーマータイム！アギト！】

ジオウアギトアーマーに変身をして相手が変身をした相手に拳をぶつける。一体は吹き飛ばしたがもう一体が攻撃をしてベルは攻撃を受けてしまう。

「ベルさまーぶううううううう!!」

フィルデイスも援護をしようとしたがもう一体が攻撃をして向か

うことができない。ベルは立ちあがりライダー召還を使うと狐のライダーが現れた。

「え?」

「さあここからがハイライトだ。」

突然として現れた狐のライダーはベルトについているのを操作をして構える。

【BOOTH TIME! MAGNUM! BOOTH! GRAND VICTORY!】

「はあああああああああああああ!!」

飛びあがり燃え盛るライダーキックを放ち一体を吹き飛ばして撃破した。さらに反転をしてそのままもう一体を倒した。

「とりあえず僕も!!」

【フィニッシュタイム! アギト! グランドタイムブ레이크!!】

「おりゃあああああああああああ!!」

飛び合がりライダーキックが命中をして相手は爆発をする。狐のライダーは辺りを見てからジオウに近づいた。

「ふーん、俺を呼んだのはあんたってことか?」

「あなたは?」

「俺はギーツ、仮面ライダーギーツだ。これをお前に渡すよ。」

そういつてジオウに渡したのはギーツのライドウォッチだ。

「これは!」

「俺を呼ぶときはいつでも読んでくれ、スター・オブ・ザ・スターズ・オブ・ザ・スターズの俺がいつでも駆けつけるからな。」

「あ、はい」

「じゃあ!」

そういつてギーツは消えて、オーマジオウは中で呟いた。

『仮面ライダーギーツ……私が知らない仮面ライダー……それは私が知らない仮面ライダーの歴史が始まっているということか……それがあの仮面ライダーギーツという仮面ライダー……そして見たことがない謎の怪人のライダーか。』

「あの仮面ライダーギーツと言うのは知らないものですね。ですが彼



「二」駄目だこりや「二」

こうしてベルに体を治させた後もアルフィアのお仕置きは続いたのであった。

## 武器の修理が完了!!

ベルside

お義母さんに対してOHANASIをした僕は、スッキリをしたので椿さんのところへと向かっていた。

ようやく僕の太刀の修理が終わったので取りに向かっているところである。なおお義母さんは動けないようにウイザードさんのバインド魔法を使い動けないようにしているので大丈夫だよな？

『まあ、動けないのは事実だろうな。やれやれ……まさか、あそこまでやるとは思ってもいなかったぞベル？あの後色んなライダーたちを使ってアルフィアがボロボロにしては回復させるとは……』

アリーゼお姉ちゃん達が受けたのに比べたら大丈夫だよオーマジオウさん。

(…………ベル恐ろしい子、私でもあそこまではしなかったのだが…………) さてとりあえず椿さんのところへ急いで太刀を取りに行かないとね。

ベルside終了

一方で？

「ぶぐううううううう！ぶぐ！ぶぐううううううううううううううう!!」

口にハンカチを巻き付かれて、鎖でガツガチに固定されたアルフィアの姿を見てアリーゼ達は苦笑いをしていた。

「なんというか……………」  
「あのアルフィアがベルにボコボコにされているのを見てしまうと……………」

「あれだけやられたのに、私たちやられ損よ。」

アリーゼ達はベルがアルフィアにしたことを考えて、ベル恐ろしい子と思いがながらもツンツンと動けないアルフィアに棒で突ついたりして遊ぶことにした。

「ベルは怒ったら怖いのだなアストレア。」

「ええ、私もベルがあんなに怒ったというか、あんなことをするのは初めてよ？まあ仕方がないとはいえ、ベルに黙ってあんなことをしたらいくら優しいベルだって怒るわよ。」

「そうだな……………」

二人は紅茶を飲みながらアルフィアを見るのであった。一方でヘアイトスファミリアの工房に到着をしたベル、彼は中に入ると椿を呼ぶようにお願いをすると彼女が現れた。

「おうベル坊！待っていたぞ!!」

「椿さん……………」

いきなりベルに抱き付いてきたので、彼女の豊満な胸が彼を包んでしまう。いつものことなのでベルは苦笑いをしながら、椿は満足したのか彼を連れて自分の工房へとやってきた。

「ほれベル坊、お前さんの太刀だぞ？」

ベルは椿から二刀流の太刀を受け取ると彼はいつものところにセットをして、触っている。

「うん、やはりいつのも武器がないと落ち着きませんね。」

「まあ、ベル坊は太刀を使うまではジオウの武器を使って戦っていたからの……………よし、ベル坊……………この後用事はあるか？」

「いえ、用事などはありませんけど？」

「今日の手前はもう少しで仕事が終わりなのだ。ベル坊の太刀を直すだけだったから、終わりなんだよ。それでだ、せっかくだからお昼ご飯と一緒に食べないかと思っただけな。」

「いいんですか？」

「ああ、手前と一緒に食べたいからな。」

「わかりました。」

椿は少しだけ待っていてくれといい、彼女は奥の方へと消えたのでベルは座って待つことにした。

それから数分後、椿が着替えてやってきていた。

「待たせたなベル坊。」

「あれ？あの格好じゃないんですね。」

「流石にな？手前も普通の服ぐらい着るさ。さあ行くでしょう。」

ベルの手をつないで二人は昼ご飯を食べるため移動をするが、ベルはあれ？と首をかしげながら移動をしていた。

「あれ？椿さん、食べる場所はあちらなのでは？」

「……………心配するなベル坊、こっちだ。」

そういつて椿と一緒にどこかの家へ到着をしたので、彼は首をかしげながら椿は扉の鍵を開けて中に入る。

ベルも一緒に中に入り、どこかの家なので驚いている。

「驚いたか？ここは手前の家だ。」

「椿さんの家？ってことは!？」

「そうじゃ手前が料理を作るんだ。ちよつと待っていてくれ。」

椿はそういつて料理を作っているのでベルは暇だなーと思う一方中のオーマジオウはなぜ椿は自分の家にベルを連れてきたのだろうか？と思いつながら待っていると料理を完成させた椿が現れた。

「待たせたな、ほれ食べるとしよう。」

二人は椿が作ったご飯を食べることになり、ベルは箸を使い食べる。

「美味しいです！」

「そうか、ベル坊の口に合つて良かったわい。」

そしてベルはお腹いっぱいになり、椿はお皿を洗うために洗い場へと向かつていく中、ベルは体が燃え上がる香のような感じがしていた。

「ん？」

彼は違和感を感じながら、なぜかエロいことを考えるようになっていくのを感じているとふふふと言う声が聞こえてきたので彼は見る。

「ようやく効いてきたみたいだなベル坊？」

「椿……………さん？な、何を……………」

「ふっふっふっふ、ベル坊の料理にな……………何を入れたのか？教えてやろう……………料理に入れていない。お水の方に入れたのじやよ媚薬をな。」



「ななななな・・・」

「ふっふっふ、ほーれ手前のなかなか大きいのが出てきたの？さあべ  
ル坊・・・やるとするか？」

椿の罨によつてベルは椿と昼間からやることになったのであった。  
ちなみにその日の夜はベルが帰つてこなかつたのであった。

ベル、ベツトの上で死す

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ベル・クラネルはじーつと睨んでいた。その相手は裸のまま笑っており彼はうーっーと睨んでいる。

「いやー、すごいなーベル坊、その大きなものがあたしの中で暴れていたよ（笑）」

「そりゃあ、あれだけ激しくされたらこっちだつて・・・・・・・・ぐぬぬぬぬ・・・・・・・・」

「いやー、それにしてもたくさん出してくれたねーっーベー坊?」

椿は笑いながら抱き付いて、彼女の豊満な胸が当たっており彼のがまた大きくなったのを見て、彼女はニヤニヤしながらもう一発したのであった。

それから解放されたのは数時間後、彼は家を後にしてアストレア・ファミリアのホームへと戻ろうとしたが・・・・・・・・すでに力などが消耗しており、彼は壁に寄りかかりながら歩いていった。

『だ、大丈夫かベル? って見えないな、体の主導権変わろうか?』  
「・・・・・・・・・・お願いします。」

ベルはそういうオーマジオウは主導権をとったが、体に力が入ってこないのです。ということかと判断をして、ゆっくりと立ちあがる。

「椿の奴、どれだけベルの体力などを奪ったんだ! 全く、これではアリーゼ達と「私たちがんばりますってベル?」え?」

ベル事オーマジオウが振り返るとニコニコと笑っているアリーゼが立っていたので、彼は嫌な予感がしていた。

「さあーてベル? 今までどこで何をしていたのか全てハナシテモラオウカシラ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ベル事オーマジオウは一体どうしたらいいのだろうか? 考えていた。ベルは疲れてしまい奥の方で眠っている。

彼女から黒いオーラを感じてしまったので、仕方がないと時を止める力を発動をして時間が止まったの確認をして、その場を後にする。

そして時間が動いて、アリーゼは辺りを見ていた。

「ベルがない!?どこにいった!!」

一方で時を止める力を使い別の場所に到着をしたベル、彼ははあとため息をついてベル自身も問題だが、これからどうしたらいいのだろうか?と思いつながら考えていると誰かが近づいてくるの感じたが、ベル事オーマジオウはジクウドライバーを装着をして立ちあがる。

「誰だお前は?」

「……………死んでもらおうか?オーマジオウ。変身。」

相手は変身をした姿を見て、彼は驚いている。

「その姿は……………確か、仮面ライダーベルデだったか?それとインペラーにタイガか。」

三人のライダーはそれぞれ武器を構えたのを見て、ベルはジオウライドウオツチとグランドジオウライドウオツチを起動させてジクウドライバーにセットをしてグランドジオウに変身をする。

ベルデはホールドベントを発動をしてバイオワインダーを装備をしてジオウに攻撃をしてきた。

彼は冷静にダブルのボタンを押して、現れたメタルシャフトを使いはじかせる。タイガとインペラーの二人も攻撃をしてきたが、彼はブレイドのボタンを押してメタルが発動をして二人の攻撃をガードをする。

「!!」

さらにキバのボタンを押すとドツガハンマーを出してそれをタイガ達に攻撃をして吹き飛ばす。

ベルデは舌打ちをしてクリアーベントを使い姿を消したが、オーマジオウは無駄なことをといいながら時間を止めてカブトのボタンを押してカブトクナイガン、ダブルのボタンを押してトリガーマグナムをとりだして二丁打ちで時間を止めている間に弾を連続で放ちながら発砲をして構え直す。

「そして時間が動きだす。」

時止めを解除をして三人のライダー達に弾丸が命中をして吹き飛ばされる。ベルは一気に倒す為龍騎のボタンを押す。

【龍騎】

龍騎の幻影が合体をしてドラグレッタが現れていつしよに飛びあがりドラゴンライダーキックを放ち三人のライダー達に命中をして撃破した。

相手は姿を消したのを見て、一体誰が？と思いながらベルは変身を解除をした。

「ふーむ、どうやら我を狙っているものがあるってことか？いずれにしても、厄介なことだな。「厄介なこととは何でしょうか？」……………」

ベルは振り返ると、輝夜をはじめとしたアストリア・ファミリアのメンバーが立っていたので彼は苦笑いをしながら後ろの方へと下がる。

「……………あえて聞かない、いつからいた？」

「最初に気づいたのはフィルデイスですわ。」

「あーそういうことか、さらば!!」

「逃がすなあああああああああ!!」

「二「おええええええええええ!!」二」

こうしてアストリア・ファミリアの鬼ごっこが始まったのであった。

連れていかれるベル

オーマジオウside

ベルの体を使いアストレア・ファミリア達から逃げていた私、時間停止などの力を使い何とか逃げていたが、いつの間にか捕まってしまう、てかアルファイアが参戦をするなんて聞いていないぞ？

変身をする隙も与えないで捕獲されるとはな……さて現在、私は縄で犯人のように捕まるなんて思ってもいなかったのだが？

「さてベル？今まで何をしていたのか説明をしてもらいましょうかしら？」

「……………言っておくが、私はベルじゃないぞ？オーマジオウだ。」

「なぜ貴様がベルの体を使っている？またベルは戦ったのか？」  
「別の意味で戦ったとだけ言っておく。」

ベル自身が疲れるってことはこいつらがいつもしているの考えると一緒だろうな。流石にアルファイアがいないので色々とできるのだからなって何を考えているんだ私は……ってか色々ため息がでてしまい、とりあえず捕まっている縄を力を込めてちぎった。

「……………あ……………」

「忘れたのか？私はかつて最低最悪の魔王と呼ばれていたのだぞ？」

「福音」は!!」

突然として衝撃波が放たれて吹き飛ばされてしまう。アルファイア!?! 貴様、いきなり何をする!!

「ベルの体をいつまで使う気だ？」

「仕方がないだろ？ベルが疲れてしまい、今は眠っている。」

「……………そういうことか、今度はどの女だ？こいつか？こいつか？こいつか？」

アルファイアはアリーゼ、輝夜、リユウを見ているので違うといい、流石に椿のことを言うわけにはいかないな。さてとりあえず……………

【ウィザード】

「やいば」

「「あ!!」」

ウィザードのライドウオッチを使いテレポート能力を発動をして、脱出をしようとするか?と思いつながら歩いてた。

「いずれにしても、今はあそこに帰るわけにはいかないからな」これはベル君じゃないか!!」ん?」

声が出たので振り返ると変態がいたので、私は立ち去ろうと「待って待って!誰が変態アポロンだ!俺だよヘルメスだよ!」そうヘルメスが私に声をかけてきたので立ち去ろうとする。

「まあまあベル君、君もこっちに用があったのだね?」  
「用?」

「そうだよ、南の方へと来るなんてね?ベル君もヤルことだけはやっているのにね」「うるさい」ぐは!!」

「そういえば春姫を助けたのもこの場所だったな?また来てしまうなんてな、って危ない!!」

「ちい!!」

「どああああああああああ!!」

こいつを抱えながら飛び、私は放たれたであろう場所を見ると何かが立っているのこの馬鹿神を投げ飛ばして飛びあがる。

「どひええええええええええ!!」

「誰だお前は?」

「.....」

確かこいつは、思いだした。仮面ライダーG4、まずいこいつはギガントと呼ばれるミサイルランチャーを持っている。

こんなところで売ったら大変なことになる!

「誰が貴様をここで暴れさせるわけにはいかないな。」

ジクウドライバーを腰に装着をして私はジオウに変身をする。ふふ自分の意思で変身は久しぶりだな。

【ジオウ】

「変身!!」

【ライダータイム!カメンライダージオウ!】

オーマジオウside終了

ジオウに変身をしたオーマジオウはジカンギレードを構える。G4はスコープオンを構えて発砲をしてきた。

ジカンギレードではじかせた後、ライドウオッチを起動させる。

【エグゼイド】「ライダータイム！カメンライダージオウ！アーマータイム！レベルアップ！エグゼイド！」

ジオウエグゼイドアーマーに変身をしてガシャコンブレイカーブレイカーでG4の胴体に攻撃をしてダメージを与えていく。

G4はスコープオン改で攻撃をするが、チョコブロックを発生させて飛びあがり上空から落下をしてダメージを与えた後、ベルトを操作をする。

「フィニッシュタイム！エグゼイド！クリティカルタイムブ레이크！！」

「はああああああああ！！」

ガシャコンブレイカーブレイカーでG4を殴っていき、そのまま上空へと叩きあげる。

「ぶつとべ！！」

上空へ吹き飛ばしてG4は爆発をした。ベル事オーマジオウは爆発をしたG4を見た後に後ろを振り返るとタイムジャッカーが使用をするオーラみたいなのが発生をしているのを見たが、すぐに消えたので……………変身を解除をする。

「……………」

彼はこの世界で仮面ライダー達が現れたのは、自分がこの世界にいるからタイムジャッカーが復活をしようとしているのか？と思いつながら、彼はゆつくりと飛び降りてアストレア・ファミリアの本拠地へ帰ろうとした。

「ベル？」

「アイズか？」

「この雰囲気は、オーマジオウ？」

「ああそうだ。」

「ベルは？」

「色々あつて疲れているみたいだ。」

「そうなんだ。(といってもどうせ、ベル……浮気者……)」  
アイズはもやもやした気分となり、彼を連れてどこかへ行こうとしている。

「おいどこへ?」

「いいから。」

彼女に連れられて、彼はどこかの場所に連れてこられた。辺りを見ると誰も来なさそうな場所に連れてこられる。

そしてアイズは、オーマジオウを気絶させる。

「うは!!」

彼は気絶をするとすぐに起き上がった。

「あ、あれ?ここは……」

「ベル……」

「アイズさん?え?」

すると彼は抑えられてしまう。

「やっど……やっどできるね?」

「は、はい?(つてあれ?オーマジオウさんの反応がない!?つて何があつたんですかああああああああ!!)」

「さあヤロ?」

こうしてアイズはベルに初めてを捧げたのであった、ちなみに場所はお外であった。





な気がする。」

「素晴らしいながら、僕はアストレア・ファミリアの方へと向かって歩いていると……誰かの気配を感じて振り返る。」

「これはベルさん、こんな夜にどうしたのですか？」

「……シルさん？」

後ろを見るとシルさんが立っていたので、僕は辺りを見ているが気のせいかなと思いつつ話しかける。

「シルさんこそ、どうしてこのような場所に？危ないですから」

「私はベルさんを待っていたんです。」

「僕を？」

シルさんから感じる神の力……まさか？この感じは、フレイヤ様？どうしてシルさんからフレイヤ様を感じるんだ？

「ベルさん？」

「!!」

僕はシルさんを抱えて飛びあがる。彼女は驚きながらも僕に抱き付いてるのでその……大きなものが当たっているが気にせずに飛びあがる。

「わーっベルさん、ってか高い!?高すぎる!？」

「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「なんでええええええええええ!!」

シルさんが叫んでいるけど、今の僕にはそんな余裕がないので飛びあがるしかない。そしてどこかに降りたち着地をする。

「ぜえ……ぜえ……ぜえ……」

シルさんを降ろして、僕はシャワーを浴びていなかったのに気づいた。アイズさんとヤツテからまだ戻っていないので汗だくである。

「ひ、ひどいですよベルさん……でも、綺麗な場所ですね？」

「……ここは、オラリオの街が見える場所か……」

「あれ？ベルさん知らない感じですね？」

「ええ、なにせ僕自身も無意識でここへ来たみたいですから」

とりあえず冷えないように、廃墟のような場所を見つけたのでシルさん連れて入りこむ、僕はとりあえず使えそうなのがないみたいな

のでライダー召還をすることにした。

「召還！」

【コレクトプリーズ】

ウィザードさんと呼んでコレクト魔法を使い食事ができるお皿や食材を取り寄せて使えそうなのでちらつとライダー召還をするとアギトさんとカブトさんが現れて料理をしてくれた。

てか仮面ライダーって料理が得意な人いたんですね？（苦笑）

そういえば、シルさんとこうして二人きりつてのは初めてかもしれない、フレイヤ様とは小さい時に膝枕をしてもらったことがあるな……

「ベルさん……」

「ご飯を食べ終えたシルさんが僕の方へとやってきて抱き付いてきた。突然のことだったので驚いてしまう。

「ベルさん、私はあなたのことが……」

「……シルさん、いいえフレイヤ様……」

「!!」

「ずつと感じていました。あなたがフレイヤ様だつてことに……神の力を抑えているつもりでしょうが、オーマジオウさんが感じていたのはこういうことだったのですね？」

「ふふふ、よくわかったわね？でもなにか私に当たっているのだけど？」

「……」

残念ながら僕だつて男です、フレイヤ様……あなたの大きなものが僕に当たっているので当たり前に大きくなります。

僕は顔をそらすとフレイヤ様はふふふと笑いながら僕にキスをしてきたので驚いてしまう。

姿はシルさんのままだけど？

「やっぱりあなたは素敵よベル、今の私はシル……フレイヤとしてもあなたに抱かれないけど、今はシルとしてあなたに抱かれる。まあ色々あなたはヤツテいるのは知っているけどね（笑）」

「……」

「ふふ冗談よ（笑）さあやりましょう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

こうして、僕はフレイヤ様事シルさんを抱くことになりました。

ベルside終了

『私が眠っている時に一体何があったんだ？』